県営かんがい排水事業関連発掘調査報告書II－2

日吉・吉住池遺跡発掘調査報告書

1984

滋賀県教育委員会
八日市市教育委員会
滋賀県文化財保護協会

日吉・吉住池遺跡発掘調査報告書

1984

滋賀県教育委員会
八日市市教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県下の県営灌漑排水事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、ほ場整備事業の拡大に伴い、その件数も年々増加し、本年度は８遺跡が対象となりました。

今回は上記の遺跡のうち整理の完了しました７遺跡を４分冊に分けて刊行するものです。

ここに、この報告書により、広く埋蔵文化財に関する理解と文化財愛護普及の一助にしたいと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施にご理解をいただきました地元関係者並びに関係諸機関に対し、深く感謝申し上げますとともに、この報告書の刊行にご協力をいただきました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和59年９月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課長
市　原　　浩

例　　言

1．本書は、滋賀県農林部耕地建設課の実施する吉住池浚渫工事に伴う、日吉・吉住池遺跡発掘調査報告書である。

2．調査は、滋賀県農林部の依頼により、第一次調査を八日市市教育委員会が、第二、三次調査を滋賀県教育委員会が調査主体となり、(財)滋賀県文化財保護協会が実施した。本書は一、二、三次(昭和57～59年度)にわたる調査の報告である。

3．調査は、第一次調査を八日市市教育委員会社会教育課技師石原道洋、第二、三次調査を滋賀県教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係長丸山竜平を担当者として実施したものであり、現地調査にあたっては、第一次調査においては、大谷祐次、菊井美和、神田淳子、灰谷昌美の、また、第二次調査に際しては大谷巌、図師利兵衛両氏の協力を得た。なお、調査に際しては南菊枝、故田中一雄、県会議員北川弥助、八日市市史編纂室中島伸男各氏に格別のご協力をいただいた。

4．遺物整理、原稿作成にあたっては、丸山、石原のほかに岡本隆子、喜多貞裕、濱　修(以上(財)滋賀県文化財保護協会嘱託)、古川登、渡辺泰子が担当し、丸山がとりまとめた。整理には平井美典、竹谷鈴代、長尾ひとみ、寺井弘子、立入和子、福知義久、水谷哲郎、加野喜代子、大塚敬子の各氏のほか多数の人々の協力を得た。

5．古文書の調査と報告には長谷川淑子、民俗については三露俊男（八日市郷土文化研究会）の両氏の協力を得た。

6．写真撮影は、現地では担当者と寿福滋が行い、遺物撮影は寿福が行った。

7．現地作業員として特にご協力いただいた方々は以下のとおりである。

大谷長兵衛、大谷朝子、北川かず、大谷輝子、大谷寿美枝、大谷くに、久保川貴彦、山口哲造 、南くり、南菊枝、上田きし

目　　次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
第２章　第１次調査 …… 3
(1)　調査の概要 …… 3
(2)　調査の内容 …… 7
１．遺　構 …… 7
２．遺　物 …… 7
３．小　結 …… 11
表 …… 15
第３章　第２、３次調査 …… 18
(1)　調査の概要 …… 18
(2)　調査の内容 …… 19
１．基本土層 …… 19
２．遺　構 …… 20
３．遺　物 …… 20
(1)　土　器 …… 21
(2)　瓦 …… 26
(3)　土　錘 …… 29
(4)　石　器 …… 30
(5)　銅　銭 …… 31
４．小　結 …… 31
表 …… 33
第４章　古文書から見た吉住池 …… 59
(1)　江戸時代までの吉住池 …… 59
(2)　近代以降の吉住池 …… 60
(3)　史　料 …… 62
(1)　元禄五年　（史料１） …… 62
(2)　元禄十二年　（史料２） …… 63
(3)　明治七年　（史料３） …… 63
(4)　明治六年　（史料４） …… 64
(5)　明治九年一月（史料５） …… 64

(6) 明治九年三月（史料６）…… 65
(7) 明治十二年　（史料７）…… 66
第５章　吉住池にかかわる民俗 …… 68
第６章　結　　び　－吉住池に関する一試考－ …… 72

図　版　目　次

図版１　遺跡（上）吉住池全景（東から）
（下）吉住池全景（南東から）
図版２　遺跡（上）吉住池第２、３次調査前（北から）
（下）吉住池第２、３次調査前（東から）
図版３　遺跡（上）吉住池第１次調査後近景（南から）
（下）吉住池第１次調査後近景（北から）
図版４　遺跡　第１次調査　（上）吉住池全景（南から）
（下）吉住池全景（西から）
図版５　遺跡　第１次調査　（上）第１トレンチ水路２南部分（南から）
（下）第１トレンチ水路２南部分（北から）
図版６　遺跡　第１次調査　（上）第７トレンチ水路２（南から）
（下）第７トレンチ水路２（南から）
図版７　遺跡　第１次調査　（上）第８トレンチ（北から）
（下）第８トレンチ（南から）
図版８　遺跡　第１次調査　（上）湧水土坑II（西から）
（下）湧水土坑II（西から）
図版９　遺跡　第１次調査　（上）湧水土坑II（北から）
（下）湧水土坑II（東から）
図版10　遺跡　第１次調査　（上）湧水土坑Ⅰ（西から）
（下）湧水土坑Ⅰ（南から）
図版11　遺跡　第１次調査　（上）第４トレンチ池床起伏状況(南から）
（下）水路２遺物出土状況（南から）
図版12　遺跡　第２、３次調査（上）完掘後全景（西から）
（下）完掘後近景（北から）
図版13　遺跡　第２、３次調査（上）完掘後近景（南から）
（下）完掘後近景（南東から）
図版14　遺跡　第２、３次調査（上）敷石遺構全景（南から）
（下）敷石遺構近景（南から）
図版15　遺跡　第２、３次調査（上）敷石遺構近景（北から）
（下）敷石遺構近景（南から）

図版16　遺跡　第２、３次調査（上）第１トレンチＳＤ－１（南から）
（下）第１トレンチＳＤ－１（北から）
図版17　遺跡　第２、３次調査（上）第２トレンチＳＤ－１（南東から）
（下）第２トレンチＳＤ－１（南西から）
図版18　遺跡　第２、３次調査（上）第２トレンチＳＤ－１遺物出土状況（南から）
（下）第２トレンチＳＤ－１遺物出土状況（南東から）
図版19　遺跡　第２、３次調査（上）第３トレンチ（東から）
（下）第３トレンチ（西から）
図版20　遺跡　第２、３次調査（上）第３トレンチ（東から）
（下）第３トレンチ大井（西から）
図版21　遺跡　第２、３次調査（上）第３トレンチ大井（西から）
（下）第３トレンチ軒丸瓦出土状況（南東から）
図版22　遺跡　第２、３次調査（上）第４トレンチ石垣（南から）
（下）第４トレンチ石垣、敷石遺構（北から）
図版23　遺跡　第２、３次調査（上）第４トレンチ石垣（南西から）
（下）第４トレンチ石垣断面状況（南東から）
図版24　遺跡　第２、３次調査（上）第５トレンチ弁天島（東から）
（下）第５トレンチ弁天島（西から）
図版25　遺跡　第２、３次調査（上）第５－１トレンチ（東から）
（下）第５－１トレンチ（西から）
図版26　遺跡　第２、３次調査（上）第５－１トレンチ（東から）
（下）第５－１トレンチ（西から）
図版27　遺跡　第２、３次調査（上）第５－１トレンチ断面状況（西から）
（下）第５－１トレンチ断面状況・弁天島（北から）
図版28　遺跡　第２、３次調査（上）第５－２トレンチ（西から）
（下）第５－２トレンチ（東から）
図版29　遺跡　第２、３次調査（上）第５－２トレンチ断面状況（西から）
（下）第５－２トレンチ断面状況（東から）
図版30　遺跡　第２、３次調査（上）第６トレンチ石垣、敷石遺構（西から）
（下）第６トレンチ敷石遺構（東から）
図版31　遺跡　第２、３次調査（上）第７トレンチＳＤ－２（西から）
（下）第７トレンチＳＤ－２（南から）
図版32　遺跡　第２、３次調査（上）第７トレンチＳＤ－２（北西から）
（下）第７トレンチＳＤ－２（南西から）

図版33　遺跡　第２、３次調査（上）第８トレンチ（北から）
（下）第８トレンチ（南から）
図版34　遺物　第１次調査　須恵器
図版35　遺物　第１次調査　（上）須恵器（表）
（下）須恵器（裏）
図版36　遺物　第１次調査　須恵器、土師器
図版37　遺物　第１次調査　（上）弥生式土器、土師器（表）
（下）弥生式土器、土師器（裏）
図版38　遺物　第１次調査　土師器、石製品
図版39　遺物　第２、３次調査　土師器
図版40　遺物　第２、３次調査　須恵器、染付
図版41　遺物　第２、３次調査（上）縄文式土器、土師器（表）
（下）縄文式土器、土師器（裏）
図版42　遺物　第２、３次調査（上）弥生式土器、土師器（表）
（下）弥生式土器、土師器（裏）
図版43　遺物　第２、３次調査（上）土師器（表）
（下）土師器（裏）
図版44　遺物　第２、３次調査（上）土師器、黒色土器（表）
（下）土師器、黒色土器（裏）
図版45　遺物　第２、３次調査（上）黒色土器、瓦器、瓦質土器（表）
（下）黒色土器、瓦器、瓦質土器（裏）
図版46　遺物　第２、３次調査（上）染付（表）
（下）染付（裏）
図版47　遺物　第２、３次調査（上）染付（表）
（下）染付（裏）
図版48　遺物　第２、３次調査（上）染付（表）
（下）染付（裏）
図版49　遺物　第２、３次調査（上）染付（表）
（下）染付（裏）
図版50　遺物　第２、３次調査（上）染付（表）
（下）染付（裏）
図版51　遺物　第２、３次調査（上）染付、磁器、陶器（表）
（下）染付、磁器、陶器（裏）
図版52　遺物　第２、３次調査（上）陶器（表）

（下）陶器（裏）
図版53　遺物　第２、３次調査（上）陶器（表）
（下）陶器（裏）
図版44　遺物　第２、３次調査（上）陶器（表）
（下）陶器（裏）
図版55　遺物　第２、３次調査（上）陶器（表）
（下）陶器（裏）
図版56　遺物　第２、３次調査（上）陶器（表）
（下）陶器（裏）
図版57　遺物　第２、３次調査　　軒丸瓦、軒平瓦、隅平瓦
図版58　遺物　第２、３次調査（上）丸瓦（裏）、平瓦（表）
（下）丸瓦（表）、平瓦（裏）
図版59　遺物　第２、３次調査（上）平瓦（表）
（下）平瓦（裏）
図版60　遺物　第２、３次調査（上）平瓦（表）
（下）平瓦（裏）
図版61　遺物　第２、３次調査（上）平瓦（表）
（下）平瓦（裏）
図版62　遺物　第２、３次調査　　土錘
図版63　遺物　第２、３次調査　　石製品、銅銭
図版64　位置図（５万分の１）
図版65　位置図（２万５千分の１）
図版66　第１次調査前地形図・トレンチ配置図
図版67　第２、３次調査前地形図・トレンチ配置図
図版68　第２、３次調査後地形図・トレンチ配置図、遺構図
図版69　第２、３次調査断面図（第１トレンチ）
図版70　第２、３次調査断面図（第２、３、８－２トレンチ）
図版71　第２、３次調査断面図（Ａ、Ｂセクション・第７、８－１トレンチ）
図版72　第２、３次調査断面図（第４、５トレンチ）
図版73　第２、３次調査　弥生式土器、土師器、須恵器
図版74　第２、３次調査　縄文式土器、土師器
図版75　第２、３次調査　土師器、須恵器
図版76　第２、３次調査　土師器、黒色土器
図版77　第２、３次調査　須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、銅銭

図版78　第２、３次調査　軒丸瓦、軒平瓦、隅平瓦
図版79　第２、３次調査　丸瓦、平瓦
図版80　第２、３次調査　丸瓦、平瓦
図版81　第２、３次調査　平瓦
図版82　第２、３次調査　土錘
図版83　第２、３次調査　土錘
図版84　第２、３次調査　石製品

挿　図　目　次

挿図１．日吉・吉住池遺跡周辺遺跡分布図 …… 2
挿図２．日吉・吉住池遺跡位置図 …… 4
挿図３．第一次調査遺構平面図 …… 5
挿図４．第一次調査トレンチ配置概略図 …… 6
挿図５．第一次調査遺構平面図 …… 7
挿図６．断面実測図 …… 8
挿図７．断面実測図 …… 8
挿図８．遺物出土状況平面図 …… 10
挿図９．出土遺物実測図 …… 13
挿図10．出土遺物実測図 …… 14
挿図11．湖東平野の等高線 …… 72
挿図12．吉住池周辺地図 …… 74
挿図13．湖東平野の水系図(明治25年測図5万分の1地形図による) …… 81

表　目　次

表１　第一次調査土器観察表 …… 15
表２　軒丸瓦計測表 …… 27
表３　第二、三次調査土器観察表 …… 33
表４　陶磁器観察表 …… 43
表５　瓦観察表 …… 52
表６　土錘観察表 …… 56

第１章　遺跡の位置と環境

八日市市域は鈴鹿山脈に端を発する県下第三位の大河川である愛知川によって形成された扇状地である。この愛知川は八日市市の南方の布引山丘陵に平行して流れたあと、箕作山に流れを阻まれるように北へ流れを変える。この流れも古くは箕作山と瓶割山との間を通過し、西の湖や大中の湖に流入していたようだ。

扇状地の扇央地域は地表水が地下水となり水田開発が非常に困難となる。その為現在でも布引山丘陵の山麓や、愛知川右岸の愛東町には数多くの溜池が存在する。また扇状地で伏流水となった湧水帯は、海抜100～110ｍの八日市市中羽田町から愛知川町豊満を結ぶ線で示される。この伏流水の一部は箕作山山塊に流れを阻止され、海抜119ｍの吉住池において湧水している。この湧水は開発困難な扇状地にあっても、特別有利な条件を古代より与えていたものと思われる。

今回調査した吉住池は、現在も池の東に県道八日市・五箇荘線や近江鉄道が通り、近世にも吉住池の東西を伊勢詣りに向う古道として利用していた。古来より交通の要衝として重要な位置を占めていたといえる。

吉住池周辺の遺跡では、吉住池の南に1979年の発掘調査で縄文時代晩期の甕棺墓と弥生時代後期から古墳時代にかけての住居跡、方形周溝墓、７世紀前半から奈良時代にかけての住居跡群が検出された。また箕作山山麓の瓦屋寺カマエ遺跡では縄文時代から奈良時代の遺物が発見されている。更に箕作山東斜面には古墳時代後期の瓦屋寺山古墳群が57基以上存在し、白鳳時代の瓦窯である時雨谷遺跡と崩ヶ谷遺跡がある。また、聖徳太子創建伝承をもつ瓦屋寺がある。

八日市市は愛知川の扇状地として、平安時代以降開発が進んだと考えられていたが、先の、日吉遺跡や、雪野山山麓の下羽田遺跡や内堀遺跡の弥生時代の遺溝が発見されたことで、住民の定着は大きく溯のぼることとなった。

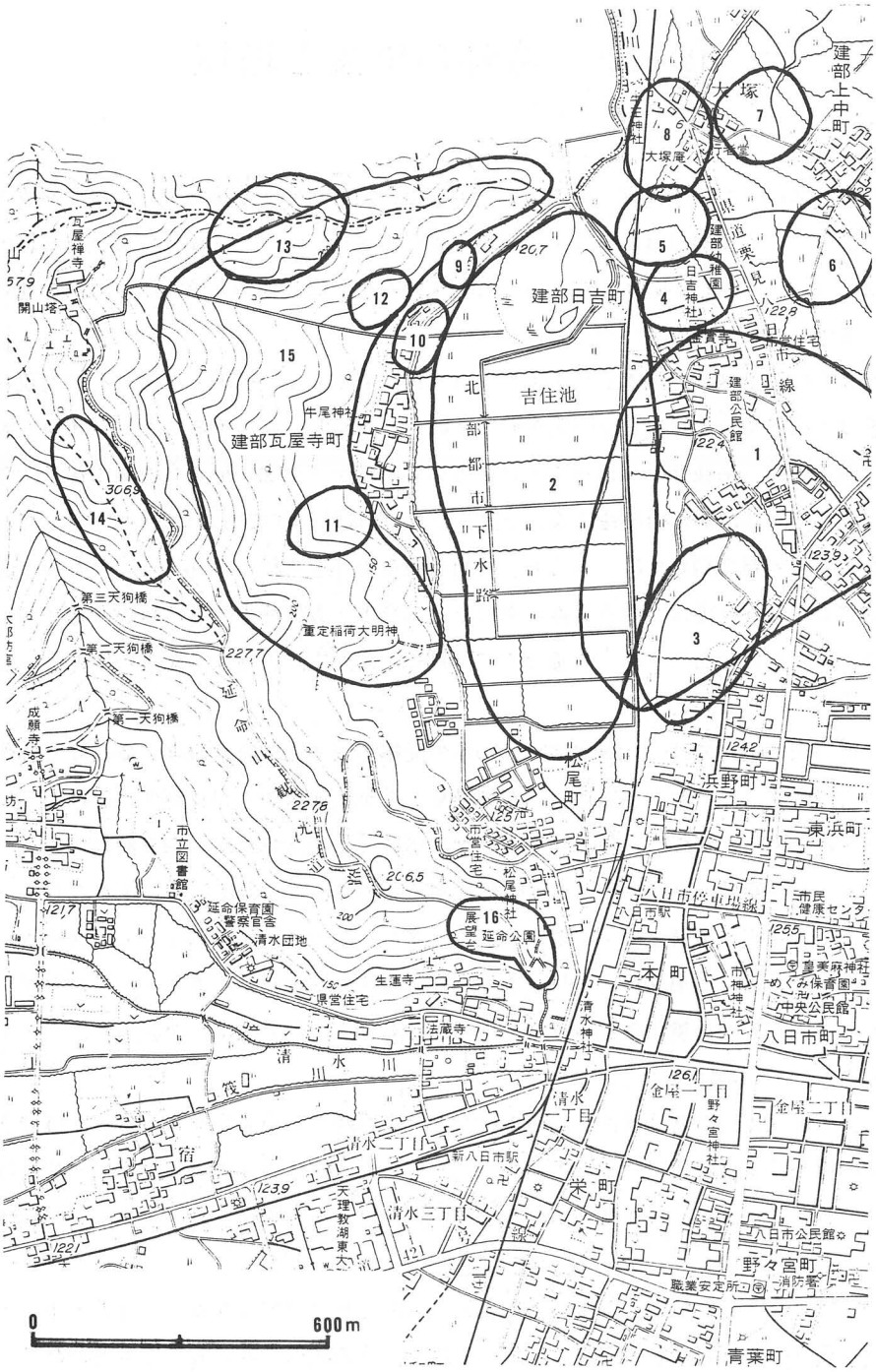
また、吉住池周辺や布施溜池、羽田地区などで奈良時代以前の古条里の存在が確認されている。神崎郡では奈良時代以降の条里が北－33°－東であるが、吉住池周辺の古条里ではほぼ北を示している。この事実は吉住池周辺が奈良時代以前にすでに開発され、中央の支配領域でもあった事を示している。

平安時代になると吉住池も荘園領主によって支配された地域になる。吉住池を中心とした地域は日吉社領の建部荘として存在し、また近江一の宮の建部神社の故地とも言われている。

近世になってからは池の支配をめぐって、日吉村と池の下流の伊野部村・平坂村・木流村・下野村四ヶ村との争論が記録されている。また、たびたび池床の浚渫作業も行われている。更に、豊富な淡水魚は地元住民の重要なタンパク源として利用されていた。

これら吉住池をめぐる地理と歴史は地元や下流の人々の生活に深く根ざしている。

（石原道洋）



挿図１　日吉・吉住池遺跡周辺遺跡分布図

1．上日吉遺跡	5．中善寺遺跡	9．瓦屋寺北山遺跡	13．地蔵谷遺跡
2．日吉遺跡	6．浅前遺跡	10．瓦屋寺遺跡	14．東山遺跡
3．上日吉南遺跡	7．建部城遺跡	11．崩ヶ谷遺跡	15．瓦屋寺山遺跡
4．馬場遺跡	8．大塚遺跡	12．時雨谷遺跡	16．延命山遺跡

第２章　第１次調査

１）調査の概要

八日市市建部日吉町地先に所在する吉住池は日吉の溜とも呼ばれ、愛知川の伏流水が湧水となって常に清水を満々とたたえた溜であった。この溜は下流の五個荘町伊野部方面にかけて田養水を供給してきたが、近年愛知川ダムの建設等の関係で湧水も減り、年々ヘドロの堆積が著しく進行している。

このため滋賀県農林部耕地建設課、八日市土木事務所耕地建設課は、昭和57～59年度の３ヶ年にわたり池底の浚渫工事を実施することになった。

しかし、この吉住池の周辺では、昭和54年度にほ場整備事業に先立ち発掘調査が実施され、縄文時代から奈良時代にわたる複合遺跡である日吉遺跡が確認された。当地はこの日吉遺跡の北側に隣接するため、遺跡が北へ広がる可能性も強く、今回、浚渫工事に先だち発掘調査を実施することとなった。

調査は1983年１月27日から同２月８日まで現地調査にあたり、以後整理作業を行った。

現在吉住池は挿図３の如く南部に湧水土拡が数ヵ所掘られ、ここから湧き出た水が集まって流路をつくり、北部へ流れている（水路１）。　また、西南部中央付近に別の水路（水路２）があり、北へ流れて水路１に合流している。

今回の浚渫工事では、西半分が掘削土の仮置場となり掘削がおこなわれないため、水路２より東の部分の発掘調査となった。トレンチの設定は次のとおりである。

▶幅約２ｍの第１トレンチを西南から北東に向かって設定し、これに直角方向に東南から北西へ第２トレンチを設定した。

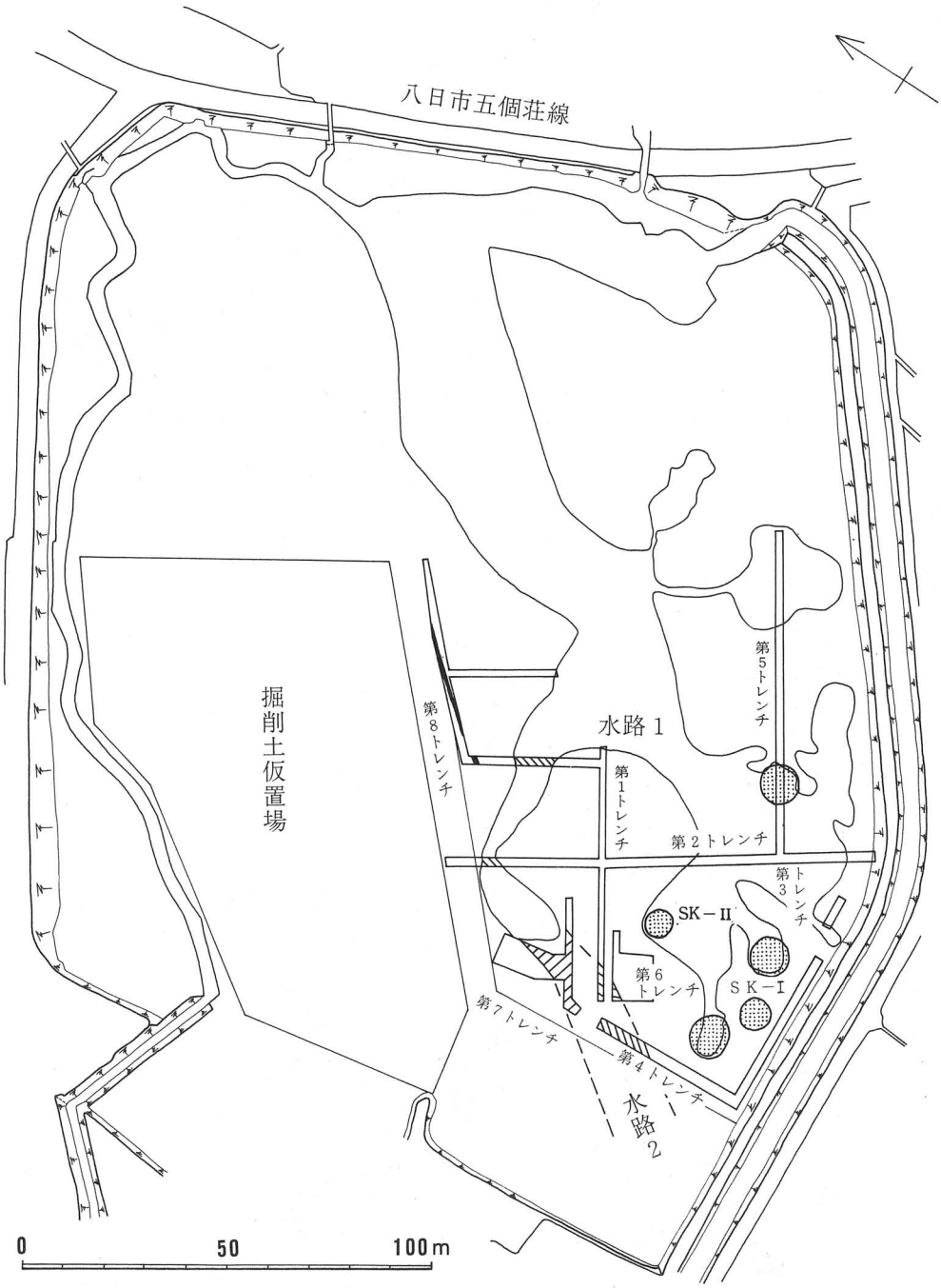
▶第１トレンチ西南端で水路２が検出されたため、この輪郭を追うべく、第４・６・７トレンチを設定した。

▶日吉遺跡との接点を探るべく、第３トレンチを設定し、第４トレンチを東へ延長した。

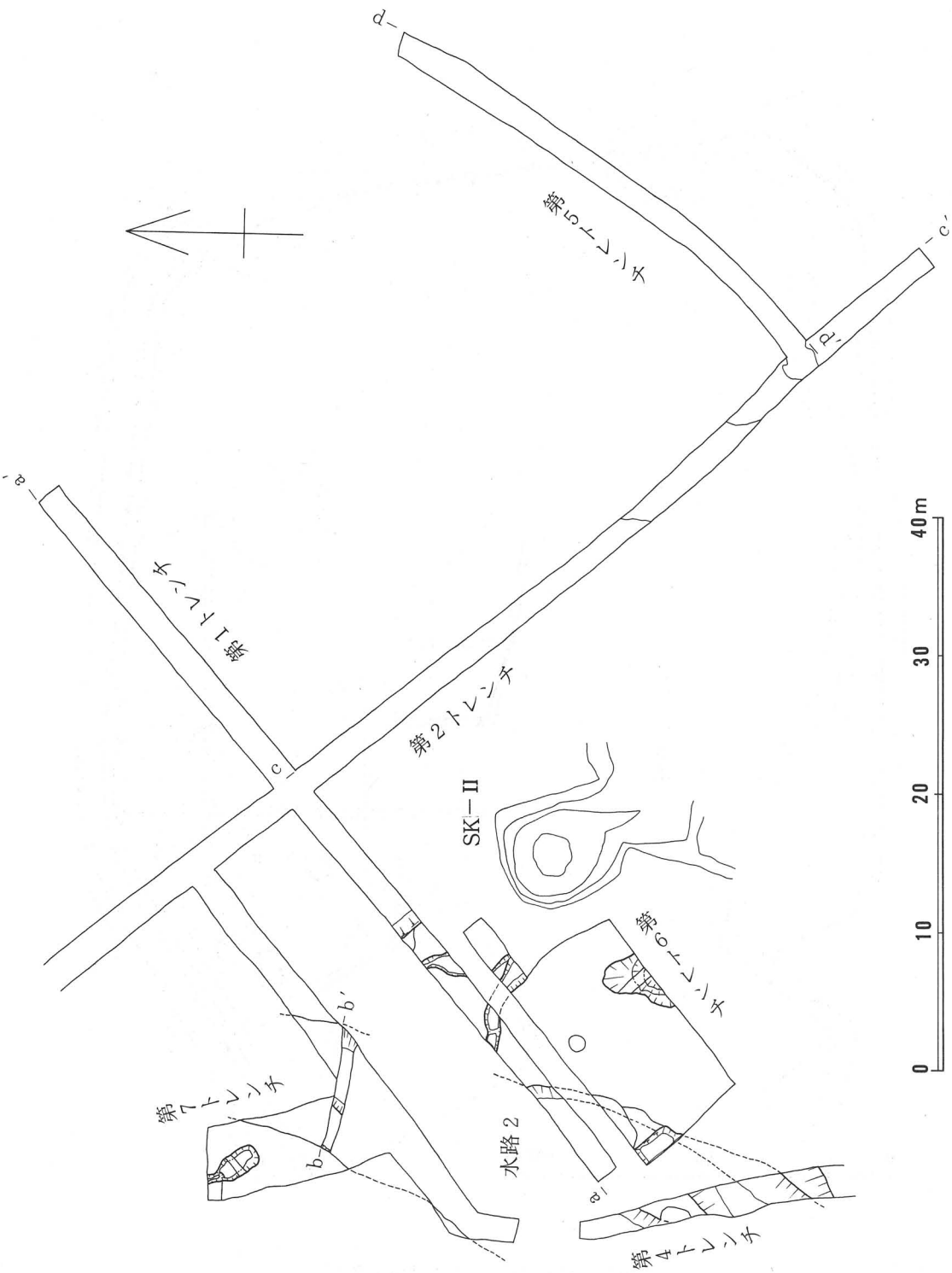
▶さらに、掘削土仮置場との境界に沿って第８トレンチを設定し、これから東南へ向かって２本トレンチを伸ばした。

基本土層は、表土が暗茶黒色腐植土で、平均して約20cmの深さがあり、全体を覆っている。次に灰褐色、茶褐色系の砂礫層が何層か堆積しており、さらにその下に褐灰色系の砂礫層が堆積する。これがベースで、各トレンチの最下層にこの層が広がっている。

挿図２　日吉・吉住池遺跡位置図



挿図３　第１次調査トレンチ配置概略図



挿図4　第一次調査遺構平面図

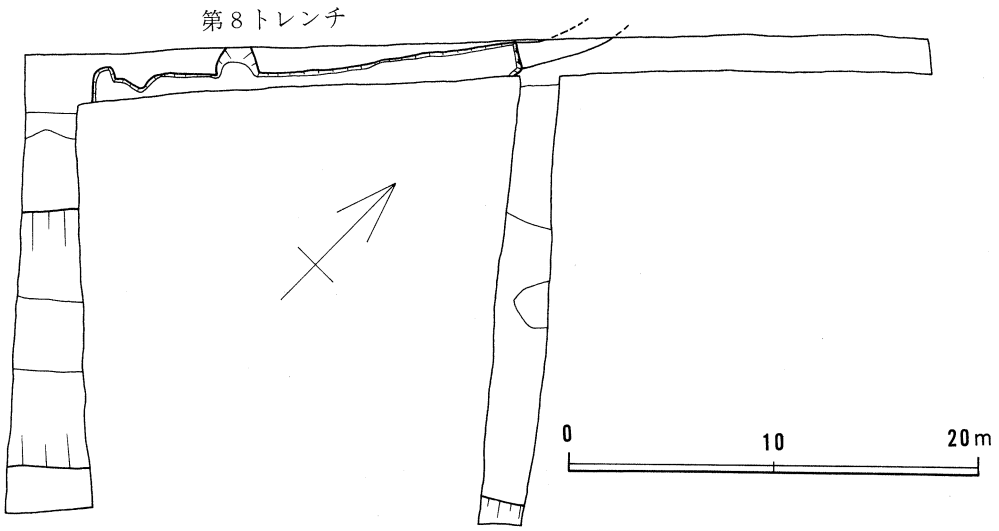
2）調査の内容

1．遺　構

水路1……第2トレンチで断ち割ったが、ベースがゆるやかに下がり、その上に腐植土がやや厚目に堆積している。遺物は当トレンチからは出土していない。

水路2……第1・2・4・6・7トレンチおよび第8トレンチで確認した。とくに第1・7トレンチで土師・須恵器片等の出土が多い。水路幅は10～12mで、第2トレンチの部分で幅約4mと細くなり東方に流路を変えている。肩部はゆるやかで、最深部で肩部から約40cmしか比高差はない。埋土は暗茶黒色粘質土で表土（腐植土）と基本的にはよく似ているが、腐植土でない点で異なる。

ＳＤ－1・2……第1トレンチで浅い溝状遺構が検出されたため、第6トレンチを若干延長した。ＳＤ－1は幅約1m、深さは2～10cmしかない。ＳＤ－2についてはほとんど消えかかっており、第6トレンチに向かって伸びるが、第6トレンチでは消滅している。



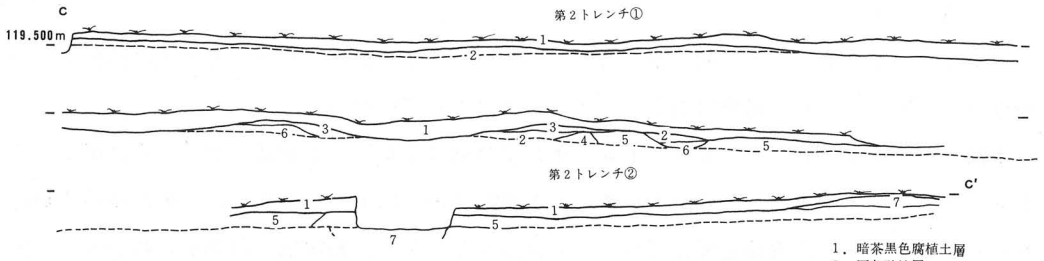
挿図5　第一次調査遺構平面図

ＳＫ－Ⅰ……湧水土坑を断ち割ってみた。直径約10mで、表土の落ち込みは約60cmある。中央部では茶黒色粘質土が厚さ40cmほど堆積している。ベースは褐灰色砂礫層である。

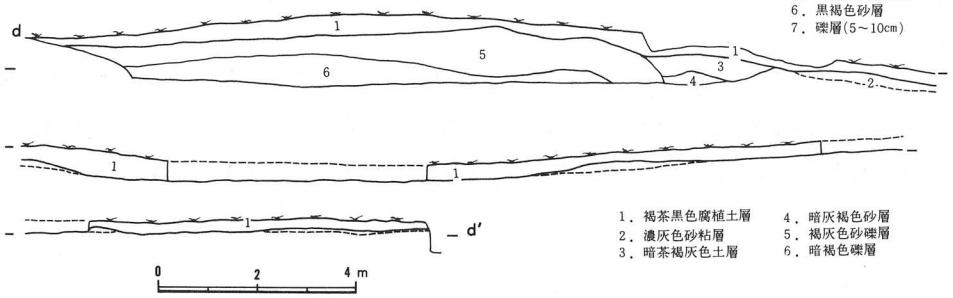
2．遺　物

当遺跡からは弥生式土器・土師器（Ｈ－1～16）・須恵器（Ｓ－1～26）および石製品（Ｚ－1）等が出土しているが、大半が水路2の埋土中のもので、そのほか湧水土坑（ＳＫ－Ⅰ）から若干の土師器が出土したのみである。水路2出土の土師器埦や須恵器の甕・杯蓋・杯身等

第２トレンチ セクション図



第５トレンチ セクション図

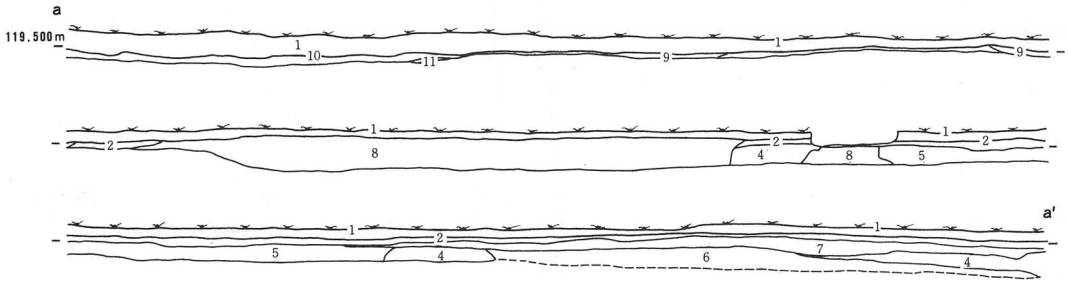


1．暗茶黒色腐植土層
2．灰色砂粘層
3．暗灰色砂層
3．暗茶灰色砂礫層
6．黒褐色砂層
7．礫層(5～10cm)

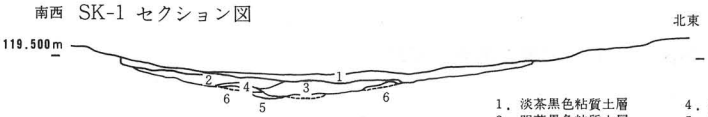
1．褐茶黒色腐植土層
2．濃灰色砂粘層
3．暗茶褐灰色土層
4．暗灰褐色砂層
5．褐灰色砂礫層
6．暗褐色礫層

挿図６　断面実測図

第１トレンチセクション図



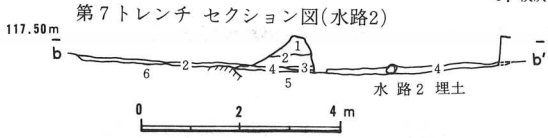
南西　SK-1 セクション図



1．暗褐色腐植土層
2．灰色砂粘層
3．暗茶褐灰色土層
4．暗灰褐色砂層
5．褐青灰色粘質土層
6．褐灰色砂礫層
7．暗茶色砂層
8．暗茶灰色混礫砂層
9．暗茶黒色粘質土層
11．暗灰黒色粘質土層

1．淡茶黒色粘質土層
2．明茶黒色粘質土層
3．淡灰茶黒色粘質土層
4．淡灰茶黒色砂礫混粘質土層
5．明灰茶黒色粘質土層
6．褐灰色砂層

第７トレンチ セクション図(水路2)



1．淡茶黒色粘質土層
2．暗茶黒色粘質土層
3．茶黒色粘質土層
4．暗灰黒色粘質土層
5．暗灰色混礫層（礫10～15cm大）
6．淡青灰色粘土層

挿図７　断面実測図

は７世紀初頭から前半にかけての時期を示している。

また、ＳＫ－Ⅰ出土の灯明皿（Ｈ－16）は近世以降の遺物と思われる。

第１トレンチ

甕（Ｈ－１）……弥生時代末期の台付甕の脚部である。胴部外面は荒いハケ目調整を行うが、脚部は内外面ともにヨコナデ調整である。脚部の内端部が少し肥厚する。

埦（Ｈ－２～５）……底部が丸やかで、体部～口縁部も内湾している。口縁端部は内傾する端面を成す。体部から底部内面は丁寧なヘラナデ調整、体部外面はヘラ削りしている。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行う。Ｈ－２・３の内面には放射状暗文が施される。

埦（Ｈ－６）……明瞭な底部を有し、口縁部も直立する。口縁端部は外上方につままれ、内傾する端面を成す。体部から底部内面は丁寧なナデの後、下からラセン状暗文、放射状暗文の順に施文する。外面は指ナデ調整で接合部を消している。口縁部内外面はヨコナデ調整を行う。

埦（Ｈ－７）……Ｈ－２～６に比して小型の椀で、器壁も薄い。

鍋（Ｈ－８）……内湾する半球形の体部を有し、外上方に口縁部が伸びる。口縁端部は垂直な端面を成す。体部内面は目のつまったヨコハケ目調整、外面は斜方ヘラ削り調整である。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を行う。

長甕把手（Ｈ－９）……長甕の最大腹部に上そりで平面三角形の把手が付けられる。胴部内外面ともに斜方ハケ目調整を行う。

平瓶（Ｓ－１）……最大腹部は中央位よりやや上にある。天井部に円形浮文が１個貼付される。胴部成形後に天井部をヘラでくり抜いて口縁部を装着する。底部外面はヘラ削りしている。

▶甕（Ｓ－２）……頸部は丸く屈曲して口縁部が外上方に開く。口縁端部は外面に肥厚する。口頸部内外面ともにヨコナデ調整を行う。肩部内面は同心円文叩き目、外面は平行叩き目調整である。

▶壺（Ｓ－３）……少し肩の張る胴部を有し、口縁部は外開きしながら立ち上がる。胴下半部をヘラ削りするほかはヨコナデ調整を行う。

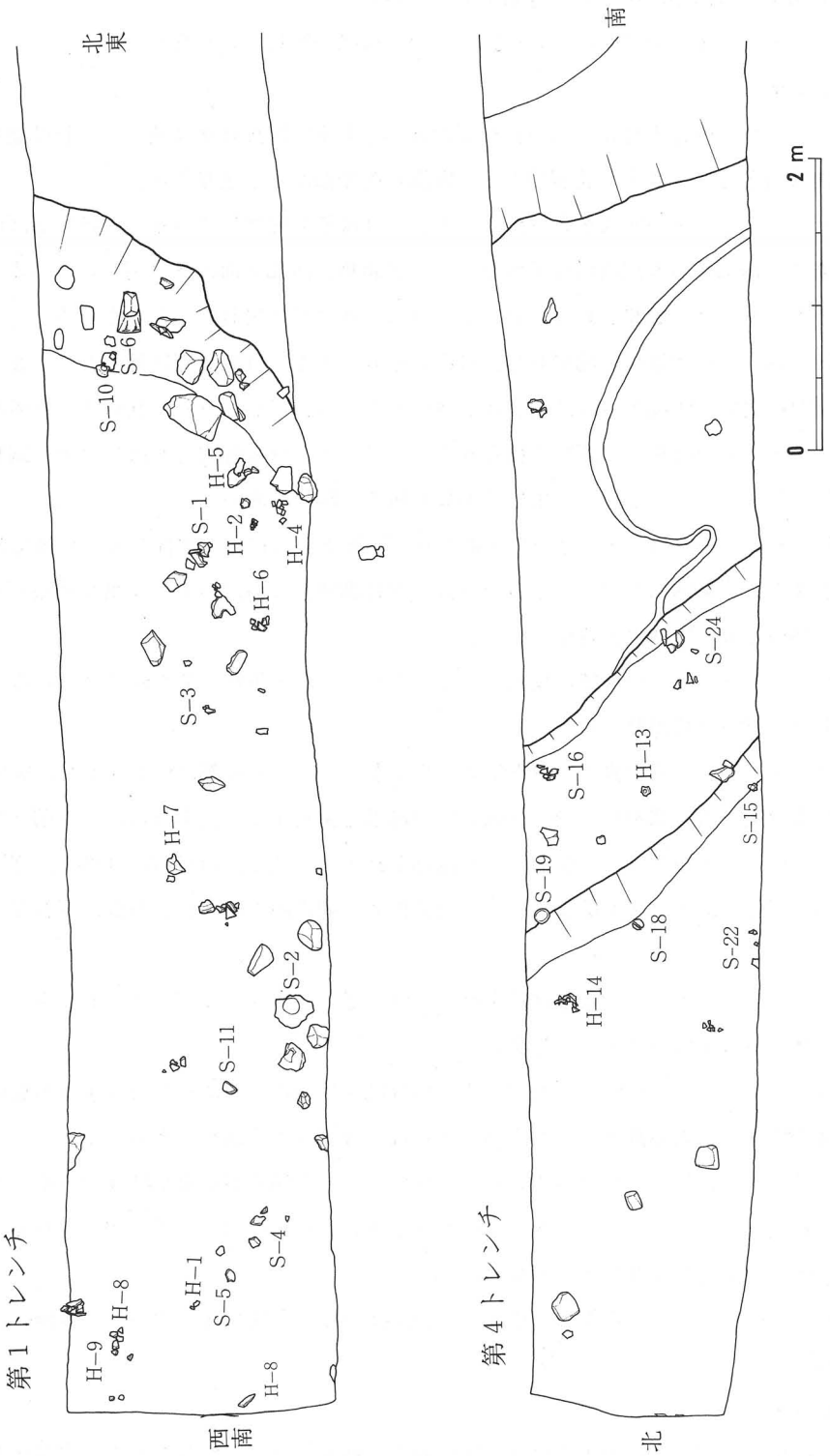
▶坏蓋（Ｓ－４～６）……かえりをもたず、口縁部が外面に稜を成して外反する形態のもので、天井部はやや丸い。天井部外面をヘラ削りするほかはヨコナデ調整である。

▶坏身（Ｓ－７～14）……全般的に立ち上がりが短く、底部の不安定な坏身である。その中で比較的立ち上がりのしっかりしたＳ－７～９と小さいＳ－10～14にタイプが分かれる。底部外面をヘラ削りするほかはヨコナデ調整である。

▶紡錘車（Ｚ－１）……滑石製の紡錘車で、斜面はかなり摩耗し窪んでいる。斜面には斜方に条痕が廻る。

第４トレンチ

▶壺（Ｈ－10）……弥生後期の壺肩部で頸部屈曲部外面に突帯が貼付される。突帯はさらに棒状工具により刺突される。肩部外面には櫛描平行線文が廻る。内面はハケ調整のようである。



挿図８　遺物出土状況平面図

▶甕（Ｈ－11・12）……弥生時代末期の近江型甕の口縁部である。Ｈ－11はＨ－12に比して口縁部の直立度が強く、外面に２個一単位の沈線が２条廻る(板状工具)。　Ｈ－12は口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行う。

▶高坏（Ｈ－13）……中空の脚部を有する高坏で、脚部の裾部で外反度が大きくなる。内外面ともに指ナデ調整である。接合部外面に沈線が２条廻るが、全体に荒いつくりである。

▶甕（Ｈ－14）……ほぼ球形の胴部を有する。口縁部は端部で内外から強くつままれる。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を行う。胴部外面には煤が付着する。

▶高坏（Ｓ－15）……透しはなく、脚裾部の外反が大きい。脚部外面に沈線が一条廻る。

▶甕（Ｓ－16・17）……Ｓ－16は口縁端部が内外に肥厚し、Ｓ－17は内側に肥厚して内傾する端面を成す。胴部内面は同心円文叩き目、外面は平行叩き目による調整である。

▶坏蓋（Ｓ－18～21）……Ｓ－18・19はかえりをもたず、天井部と体部が明瞭な稜で画される。口縁端部は丸い。Ｓ－20は口縁部で一旦外反しさらに下方へ垂下する。調整は、天井部を板で叩く（Ｓ－18）か、ヘラ削りする（Ｓ－19・20）ほかはヨコナデ調整である。Ｓ－21は本体よりも長いかえりを有し、天井部外面に宝珠つまみを付ける。天井部外面のみヘラ削りし、そのほかはヨコナデ調整である。

▶坏身（Ｓ－22～25）……立ち上がりの短い坏身であるが、Ｓ－22・23の立ち上がりは内湾して内上方に伸び、Ｓ－24・25のそれは太短くまっすぐに伸びる。底部外面をヘラ削りするほかはヨコナデ調整である。

第６トレンチ

▶高坏（Ｈ－15）……中実ぎみの脚部を有する高杯で、裾部に至って外方に開く。端部は丸い。調整は内外面ともに指ナデ調整であるが、外面にはハケ目状の擦痕が残る。

第７トレンチ

▶坏身（Ｓ－26）……本体口縁部と立ち上がりがほぼ水平の位置にある。調整は内外面ともにヨコナデ調整である。

ＳＫ－１

▶皿（Ｈ－16）……ほとんど底部はなく丸やかである。口縁部が外反し、端部は外上方に尖る。全体に指ナデ調整を行う。口縁部には煤が付着する（灯明皿）。

３．小　　結

昭和54年度に発掘調査が実施された日吉遺跡(註１)では、吉住池に最も近づく第１トレンチにおいて（距離約 100ｍ）、縄文時代晩期の甕棺墓のほか、７世紀前半（ＳＢ－４～６）と７世紀後半から８世紀前半（ＳＢ－１）の時期の竪穴式住居跡群などの遺構が検出されている。

また、同遺跡第２～４トレンチからは、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴式住居跡群および方形周溝墓群が微高地上にかけて存し、７世紀後半から奈良時代に亙って建て替えをしながら存続した掘立柱建物跡群（官衙あるいは豪族の館跡）も検出されている。

そして、第１・第２トレンチの西方部は沼沢地を形成している。

第１トレンチ検出の竪穴式住居跡のうち、７世紀前半のものは沼沢地に近い地点で営まれ、７世紀後半から８世紀前半のものはトレンチ東端で１基だけ検出された。後者の時期の集落は、このＳＢ－１を西限として東方の現建部日吉町集落付近にひろがるようである。

今回の吉住池遺跡の発掘調査で検出された水路2は、日吉遺跡第１・２トレンチの沼沢地から流れ出た自然水路であると思われる。埋土中の出土遺物は７世紀前半のものがほとんどであり、新しいものはみられない。

水路２出土遺物と日吉遺跡第１トレンチ沼沢地付近の住居跡群（ＳＢ－4～6）の出土遺物がほぼ同時期であることから、ＳＢ－４～６の住人が遺棄した遺物が水路２へ流れ込んだと理解される。また、水路２の出土遺物に新しい要素が含まれないということから、７世紀後半のＳＢ－１が営まれた時期には水路２は埋まっていたか、遺物の流入しえない状況であったと思われ、同時に日吉遺跡第１トレンチの沼沢地もその様相が失なわれていたことが伺える。

このことと、日吉遺跡第１トレンチの住居跡群が７世紀前半から後半以降の時期に西から東へ、つまり低地から高所へと移る事実とを併せて考えると、７世紀後半以降、日吉遺跡北西部から現在の吉住池までの間の低湿地が水田化し、集落自体は微高地へと移動していったことが推定されるのである。

近年ヘドロが堆積するまでの吉住池は、きれいな清水の湧き出る湧水地であり、五個荘町伊野部への貴重な水源であった。当遺跡で検出された数基の湧水土坑は、水の乏しい時期に水源を確保するために人為的に掘削されたものである。ＳＫ－１からは樋口などの遺構は検出されなかったが、これらいくつかの土坑から水路で導かれた水が集まって水路１を形成し、水路２と合流して池の北西部へ流れている。

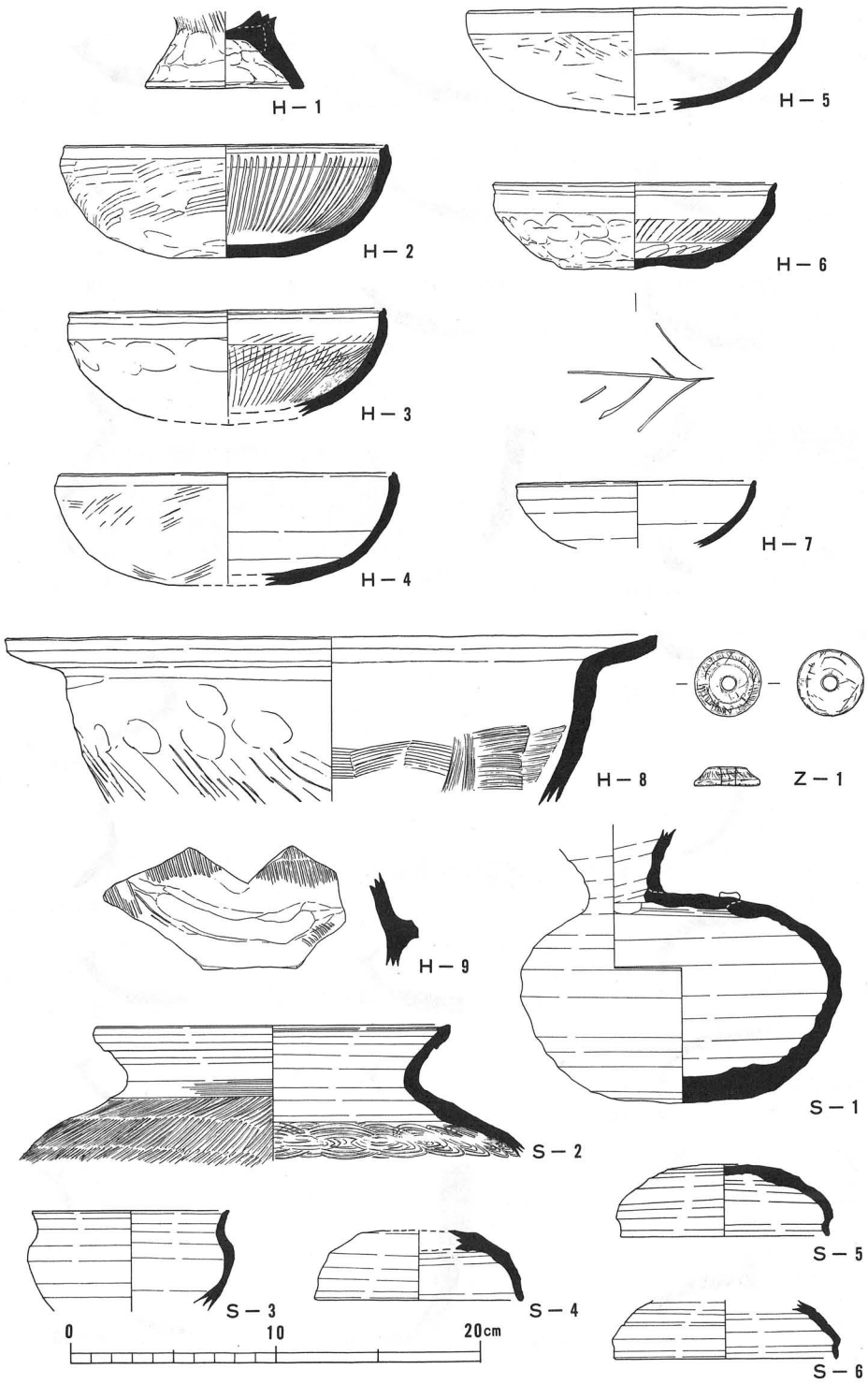
この湧水土坑がはじめて掘削された時期は定かでないが、旧来建部日吉町と建部瓦屋寺町との間には、何カ所かの湧水地が存したらしく、当地がその最下流部に該当する。吉住池以南が完全に埋め立てられて水田化し、吉住池が現在の規模に縮少された後にこれら湧水土坑が掘削されたと考えられる。それ以前は数ヵ所の湧水地から湧き出た水が箕作山から張り出した尾根の突端に妨げられ、北へ一気に流れず池を形成したのであろう。

今回の発掘調査は吉住池の南半分のみの調査であったため、日吉遺跡と接する南端部分を中心に調査したが、水路２以外は主な遺構は得られず、日吉遺跡の北限が明らかとなった。

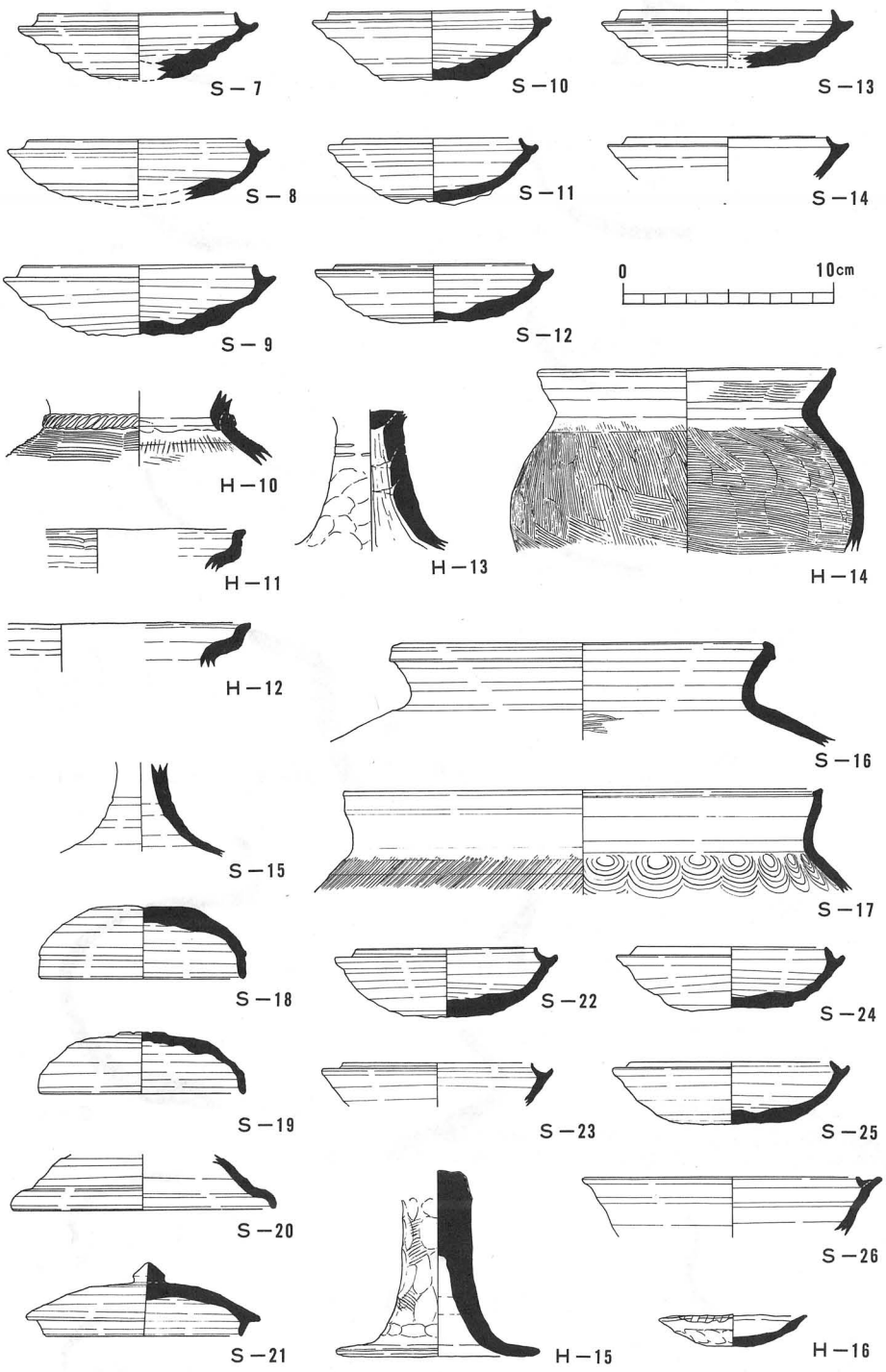
しかし、昭和58年度の北半分の発掘調査（第２次調査）により、五個荘町へ水を落とす取水口付近から堤防状遺構が検出されており、吉住池からの放流がここで調節されていたことが明らかとなった。（石原道洋）

註１　「八日市市上日吉遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ－２』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会（1979）

※　当時は上日吉遺跡と呼んでいたが、上日吉古墳群とまぎらわしいため日吉遺跡と改称した。



挿図９　出土遺物実測図　Ｓ－7～14：第1トレンチ水路２出土、Ｓ－26：第7トレンチ水路2出土
Ｈ－10～14、Ｓ15～25：第4トレンチ水路２出土、Ｈ－16：ＳＫ－１埋土出土、Ｈ－15：第６トレンチ水路２出土



挿図10　出土遺物実測図　　Ｈ－1、Ｓ－1～6、Ｚ－1：第１トレンチ水路２出土

表1　土器観察表

	器形	番号	法量（cm）	色　調	胎　　土	備　　考
弥生式土器・土師器	甕脚部	H－1	脚径　7.8	淡褐灰色	0.5～1、3～5㎜大の砂粒を含む	第1トレンチ　水路2出土
	埦	H－2	口径　16.2 器高　5.5	淡褐色	精　　良	第1トレンチ　水路2出土
	埦	H－3	口径　15.6	明灰褐色	精　　良	第1トレンチ　水路2出土
	埦	H－4	口径　16.2	淡褐色	精　　良	第1トレンチ　水路2出土
	埦	H－5	口径　16.1	淡褐色	精　　良	第1トレンチ　水路2出土
	埦	H－6	口径　13.8 器高　4.2 底径　7.0	灰褐色	精　　良	第1トレンチ　水路2出土
	埦	H－7	口径　11.4	淡赤褐色	精　　良	第1トレンチ　水路2出土
	鍋	H－8	口径　32.0	灰褐色	0.5～1㎜大の砂粒（石英、長石、雲母）を多く含む	第1トレンチ　水路2出土 頸部以下外面に煤が付着する。
	長甕 把手	H－9	——	淡褐色	0.5～1㎜大の砂粒（石英、長石）を含む	第1トレンチ　水路2出土
	壺頸部	H－10	頸径　16.5	灰褐色	0.5㎜内外の砂粒（石英、チャート）を含む	第4トレンチ　水路2出土
	甕	H－11	——	灰褐色	0.5～2㎜大の砂粒（石英、チャート、長石）を含む	第4トレンチ　水路2出土
	甕	H－12	——	灰褐色	1～3㎜大の砂粒（石英、長石、チャート）を含む	第4トレンチ　水路2出土 焼成やや甘し
	高　杯	H－13	——	淡赤褐色	精　　良	第4トレンチ　水路2出土
	甕	H－14	口径　13.8	灰褐色	0.5～1㎜大の砂粒（石英）を含む	第4トレンチ　水路2出土
	高　杯	H－15	脚径　9.8	淡灰褐色	0.5～1㎜大の砂粒（石英、雲母）を含む	第6トレンチ　水路2出土
	皿	H－16	口径　6.9 器高　1.6 底径　2.4	淡褐色	精　　良	SK－1埋土中出土

	器形	番号	法量（cm）	色　調	胎　　土	備　　考
須恵器	平　瓶	S－1	最大腹径 15.7	灰色 内面光沢あり 外面一部に灰がかかる	1.0㎜大の砂粒（石英、長石）を含む	第1トレンチ　水路2出土 ロクロ左回転
	甕	S－2	口径　17.4	暗灰色	0.5～2.0㎜大の砂粒（石英・長石）を多く含む	第1トレンチ　水路2出土 ロクロ右回転 口縁部内面、肩部外面に自然釉かかる
	無蓋壺	S－3	口径　9.7	暗灰色 （表面黒ずむ）	0.5㎜内外の砂粒（チャート・石英）を多く含む	第1トレンチ　水路2出土 ロクロ右回転
	坏　蓋	S－4	口径　10.1	暗灰色	0.5～1.0㎜大の砂粒（石英・長石・チャート）を含む	第1トレンチ　水路2出土 ロクロ右回転
	坏　蓋	S－5	口径　10.2 器高　3.5	淡灰色	0.1～0.3㎜大の砂粒（石英・長石）を含む	第1トレンチ　水路2出土 ロクロ左回転
	坏　蓋	S－6	口径　10.8	淡褐灰色	0.2～0.5㎜大の砂粒を含む	第1トレンチ　水路2出土
	坏　身	S－7	口径　9.2	灰色	精　　良	第1トレンチ　水路2出土 ロクロ左回転
	坏　身	S－8	口径　10.4	淡灰色 （外面暗い）	0.5㎜内外の砂粒（石英・チャート）を含む	第1トレンチ　水路2出土
	坏　身	S－9	口径　11.0 器高　3.4 底径　4.2	外面 暗褐灰色 内面 淡褐灰色	0.5～1.5㎜大の砂粒（石英・長石）を含む	第1トレンチ　水路2出土 ロクロ右回転
	坏　身	S－10	口径　9.4 器高　3.3 底径　5.4	灰色	0.1～0.5㎜大の砂粒（石英・長石）を含む	第1トレンチ　水路2出土 ロクロ右回転
	坏　身	S－11	口径　8.4 器高　3.0	暗灰色	精　　良	第1トレンチ　水路2出土 底面ヘラ削りの上に粘土が付着。 ロクロ右回転
	坏　身	S－12	口径　9.4 器高　2.7 底径　6.0	褐灰色	0.1～0.5㎜大の砂粒（長石）を含む	第1トレンチ　水路2出土 ロクロ右回転
	坏　身	S－13	口径　10.0	淡灰色	精　　良	第1トレンチ　水路2出土

	器形	番号	法量（cm）	色調	胎土	備考
須恵器	坏身	S－14	口径 9.5	淡灰褐色	0.2～0.5mm大の砂粒を含む	第1トレンチ 水路2下（砂）層出土
	高坏	S－15	——	暗灰色	0.5mm大の砂粒（石英・長石）を含む	第4トレンチ 水路2出土
	甕	S－16	口径 17.3	淡灰色	0.3～0.7mm大の砂粒（石英）を含む	第4トレンチ 水路2出土
	甕	S－17	口径 22.8	淡灰色	精良	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転 焼成不十分
	坏蓋	S－18	口径 9.8 器高 3.4	灰色	0.5～3.0mm大の砂粒（石英・長石）を少し含む	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
	坏蓋	S－19	口径 9.8 器高 3.0	灰色	0.5～1.5mm大の砂粒（石英・長石）を含む	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
	坏蓋	S－20	口径 12.3	淡褐灰色	0.2mm大の砂粒（長石）を含む	第4トレンチ 水路2出土
	坏蓋	S－21	口径 9.5	暗灰色	精良	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
	坏身	S－22	口径 8.5 器高 3.3 底径 5.4	内面 暗灰色 外面 淡灰色	精良	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
	坏身	S－23	口径 9.2	灰色	0.2～0.5mm大の砂粒（長石）を含む	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
	坏身	S－24	口径 9.0 器高 2.9 底径 5.8	褐灰色	0.3～1.0mm大の砂粒（長石）を含む	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
	坏身	S－25	口径 9.6 器高 3.0 底径 4.6	淡灰色	精良	第4トレンチ 水路2出土 ロクロ右回転
	坏身	S－26	口径 12.0	暗灰色	0.5～1.0mm大の砂粒（石英・長石）を含む	第7トレンチ 水路2出土
その他	紡錘車	Z－1	直径 3.2 孔径 0.7	暗緑灰色	滑石製	第1トレンチ 水路2下（砂）層出土 重さ 14.9g

第３章　第２、３次調査

１）調査の概要

二次、三次調査は滋賀県教育委員会が調査主体となり、(財)滋賀県文化財保護協会が実施機関として行った。期間は二次調査が1983年11月28日から1984年３月末日、三次調査が1984年４月２日から９月30日までである。三次調査は二次調査で検出した敷石遺構の範囲確認のために実施したため、今回の報告では同時調査の扱いとして一括してとりまとめた。

調査範囲は池の南半を一次調査で八日市市教育委員会が実施したため、池の北半を調査した。（図版68）

調査は調査区の中央に南北２本のＡセクション、Ｂセクションを壁面観察用に残し、バックホーにより表土の除去を行った。表土はヘドロ状の濃茶褐色腐植土層と暗緑灰色腐植土層を基本とした堆積を示していた。この暗緑灰色腐植土層は遺物の包含層である。この結果調査区の北側面で池の土手に平行して、南北北向に大溝ＳＤ－1を検出した。この溝は北流し北辺の樋門に集中していたと思われる。また、調査区の中央部分でＳＤ－１に直交するように北東に向う大溝ＳＤ－２を検出した。更にＳＤ－１の部分を覆う敷石遺構を検出した。この敷石は溝の東肩部から池の中央部分にかけて現われ、Ａセクションと第３トレンチで最大幅を計り、Ｂセクションで最小幅となるＳ字状の石敷である。

表土の除去は図版68の網目部分については実施できなかった。特に第２トレンチ南側部分からは旧日本軍のものと思われる機関砲実弾10発・小銃実弾２発・焼夷弾・銃剣などが発見されたことから、遺構の検出は不可能であった。

溝ＳＤ－1、ＳＤ－２・敷石遺構確認のため次のようにトレンチを設定した（図版68）。ＡトレンチはＳＤ－１の東肩・敷石の範囲確認のために設定した。第2トレンチはＳＤ－1の西肩と敷石確認のため、池の東岸から中央に向けて設定した。第３トレンチは大井の取水口から西に設定し、敷石遺構とＳＤ－1の検出を行った。第４トレンチは北岸堤の敷石確認のために設定した。第5トレンチも敷石確認のために設定した。第５トレンチは中央のセクションより東半部を第５－１トレンチ、西半部分を第５－２トレンチとした。第６トレンチは第１トレンチの中央付近で東側堤に向けてトレンチを拡張して敷石の確認を行った。

第7・８トレンチは南西から北東に向う大溝ＳＤ－２の範囲確認のために設定した。

各トレンチの掘り下げは人力によって行い、遺構の発掘と層位の観察を行った。

2）調査の内容

1．基本土層

本調査区における基本土層は、湧水や水路の堆積、近世以降の浚渫のため全調査区を統一した土層で表示せず、包含層と、第1～8トレンチの遺物の出土層をⅠ～Ⅳ層で示した。

池床を構成する土層は上層より濃茶褐色腐植土層、暗緑灰色腐植土層で、この層を除去すると愛知川の沖積作用によって堆積したと思われる砂礫層が遺構ベース面を形成していた。この暗緑灰色腐植土層は第1・3・7トレンチの暗緑灰色微砂混り腐植土層と同類土層である。この層を包含層の2層として扱い、出土する遺物も近世の染付等が多く含まれていた。

第1トレンチでは溝ＳＤ－1の溝底まで検出した。トレンチ南端についての遺物包含層の基本土層を示す。上層より黒褐色有機質土上層をⅠ層、黒褐色有機質土下層をII層、黒褐色有機質混り灰褐色細砂層をIII層、暗緑灰色粘土混りの鉄分を帯びた細砂層をⅣ層とした。Ⅰ・II層の黒褐色有機質土層はＳＤ－1、ＳＤ－2の基本土層として、溝の上層に堆積していた。また、ＳＤ－1の黒褐色有機質土上層の上面には敷石IIが人為的に敷設されていた。しかし、敷石Ⅰがどの層と対応するかは池岸を縦に掘り下げていないため判然としない。

第2トレンチでは上層より敷石II、黒褐色有機質土層をⅠ層、暗灰褐色有機質混り砂礫層をII層、暗青灰色砂礫層をIII層とした。特にⅠ層からは土師器の杯が一括出土している。

第3トレンチの基本層位は池床のヘドロ状の腐植土層、敷石II、黒褐色有機土層をⅠ層、薄い落ち込み状の明青灰色粘土層をII層とした。軒丸瓦はII層の直上でⅠ層の最下部にあたる溝底部分より出土した。

第4トレンチは明青灰色粘土混りスクモ層より遺物が出土し、これをⅠ層とした。トレンチの北端は池堤部分で道路に向って上方に傾斜している。その部分に敷石が施され、更に堺の石垣に連続している。

第5トレンチでは敷石IIが見られ、黒褐色有機質土層に遺物が出土しこれをⅠ層とした。また、下層の円礫及び角礫混りスクモ層には1ｍ前後の自然木2本が埋没していた。また円礫・角礫はそれぞれ15cmと20～30cm大で、人為的に投入されたものと思われる。

第6トレンチは暗灰褐色砂礫層をⅠ層とした。このトレンチには杭が1本見られたほか、Ⅰ層の上面には瓦と、敷石II内（但しこの地点の敷石はⅠとIIが重なり、IIが薄くなる所であるため、厳密には銅銭は敷石Ⅰに伴うと考えられる）より「和同開珎」の銅銭が2点重なり合った状態で出土した。

第7トレンチでは黒褐色有機質土層より遺物が出土しこれをⅠ層とした。ＳＤ－2の覆土は上層より黒褐色有機質土層、スクモ層、灰褐色有機質土層の順である。

8トレンチでは遺物の出土はなかったが、ＳＤ－2の覆土は第8－1トレンチにおいて、黒褐色有機質土層、スクモ層、灰褐色有機質混り砂礫層、暗緑灰色粘土層であった。

2．遺　構

検出された遺構には、溝ＳＤ－１・ＳＤ－２、敷石Ⅰ・Ⅱ・Ⅲがある。また、その検出された遺構と関連し、今日なお機能しているものとして大塚井・大井・伊野部井と呼ばれている取水口・排水口がある。なお、池の北西隅には地元の人々が弁天塚あるいは龍神塚と呼ぶ塚状遺構がある。

ＳＤ－１

ＳＤ－１は、ほぼ南北方向にのびる溝である。この溝は南から北にむかって流下しており、溝の規模は、南北 150ｍ、東西13.2～16.8ｍを測り、深さは約 1.4ｍを測る事が出来る。ＳＤ－１は池中央部でＳＤ－２と合流したあと、大きな広がりをみせ、それは扇のごとき形状を呈する。

ＳＤ－２

ＳＤ－２は、池の中央を東西方向にのびる溝であり、西から東にむかって流下し、ＳＤ－１に合流している。規模は東西60ｍ・南北８～15ｍを測る。機能および機能していた時期はＳＤ－１と同じである。

敷石Ⅰ

敷石Ⅰは、１トレンチの一部において確認されたものである。遺構はＳＤ－１にある程度腐植土層が堆積後敷かれたらしく、Ⅱ層よりも礫石は大きく、岸裾では敷石Ⅰ、Ⅱ層も接して重なっている。その機能は護岸のためであろう。

敷石Ⅱ

敷石Ⅱは、敷石Ⅰ同様ＳＤ－１・ＳＤ－２が機能を失った後に施されたもので５～15cmの円礫からなっている。その機能は、溝が埋まった後の腐植土層の池底をおおいかくし清めるために施されたものと考えられる。その造成時期は、敷石上の遺物が江戸前期とみられる陶磁器類であるから、それ以前の時期と考えられよう。

敷石Ⅲ

敷石Ⅲは、堤の法側面の裾よりやや上方にみられるものである。護岸の機能を持ったものであり、その形成された時期は近代であろう

塚状遺構

塚状遺構は、弁天塚あるいは龍神塚と呼ばれるものであるが、現在それは規格性あるマウンドを示すものではない。未調査区域となったためその実体は詳らかにすることはできなかった。

（古川　登、丸山竜平）

3．遺　物

今回の調査で出土した遺物は土器、陶磁器、土錘、瓦、石器、銅銭などである。遺物は主として池床に堆積した暗緑灰色微砂混り腐植土層と、その下層より検出した溝ＳＤ－１・２の覆土より出土した。

以下、土器、陶磁器、瓦、土錘、石器、銅銭の主な遺物について報告する。

(1) 土　器

土器は縄文時代後期から、近世の陶磁器まで幅広く出土した。これを溝ＳＤ－１、ＳＤ－２および包含層、表採別に遺物の特徴とその観察表を記す。また、器種分類は実測したもので、出土点数の多い土師器、須恵器、黒色土器について行った。なお、陶磁器については表２でとりまとめた。第２、３次調査の図版土器番号に付したアルファベットは以下の記号である。Ａ：縄文式土器、Ｂ：弥生式土器、Ｃ：土師器、Ｄ：須恵器、Ｅ：黒色土器、Ｆ：瓦質土器、Ｇ：瓦器、Ｔ：陶磁器。

土師器

〈壺〉

ａ類－二重口縁のもの。

ｂ類－短頸のもの。

〈杯〉

ａ類－高台の付かないもの。

a_1：外面に３段の横なでを行い、底部との境に指圧痕をもつ。

a_2：a_1のもので内面に沈線を持つ。

a_3：２段の横なでを行い、底部は未調整。

a_4：５段の横なでを行い、赤橙色である。

ｂ類－高台の付くもの。

〈皿〉

ａ類－外面に２段の横なでを行う。

ｂ類－「て」字状のもの。

ｃ類－１段横なでのもの。

c_1：口縁部が外反する。

c_2：端部を丸くおさめる。

c_3：端部をつまみ上げ、横になでる。

c_4：端部が面をなす。

ｄ類－口縁部が肥厚し、外反する。

〈埦〉

ａ類－高台の付かないもので、内・外面にへら磨きを施す。

ｂ類－高台の付くもの。

須恵器

〈杯身〉

ａ類－受部をもつもの。

b類－口縁部が外反するもの。

c類－口縁部が上方に伸びるもの。

黒色土器

a類－内面だけ炭素を吸着させたもの。

a_1：へら磨きを施す。

a_2：暗文を施す。

b類－内外面に炭素を吸着させたもの。

ＳＤ－１の出土土器

溝ＳＤ－01には５本のトレンチを設定し、各トレンチの基本土層を上層より順にⅠ～Ⅳ層に区分した。

第１トレンチ(図版73・74)

〈Ⅰ　層〉

土師器

坏(Ｃ4・Ｃ5)の２点が出土した。共にやや高めの高台を持ち、赤橙色の良質な胎土を持った官衙系の土器である。(Ｃ4)は内面にへら磨きを施してある。近江国衙に同種類の土器が出土している。[註(1)] 皿は(Ｃ1～3)の3点で、(Ｃ１)はC_3類で強い指おさえで口縁部がやや肥厚している。(Ｃ2・Ｃ3)はC_1類で外反する口縁部を持ち、(Ｃ３)は口径13.4cmで中皿である。他に坏片、甕片など約80点が出土した。

須恵器

坏身の口縁片(Ｄ6)が１点出土した。器壁は薄く、口径は12.0cmである。

他に黒色土器椀、縄文式土器片各２点が出土した。

〈Ⅱ　層〉

土師器

椀(Ｃ7・Ｃ8)の2点が出土している。口径は10.9cmと11.0cmで、共に外面に埴土を用いて朱色に仕上げている。内面は細い縦の暗文を施し、外面は(Ｃ7)がやや幅の広いへら磨きを行い、(Ｃ８)もへら磨きの痕跡がうかがわれる。共に７世紀中葉と考えられる。皿(Ｃ10)はC_1類で外反する口縁部を持さ、(Ｃ９)はC_2類でなでが３方向で施されている。その他甕の体部片60点と器種不明片60点余りが出土している。

その他の区分では縄文式土器片２点、須恵器片、灰釉陶器片、黒色土器椀片が各１点出土している。

〈Ⅲ　層〉

弥生式土器

(Ｂ12)の受け口状の口縁部を持った甕が１点のみ出土している。内・外面共に磨滅して手法

の特徴は不明である。

須恵器

坏身(D11)が1点出土しているが、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸くおさまり、底部はやや丸底ぎみである。

その他、土師器片13点が出土している。

〈Ⅳ　層〉

縄文式土器

6点出土したが(A19～21)の3点が実測できた。深鉢(A20)は波状口縁で、へら状工具又は貝殻による沈線文を3条施す。後期末のものと考える。深鉢(A21)は口縁部外面にややゆがんだ、指圧痕も不明瞭な突帯が付く。浅鉢(A19)は内面をへらで磨き、外面は口縁部が左に体部は右下にへら削りしてある。共に縄文晩期のものである。

弥生式土器

(B14・B15)は共に甕の底部であるが、(B15)はやや上げ底で厚く、(B14)は刷毛目を施し、底部も薄い。後期のものである。他に細片が 200点余り出土した。

土師器

二重口縁をもつ古式土器が3点(C16～18)出土したが、(C16・17) は同一個体と思われる。口径は共に26.4cmとやや大型である。古墳時代前期のものと考える。短頸壺(C13)は外面に朱を塗り、口縁部に横、体部に縦のへら磨きを行い、内面には刷毛目を施す。出土例は少ないが、古墳時代前半のものと思われる。他に土師器片は細片が約 500点が出土している。

第2トレンチ(図版75)

第2トレンチは土器の出土層が上層より、黒褐色有機質土層、黒褐色有機質土混り砂礫層、暗青灰色細砂層となり、順にⅠ～Ⅲ層とした。

〈Ⅰ　層〉

土師器

甕(C22)は口径26.0cmで内彎する口縁部を持ち、端部外面に一条の沈線を巡らして上方に引き出してある。内・外面共に刷毛目を縦・横・斜に施し、外面頸部は横なでを施している。いわゆる「近江型」の長甕で、8世紀前半のものである。坏は(C23～30)が西肩部分より一括出土し、共に外面に3段の横なでを行い、底部との境に指圧痕が目立つ。色調は淡い灰白色が多い。(C29・C30)は内面に横なでに伴う沈線をもつ。(C31)は溝の東肩部分より出土している。いずれも10世紀末から11世紀にかけての平安中期の土器である。土師器片は小皿が3点、一括出土の坏片が約 140点出土している。

須恵器

高台付きの坏身底部(D32)と、壺の底部(D33)の2点が出土している。

〈II　層〉

須恵器の坏蓋(D34)が1点と弥生式土器の少片が数点出土しているだけである。坏蓋はほぼ水平の体部をもち、ゆるやかな孤をえがいて端部にいたる。体部の半分にへら削りが見られる。平安時代のものと考える。

〈III　層〉

この層からは縄文時代晩期の浅鉢片3点と土師器片が少々出土しているが、実測可能なものは見られない。

第3トレンチ(図版75)

第3トレンチは厚い黒褐色有機質土層（I層）と明青灰色粘土層（II層）より遺物が出土した。

〈I　層〉

土師器

土師皿(C35・C36)の2点が出土し、口径は13.2～13.4cmと中型で、外面の横なでも幅広く、親指でいっきになでたものと思われる。C_2類ではあるが、平安後期のものと思われる。

他に土師器の坏、甕小片と鍛治炉の炉壁片が出土している。

第4トレンチ（図版75)

明青灰色粘土混りスクモ層（I層）から土師皿と坏底部片2点が出土した。

土師器

小皿(C37)はc類で外面の横なでが強く、底部との境に段をもち、底部には粘土紐巻き上げ痕が残る。体部には×印を線刻する。(C38)は「て」字型の小皿で口径 8.2cmでb類である。

第5トレンチ（図版76)

第5トレンチでは黒褐色有機質土層（I層）より土師器皿(C39～42)、皿小片3点、甕小片2点、須恵器坏片、甕片各1点が出土した。

土師器

小皿(C41)はb類の「て」字状で器壁は薄い、(C39・C40)はC_1類で外反する口縁部を持つ。(C39)は底部に十字の線刻が見られる。(C42)はd類で口縁部が肥厚し、底部は上げ底となる。SD－1ではもっとも新しい土器である。

SD－2の出土土器

溝SD－2では2本のトレンチを設定したが、遺物が出土したのは7トレンチだけであった。

第７トレンチ（図版76）

〈Ⅰ　層〉

Ⅰ層の黒褐色有機質土層より土師器が２点出土した。

土師器

皿(Ｃ44)は大皿ａ類で口径16.8cmで今回出土した皿では最大径をはかる。２段の横なでを施し、口縁部は大きく外反する。小皿(Ｃ43)はｂ類で「て」字状口縁をもつ。

包含層の出土土器(図版76、77)

包含層は池床の全面を覆う暗緑灰色微砂混り腐植土層である。

土師器

坏(Ｃ65)は２段の横なでを行い、底部は粘土ひも巻き上げ痕が残る。内面の1/3と外面の口縁部に少々黒斑が付着する。埦の底部と見られる(Ｃ63・Ｃ64)はやや荒い砂粒を含む。皿は(Ｃ45～62)である。ａ類には(Ｃ57)があり、２段の横なでを施し、下段は凹線ぎみになる。C_2類には(Ｃ45～50・Ｃ62)があり、(Ｃ62)はやや口径は大きいが、他は 8.0～ 8.9cmの小皿である。(Ｃ62) は内面に横なでによる沈線が見られ、(Ｃ50)は口縁部がやや肥厚する。(Ｃ52・Ｃ53)はC_3類である。(Ｃ53)は口縁部の内・外面にススが付着していることから灯明皿として使用されていたものと思われる。(Ｃ54～56・Ｃ59)はC_4類であり、(Ｃ54)は赤橙色で内面は水びきの平滑な面をもつ。他は端面に浅い凹線をなす。（Ｃ58・Ｃ60・Ｃ61）はｄ類である。共に口縁部が肥厚し、底部との境で屈曲する。

黒色土器

埦の底部(Ｅ66～68)は(Ｅ68)が内・外面共に炭素を吸着させて外面にはへら磨きが施されている。(Ｅ66)の底部には十字の線刻が見られる。(Ｅ69～72)は底部を欠損している。(Ｅ69)は横なでを行う。(Ｅ70)はラセン状の暗文が内面に見られ外面にはヘラによる磨きがみうけられる。(Ｅ71・Ｅ72)はラセン状の暗文で外面の磨きは見られない。(Ｅ72)は内面の沈線もごく浅くなっている。(Ｅ69・Ｅ70)は10～11世紀、(Ｅ71・Ｅ72)は12～13世紀のものと考えられる。

瓦　器

Ｇ(73)の埦片が１点のみ出土した。内面の口縁部には沈線を持ち、横の磨きと斜めのこまかな磨きが見られる。

瓦質土器

鉢の小片(Ｆ74)は端部上方に面を持ち、内彎する口縁部を持つ。(Ｆ75)は羽釜の脚で面取りをしている。

池床の包含層からは他に陶器・磁器などが出土し、その内容については表(2)に示した。

表　採(図版77)

表採の土器は3点あるが、(D77・D78)は第一次調査時の採集土器である。

須恵器

坏身(D77)は受部がやや上方に伸び、立ち上がりは内側上方に伸びる。底部にはかき目が見られる。(D78)の坏身は短かく内傾するかえりと、小さな受け部をもつ。底部の3分の1にはへら削りが見られる。共に6世紀初頭のものと考える。

瓦質土器

(F76)は口縁部を欠くが短頸の壺と思われる。底部は厚く丸底ぎみである。壺の内・外面には漆が付着している。

(濱　　修)

(2)　瓦(図版78～81)

第2～5トレンチ、包含層から軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、隅平瓦などの破片97点が出土した。時代は、白鳳から中世のものまで含まれており、中でも平安時代の平瓦片が大半を占める。今回出土したこれらの瓦片はきわめて小さく、観察項目をかろうじてうめられる程度のものである。ここでは比較的残存状況のよいものをとりあげ、説明を加えることにする。なお、観察表においては、分類項目をもうけ、記号化した。

第2トレンチからは、黒褐色有機質土層(I層)より、平安時代の平瓦片(1)が1点のみ出土した。　狭端面の一部を残す破片で、凹面側に一回面取りを施している。厚みは比較的薄く、現存厚 1.3cmを測る。凹面の布目圧痕は、部分的にハケ目ですり消されているが、1㎠あたり(7×7)本の布目である。凸面の縄目叩きは、縦方向のハケ目によってすり消されているが、一部に残る縄目より、3㎠に11条を数えるやや細やなものである。

第3トレンチからは、黒褐色有機質土層(I層)より、白鳳～奈良時代の軒丸瓦(2)1点、丸瓦片(3・4)2点、平瓦片(5～8)4点、平安時代の丸瓦片(10～13)4点、平瓦片(14～31)18点、隅平瓦片(32)1点、中世の平瓦片(33)1点、また、明青灰色粘土層(II層)より、白鳳～奈良時代の平瓦片(9)1点、計33点の出土をみた。

単弁蓮華文軒丸瓦(2)

外区周縁、内区花弁の一部を欠失した単弁蓮華文軒丸瓦の瓦当面左半部の残存したものである。内区において、中房には半球形を呈した蓮子が中央に1個、その周りに6個一重にめぐるものであるが、そのうち1個欠失している。花弁は、弁中に子葉1個を配した単弁をあらわし、弁数は本来12葉であるが、欠損して現存するのは8葉である。弁端はやや角ばった形をしている。外区外縁は、傾斜縁で内斜面の一部に細い線鋸歯文が認められる。色調は明灰白色、胎土は細かく、焼成は軟かい。なお、顎面部には、左から右へ6本の櫛目でやや粗雑に波状文をえがいており、他に類例をみない興味深いものである。

表２　軒丸瓦計測表

瓦当面								
直径	内区				外区			
14.2	中房径	蓮子数	弁幅	弁数	外区広	外区幅	外区高	文様
(16.8)	4.9	1＋5(6)	2.7	8（12）	2.2	1.8	1.3	線鋸歯文

※単位はcm．（　　）は復元値

次に、破損面における粘土の重なり合いの観察によって製作技法を復元してみると、以下その順序である。

①　瓦当范に外区の粘土を入れる。

②　内区のうちの中房に、まず粘土をいれる。

③　その上へ重ねるように内区全体に入れる。

④　瓦当全体に粘土を補充する。

⑤　丸瓦を接合するための溝をつける。

⑥　丸瓦をさしこむ。

⑦　瓦当、丸瓦接合部の補強のため、内面接合粘土、外面接合粘土をあてる。
瓦当裏面はヘラで成形したのち、さらに指で整形しており、瓦当裏面上部には明瞭な指頭圧痕がみられる。

丸瓦（３）

側面の一部を残す破片である。凹面には、粘土板糸切り痕が斜めに走っており、それを覆うように布目圧痕が広がっている。１㎠につき（11×10）本の細かい布目である。側縁に平行して一例、布筒端布の重ね合せ部分の綴目が認められる。やく 0.5cmの縫目である。そのよこＶ字形にういてみえるのは、糸紐の圧痕であろうか。縫目とは異なるものである。凸面においては、叩き目の痕跡は全く認められず、縦方向のケズリですり消され、さらに縦ナデで仕上げられている。側縁に平行してヘラ痕を残す。半載以前の分割載線のヘラじるしであったものか。

隅平瓦（32）

広端部の左側隅を生乾きの段階で、斜めに切断し、のちに焼成した隅平瓦の破片である。わずかに残る切断面を延長して復元してみると、側縁に対する切断部分の角度は、45度くらいであったと思われる。凸面においては、３cm幅で10条の縄目痕をとどめる。凹面には１㎠に（10×８）本の布目圧痕を残し、狭端縁、側縁に浅い面取りをしている。

第４トレンチからは、明青灰色粘土混りスクモ層（Ⅰ層）から白鳳～奈良時代の丸瓦片（34）１点、平瓦片（35・38)2点、平安時代の丸瓦片（36）１点、平瓦片（37、39～55)18点、計22点の出土をみた。

第5トレンチからは、黒褐色有機質土層（Ⅰ層）より、白鳳～奈良時代の軒平瓦片（57）1点、丸瓦片（56）1点、平瓦片（58～64）7点、平安時代の丸瓦片（65）1点、平瓦片（66～86、88～90）、また、明青灰色粘土層（Ⅱ層）から平安時代の平瓦片(87)1点、計35点の出土をみた。

軒平瓦（57）

重弧文軒平瓦の顎部だけが剝落して残ったものである。顎部中央から端部にかけてやく1／2が現存する。瓦当部の重弧文を描く手法は、砂粒子の移動が認められることから、ヘラで行ったものと推察される。弧の断面形状は、〔形を呈し、三～四重弧であったものと思われる。端縁は欠失。段顎形式のもので、顎部幅 6.8cm、深さ 1.8cm（文様の深さ 0.5cm）を測り、幅の割には段が低い浅顎になる。なお、顎面部底面は、横ナデ調整が施され、また数ヶ所に明瞭な指頭圧痕が残る。破損面には、粘土板製作時の糸切り痕をとどめる。これは、平瓦との接合面であり、粘土板を継ぎたして顎部をつくりあげる製作技法によって生じたものである。

包含層(2層)暗緑灰色微砂混り腐植土層より、白鳳～奈良時代の丸瓦片(91)1点、平瓦片(92、93）2点、平安時代の平瓦片(94)1点、中世の丸瓦片(95)1点、平瓦片(96、97)2点、計7点の出土をみた。

まとめ

昭和58・59年度にまたがる吉住池発掘調査においては、総数97点にのぼる瓦片の出土をみた。当初、吉住池に近接する瓦屋寺古窯址群の存在から、まずそれとの関連を想定した。しかし、出土瓦は瓦窯址に最も近い西寄りからは全く出土をみず、また吉住池全域にわたって点在することもなく、トレンチ3～5に集中して出土している。その層序においても下層から上層にかけて大きくは層序順の出土状況を示すものである。このトレンチ3～5は吉住池の北端、角部に位置し、また吉住池から流れる唯一の排水口でもある。

出土瓦には、ひずみのあるもの、焼成不良の生焼けのもの、あるいは窯に用いたスサ混りの粘土の付着するものなど、明らかに窯跡からの出土と確定づけるものは現在のところ見受けられない。またこれらの出土瓦の観察により、時代は白鳳から奈良、平安、中世に及ぶものまで含まれている。

以上のことからも、これらの瓦が窯跡に関連するものではなく、　この付近に建立された何らかの建物に伴うものと推定できる。出土の瓦量は、一般的な寺院を想定するには、あまりにも出土量が乏しいこと、また、唯一の軒丸瓦は類例に比べてやや小規模であること、隅切瓦の出土をみることなどから、推定にはせると、吉住池の排水口である北端角にこの池水の信仰にかかわる小堂などが建立されていたのではないだろうか。

なお、この唯一の軒丸瓦は吉住池から流れる用水の水系下流にあたる五箇荘町金堂及び、能登川町法堂寺で類例がみうけられることから、いずれもが吉住池を中心とする同一水系に同一

文化圏が発達していたものと考えられないであろうか。

（岡本隆子）

(3) 土　錘（図版82、83）

本遺跡出土の土錘は、総数41点を数える。ＳＤ－１（Ⅰ層・Ⅲ層、包含層（２層）からの出土が大多数を占め、数点の表採品が挙げられる。

出土した土錘は、すべて土師質で身の長軸方向に貫通孔があるものである。以下、形態によって分類する。

Ａタイプ（1・2・14・15・18・19・40）

中央で脹らみのもつ管形で、本遺跡から出土した土錘の中で最も小型で軽量のものである。７点出土した。完形品（３点）からみた法量の平均値は、長さ2.63cm、最大径0.65cm、孔径0.33cm、重量1.60ｇとなる。孔口は不整形であるのが通常である。貫通孔は焼成後に貫孔するのではなく、むしろ丸棒状のものを芯軸として軸に粘土を均一に巻いて（板状の粘土を巻いたのか）貫通孔を生じだしている。焼成によって生じる黒斑は、19で両端にみられるだけである。また19は、焼成後両端に穿孔を試みているが、貫通までは至っていない。

Ｂタイプ（5・13・28～30・32・34・35・39）

円柱形のものである。９点出土した。大多数の端部に欠損がみられるが完形に近いものである。法量は、長さ5.05～ 3.8cm、最大径 1.9～ 1.3cm、孔径 0.8～ 0.6cm、重量 13.68～7.08ｇを測る。孔径はＡタイプよりやや大きい程度のものである。孔口は横ナデあるいはへら状工具のナデにより面をなしている。貫通孔はＡタイプと同様、芯軸に粘土を巻いて貫通孔を生じだしている。黒斑は、表面の磨滅が著しいものが多くわかりにくいが、片端の一ヶ所に黒斑がつくもの（５）もある。

Ｃタイプ

紡錘形を呈する。以下、法量の差により３タイプに分類できる。

C_1タイプ（３・４・12・16・20・31・41）

小型で紡錘形を呈する。７点出土した。完形品（３点）からみた法量の平均値は、長さ3.13cm、最大径1.38cm、孔径 0.5cm、重量5.80ｇとなる。孔口は面をなしている。孔径、重量ともにＡタイプとＢタイプの中間的な様相を示している。貫通孔は、芯軸に粘土を巻いて生じ、また、両端を指オサエすることにより突出させるものもみられる。黒斑はつくものとつかないものがあり、つき方は一様でない。

C_2タイプ（６・11・17・21・26・27・33・36・37）

中型で紡錘形を呈する。９点出土した。完形品（３点）からみた法量の平均値は、長さ5.33cm、最大径1.93cm、孔径0.83cm、重量 17.22ｇとなる。孔口は横ナデにより面をなしているのが通常である。孔径は、Ｂタイプに近いが重量はＢタイプよりもやや重い傾向にある。貫通孔は、芯軸に粘土を紡錘形に積み出して生じ、また両端あるいは片端を指でオサエる。31・37の

ように端部に粘土の合せ目が長軸に平行して見られることから板状の粘土を巻き合せて製作されたものと考えられる。黒斑は、つくものとつかないものがあり、つき方が一様でない。

C_3 タイプ（39）

大型で紡錘形を呈し、本遺跡出土の土錘の中で最も大型で重量のあるものである。両端の一部に欠損がみられる。法量は、長さ 8.1cm、最大径 3.3cm、孔径 1.1cm、重量 57.36ｇを測る。径孔は、出土した土錘の中で最も大きく、特に重量は他のと比較すると抜きんでている。貫通孔は、芯軸に粘土を巻いて生じ、また、両端を強く指でオサエることにより突出させる。黒斑は、片端の一ヶ所に認められる。

Dタイプ（7・8・22・24）

俵形を呈する。４点出土した。完形品（２点）からみた法量の平均値は、長さ3.75cm、最大径 2.1cm、孔径0.95cm、重量 13.57ｇとなる。孔口は、面をなしヘラ状工具でナデているのが通常で、また、両端から最大径付近に向ってヘラ状工具でナデているもの（８）もみられる。孔径は、他と比べて大きいが、24の様に小さいものもみうけられた。貫通孔は、芯軸に粘土を巻いて生じる。黒斑は、残存の少ない１点を除き、外面に１ヶ所認められる。

Eタイプ（9・10・23・25）

樽形を呈する。４点出土した。完形品（３点）からみた法量の平均値は、長さ3.87cm、最大径 2.8cm、孔径1.27cm、重量 31.42ｇとなる。孔口は、へら状工具でナデ、巾の広い面をなしている。また、長軸に直交する方向で横ナデが施され、両端付近は強く施されている。端部には、粘土の合せ目が認められ、これが両端に対応して認められることから、芯軸に細長い板状の粘土を巻き合わせた成形法で製作されたものである。

（喜多貞裕）

(4) 石　器（図版84）

１は包含層より出土した磨製石器の破片である。現存長10cm、現存幅 8.5cm、最大厚0.55cmを測る。石材は黒色の頁岩を使用しており、両面とも横方向の細かな研磨により仕上げられている。背部にも荒い研磨が施されている。大型の石庖丁の破片であろうか。重量55.4ｇ。

２は第１トレンチの暗緑灰色粘土混り鉄分帯細砂層（Ⅳ層）より出土した石器の破片で、現存長5.6cm、現存幅3.3cm、最大厚2.6cmを測る。平面形は楕円形を呈するものであろう。片面にごく浅い凹部がある。石材は白色のアプライトである。重量は68.7ｇを量る。

３は包含層より出土している。刃部を欠損した石斧で、断面は楕円形を呈する。基部の先端には敲打痕が認められる。現存長 9.9cm、最大幅 4.8cm、最大厚 3.3cmを測る。石材は玢岩である。重量 234.6ｇ。

４は表面採集した砥石で、長さ20.3cmを測り、断面は方形を呈する。二面を砥面としている。使用痕は顕著であり、とくにＡ面下方窪み中央縦方向２ヶ所に鑿様金属工具の側面のあたりが明瞭に認められる。また、Ｂ面右下方には砥面以前の自然面が残る。石材は、きめの荒い

花崗岩質のアプライトであり、荒砥石として使用したものであろう。重量は 1,325.0ｇあり、置き据えて使ったと考えられる。

（渡辺泰子、岡本隆子）

(5) 銅　銭（図版77）

1は第6トレンチ石敷内より出土した「和同開珎」であり、たて径2.38cm、よこ径2.40cm、厚み0.14cm、重さ2.00ｇを測る。2は第2層(包含層)より出土した寛永通宝であり、たて径径2.44cm、よこ径2.45cm、厚み0.13cm、重さ3.12ｇを測る。また、3は第2層(包含層)より出土した文久永宝であり、たて径2.64cm、よこ径2.64cm、厚み 0.9cm、重さ2.74ｇを測る。和銅開珎は、この吉住池の築造年代の下限を暗示しており、また、2．3の銅銭についても敷石IIの下限を示すものである。なお、銅銭1に伴出しもう1点の破損した「和同開珎」の出土をみる。

（丸山竜平）

4．小　結

昭和54年度に発掘調査された上日吉遺跡(註1)(のち日吉遺跡に改称)は吉住池に南接して、縄文時代晩期の甕棺墓、弥生時代末から古墳時代の竪穴式住居跡、方形周溝墓、7世紀前半から8世紀前半の竪穴式住居跡と掘立柱建物跡群が検出されている。

また、吉住池の第一次調査では池の南半分について行ったが、7世紀後半には機能を停止した水路や、江戸時代まで確実に溯る湧水土坑が検出されている。

今回の調査で検出されて溝ＳＤ－1は吉住池の機能を解明する糸口を提供してくれた。

ＳＤ－1の出土遺物は溝の底より縄文時代後期の深鉢や弥生時代終末～古墳時代前期の土器が出土し、埋土の上層では中世末の土師皿が出土している。出土量のもっとも多い遺物は平安時代のものと江戸時代のものである。

これらから、ＳＤ－1について4回の画期を考えたい。第1回は1トレンチ第Ⅳ層出土遺物に見られる、弥生時代終末から古墳時代初頭の時期である。日吉遺跡の第2～4トレンチでは弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴式住居跡や方形周溝墓が微高地に存在している。この地方は古代より愛知川の扇状地で水稲耕作に不適な地とされてきたが、吉住池周辺には愛知川の伏流水が箕作山にさえぎられ湧水となっていた。吉住池を中心とする低湿地帯は弥生時代の農耕民にとって貴重な生産活動の場であったと思われる。微高地に生活する人々は、低湿地を利用して水稲耕作を営んでいたであろう(註2)。

第二の画期は土師埦(Ｃ７・Ｃ８)に代表される7世紀中葉の時期である。この時期、吉住池に南接する日吉遺跡の第1トレンチでは、西の沼沢地に近接して7世紀前半の竪穴式住居跡が検出されており、また吉住池南半分の調査でも、7世紀前半の遺物を多く含む水路を検出している。吉住池周辺には白鳳期までさかのぼる古地割が認められる(註3)。周辺地域の経済的発展は用水確保に伴う地割を発達せしめたと思われる。そのためにも溝の機能は重要な政治的・経済的役割を持っていた。

第３の画期は平安時代中期で、今回図示した土器の３割がこの時代であり、平安時代後期の遺物も加えると６割を数える。

平安時代になると日吉社が荘園領主として吉住池周辺の建部荘を支配した(註４)。建部荘の初見は文治２年(1186)であるが、それ以前から中世的開発を受けていた。建部荘は神崎郡の新堂・三股・山本・野・奥・木流・平坂・中・南・北・上日吉・瓦屋寺・浜野・堺・八日市場などに該当すると思われる(『近江輿地志略』)。新堂～平坂の各集落はいずれも吉住池の湧水の下流域であり、流域農民にとっては貴重な水源であったろう。集中的に多量の用水を必要とする水稲耕作にあたって、恒常的に供給される吉住池の湧水は農民にとって信仰の対象ともなったであろう。時として、水不足による飢饉や、村落共同体間での水争いも発生したであろう。

２トレンチのⅠ層で池中央寄りの溝肩部分で一括出土した土師器の杯は、祭祀や官衙的性格の強い遺跡での出土が多いものである。池の湧水は周辺農民や下流農民にとって貴重な水源であったことから、一括遺物は池の霊・水の霊に対する民衆の祭祀的性格を強く示すといえる。

第４の画期はこの溝の機能が長年の濁土の堆積で停止し、溝の全面に敷石が施された。中世末から近世初頭にかけてである。

現在も吉住池には伊野部井、大井、大塚井などの樋門があり、下流の集落に用水を供給しつづけてきた。今回の調査で、吉住池は水稲耕作の伝わった弥生時代よりこの方、水源地としてその機能を保ちつづけてきたものとみてよかろう。

（濱　　修）

註１．近藤滋他『ほ地整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅶ－２、「上日吉遺跡」は「日吉遺跡として変更されたため、以下それに例う。

註２．丸山竜平『八日市市史』第１巻第２章第２節

註３．丸山竜平『八日市市史』第１巻第５章第４節

註４．岡田精司『八日市市史』第１巻第３章第２節

表３　土器観察表

ＳＤ－１

器種	器形		土器No.	法量(cm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土師器	皿	C_3	1	口径 9.8	1	I	体部は内彎して立ち上がり口縁部は肥厚しながら外反する。端部はつまみあげたあと、横なでを施す。	内、外面の口縁部を横なでする。口縁部及び底部に指おさえを施す。	灰褐色	良好	良好	
		C_1	2	口径 9.1	1	I	体部は内彎して立ち上がり口縁部はやや外反し、端部はやや上に面をもつ。丸底である。	内面と外面口縁部は、横なでを行い外面底部は指でおさえる。	暗灰褐色	良好	良好	
		C_1	3	口径 13.4	1	I	体部は内彎して立ち上がり口縁部は外反し、端部内側に面をなす。外面口縁部に沈線をもつ。	内面及び、外面体部に横なでを施す。	灰褐色	良好	良好	
	坏	b	4	口径 16.8	1	I	体部は内彎し端部はやや面をもっておさまる。外面底部の境には段をもつ。底部には断面方形の外方へ開く高い貼り付け高台をもつ。	内面体部は２条の磨きがある。外面は横なでを行い底部は、なで調整を施す。	赤橙色	良好	やや軟	
			5	底径 8.6	1	I	体部は内彎して立ち上がり底部には断面・方形の外方の開く高めの貼り付け台をもつ。	内面は、横なでの後、右上りの斜めのなでを施す。外面及び高台内外面には横なでを施す。	赤橙色	良好	やや軟	
須恵器	坏身	c	6	口径 12.0	1	I	口縁部は、内彎して立ち上がり、端部は丸くおさまる。	内・外面共に横なでを施す。	灰青色	２㎜前後の砂粒を含む。	堅緻	
土師器	埦	a	7	口径 10.9	1	II	体部は内彎して立ち上がり口縁部で外反する。端部は外方へつまみあげられている。	内面はヘラ磨きを施し、平滑であり、外面も太いヘラ磨きを行う。	灰褐色	良好	良好	
			8	口径 11.0	1	II	内部は内彎して立ち上がり口縁部ではさらに内彎する。端部は上方につま	内面はヘラ磨きを施し、外面口縁部は横なでを行う。	褐灰色	良好	良好	

器種	器形		土器No.	法量(cm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土師器							みあげる。底部は丸底と思われる。					
	Ⅲ	C_2	9	口径 8.6	1	II	体部は内彎して口縁部は上方に立ち上がる。端部は丸くおさまる。底部は丸底と思われる。	外面口縁部は、なでが左上方に、又内面は右上方に施し更に横方向になでる。底部との境は内外面より指おさえを行い底部は末調整である。	灰褐色	1㎜前後の砂粒を含む	良好	
		C_1	10	口径 9.2	1	II	体部は内彎して立ち上がる。口縁部で外反し、端部内側に面をなす。	内外面口縁部に横なでを施し、底部に指おさえする。		良好	良好	
須恵器	坏身	c	11	口径 11.0	1	III	体部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸くおさまる。内面底部には、段をもち底部は丸底である。	内、外面はロクロなでをし、外面底部はヘラ削り。	暗灰青色	1～2㎜の砂粒を含む	堅緻	
弥生式土器	甕		12	口径 16.8	1	III	受け口状の口縁部をもち、端部は外方にのび、丸くおさまる。	全体に磨滅している。	灰褐色 灰黒色	砂粒	やや軟	
土師器	壺	b	13	口径 14.8	1	Ⅳ	体部は丸く内彎し、やや「く」の字状に屈曲した口縁部は又内彎する。端部は内面につまみ出す。外面に丹を施す。	外面、口縁部は磨きの後横なでを行う。体部は縦の磨きを施す。内面口縁部は横なでを行い体部は横なで後刷毛目調整を行う。	(内) 灰白色 (外) 褐橙色	精良	良好	
弥生式土器	甕		14	底径 5.0	1	Ⅳ	体部は内彎して立ち上がり底部は厚くあげ底となっている。	全体に磨滅している。	(内) 茶褐色 (外) 赤褐色	砂粒	良好	
			15	底径 3.0		Ⅳ	体部は外彎して立ち上がる。底部は扁平である。内面は、剝離している。	外面体部に縦、横にこまかい刷毛目を施す。	赤橙色 黒褐色	砂粒	もろい	
土師器	壺	a	16	口径 26.4	1	Ⅳ	外反して伸び、口縁端部で更にやや外反する。端部は丸くおさまる。	内、外面とも横なでを施す。	灰褐色	砂粒	良好	

器種	器形		土器No.	法量(cm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土師器	壺		17		1	Ⅳ	屈曲部分に突帯状の稜を持ち、体部は強く外反する。	外面は横なでを施す。	灰褐色	砂粒	良好	19と同一個体
			18	口径26.4	1	Ⅳ	外反して立ち上がったあと、屈曲してやや直立したあと再び外反する。口縁部で端部は丸くおさまる。屈曲部外面に突帯状の稜をもつ。	内、外面共に横なを行い、体部に指おさえを行う。	灰褐色ススス付着	砂粒	良好	
縄文式土器	浅鉢		19		1	Ⅳ	体部から口縁部にかけ内彎して立ち上り端部は丸くおさまる。	外面は左方向と右方向へのけずりがある。体部下は横なでを行う内面は磨きを施し、端部は、丸くなる。	(内)黒褐色(外)暗黄褐色	砂粒		スス付着
	深鉢		20		1	Ⅳ	波状口縁をもち、外面には3条の沈線文を施す。端部は、丸い。	貝殻又はヘラ状工具によるナデを施す。	褐色	砂粒	良好	スス付着
			21		1	Ⅳ	口縁部に突帯をめぐらし、刻目を入れる。口縁端部は、外彎する。	内面口縁部は、横なでを行い体部には貝がら条痕文をもつ。端部は、なでを施し、突帯は横から指おさえをし体部はヘラ削りを施す。	(内)暗黄褐色(外)灰褐色	砂粒	良好	スス付着
土師器	甕		22	口径26.0	2	Ⅰ	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は内彎しながら立ち上がり端部外面に一条の沈線をめぐらす。	外面体部に右下りの刷毛目と指おさえを行う。内面体部は縦横の刷毛目口縁部には横に刷毛目を施す。	暗黄褐色	2～3㎜の砂粒を含む	良好	
	坏	a1	23	口径13.4器高3.8	2	Ⅰ	口縁部はやや内彎しながら立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は3段のなでを認める。底部は扁平である。	内面及び平面の口縁部は、横なでを行う。内外面共に底部との境に指圧痕を施す。底部は未調整である。	褐灰色	良好	良好	
			24	口径13.6器高3.4	2	Ⅰ	端郎は丸くおさまる。口縁部はやや内彎し、3段の横	内面、外面ともに横なでを行う。内・外面の底部の境には	淡茶灰色	良好	良好	

器種	器形		土器No.	法量(cm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
							なでを施す。	指圧痕をもつ。				
			25	口径 13.4 器高 3.7	2	I	口縁部は内彎して立ち上がり口縁端部は丸くおさまる。体部は3段の横なでを施す。	内面外面共に横なでを行い底部は未調整である。内外面の底部の境には指圧痕をもつ。	褐灰色	良好	良好	
			26	口径 13.4	2	I	口縁部はやや内彎し、端部は丸くおさまる。	内面の口縁端部下にはやや深いなでが見られる。内外面共に横なでを施す。	褐灰色	良好	良好	
			27	口径 12.6 器高 3.7	2	I	口縁部はやや外反して端部は面をもつ。体部には3段の横なでを施す。	内外面共に横なでを施すが内面はやや荒い底部との境に内外面共指おさえを行う。底部は未調整である。	褐灰色	良好	良好	
			28	口径 12.8 器高 3.7	2	I	口縁部は内彎して立ち上がり端部は丸くおさまる。外面体部には3段のなであとがある。底部は扁平である。	内面、外面共に横なでを行う外面底部との境には、強い指おさえをもつ。	褐灰色	良好	良好	
	坏		29	口径 13.8 器高 3.8	2	I	口縁部はやや外彎し端部は丸くおさまる。体部には3段の横なでを施す。底部は平らで中央でややあげ底となる。	内・外面共に荒い横なでを行い、内面の口縁部に一条の沈線がみられる。外面底部の境は強い指圧痕があり底部は未調整である。	褐灰色	良好	良好	
			30	口径 13.2 器高 3.6	2	I	口縁部は、やや内彎して立ち上がり端部は丸くおさまる。体部には3段のなでがある。底部はややくぼみをもつ。	内面の口縁部は2条の沈線をもち、内・外面共に横なでを施す。内・外面底部境には指圧痕があり底部は未調整である。	褐灰色 赤褐色	良好	良好	
		a4	31	口径 14.0 器高 4.0	2	I	体部は内彎して立ち上がり口縁部はやや外反し端部は上方に面をなす。体部外面には5段の横なでを施す。底部は平底である。	内外面共に横なでを施し底部は未調整である。全体に磨滅している。	赤橙色 黄褐色	1～2㎜の砂粒を含む	やや軟	
	坏身		32	底径 8.6	2	I	底部には外方へ開く断面方形の高台	内面底部はロクロなでを行い外面は	灰橙色	2～3㎜の砂	良好	

器種	器形		土器No.	法量(cm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
須恵器							がつき、高台の内側で接地する。	ヘラ削りを行う。	粒を含む。			
	壺		33	底径 8.6	2	I	底部は平底で体部は、内彎しながら立ち上がる。内面に段を持つ。	内面はロクロなでを施す。	灰青色	2～3㎜の砂粒を含む	堅緻	
須恵器	蓋		34	口径 22.0	2	II	体部はほぼ水平にのびて口縁部にいたり、口縁部はゆるい弧状を呈し先端にいたる。端部内面には凹部をつくる。	外部は体部にヘラ削りを行い端部では横なでを施す。内面は横なでを行い、中央に仕上げなでをする。	暗灰青色	2～5㎜の砂粒を含む	堅緻	
土師器	皿	C_2	35	口径 13.2	3	I	体部は内彎して立ち上がる。内面口縁部に段をもち、外面底部との境に段をもつ。端部は丸くおさまる。	内面は荒い横なでを行い、外面口縁部まで横なでを施す。底部は指おさえを行う。	暗青灰色	精良	良好	
		C_1	36	口径 13.4	3	I	口縁部は内彎して立ち上がり、端部は丸くおさまる。	内面は荒い横なでを行い外面は口縁部に横なでを行い底部は、指でおさえる。	黄灰色	良好	良好	
土師器	皿	C_1	37	口径 10.8 2.8	4	I	体部は、内彎して口縁部でやや外反する。端部は上に面をなす。底部は丸底である。	外面口縁部は横なでで体部との境に段をもつ。底部は未調整で内面は横なでし、外面体部に「×」を刻む。	暗黄灰色	良好	良好	
		b	38	口径 8.2	4	I	口縁部は外彎し、端部は内に屈曲し、丸くおさまる。	底部未調整、内面外面、口縁は横なでを行う。	灰褐色	やや荒い	良好	
土師器	皿	C_1	39	口径 9.6 器高 2.3	5	I	体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。端部は、上に面をなす。底部は、丸くなる。	外面内縁部と内面体部に横なでを施す。外面体部に指おさえ、底部は未調整。	暗黄灰好	良好	良好	
			40	口径 10.5	5	I	口縁部は外彎ぎみに立ち上がり端部は上に面をもつ。外面端部との境に段をもつ。	内面及び外面口縁部には、横なでを施す。	暗灰褐色	良好	良好	

器種	器形		土器No.	法量(cm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土師器	皿	b	41	口径 11.0	5	I	口縁部は屈曲して外彎し端部はさらに内に屈曲して丸くおさまる。	外面口縁部と内面は軽い横なでを行う。外面底部は未調整である。	灰褐色	良好	良好	
		d	42	口径 10.2	5	I	口縁部はやや外彎して肥厚する。端部は丸くおさまる。	内・外面に横なでを行う。	茶灰色	良好	良好	全体に磨滅している。

ＳＤ－２

器種	器形		土器No.	法量(cm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土師器	皿	b	43	口径 9.4	7	I	口縁部は屈曲して外彎し端部はさらに屈曲して立ち上がる。先端部は外に面をもつ。	外面底部は指おさえ、口縁部は横なでを行う。	灰褐色（茶褐色）	良好	良好	
		a	44	口径 16.8	7	I	体部は内彎しながら立ちあがり口縁部でやや外反して端部は面をなす。２段の横なでを行う。	内面は端部で右上りになでた後、中央は横になで、最後で右にあがる。外面は横になでる。外部に指おさえ。	褐灰色	良好	良好	

包含層

器種	器形		土器No.	法量(cm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土師器	皿	C_2	45	口径 8.9		2	口縁部は内彎し端部は丸くおさまる。底部は平扁でややあげ底となる。	内面と外面口縁部は横なでを行う。外面底部は指でおさえる。	灰白色	良好	やや軟	
			46	口径 8.6		2	口縁部は内彎して立ち上がり、端部は丸くおさまる。	内面及び外面口縁部は横なでを施す。底部は指おさえを行う。	灰褐色	良好	良好	
			47	口径 8.4		2	口縁部は内彎して立ち上がり端部は丸くおさまる。底部は丸底である。	内面及び外面口縁部は横なでを施す。外面底部は指おさえをする。	灰白色	良好	良好	
			48	口径 8.0		2	口縁部は内彎して立ち上がり端部は丸くおさまる。丸底である。	内面と外面口縁部は横なでを行い外面底部は指おさえを行う。内面に仕上げなでを施す。	灰白色	良好	やや軟	

器種	器形		土器No.	法量(cm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土師器	皿		49	口径8.4		2	体部は内彎し口縁部はさらにやや内彎する。端部は丸くおさまる。底部はあげ底となる.	内面及び外面口縁部は横なでを施す。底部は未調整である。	灰褐色	良好	良好	
			50	口径8.8		2	体部は内彎して口縁部でやや肥厚する。端部は丸くおさまる。	内面に横なでを施す。外面は未調整底部に指おさえする。	濃灰褐色	良好	やや軟	
		C_3	51	口径9.0		2	口縁部は内彎して立ち上がり、端部はつまみ上げた後、外面は横なでを施す。	内面及び外面口縁部に横なでを施す。	灰褐色	良好	やや軟	
			52	口径8.4		2	体部は内彎し口縁部で、さらにやや内彎する。端部はつまみあげる。丸底である。	内面と外面口縁部は、横なでで、底部は指おさえである。	灰白色	精良	良好	
			53	口径7.6		2	体部は直線的に外方に伸び口縁部で肥厚する端部はつまみあげた後、横なでを施す。	体部に指圧痕をもつ。	濃灰褐色	良好	良好	口縁部にスス付着
		C_4	54	口径7.8		2	口縁部は内彎し端部はつまみあげる。底部は扁平でややあげ底となると思われる。	内面は水びきの平滑なでで調整する。	赤橙色	精良	良好	
			55	口径7.8		2	口縁部は、内彎して立ち上がり端部は外面に面をなす。	内・外とも横なでを行う。	茶黄色	2㎜の石英を含む。	良好	
			56	口径8.0		2	口縁部は屈曲ぎみに内彎し、端部外面に面をなし凹線が入る。	内面及び外面口縁部を横なでし、口縁部を指おさえする。	灰褐色	良好	良好	
		a	57	口径8.5		2	体部は内彎して立ち上がり、口縁部で、やや外反し、又内彎する。端部は丸くおさまる。丸底である。	内面・外面口縁は横なでし口縁部下に2つの段をもつ。底部は指おさえをする。	灰白色	良好	良好	
		d	58			2	体部は、内彎し段	内面口縁部を横な	灰褐色	2㎜前	良好	

器種	器形		土器No.	法量(cm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
土師器			58	口径11.4		2	をもって外方に屈曲し、口縁部は内彎して端部は丸くおさまる。	でする。口縁部及び底部に指おさえを施す。		後の砂粒を含む。		
		C4	59	口径11.0		2	体部から口縁部は内彎し端部は外側に面をもち浅い凹線が入る。内側はやや丸みをもつ。	外面口縁部は横なでを施し、内面には横なでの後、底部に向け縦右下り、左下りのなでを施す。底部は内・外面共に指おさえを行う。	灰褐色	良好	良好	
		d	60	口径11.8		2	体部で段をもつ。外方に屈曲した後、内彎して口縁部につづく。端部は、外面に面をもつ。底部はあげ底となる。	内面口縁部及び外面体部は横なでを施し、口縁部に強い指おさえを施す。内面底部に、刷毛目状のものが見られる。	灰褐色	良好	良好	
			61	口径15.0		2	体部は内彎し、段を持った後、更に内彎し、端部はほぼ垂直に立ち上がる。端部外側に浅い凹線をもつ。	内面及び口縁部に横なでを施す。底部及び口縁部の内外面を指でおさえている。	灰褐色	1～2㎜の砂粒を含む	良好	
		C2	62	口径13.2		2	口縁部は、内彎して端部は丸くおさまる。内面口縁部に一条の沈線をもつ。	内面と外面口縁部は横なでを施す。	灰褐色	良好	良好	
	椀	b	63	底径4.8		2	底部にはやや外方に開く断面三角の低い高台をもつ。外面底部よりやや上がった所で段をもって、体部へとつづく。	内面、外面共になでを施す。	灰黄褐色	2㎜前後の石英を含む。	良好	
			64	底径4.8		2	体部は内彎して立ち上がる。底部にはやや外方に開く低い断面三角形の高台をつく。	内面及び外面の高台に横なでを施す。	淡褐色	5㎜大の小石を含む。	やや軟	
	坏	a3	65	口径12.8		2	体部はやや外反きぎみに立ち上がり口縁部もやや外反	内面、外面共に横なでを施すが、外面は、やや荒い。	(内)赤褐色 灰褐色	3㎜前後の砂粒を含	良好	

器種	器形		土器No.	法量(cm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
	坏	a3	65	口径12.8 器高3.4		2	する。端部は丸くおさまる。体部には2段のなでをもつ。底部は平底である。	底部は未調整である。	(外) 灰褐色	む。		
黒色土器	埦	a1	66	底径5.0		2	底部には、外方に開く断面方向の高台がつく。底部には、ヘラ描きの線刻がある。	外面の高台部分をヘラ削りする。高台部分は横なでをする。	(内) 黒色 (外) 灰褐色	良好	良好	
			67	底径5.1		2	底部には断面方形で、外方へ開く貼り付け高台をもつ。高台は、外側で着地する。	内面はヘラで磨く、外面と高台外側をヘラで磨き、高台内側は、横なでを施す。	(内) 黒色 (外) 灰色	良好	良好	
		b	68	底径4.8		2	底部には、断面方形で、外方へ開く貼り付け高台をもつ。	内・外面に、炭素を吸着さす。外面の貼り付け部はヘラで磨き、底部は横なでを行う。	黒色 (断) 褐灰色	良好	良好	高台は磨滅化している。
		a1	69	口径11.2		2	口縁部はやや外反し端部下に一条の沈線をもつ端部は丸くおさまる。	外面は横なでをし内面は黒色の炭素がはく離しているがヘラ磨きのあとがうかがわれる。	(内) 黒色 (外) 黒色 灰褐色	1～3㎜の砂粒を含む	良好	
			70	口径12.0		2	体部はほぼまっすぐにのび、口縁部で、やや外反する端部下には、1条の深い沈線をもちすぐ下にも浅い沈線をもつ。	内面に格子目状のへら磨き、外面口縁部に斜め方向のヘラ磨きを施す。	(内) 黒色 (外) 灰褐色	3㎜前後の砂粒を含む	良好	
			72	口径16.0		2	体部は、内彎して口縁部でやや外反する。	内面にヘラ磨きを行い、外面に横なでで指おさえを行う。	黒色 灰褐色	良好	良好	
瓦器	埦		73	口径11.6		2	口縁部は、やや外反して立ち上がり端部は、丸くおさまる。口縁部内面には、一条の沈線をもつ。	内面は、ヘラで磨き、外面は指圧痕をもつ。	黒色 (断) 灰色	良好	良好	
			74	口径14.2		2	体部は内彎して、口縁部は内反する	内外面共に、横なでを施す。	(内) 灰茶褐色	良好	堅緻	

器種	啓形		土器No.	法量(cm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
瓦質土器	鉢		74				端部は、上方に面をもつ。		(外)黒色	良好	堅緻	
	脚		75			2	6つの面をなし、やや内彎する。面の境を更に面取りする。		(外)黒色 (断)灰褐色	良好	良好	

表採

器種	器形		土器No.	法量(cm)	トレンチ	層	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
須恵器	坏身	b	76	口径10.2 器高3.2			体部は内彎して、ほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。端部は三角形に真直ぐ立ちあがる。	内・外面は、横なで調整を行い、底部外面はヘラ削りを施す。	青灰色	1㎜の砂粒を含む。	良好	
		a	77	口径11.9			底部は肥厚で、体部は内彎する。受部は、やや外上方にのび端部はやや尖りぎみである。立ち上がりは内上方にのび端部は直立ぎみに立つ。	内面・及び外面は横なでを行う。底部はヘラ削りの後、カキ目を施す。	青灰色	2㎜大の砂粒を少々含む	良好	
瓦質土器	壺		78				体部は弓状に内彎して、口縁部は外彎して立ち上がる。	ロクロによる形成である。	灰黒色	1～2㎜の砂粒を含む	良好	内外面に漆が付着する。

(濱　　修)

表4　陶磁器観察表

器種	No.	土層	法量 (cm) 口径	器高	高台径	高台高	備考	器種	No.	土層	法量 (cm) 口径	器高	高台径	高台高	備考
	1	2層	—	—	4.2	0.7	染付。呉須はくすんだ淡い藍色で、一部灰茶褐色を呈する。外面には二重の網目文、高台には二条の圏線、見込に菊花文を描く。高台内に窯印を記す。灰白色の素地に、淡い灰青色の上釉を施す。見込と高台下端に釉切れがみられる。高台下端はやや内傾気味。高台畳付と内側には砂粒が付着。器壁は肉厚。古伊万里か？		5	2層	—	—	3.6	0.8	染付。淡い藍色の呉須で外面には梅花文、高台には二条の圏線を描く。見込にも文様を描く。胎土は白色で気泡を含んだ半透明の釉を施す。内外面に貫入あり。高台は、外方へやや開き気味。下端に面取りをする。腰部が張り出す形状で、器壁は腰部で最も厚く、立ち上がるにつれて薄くなる。伊万里系
碗（磁器）	2	2層	—	—	3.9	0.4	染付。淡い藍色の呉須により、外面には二重網目文、高台には二条の圏線、内面には一重網目文、見込には菊花文を描く。外面の文様には濃淡の差をつけている。灰色の素地に淡い灰青色の上釉を施釉。高台、内面に砂粒が付着、高台は低く器壁は薄い。伊万里系	碗（磁器）	6	2層	—	—	—		染付。藍色の呉須で外面に梅花文、高台には二条の圏線を描く。胎土は白色で青みを帯びた釉を施す。わずかに貫入がみられる。腰部が張り出す形状。伊万里系
	3	2層	—	—	4.0	0.8	染付。藍色の呉須で外面には河骨文。高台には一条の圏線。見込には文様を描く。又口線部内面にも文様がみられる。胎土は白色で、淡い青緑色の気泡を含んだ釉を施す。高台下端はやや開き気味。腰部が張り出す形状で、腰部の器壁は底部よりも厚い。伊万里系		7	2層	—	—	4.0	0.75	染付。淡い藍色の呉須で、高台に二条の圏線、外面にも文様を描く。胎土は白色で、白濁釉を施釉。高台下端に釉切れがみられる。高台下端に面取り、高台の内側に砂粒が付着、器壁は厚い。伊万里系。
	4	2層	—	—	3.8	0.65	染付。くすんだ藍色の呉須で、外面には河骨文、高台には一条の圏線、口縁部内面には楕円形の連続文様を描く。見込中央に「寿」と記す。		8	2層	—	—	3.8	1.1	染付。くすんだ淡い藍色の呉須で、高台に二条の圏線、体部にも文様を描く。高台内には窯印を記す。胎土は白色で、青みを

器種	No.	土層	法量 (cm) 口径	器高	高台径 高台高	備考
						帯びた白濁釉を施す。 高台下端に釉切れがみられる。 器壁は厚い。 伊万里系
	9	2層	10.5	—	4.0 0.85	染付。薄い藍色の呉須で、外面には自然物を抽象化した文様を、口縁部内部には三条の圏線内に雷文を、高台には一条の圏線を描く。見込には、「□化年制」の年款を記すが、「制」は「製」を省略し、だと考えられる。 胎土は灰白色で、淡い灰青色の気泡を含んだ釉を施す。 腰部は張り出し、口縁は外へ反る形状のもので、器壁は、腰部から立ち上がるにつれて薄くなっている。 伊万里系
碗	10	2層	—	—	4.1 0.75	染付。藍色の呉須で、外面にはよろけ縞、高台には一条の圏線、口縁部内面には連続文様を描く。 胎土は灰白色で、淡い灰青色の気泡を施す。 腰部は張り出し、口縁は外方へ反る形状のもので、器壁は、腰部から立ち上がるにつれて薄くなっている。 伊万里系
（磁器）	11	2層	—	—	3.9 0.45	染付。淡い藍色の呉須で、高台には二条の圏線、外面には自然物を描く。見込にも文様を描く。 胎土は白色で、光沢のある青みがかった釉を施す。 高台は低く、下端に面取りがあり、腰部は器壁が最も厚くなっている。 伊万里系
	12	2層	—	—	3.4 0.8	染付。紺色の呉須で、高台内外面に一条の圏線、体部外面に文様を描く。胎土は白色で、青みを帯びた釉を施す。 高台は外方に開き気味で、下端に面取りをしている。腰部は張り出す。
	13	2層	—	—	3.8 0.8	染付。鮮やかな藍色の呉須で、外面には筆先を押しつけたような文様を。高台には一条の圏線を描く。見込には、一重の円の中に略式化した松竹梅を描く。 胎土は白色で、乳白濁色の気泡を含んだ釉を施す。 高台からの立ち上がりは、ゆるやかで、高台下端に面取りをする。
	14		—	—	3.8 0.4	染付。藍色の呉須で、外面には丸文を描き、高台には一条の圏線を見込にも文様を描く。 胎土は白色で、気泡の混った淡い青緑色の釉を施す。 高台は低く、腰部は張り出し直線的に立ち上がる。器壁は薄い。 伊万里系
碗		表採				
（磁器）	15	2層	—	—	3.8 0.65	染付。くすんだ藍色の呉須で外面には自然物と思われるものを、高台には二条の圏線を描く。高台内には窯印を記す。 胎土は灰白色で、薄い青緑色の釉を施す。外面の一部と高台下端に釉切れがみられる。 高台はやや内傾し、体部は高台からゆるやかに立ち上がる。高台内には「トキン」を留める。 器壁は厚い。 初期伊万里か？
	16	2層	—	—	— 0.8	染付。くすんだ藍色の呉須で、外面に文様、高台に一条の圏線を描く。見込にも文様あり。

器種	No.	土層	法量(cm) 口径	器高	高台径 高台高	備考
						胎土は灰白色で、青みを帯びた釉を施す。
	17	2層	—	—	— 0.85	染付。紺色の呉須で、外面に菊花文、高台に一条の圏線を描く。見込、口縁部内面にも文様を描く。胎土は灰白色で、青みを帯びた釉を施す。高台は外方に開き気味で、下端に面取りをしている。体部は高台から丸味をもちながら上方へ立ち上がる。伊万里系
碗	18	2層	10.8	—	— —	染付。薄い紺色の呉須で、外面に菊花文、口縁部内面には圏線の中に直線を組み合わせた文様を描く。胎土は灰白色で、青みを帯び気泡を含んだ釉を施す。口縁端はわずかに内傾する。伊万里系
	19	2層	—	—	— —	染付。濃い紺色の呉須で、外面には竹などの自然物、口縁部内面には、圏線で区画した中に、直線を組み合せた連続文様を描く。胎土は灰白色で、気泡を含んだ半透明釉を施す。腰部で張り出し、体部は直線的に立ち上がり口縁部が外反する。
（磁器）	20	2層	10.6	—	— —	染付。くすんだ藍色の呉須で外面には自然物、口縁部内面には、二条の圏線を描く。胎土は灰白色で、乳濁釉を施す。器壁は薄く、口縁端はわずかに外反している。伊万里系
	21	2層	10.6	—	— —	染付。藍色の呉須で、外面には鶴、口縁部内面には連続した渦巻状の文様を描く。胎土は白色で、淡い青緑色の気泡を含んだ釉を施す。
	22	2層	11.0	—	— —	染付。薄い紺色の呉須で、外面には風景を、口縁部内面には、圏線の区画の中に曲線を組み合せた連続文様を描く。胎土は灰白色で、青みを帯び、気泡を含んだ釉を施す。口縁は外反する。器壁は薄い。伊万里系
碗	23	2層	—	—	— —	染付。濃い紺色の呉須で、外面に不規則な文様を描く。胎土は灰白色で気泡を含んだ釉を施す。腰部は張り出す。
	24	表採	—	—	— —	染付。濃い紺色の呉須で、外面に幾可文を組み合せた文様を描く。胎土は灰白色で、透明釉を施す。腰部で張り出し、直線的に立ち上がる形状。
（磁器）	25	2層	8.8	—	— —	染付。くすんだ藍色の呉須で、内外面とも肉太に縦線を描く。胎土は灰白色で、青みをおびた釉を施す。器壁は薄く、口縁端は外反する。
	26	2層	11.8	—	— —	染付。紺色の呉須で外面には草花文を、口縁部内面には圏線で区画した中に、直線を組み合せた連続文を描く。胎土は白色で、半透明の白濁釉を施す。器壁は薄く、口縁端は外反する。伊万里系
	27	表採	—	—	— —	染付。くすんだ藍色の呉須で外面には濃淡の差をつけて梅枝を描く。胎土は灰白色で、灰色を帯びた半透明釉を施

器種	No.	土層	法量 (cm) 口径	器高	高台径 高台高	備考
						す。 器壁は厚く、口縁端はわずかに内傾する。 伊万里系
碗（磁器）	28	2層	—	—	— —	染付。くすんだ藍色の呉須で、外面には「歳年」の文字がかかれ、口縁内面には圏線の区画の中に楕円形の連続文様を描く。 胎土は灰白色で、青みをおびた上釉を施す。 器壁は薄く、口縁は外反する。 伊万里系
	29	表採	—	—	— —	染付。明るい紺色の呉須で口縁部内面、外面に文様を描く。 胎土は灰白色で青みを帯びた釉を施す。 口縁端は外反する。 一部に焼きぶくれあり。
	30	2層	11.4	—	— —	染付。藍色の呉須で、外面には自然物を、口縁部内面には圏線で区画した中に直線を組み合せた連続文様を描く。 胎土は灰白色で、青みを帯びた釉を施す。 伊万里系
	31	2層	10.7	5.65	3.7 0.6	染付。鮮やかな藍色の呉須で、外面には肉太に梅花文を描き、高台には一条の圏線、口縁部内面には連続の文様を描く。見込にも文様を描く。 胎土は白色で、青みをおびた釉を施す。 腰部で張り出し、胴部は直線的に立ち上がる形状。器壁は高台付近が最も厚く、立ち上がるにつれて薄くなっている。 高台下端は面取りしている。 伊万里系
	32	表採	—	—	0.8	染付。藍色の呉須で、
					3.8	高台に二条の圏線。体部外面に文様を描く。 胎土は灰白色で、青緑色を帯び、気泡を含んだ釉を施す。
碗蓋（磁器）	33	表採	10.3	—	— —	染付。藍色の呉須で、外面に草花文を、口縁部内面には圏線の区画の中に雷文を描く。 胎土は白色で、気泡を含んだ釉を施す。 伊万里系
湯呑（磁器）	34	表採	—	—	— 0.45	染付。淡い紺色の呉須で、見込に文様を描く。 胎土は白色で、気泡を含んだ半透明釉を施す。 器壁は薄い。 高台からの立ち上がりはゆるやかで、高台下端には面取りをする。 伊万里系
	35	表採	9.0	4.0	3.6 0.5	染付。鮮やかな濃い藍色の呉須で、外面に文様を描く。又口唇部に淡い茶色の鉄釉を施す。 胎土は灰白色で、灰色を帯びた釉を全面に施す。 口縁が外反する小ぶりの湯呑茶碗。高台は外方へ開き気味である。 愛知県かみた窯産
茶碗（磁器）	36	2層	8.7	3.7	3.0 0.45	染付。紺色の呉須で、蔓草文を内外面に、高台には一条の圏線を、見込には渦巻文を描く。 胎土は灰白色で、青みがかった釉を施す。 高台は低く厚みがあり、畳付には砂粒が付着している。 腰部は張り出し、口縁端がわずかに外反する形状。 瀬戸系
	37	2層	—	—	3.1 0.35	染付。藍色の呉須で、外面には菊花文を、見込には五弁花文を描く。 胎土は灰色で、灰色をおび気泡を含んだ半透

器種	No.	土層	法量 (cm) 口径	器高	高台径 高台高	備考
湯呑茶碗（磁器）	38	表採	—	—	— —	明の釉を施す。 高台は低く、内傾しており、高台内はやや突出気味である。形状は、腰部で斜め上方に直線的に張り出し、体部は、やや反り気味に立ち上がる。突立型の湯呑茶碗。 伊万里系 染付。くすんだ藍色の呉須で外面には菊花文、口縁部内面には、直線を組み合せた連続文様を描く。 胎土は灰白色で、乳白濁釉を施す。 体部はやや反り気味に立ち上がる。 伊万里系
皿（磁器）	39	2層	—	—	— —	染付。藍色の呉須で、内面には丸を使った文様、外面には細い線の文様を描く。 内外面ともに区画の縦線がみられる。角皿か、胎土は白色で、淡い青緑色の気泡を含んだ釉を施す。 伊万里系
	40	2層	—	—	— —	染付、外面には濃い藍色の呉須で菊を描き、口縁部内面には直線を組み合せた連続文様を描く。 胎土は白色で、青みを帯びた白濁釉を施す。 立ち上がるにつれて器壁は薄くなり、口縁は内彎する。 伊万里系
	41	2層	—	—	— —	染付。鉄分を含み、くすんだ藍色の呉須で、内外面に草花文を描く。 胎土は灰白色で青みを帯び、気泡を含んだ半透明釉を施す。 伊万里系
	42	2層	—	—	— —	染付。薄い藍色の呉須で内外面に文様を描く。 胎土は灰白色で、青緑
皿（磁器）	43	2層	—	—	— —	色を帯び気泡を含んだ釉を施す。 伊万里系 染付。口縁が反る角皿の破片。藍色の呉須で、外面には丸を使った文様、内面には円弧を描く。 角の部分には内外面とも区割りの縦線二本を描く。 胎土は灰白色で、青みを帯び気泡を含んだ釉を施す。 伊万里系。
	44	表採	—	—	—	染付。鉄分を含み、茶色がかった藍色の呉須で、高台に二条の圏線見込には五弁花文を描く。高台内中央には窯印を施す。 胎土は灰白色で、青緑色を帯び気泡を含んだ釉を施す。 見込に貫入が入る。 伊万里系
	45	2層	—	—	— 0.5	染付。藍色の呉須で、濃絵の技法を用いて山水文を描く。建物を屋根のみで表現するなど簡略化している。 胎土は白色で青みを帯びた釉を施す。 古伊万里？
	46	2層	—	—	14.0 0.7	染付。淡い藍色の呉須で、垣根状のものと、曲線を内面に　高台には二条の圏線を描く。 胎土は白色で、青緑色を帯び気泡を含んだ釉を高台畳付を除いた全面に施す。 伊万里系
	47	2層	42.6	—	— —	染付。紺色の呉須で、内外面に文様を描く。 胎土は白色、青みを帯び気泡を含んだ釉を施す。 伊万里系
	48	2層	—	—	11.4	染付。藍色の呉須で、

器種	No.	土層	法量 (cm) 口径	器高	高台径 高台高	備考
皿（磁器）					3.5	外面には唐草文、高台には二条の圏線内面には草花文を描く。 胎土は白色で、青みがかった白濁釉を高台内を除いた全面に施す。 高台内の中央は凹む。 伊万里系
	49	2層	—	—	11.5 0.3	染付。口縁部内面には明るい藍色の呉須で菊花文を描き、見込には、鉄分を含み茶色をおびた藍色の呉須で草花文を描く。外面は淡い藍色の呉須で伸びやかに唐草文を描く。 高台との境目には、一条の太い圏線を描く。 胎土は白色で、青色をおび気泡を含んだ釉を高台畳付を除いた全面に施す。 全面に細かな貫入が入る。 伊万里系
鉢（陶器）	50	2層	—	—	6.2 0.75	陶器 胎土は赤褐色で、乳白濁色の気泡を含んだ釉を、高台内とその周囲を除いた部分に施す。 全面に細かな貫入がはいる。釉を施した部分のみ、内面には梅、外面には弧を連続した文様を藍色の呉須で描く。 高台内には墨書が残る。 内面には二ケ所目土痕を留める。 赤褐色の胎土は砂粒を含み、きめが荒い。 成形はヘラ削りによりなされており、外面には削り痕がそのまま残されている。
鉢（磁器）	51	2層	22.8	—	— —	染付。落ち着いた藍色の呉須で、外面には唐草文を、口縁部内面には波頭文を描く。 胎土は灰白色で、青緑色を帯び気泡を含んだ釉を施す。 腰部で張り出し、口縁が大きく外反する鉢。 伊万里系

器種	No.	土層	法量 (cm) 口径	器高	高台径 高台高	備考
鉢（磁器）	52	2層	17.0	—	— —	胎土は灰白色で、気泡を含んだ透明釉を施す。全体的に灰色。 口縁端は肥厚し、丸味をおびる。 外面にヘラ削りの跡が残る。ヘラ削りの後、曲線を7㎜程の間隔を開けて刻む。
不明（磁器）	53	2層	—	—	5.2 0.8	胎土は灰白色で、淡い灰色の気泡を含んだ釉を施す。 淡い藍色の呉須で圏線を描く。 上部を欠いた、壺の蓋か？
碗（陶器）	54	2層	10.2	5.75	4.6 1.0	胎土は灰白色で、茶褐色の鉄釉を高台と高台脇を省く全面に施した天目茶碗。高台は削り出しで、下端は外方へ開き気味である。又高台内にはトキンを留める。 高台より上は、内彎しながら立ち上がり、口縁は外反する。口縁端は丸味をおび、口縁部直下はくびれている。 美濃系。
	55	2層	14.2	—	— —	胎土は灰褐色で、黒色に茶色の斑文の混る鉄釉を施した天目茶碗の口縁部片。 口縁部直下はくびれ、口縁は外へ反る。胴部はふくらむ。 美濃系
	56	2層	13.0	—	— —	胎土は灰茶褐色で、暗茶褐色に茶色の斑文の混る鉄釉を施した天目茶碗の口縁部片。 口縁部直下はくびれ、口縁は外へ反る。胴部は斜め上方へ立ち上がり、口縁下でふくらむ。 美濃系。
	57	2層	—	—	4.5 1.0	天目茶碗の高台部片。 胎土は灰白色で、大粒の砂をわずかに含む。 暗茶褐色に茶色の斑文

器種	No.	土層	法量 (cm) 口径	器高	高台径 高台高	備考
椀（陶器）						の混る鉄釉を内面に施す。 高台下端は内傾し、高台内にはトキンを留める。 美濃系
	58	2層	11.2	—	— —	天目茶碗の口縁部片、胎土は灰色、内外面にに暗茶褐色の釉を施す。内面は乳白色に変化している。 口縁は肥厚して丸味をおび口縁直下はくびれている。胴部は曲線を描きながら立ち上がる。 美濃系
皿（陶器）	59	2層	—	—	3.0 0.4	見込に淡い藍色の呉須で一条の圏線を描く。 胎土は灰色で、灰緑色の気泡を含んだ釉を施す。 内面、高台畳付に砂粒が付着。 高台は削り出しであるが、雑な作りとなっている。
	60	2層	—	—	3.8 0.3	茶褐色の鉄釉で見込に草花文を描き、灰緑色の灰釉を高台とその周囲を除いた全面に施す。細かな貫入がみられる。内面には砂粒が付着している。 胎土は灰色。 高台は削り出しで、下端に面取りをする。
	61	2層	—	—	3.4 0.4	胎土は灰白色で、高台を除いた全面に淡緑色の灰釉を施す。細かな貫入がみられる。 高台は削り出しで、中にトキンを残す。
壺（陶器）	62	2層	14.5	—	— —	胎土は黄褐色で、薄い黄緑色の灰釉を外面と内面口縁部付近に施釉。細かな貫入がみられる。口縁端は肥厚して立ち上がる。口縁下には段を有し、段より下には、ヘラ状の工具を押しつけた線状の文様を施す。
蓋（陶器）	63	表採	—	—	— —	胎土は灰色で、内外面に薄い灰緑色の灰釉を施す。 外面には、つまみの跡が残っており、つまみを中心として、茶褐色の鉄釉で同心円を描いている。
片口（陶器）	64	2層	—	—	— —	片口の注水口 胎土は薄い茶色で、内外面に薄い茶褐色の灰釉を施す。 極めて細かな貫入が入る。 注水口は貼り付けで、蓋受が上に付く。
灯明皿（陶器）	65	2層	9.6	1.6	底部直径 3.3	平底の底部より胴部は直線的に斜め上へ立ち上がり内面には突帯をめぐらす。突帯はやや内傾気味。 胎土は灰褐色で、くすんだ淡緑色の釉を内面と外面の口縁部付近に施す。貫入あり。 底面に糸切り痕。
	66	2層	—	—	底部直径 2.8	平底の底部より、胴部は斜め上へ立ち上がり、内面には突帯をめぐらす。突帯はやや内傾気味。 胎土は灰白色で、くすんだ淡緑色の釉を内面に施す。部分的に貫入が入る。 底面に糸切り痕。
	67	2層	—	—	底部直径 —	平底の底部より、胴部は斜め上へゆるやかに立ち上がり、内面には突帯をめぐらす。 胎土は灰褐色で、灰褐色の釉を内面にのみ施す。 細かな貫入が入る。 底面に糸切り痕。
灯明	68	2層	6.0	1.1	底部直径 2.2	上げ底の底部より、胴部は斜め上へゆるやかに立ち上がる。内面には突帯をめぐらす。 胎土は淡黄色で、くすんだ淡黄緑色の釉を内

器種	No.	土層	法量 (cm) 口径	器高	高台径 高	備考
灯明皿（陶器）	69	2層	11.0	2.15	底部直径 3.9	面のみ施す。 貫入あり。 若干上げ底の底部より、胴部は斜め上へ反り気味に立ち上がる。内面には突帯をめぐらす。 胎土は淡灰黄で、淡黄緑色の釉を内面のみ施す。 貫入あり。 底部に糸切り痕。
小皿（陶器）	70	2層	8.0	1.5	底部直径 —	素焼きの小皿の破片、胎土は灰色で砂粒が混じる。底部は内削りで、体部はゆるやかに立ち上がる。 口縁は内外面とも煤が付着。又、所々に焼きぶくれがみられる。
	71	2層	7.1	1.8	底部直径 3.2	若干上げ底の底部より胴部は斜め上へ内湾気味に立ち上がる。 胎土は茶褐色で、内面には淡赤褐色の釉を施す。 細かな貫入が入る。 外面の口縁部には釉の玉垂れ、見込には目土痕が残る。
摺鉢	72	2層	39.0	—	— —	胎土は白黄色で長石、石英の粒を多く含み、きめが粗い。口縁部は大きく外反し、端部は肥厚して丸味をおび、胴部に屈曲部をもつ摺鉢の破片。内面には突帯がある。口縁端部に指頭痕が残る。 摺目は6本単位で施されている。 信楽焼
	73	2層	33.5	—	— —	胎土は部分的に赤みをおびる淡黄褐色で、長石、石英粒を含む。 口縁部は大きく外反し、口縁下には二ケ所の弱い屈曲がみられる。 摺目は7本単位で施されている。 信楽焼
摺鉢	74	2層	—	—	2.0 2.0	胎土は淡黄褐色で、長石、石英粒を含む。 高台はほぼ垂直で、胴部は斜め上へふくらみをもちながら立ち上がる。 摺目は7本単位で施されている。 信楽焼
	75	2層	—	—	底部直径 24.6	平底の底部片で、底部の直上でくびれ、ふくらみをもちながら斜め上へ立ち上がる。 胎土は白黄色で、大粒の長石、石英粒を多量に含む。 内外面ともに砂粒が浮き出した石はぜの状態。 摺目は8本単位で隙間なく施している。 信楽焼
壺（陶器）	76	2層	—	—	—	壺の頸部片、胎土は灰色できめが粗い。 外面には、くすんだ緑色の釉を施す。内面は丁寧な横なで調整を施す。 常滑焼
人形（陶器）	77	2層	—	—	— —	唐子の頭部片 胎土は灰色で、薄い緑色の灰釉を施す。細かな貫入が入る。 前後別々に型押ししたものを貼り合せている。
蓋物？（陶器）	78	2層	—	—	底部直径 8.2	胎土は灰白色であるが、底部は赤味を帯びる。 底部を除く全面に淡緑色の灰釉を施す。 貫入がはいる。 底部は平底で、底部脇は斜めに削り出され、胴部は垂直に立ち上がる。 底内面には目土痕が残る。
不明（陶器）	79	2層	—	—	4.8 0.6	胎土は淡黄色できめが粗く黄褐色の釉を高台を除いて施す。 高台はほぼ垂直で、腰部は斜め上に張り出し体部は垂直に立ち上が

器種	No.	土層	法量 (cm) 口径	器高	高台径	備考	器種	No.	土層	法量 (cm) 口径	器高	高台径	備考
不明（陶器）						る。 又、高台は削り出しで、高台内にはトキンが残る。 腰部直上に、一ケ所注ぎ口が残っており、注ぎ口と相対する側には、把手のようなものが付いていたと思われる跡がある。	不明（陶器）	80	2層	21.5	—	—	胎土は灰白色できめが粗い。口縁上面は平担で、端部は下方へ下がる。 くすんだ淡緑色の灰釉を施す。貫入あり。

（渡辺　泰子）

（註）　表中の第2層は暗緑灰色微砂混り腐植土層の包含層をさすものである。

表5　瓦　観　察　表

※は図版に掲載分

No.	種　類	トレンチ	土　層	残存規模(cm)			色　調	胎　土	焼　成	凸　面			凹　面	備　考
				(縦)	(横)	(厚)				格子目(3㎠)		縄目(3㎠)	布目(1㎠)	
※1	平	2	I	10.7	15.2	1.3	1	②－1	(2)			2b (11)	2 (7×7)	
※2	軒　丸	3	I	別		項	2	①－1	(4)					
※3	丸	3	敷石上面	16.9	11.4	2.1	6	③－3	(2)		3		1 (12×10)	
4	丸	3	I	6.3	6.0	1.8	5	①－2	(3)			2b	1 (8×9)	
5	平	3	I	10.3	12.8	2.4	7	①－1	(4)	1b			2 (9×10)	
※6	平	3	I	8.1	6.0	2.2	7	①－3	(3)	1a (3×3)			3	
7	平	3	I	6.8	5.2	2.0	3	③－3	(5)		3		2 (9×6)	
8	平	3	I	8.2	5.5	2.9	4	②－1	(4)		3		3	
9	平	3	II	5.7	5.2	2.0	6	①－3	(3)	1a (4×3.5)			3	
10	丸	3	I	5.0	3.6	1.3	1	①－1	(5)		3		1 (9×10)	
11	丸	3	I	4.6	4.0	1.8	5	③－1	(4)		3		3	
12	丸	3	I	4.2	5.5	1.2	5	①－1	(4)		3		2	
13	丸	3	I	4.7	6.3	1.1	5	①－1	(5)		3		1 (10×9)	
※14	平	3	敷石上面	18.5	15.4	1.8	7	②－1	(4)			2b (8)	1 (9×9)	
※15	平	3	I	15.6	15.5	1.8	1	③－1	(4)		3		3	
16	平	3	I	6.1	4.0	1.7	10	①②－2	(2)			2a (9)	1 (11×9)	
17	平	3	I	6.6	5.7	1.6	5	①－1	(2)			2b	1 (11×8)	
18	平	3	I	6.3	5.8	1.5	10	①－1	(2)			2b (10)	2	
19	平	3	I	4.5	6.2	1.7	4	③－1	(4)			2b	2 (9×8)	
20	平	3	I	5.0	6.5	1.8	5	③－1	(5)			2b	2	
21	平	3	I	4.2	4.8	1.8	5	①－2	(5)		3		1 (7×7)	
22	平	3	I	6.3	7.0	1.6	5	①－2	(4)			2b (9)	2	
23	平	3	I	11.5	6.5	1.6	3	②－1	(4)			2c	1 (10×9)	
24	平	3	I	4.5	8.0	1.9	5	①－2	(5)			2a (7)	3	
25	平	3	I	7.5	10.0	1.9	5	①－1	(4)			2c	1 (10×11)	
26	平	3	I	14.0	12.0	2.0	4	①－1	(4)			2b	1 (8×9)	
27	平	3	I	7.7	5.2	1.7	5	①－1	(5)			2b	1 (10×8)	
28	平	3	I	8.0	6.5	1.7	3	①－1	(3)		3		1 (10×9)	
29	平	3	I	7.5	5.0	1.5	7	①－2	(4)			2b (9)	3	
30	平	3	I	6.5	4.7	－	5	①－1	(4)			2a (7)	3	
31	平	3	I	5.0	5.0	1.4	1	②－1	(4)		3		1 (8×7)	
※32	隅　平	3	I	16.0	12.0	1.7	10	①－1	(2)			2a (10)	1 (11×8)	
33	平	3	I	5.2	4.0	1.5	3	③－3	(2)		3			

No.	種類	トレンチ	土層	残存規模(cm)			色調	胎土	焼成	凸面			凹面	備考
				(縦)	(横)	(厚)				格子目(3cm²)		縄目(cm²)	布目(1cm²)	
34	丸	4	I	9.0	5.1	1.7	6	①－2	(3)		3			
35	平	4	I	6.7	6.8	1.9	7	①－2	(4)	1a(4.5×4.5)			2	
※36	丸	4	I	7.1	6.5	1.6	5	②－2	(4)			2d	1(8×9)	㊱凹面端縁まで布目圧痕がのこる。
※37	平	4	I	10.6	11.8	1.9	7	①－1	(4)			2b(9)	1(7×6)	一枚作りか。
38	平	4	I	7.7	6.2	1,9	7	①－1	(4)	1a(4×3.5)			3	
※39	平	4	I	6.2	7.0	1.7	5	②－2	(3)			2c	1(10×9)	
40	平	4	I	16.7	8.4	1.9	9	①－2	(3)			2b(10)	2	
41	平	4	I	7.3	5.2	1.7	6	②③－1	(4)			2c	1(9×9)	
42	平	4	I	6.5	3.5	—	5	①－1	(4)			2b	1(9×7)	
43	平	4	I	8.7	10.8	2.0	7	①－1	(4)			2c(10)	1(9×10)	
44	平	4	I	6.6	5.0	1.9	5	③－1	(3)			2d	1(8×9)	
※45	平	4	I	17.6	16.3	2.3	8	①－3	(2)			2a(6)	1(7×8)	
※46	平	4	I	12.3	7.2	1.7	1	③－1	(3)			2b(11)	1(8×10)	
47	平	4	I	9.5	9.1	1.8	5	①－1	(4)			2a(8)	1(8×9)	
※48	平	4	I	16.6	13.0	2.4	2	①－2	(4)			2a(11)	1(10×11)	
49	平	4	I	4.7	2.7	—	5	①－2	(4)			2d	1(7×8)	
50	平	4	I	4.8	3.9	1.2	6	①－1	(4)			2b	1(10×8)	
51	平	4	I	6.3	4.2	—	7	②－1	(4)			2d	1(8×9)	
52	平	4	I	4.5	4.5	—	5	①－2	(4)			2d	3	
53	平	4	I	6.7	4.0	—	5	①－3	(4)			2d	3	
54	平	4	I	8.8	7.4	2.0	5	①－3	(4)			2d	3	
55	平	4	I	12.6	16.2	1.6	7	①－1	(4)			2b(10)	1(7×8)	
※56	丸	5	I	9.0	6.0	1.4	7	①－2	(4)				1(9×10)	
※57	軒平	5	I	16.4	6.8	1.8	8	①－2	(2)				3	
※58	平	5	I	5.8	5.4	1.7	1	①－1	(3)				3	
※59	平	5	I	11.8	12.4	2.5	8	①－2	(3)				1(10×8)	㊴凸面中央寄りに正格子目叩きの
60	平	5	I	7.5	7.8	1.6	5	③－1	(2)				1(9×9)	痕跡をわずかに残し、縦、横ナデ
61	平	5	I	5.8	7.8	2.5	7	①－2	(4)				1(10×8)	により面調整を施す。　断面中に、
62	平	5	I	7.5	9.8	2.3	7	①－2	(3)				1(11×9)	厚さ0.6cmの須恵器片の混入をみる
63	平	5	I	12.0	11.4	2.2	3	①－1	(4)			2a(11)	3	
※64	平	5	I	10.0	7.6	2.5	5	①－3	(4)				1(8×9)	㊹端面に対する側面の角度がやや
65	丸	5	I	10.4	5.1	1.8	4	③－1	(3)			2c(8)	1(8×9)	鈍角である。
※66	平	5	I	11.5	15.3	1.9	7	②－2	(4)			2a(11)	1(7×7)	

No.	種類	トレンチ	土層	残存規模(cm) (縦)	(横)	(厚)	色調	胎土	焼成	凸面 格子目(3cm²)	縄目(3cm²)	凹面 布目(1cm²)	備考
67	平	5	I	8.4	4.5	2.2	5	①－2	(4)		2 b	1(9×8)	
※68	平	5	I	14.4	9.6	1.6	6	③－3	(3)		2 b (8)	1(8×9)	
69	平	5	I	2.7	2.6	－	6	①－2	(3)		2 b	1(6×8)	
※70	平	5	I	13.9	23.2	2.1	10	②③－2	(2)		2 b (12)	1(11×7)	(70)狭端面の残る唯一のものである。
71	平	5	I	14.0	12.8	2.1	7	②－2	(5)		2 c (12)	2	端面の一部分に布目圧痕がおよんでおり、一枚作りか。
72	平	5	I	3.9	4.4	1.7	7	①－1	(3)		2 b	3	
※73	平	5	I	14.4	10.5	1.9	3	③－2	(4)		2 b (11)	1(8×9)	
74	平	5	I	13.7	9.6	2.0	7	②－1	(4)		2 c (9)	1(8×7)	
75	平	5	I	4.1	2.2	－	2	①－2	(4)		2 d	3	
76	平	5	I	8.6	4.9	1.9	7	②－2	(4)		2 c	2(6×6)	
77	平	5	I	9.9	4.3	1.7	8	②－2	(4)		2 b	1(10×10)	
78	平	5	I	12.9	9.5	2.1	2	①－2	(3)		2 b	1(7×11)	
※79	平	5	I	10.5	7.1	1.8	10	③－1	(1)		2 b	2(10×9)	
80	平	5	I	11.1	6.7	2.0	6	①－2	(4)		2 c	1(11×8)	
81	平	5	I	9.4	11.2	1.4	6	①－2	(4)		2 b (10)	2(7×9)	
82	平	5	I	6.6	3.9	1.8	5	①－3	(4)		2 d	1(9×9)	
※83	平	5	I	20.8	18.0	1.4	8	②－3	(2)		2 b (9)	1(10×11)	
84	平	5	I	6.1	6.0	1.5	7	①－2	(3)		2 a (7)	1(8×8)	
85	平	5	I	5.9	4.2	－	7	①－2	(3)		2 c	1(8×9)	
86	平	5	I	10.2	9.1	1.7	2	①－2	(3)		2 c (11)	1(7×10)	
※87	平	5	II	17.2	13.2	1.8	8	②－1	(1)		2 b (9)	1(8×10)	
88	平	5	I	4.9	5.5	2.0	3	③－1	(4)		2 c (8)	2(9×10)	
89	平	5	I	7.5	7.5	1.7	5	①－2	(4)		2 a (9)	1(9×10)	
90	平	5	I	5.5	7.5	1.3	7	①－1	(4)		2 b	2(8×10)	
91	丸		2層(包含層)	6.2	4.8	1.5	2	③－2	(4)	3		3	
92	平		2層(包含層)	7.0	7.0	2.4	6	①－1	(3)	3		3	(93)凹面に布目痕をわずかにのこす。
※93	平		2層(包含層)	12.9	15.5	2.9	7	－	(3)	3		2	
94	平		2層(包含層)	10.5	10.0	2.2	5	①－2	(2)		2 d	3	
※95	丸		2層(包含層)	6.3	9.0	2.5	3	①－2	(2)		2 b	2(14×13)	
※96	平		2層(包含層)	21.0	20.5	1.7	5	－	(2)			2	
97	平		2層(包含層)	6.2	6.2	1.9	7	③－3	(2)			－	

（岡本隆子）

〈凡　例〉

種　　類

軒　丸----------軒丸瓦
軒　平----------軒平瓦
丸　----------丸　瓦
平　----------平　瓦
隅　平----------隅平瓦

色　　調

1　灰　　色
2　灰 白 色
3　灰 黄 色
4　灰黄白色
5　黄 灰 色
6　黄灰白色
7　橙 灰 色
8　青 灰 色
9　青灰白色
10　青灰黒色

胎　　土

①　細砂を含む
②　粗砂を含む
③　細礫（2.0～5.0㎜）を含む。

(量)

1　ごくわずか
2　少　量
3　多　量

焼　　成

(1)　堅　徴
(2)　硬
(3)　やや硬
(4)　やや軟
(5)　軟

調　　整

凸面　1 a　格子目叩き
　　b　格子目叩きのあとナデ
　　2 a　縄目叩き
　　b　縄目叩きのあとナデ
　　c　縄目叩きのあとケズリ
　　d　縄目叩き不明瞭
　　3　叩きの痕跡みられず、ケズリ・ナデ

凹面　1　布目
　　2　布目のあとナデ
　　3　布目痕不明瞭

表6　土錘観察表

No.	法量（）は残存				出土地点		色調	胎土	焼成	形態の特徴	手法の特徴	備考
	長さ cm	最大径 cm	孔径 cm	重量 g	遺構	層位						
1	2.3	0.9	0.4	1.78	—	—	黄褐色	細い砂粒を含む	良好	A．完形品、小型．中央でふくらむ管形孔の横断面は円形に近い。	外面全体ナデ。	
2	3.0	0.4	0.35	2.06	—	—	灰褐色	微砂を含む	良好	A．完形品、小型。中央でふくらむ管形孔の横断面は円形に近い。	外面全体ナデ。	
3	3.0	1.5	0.7	5.04	—	—	黄灰色	緻密	良好	C1．完形品、小型。両端がやや突出する紡錘形、両端部は面をなす。	外面全体ナデ。	両端と中央にかけて黒斑を認める。
4	3.4	1.3	0.5	4.21	—	—	黄褐色	1㎜弱の砂粒を含む	良好	C1．端部の一部が欠損。小型、両端が突出ぎみの紡錘形	外面全体をナデの後指オサエ特に両端部は強くオサエ突出させている。	片端から中央付近に黒斑を認める。
5	3.8	1.6	0.6	11.54	—	—	灰褐色	1～2㎜程の砂粒を含む	良好	B．完形、端部がすぼまる円柱形。両端部は面をなすが稜線は丸い。	外面全体ナデ。	片端に黒斑を認める。
6	5.2	2.0	1.0	16.20	—	—	黄褐色 赤褐色	1㎜程の砂粒を含む	良	C2．完形、片端が突出ぎみになる紡錘形。	外面全体ナデ。突出する端部を指オサエ	両端から中央にかけて黒斑を認める。
7	4.0	2.0	0.9	14.54	—	—	灰褐色	微砂を含む	良好	D．完形、中央が突出し脹らむ俵形。端部は面をなすが稜は丸い。	外面全体ナデの後、両端を指オサエする。	両端から中央にかけて黒斑を認める。
8	3.5	2.2	1.0	12.63	—	—	黄灰色	1㎜程の砂粒を含む	良	D．完形、中央が脹らむ俵形。端部は、面をなす。	外面は両端から中央部に向ってヘラ状工具でナデる端部も同様ヘラ状工具でナデる。	片端に黒斑を認める。
9	3.9	2.5	1.3	24.67	—	II	黄灰色	微砂を含む	良好	E．完形。両端が突出ぎみの樽形。端部は幅の広い面をなす。	外面は長軸に直行して横ナデ、端部はヘラ状工具でナデ。	
10	3.2	2.9	1.1	36.04	—	II	灰褐色	1㎜弱の砂粒を含む	良好	E．完形。両端がややすぼむ樽形。端部は幅の広い面をなす。	外面は磨滅が著しく調整不明端部はヘラ状工具でナデ。	
11	(5.5)	2.1	0.6	23.93	—	II	淡黄灰色 黄橙色	1㎜弱の砂粒を含む	良	C2．片端が欠損、ほぼ完形に近い。両端が突出ぎみの紡錘形。	外面全体ナデの後指オサエ。	
12	3.4	1.4	0.4	8.15	—	II	黄褐色	細い砂粒を含む	良好	C1．完形、端部が丸みをもってすぼまる。紡錘形。片端に粘土の接合面と思われる剥れがある。	外面全体ナデ。	端部から中央にかけて黒斑を認める。
13	4.4	1.7	0.7	11.05	SD－1	—	黄橙色	細い砂粒を含む	あまい	B．完形。端部が丸みをもってすぼまる円柱形、孔の横断面は楕円形。	磨滅が著しく調整不明。	
14	(1.8)	1.1	0.3	(1.80)	SD－1	I	淡茶褐色	1㎜弱の砂粒を含む	良	A．孔を横断。全体の1/2弱残存、管形の長軸が貫孔されたもの。孔口は丸みを帯びる。	外面全体ナデ。	
15	(2.1)	0.8	0.3	0.97	SD－1	I	黄褐色	緻密	良	A．一方の端部のみ残存。小型。中央で脹らむ管形。孔の横断面は円形に近い。		
16	(2.6)	(1.7)	0.55	(4.57)	SD－1	I	黄橙色	微砂を含む	あまい	C1．孔を横断、全体の1/3残存。紡錘形の長軸が貫孔されたもの。長軸に平行に面をなす。	磨滅が著しく調整不明。	

No.	法量（）は残存				出土地点		色調	胎土	焼成	形態の特徴	手法の特徴	備考
	長 cm	最大径 cm	孔径 cm	重量 g	遺構	層位						
17	5.2	1.9	1.0	13.70	SD－1	I	黄灰色	細い砂粒を含む	良好	C2．両端の一部が欠損。両端が突出ぎみの紡錘形。端部は面をなすが稜は丸い。	外面全体ナデ。	
18	(2.5)	(1.1)	(0.65)	(1.59)	SD－1	I	黄褐色	細い砂粒を含む	あまい	A．孔を縦断、全体の1/3残存。管形の長軸が貫孔をされたもの。	磨滅が著しく調整不明。	
19	(3.4)	1.1	0.4	2.50	SD－1	I	黄灰色	細い砂粒を含む	良	A．両端が欠損。小型。中央が脹らみ両端がすぼまる管形。孔の横断面は円形に近い。	両端を指でおさえる。	両端に黒斑と焼成後の穿孔を認める。
20	3.0	1.25	0.4	4.22	SD－1	I	黄灰色	1㎜弱の砂粒を含む	良好	C1完形、小型。両端が突出ぎみの紡錘形両端部は面をなす。	外面全体ナデ、両端部は横ナデ	
21	5.9	2.1	0.8	19.70	SD－1	I	赤橙色	緻密	あまい	C2端部の一部が欠損、両端が突出ぎみの紡錘形。	外面全体に指オサエ、特に突出させる部分は強くオサエる。	
22	(2.8)	(2.0)	(0.56)	5.88	SD－1	I	黄褐色	1～2㎜程の砂粒を含む	良好	D．孔の縦断。全体の1/2弱が残存。俵形の長軸が貫孔されたもの。端部は面をなす。	外面全体ナデ。端部はヘラ状工具でナデ。	
23	4.5	3.0	1.4	33.56	SD－1	I	黄灰色	1㎜弱の砂粒を含む	良好	E．完形両端がややすぼむ樽形。端部は幅の広い面をなす。	外面全体指オサエ、両端は長軸に直行して強く横ナデ、端部はヘラ状工具でナデ。	
24	(2.4)	(2.0)	0.45	14.53	SD－1	I	灰褐色	1～2㎜程の砂粒を含む	あまい	D．孔の横断、全体の1/2弱が残存。俵形の長軸が貫孔されたもの、端部は面をなす。	磨滅が著しく調整不明	黒斑を認める。
25	(3.65)	(2.4)	(1.8)	(9.84)	SD－1	I	黄灰色	1～2㎜程の礫粒を含む	良	E．孔の縦断、全体の1/3が残存。樽形の長軸が貫孔されたもの。端部は面をなす。	外面磨滅が著しく調整不明。端部は、ヘラ状工具によりナデ。	
26	5.2	1.9	0.7	17.96	SD－1	I	黄灰色	細い砂粒を含む	良好	C2．完形。両端が突出する紡錘形。端部は面をなす。	外面全体ナデ、端部は、横ナデにより面をなす。	両端部から中央にかけて黒斑を認める。
27	4.3	1.9	0.7	12.49	SD－1	I	淡灰褐色	1㎜程の砂粒を含む	良好	C2．端部の一部が欠損、両端がやや突出する紡錘形	外面全体ナデの後、指オサエ	
28	(4.3)	1.3	0.7	(11.92)	SD－1	I	灰褐色	1㎜弱の砂粒含む	良	B．両端を欠損。両端が丸くすぼむ円柱形	磨滅が著しく調整不明。	
29	4.9	1.4	0.65	7.08	SD－1	I	黄灰色	1㎜程の砂粒を含む	良好	B．完形。片端が丸くしぼむ円柱形。片方の端部が面をなすが稜は丸い。	外面全体をナデの後、指オサエ	
30	5.05	1.4	0.6	8.61	SD－1	I	淡黄褐色	1㎜程の砂粒を含む	良	B．端部の一部を欠損、片端がすぼむ円柱形。	磨滅が著しく調整不明	
31	(3.1)	(1.7)	(0.7)	(3.14)	SD－1	III	黄褐色	緻密	良	C1．孔の縦断。全体の1/3弱残存。紡錘形の長軸が貫孔されたもの。	外面全体ナデ。	
32	4.1	1.6	0.7	11.72	SD－1	III	黄橙色	1㎜弱の砂粒を含む	あまい	B．端部の一部が欠損。両端がすぼむ円柱形。	両端を横ナデ(？)	
33	4.3	1.55	0.6	10.65	SD－1	III	黄褐色	細い砂粒を含む	あまい	C2．端部の一部が欠損。両端がやや突出する紡錘形。	磨滅が著しく調整不明。	片端に黒斑を認める。

No.	法量（）は残存				出土地点		色調	胎土	焼成	形態の特徴	手法の特徴	備考
	長 cm	最大径 cm	孔径 cm	重量 g	遺構	層位						
34	4.15	1.4	0.8	7.74	SD－1	Ⅲ	黄橙色	細い砂粒を含む	あまい	B.端部の一部が欠損。円柱形の中心が貫孔されたもの、端部は丸みをもつ。	磨滅が著しく調整不明	
35	(4.8)	1.6	0.75	(11.02)	SD－1	Ⅲ	黄橙色	微砂を含む	あまい	B. 両端が欠損。両端が丸くすぼむ円柱柱形	両端に指オサエ	
36	5.85	1.9	0.8	17.50	SD－1	Ⅲ	黄橙色	緻密	良好	C_2.完形。両端が突出する紡錘形。特に片端が強く突出する。	外面全体ナデの後、指オサエ。特に突出される両端は強くオサエる。	
37	(4.4)	1.8	0.8	(13.28)	SD－1	Ⅲ	黄灰色	1㎜弱の砂粒を含む。	良	C_2.片端が欠損。両端が丸くすぼむ紡錘形。	外面全体ナデ。	片端から中央にかけて黒斑を認める。
38	4.25	1.9	0.75	13.68	SD－1	Ⅲ	黄褐色	微砂を含む	良	B.端部の一部が欠損。両端がすぼむ円柱形。端部は面をなす。	外面全体にナデ、端部はヘラ状工具でナデ。	中央部に黒斑を認める。
39	8.1	3.3	1.1	57.36	SD－1	Ⅲ	赤橙色	細い砂粒を含む。	良好	C_1.端部の一部を欠損。両端が突出する紡錘形。	外面全体ナデ、両端を強く指でオサエる。	片端に黒斑を認める。
40	2.6	0.65	0.25	0.96	SD－1	Ⅲ	淡赤橙色	緻密	良	A. 完形。小型。中央がやや脹らむ管形。孔の横断面は円形に近い。	外面全体にナデ。	
41	3.35	1.45	0.55	6.66	SD－1	Ⅲ	黄橙色	微砂を含む	あまい	C_1.端部の一部が欠損。両端がすぼむ紡錘形。端部は面をなすが稜線は丸い。	磨滅が著しく調整不明	

（喜多貞裕）

第４章　古文書からみた吉住池

１．江戸時代までの吉住池

吉住の溜池が、記録による史料としてあらわれてくるのは、中世末期、文亀２(1502)年の「諸封領配當(当)之図」というものからです。ただし、この絵図は後世の写しであって、どこまでこの絵図がつくられた時の様子を正確に伝えているかはわかりません。

この絵図で吉住の池は、「菅野沼」という名称で書かれています。

吉住の池がくわしい記録として古文書にあらわれるのは、江戸時代になってからです。それは近世前期、17世紀末の元禄年間(1688～1704年)のことです。このころすでに吉住の池は、周辺諸村の用水として、また、葭や藻草のかりとり場として、人々の生活になくてはならないものでした。

そして、この時、日吉村と、溜の水を用水として利用している伊野部村・平坂村・木流村・下野村、以上の四ヶ村との間に池をめぐる争論（訴訟）が起ったことが現存する古文書によって伺えます(史料１・２)

それは、池が日吉村領か４ヶ村領かをめぐる争いでした。四ヶ村側は、池に樋３ヶ所をつくり、池の水を用水として用いています。また、堤・樋普請等も勤めているので四ヶ村領であると主張します。古文書では「四ヶ村百姓申す趣は、古来右池水三ヶ所の樋口より四ヶ村の田地用水にこれを取り、尤も堤・樋普請等も前々より相勤め、池床共に四ヶ村領の由、これを申す」となっています。

しかし、日吉村側は、池は葭地であり、池のことが日吉村の名寄帳（田畑等土地の所持ごとに、その土地の反別＝面積、石高・生産高を書いたもの）に記載されており、池の分米（石高＝生産高）八石で、年貢を上納し、また、葭の小物成（土地の用益またはその生産物にかかる税）として、一石五斗納めているので、池は日吉村領であると主張します。古文書では、「日吉村よりは、右場所は葭地にて高八石、并に葭小物成一石五斗宛、毎年地頭(領主)へ納むる所、天正年中の古水帳にもこれ有り、支配紛(まぎ)れ無きの由これを申すと述べています。

お上の判決は、池は日吉村領であることはまちがいないとし、ただし、四ヶ村の用水は従来通りこれを用い、その代償として四ヶ村から日吉村へ毎年米六石を差出すこと。また、池浚・樋普請等は従来通り行い、池堤上置普請・樋伏せ替えは日吉村へことわってからすること。また、葭・藻草・芝草等は日吉村のものとすること、以上に決定されました。古文書では、「全く池床は日吉村領たるべし。然らば、四ヶ村田地用水に取り来り候段紛れ無きの間、米六石宛毎年日吉村へ之を出し、池浚え・樋普請等相勤め、唯今迄の通り、之を取り用ふべし。勿論、池堤上置普請、并びに樋伏せ替えの節は日吉村へ相断わり、有り来り通りに之を修補すべし。

且亦た、堤の草芝は日吉村牛場飼場たるべし」と述べています。

これ以後は江戸時代を通じて、大きな争論が起ったことを示す古文書は現存しません。また、明治期の古文書の内容からして、この元禄12年の裁許(判決)が、江戸時代を通じての基調となったことが伺われます。明治７(1874)年４月13日付の上日吉村から県へ差出した「葭田地所御尋ニ付口上書」(史料３)には、次のようにあります。「元禄12年中御裁許に相成り、前書葭地水年貢として年々米六石宛(ずつ)四ヶ村より日吉村へ相納むべくして、葭地御年貢の儀は上日吉村より上納致すべき旨仰せ渡され、則ち御裁許御裏書の御絵図面御下げ渡しに相成、其後御裁許の通り仕来り候地所に御座候」と述べています。

２．近代以降の吉住池

明治維新(御一新)により、江戸幕府による封建的な諸制度は、徐々に近代的なそれに変えられることになります。その中でも重要な土地の所有権や税制度は、明治５・６年(1872・３年)ごろから変更されはじめます。それに伴ない。吉住池をめぐる所有権や税制も封建時代のままでは間に合わなくなり、問題が起きてきます。

江戸時代においては、現在のような私的な土地の所有権は確立されておらず、百姓が耕やす田畑は、そこを支配する領主（お上・武士）も土地所有者であるし(領主的土地所有)、また、耕作する百姓も「土地所有者」である(農民的土地所有者)というように、一つの土地に二重の所有関係が併存していました。また、山林等は、御料山・御料林などといって、お上の専有地として農民には一斉手をふれさせないものもあったが、他は、入会地としてみんなが共同で所有し、共通の利益を得ていた共有地といったものでした。

しかし、明治になるとそうしたあいまいな所有関係は、近代的な資本主義的諸制度とは相入れなくなり、土地は私有地・国有地・公有地等の別が確立されていきます。また、土地についての税制度も、それまでの石高（米に換算された生産高）により課せられていた年貢（原則として生産物地代）が廃され、その土地に対して算出された地価により、その３％（後に 2.5%）を地租として金納することになりました。この一連の変革が地租改正といわれるものです。

吉住地をめぐる様相も、この地租改正条例の布告（明治６年７月）により、池の所有権をどうするか、今まで日吉村がお上に納めていた年貢がどうなるか、また、四ヶ村から日吉村へ出していた用水の水年貢六石をどうするか、といったことで問題が起きます。

現存する古文書では、まず、明治６（1872）年７月10日付の滋賀県地券専務から四ヶ村へ下された御達書の写(史料４)には、池を上日吉村野帳（近世では土地の地字・名請人・反別などを記した帳簿、土地台帳と考えられる）に記載させ、同様の件状を交付する。また、池に関する取扱い向きは旧慣の通りにするという文面がみられます。古文書では、「其の村養(用)水、上日吉村地元字葭地の義、今般別紙の通り、上日吉村野帳に記載致させ、同様の件状相渡すべし。尤も、右に付ての取扱向きは旧慣の通りに候条」とあります。

しかし、「旧慣の通り」とは言うものの、この地が地租改正により無税の地ということになる

と、それに伴ない水年貢六石をどうするかということで上日吉村と四ヶ村の間で、やりとりが起ります。

明治９(1876)年１月12日付の上日吉村から滋賀県権令へ指出された願書(史料５)には、四ヶ村よりの水年貢六石は、取扱向きは従前の通りに仰せつけられたことであるのに、四ヶ村は米六石取引をしないつもりでいるが、従前の通りの扱いではないかと心に掛っているので、従前の通りにする旨を地券証にしっかり書きかえて欲しい、と願い出ています。古文書では、「今般、地租御改正に付、旧高分米等廃され候様の趣拝承奉り、就ては確証通り伊野部村・平坂村・木流村・下野村より水年貢として米六石宛、年々上日吉村へ納め来り候処、取扱向従前の通り仰せ付けられ候上は、(四ヶ村は)右六石米取引申さざる心得に存じ居り候え共、当時御下渡に相成候地券証にては、取扱い従前の姿に相成らずやと懸案仕候間、前件の通り従前の取扱い相成るべき様の地券証と御書換成し下されたく、此段御採用の程、懇に願い上げ奉り候」とあります。これに対し、県からは、伊野部村外三ヶ村を呼び出し、篤(とく)と取り調べてから決定を下すという返事がありました。

そして、明治９(1876)年３月14日付の「互換証」(史料６)により、大すじの解決をみます。それによると、地租改正につき、用水池地は無税と確定し、五ヶ村の連署でもって地券証を下付されるので、永久に互いに無税とすること(水年貢の廃止)、また、藻泥・芝草等は上日吉村が刈り取ること、しかし、水利が不便の時は、藻泥を四ヶ村が掘り上げてもかまわないこと、さらに、池底浚えと堤防普請等は四ヶ村が営繕すること、樋伏替えのときは上日吉村へ談判してから行うこと、以上のように決められました。

古文書では、「今般、地租御改正に付ては、旧高を廃され、右養(用)水池地の儀は、一般無税と御確定相成り候に付、地元上日吉村養(用)水立会い、伊野部村・平坂村・木流村・下野村野帳へ連署開き申し致し、則ち右の名義を以って、地券証御下げ渡し相成り候上は、自今永世、互に無税たるべく候。然る上は藻泥芝草等は上日吉村へこれを取るべし。然りと雖(いえ)ども、水利不便の節々は藻泥四ヶ村より勝手に掘り上げ申すべし。且つ、池底浚え及び堤防普請等は四ヶ村より営繕致すべく候。並びに、樋伏せ替えの節上日吉村へ談判の上、普請致すべきの事」と述べています。

最後に、明治12(1879)年９月の「互換証」(史料７)では、地券証にのせる吉住池の名義のことが述べられています。明治９年の「互換証」により、吉住池の地券証には五ヶ村名義にしたいと村方では県に歎願しますが、法的にはそれは認められないことになり、村方双方で話し合いの上で、上日吉村名義にして地券証を下付されることとなりました。しかし、その他の取り決めは、明治９年３月14日の「互換証」通りだというものです。古文書では、「明治９年３月14日、双方熟義約定互換仕り候処、其の内今般下附に相成候地券面記載の義に付、聊(いささ)か、約定と相触れ、其目此に定約を結ぶ、左の如し、右池地の義、地元上日吉村養(用)水立会い、伊野部村・平坂村・木流村・下野村と野帳連署開き申し仕り候上は、右の名義を以て地

券証御下げ渡し相成り候と存じ奉り候処、地券面に養(用)水立会いの名義これ無く、然るときは曩(さき)に約定互換等にも相触れ候廉(かど)を以て、双方情願仕り候処、右地券面へは養水立会いの名義、一般公法に指(さ)し問(つか)え、致底(とうてい)記載相成り難き旨御説明、止(や)むをえず、双方熟義の上、地元上日吉村名義にして地券証御下附相成り、然れども養(用)水立会いの義は伊野部村・平坂村・木流村下野村に相違これ無く、其他総じて明治９年３月14日約定互換証の通り、双方熟義を遂げ確定候」と述べています。

このように、明治以降の吉住池をめぐる税制度は、本年貢・小物成という旧幕時代の生産物地代(現物による地代)の廃止、四ヶ村から日吉へ納入していた水年貢の廃止ということになりました。しかし、池で水草魚鳥を養蓄して利潤をあげるについては、それに相当する地価を算出するということが明治９年３月14日付の「互換証」につけ加えられています(史料６)

以上は、古文書（畑家文書とその写しと考えられる南きくえ家文書）からみた吉住池の変遷を簡単にたどったものです。池がそこに暮す人々の生活に大きな恵みを与え、どの時代にあっても重要なものであることがうかがわれます。また、そうした古いできごとを知らせてくれる古文書というものも大切なもので、きちんと保存していくことが望まれます。

（長谷川淑子）

３．史　料

元禄五年（史料１）

江刕(州)神崎郡建部庄伊野部村平坂村下野村木流村与(と)同国同郡日吉村葭地池水諍論之事度々糺義之上葭藻草共日吉村江(へ)刈取水者四ヶ村江(へ)取来候段無紛相聞ニ付其通落着申付候処四ヶ村ゟ(より)葭之根堀取迷惑之由日吉村達而(て)令訴訟ニ付今度為検使森本惣兵衛手代横川専右ェ門万年長十郎手代佐藤弥次右ェ門差遣之遂見分之処(処)四ヶ村ゟ(より)ハ字ゆるが上与(と)申溜池之内伊野部下野并近在瓦屋寺三ヶ村之領有之古来ゟ(より)四ヶ村之池ニ而(て)用水樋三ヶ所有之無紛之由申日吉村ゟハ右場所ハ葭地ニ而(て)高八石并葭小物成壱石五斗宛毎年地頭江(へ)納所天正年中之古水帳ニ茂(も)葭高有之支配無紛之由申之

一右池水四ヶ村江(へ)取候義樋茂(も)三ヶ所有之山つら川ゟ之水筋ハ分明ニ相見候但先年之樋者(は)はめ板茂(も)無之候故水不断ニ落候而(て)葭快ク生出候虎(処)四年以前四ヶ村ゟ新敷樋ヲ仕かへ候節尺八樋之両脇はめ板ヲ入候之故池ニ水溜葭藻草下生東之堤水越本田之構ニ罷成迷惑之由日吉村申之四ヶ村ゟハ先年之古樋ニ無相違(違)仕かへ候由申ニ付古来之樋堀出させ見候処(処)ニはめ板入候形無之候常ニ者(は)樋之両脇ゟ水ヲ出シ用水之節者(は)土俵ヲ以両脇をふさ

き水溜候様子ニ相聞候由申之
一右池床四ヶ村ゟ支配仕候由雖申證據無之候
日吉村ゟハ葭地高之内之由申ニ付古帳ヲ以
日吉領内令穿鑿処ニ外ニ葭地曽而不相見之
上者右之場所帳面ニ有之葭地与相聞候但此
古帳ハ名寄帳ニ而百姓自分ニ拵置候由四ヶ
村ゟ申ニ付日吉村之古水帳相尋候処往古ゟ
此帳面ヲ以年貢令納所外ニ水帳無之江劦筋
此類多有之由検使之者共申候条弥最前申付
候通池ニ生候葭藻草日吉村江刈取之水之義
者四ヶ村江可取之但三つ之樋先年之通はめ
なしニ可仕候如此申付候上ハ四ヶ村之者共
葭之根ヲ不切採様ニ可仕候若相背候者曲事
ニ可申付之間向後急度可相守此旨者也

八月　日

右ハ　御公儀様へ御願申上候
御裁配書

元禄五年壬申八月廿一日　　日吉村

元禄十二年裁許写（史料2）

江州神崎郡日吉村与同国同郡伊野部村平坂村
木流村下野村用水池床諍論之事度々奥義之上
裁許雖申付日吉村依令愁訴此度為御検使遠山
四郎右ェ門石原新左ェ門被遣之糺明之処四ヶ
村百姓申趣者古来右池水三ヶ所之樋口より四
ヶ村之田地用水に取之尤堤樋普請等茂従前ニ
相勤池床共に四ヶ村領之由雖申之不分明候日
吉村百姓申候者右池床者葭地三町壱反四畝歩
分米八石与名寄帳ニ茂有之当村高内ニ而年貢
相納此外葭小物成米壱石五斗是亦年々納来候
由申之為歴然之条全池床者可為日吉村領然者
四ヶ村田地用水に取来候段無紛之間米六石宛
毎年日吉村江出之池浚樋普請ホ相勤唯今迄之
通可取用之勿論池堤上置普請并樋伏替之節者
日吉村江相断有来通に可修補之旦亦池堤之草
芝者日吉村牛馬飼場たるべし仍為後濫絵図之
面加墨引印判双方へ下置候条不可逶失者也

元禄十二年卯十二月

（史料3）

（表紙）
「
葭田地所御尋ニ付口上書

神崎郡第六区
上日吉村
」
神崎郡第六区上日吉村
持主
総村中

一葭田反別三町壱反四畝歩
此分米八石
外ニ米壱石五斗葭小物成
今般大縄場御取調ニ而御尋ニ付左ニ奉申上
候
但シ御裁許御絵図御裏書写相添
右地之義者往古ゟ當村高五百貳拾七石壱斗
六升之内ニ而葭田之葭を苅賣拂御年貢御上
納仕来り候處元禄年中同郡伊野部村平坂村
木流村下野村四ヶ村ゟ多人数葭地立入葭根
起し土手を築キ押領被致候より及諍論ニ度
々御奥儀之上元禄十二年中御裁許ニ相成前
書葭地水年貢として年ニ米六石宛四ヶ村ゟ

日吉村江可相納(して)〆葭地御年貢之儀者上日吉
村より上納可致旨被仰渡則御裁許御裏書之
御絵図御下渡ニ相成其後御裁許之通リ仕来
リ候地所ニ御座候以上

神崎郡第六区上日吉村
村総代組頭　畑　金右衛門

明治七年　副戸長

四月十三日　梅原善兵衛

戸長

南　惣八

前書之通リニ付奥印仕候以上

右区々長

福永善右衛門

信濃御印
駿河在江戸無加印
丹後御印
紀伊御印

江州神崎郡

日吉村

同國同郡

伊野部村
平坂村
木流村
下野村

庄屋

惣百姓

中嶋
氏原　」

（史料4）

明治六年七月十九日伊野部村外三ヶ村江
御達書之写

其村之養水水日吉村元字葭地之義今般別紙
之通リ上日吉村野帳ニ記載(ママ)為致同様之券状可
相渡尤も右ニ付テ之取扱向ハ旧慣之通リニ候
条其段相心得他日故障無之為メ各村後証為
替置心得違無之様可致候依其此段達候也

明治六年七月十九日滋賀県地券専務

神崎郡第五区
伊之部村
平坂村
木流村
下野村

（裏表紙）

「

権少　松田

十四等出仕三宅

（史料5）

（表紙）

「明治九年
一月十二日

池地之義ニ付
御願書

神崎郡第六区
上日吉村

」

第七拾七番字吉住　神崎郡第六区
一池地反別四町貳反八畝三歩　上日吉村

右ハ別紙確證之通リ之地所ニ付素ヨリ當村
ニ於テハ養水妨等一切致間敷候然ル處今般
地租御改正ニ付旧高分米等被廃候様之趣奉
持承就テハ確証通リ伊野部村平坂村木流村
下野村ゟ(より)水年貢として米六石宛年々上日吉
村江納来リ候虎取扱向従前之通り被仰付候
上者(は)右六石米取引不申心得ニ存居候得共當
時御下渡ニ相成候地券証ニ而者(は)取扱従前之
姿ニ不相成哉与(と)懸案仕候間前件之通リ従前

之取扱可相成様之地券証与(と)御書換被成下度
此段御採用之程奉懇願上候以上

神崎郡第六区上日吉村
明治九年　村惣代
一月十二日　南惣八
戸長
上田金兵衛

滋賀懸権令篭手田安定殿

前書之通ニ付奥印仕候以上

右区
区長福永善右衛門

書面之趣者(は)相掛リ伊野部村(ママ)外村へ呼出し篤
与(と)取調之上可及處分候条来リ(ママ)十五日午前第
八時本廳(庁)江(へ)可罷出(出)候事

明治九年
一月十二日　御印

（裏表紙）
「

明治九年
一月十二日願出
」

総代
戸長
平阪村
総代佐生太兵衛
木流村
総代
右平阪村木流村
聯合戸長市田喜兵衛

（継印）　（継印）
下野村
明治十二年九月　総代高村勘兵衛
戸長高木庄五郎

滋賀県令篭手田安定殿

（史料6）

（表紙）
「

池地示談調議ニ付上申書

神崎郡第六区
区長田中清左衛門
第五区
区長深尾忠左衛門
」

互換証

神崎郡上日吉境内第七拾七番字吉住
一池地改正反別四町貳反八畝三歩
右池地之議ハ上日吉村境内元字葭地旧反別
三町壱反四畝歩高ハ石此納辻五石壱斗貢納
仕来候処同郡伊之部村平坂村木流村下野村
四ヶ村養水池地ニ付毎年米六石上日吉村(江)
納来候処今般地税(ママ)御改正ニ付テハ旧高ヲ被
廃右養水池地之儀ハ一般無税ト御確定相成
候ニ付地元日吉村養水立會伊之部村平坂村
木流村下野村野帳(へ)江連署開申致シ則右之名
義ヲ以テ地券証御下渡相成候上ハ自今永世
互ニ可為無税候然ル上ハ藻泥芝草等ハ上日
吉村江(へ)可取之雖然水利不便之節々ハ藻泥四
ヶ村ヨリ勝手ニ堀上ヶ可申旦池底浚(え)江及ヒ
陪(堤)防普請等ハ四ヶ村ヨリ営繕可致候並樋伏
替之節上日吉村江(へ)談判之上普請可致事前件
之通今般更ニ双方遂熟議確定候上ハ自今永
世故障毛頭無之依之互換確證(証)如件

同郡第五区
下野村
明治九年　副戸長渡辺弥右衛門
三月十四日　戸長　高田藤助
木流村
副戸長布施重右衛門

戸長　布施源治郎

平坂村

副戸長佐生鍋吉

戸長　田中久平

伊野部村

副戸長富田忠左衛門

戸長　杉山所平

神崎郡第六区

上日吉村

正副戸長御中

書面之通リ相違無之ニ付奥印候也

第六区

区長　田中清左衛門

副区長　畑　値時

第五区

区長　深尾忠左衛門

副区長市田善兵衛

右池地之儀ニ付先般来各村ヨリ奉伺願候処双方江示談可致旨被仰渡候ニ付遂熟議確定致し則今般前書互換証差出候上ハ自今永世故障毛頭無之仍而此段奉上申候也

同郡第五区

下野村

副戸長渡辺弥右衛門

明治九年

四月廿四日

戸長　高田藤助

木流村

副戸長布施重右衛門

戸長　布施源次郎

平坂村

副戸長佐生鍋吉

戸長　田中久平

伊野部村

副戸長冨田忠左衛門

戸長　杉山所平

同郡第六区

上日吉村

副戸長梅原萬右衛門

戸長　永井治右衛門

取扱人

第六区

副区長　畑　値時

区長　田中清左衛門

第五区

副区長市田善兵衛

区長　深尾忠左衛門

滋賀県権令篭手安定（「田」脱カ）殿

書面互換證書中養水池地無税之儀ハ一般之公法ニ有之候得共藻泥芝草所云々有之然ルニ池地之内水草魚鳥ホ蕃（等）（養）し利潤アル分ヲ限リ相當（当）ノ地価相定可申旨兼而公布ノ次第も有之ニ付右池地之儀ハ相當ノ地価ヲ取調更ニ可申立儀与可相心得其他件々互換約定書之趣ハ聞置候条向後違乱無之様確守可致候事

明治九年三月廿四日

（史料7）

（表紙）

「

互換証

神埼（崎）郡上日吉村

」

互換証

一神崎郡上日吉村境内第七拾七番字吉住池地

ノ義ニ付明治九年三月十四日双方熟議約定互
換仕候処其内今般下附ニ相成候地券面記(ママ)裁ノ
義ニ付聊約定ト相触レ其目此ニ定約ヲ結フ左
ノ如シ

右池地ノ義地元上日吉村養水立會(会)伊野部村平
坂村木流村下野村ト野帳連署開申仕候上ハ右
ノ名義ヲ以テ地券証御下ヶ渡シ相成候ト奉存
候処地券面ニ養水立會(会)ノ名義無之然ルキ(トキ)ハ曩(さき)
ニ約定互換等ニモ相觸(触)レ候廉ヲ以テ双方情願
仕候処右地券面ヘハ養水立會ノ名義一般公法
ニ指問(つかへ)致底記(ママ)裁難相成旨御説明不得止ヲ双方
熟議ノ上地元上日吉村名義ニシテ地券証御下
附相成然レ養水(トモ)立會ノ義ハ伊野部村平阪(坂)村
木流村下野村ニ相遠(違)無之其他総テ明治九年三
月十四日約定互換証之通双方遂熟議ヲ確定候
上ハ自今永世故障毛頭無之依而再互換証書如
件

神埼郡
上日吉村
明治十二年九月　総代南　惣八（印）
戸長畑　値時（印）
（継印）　（継印）

神埼郡
伊野部村
平阪村

木流村
下野村
御中

前書再互換証差出候上ハ自今永世故障毛頭
無之依而此段奉上申候也

伊野部村

第５章　吉住池にかかわる民俗

水　口　あ　け

吉住池の水口あけのまつりは、１月11日に神崎郡五個荘町大字奥集落が行っている。

朝10時頃　奥集落の役員は酒一升と大注連縄(しめなわ)を青竹の先にかざして八日市市建部下野町集落に立寄って挨拶をした後、吉住池の樋門(ひもん)の一つである奥村のゆる(別称「下のゆる」ともいう)に行き、樋門口に大注連縄を飾り、酒一升を供えて拝む。

この大注連縄は、太さ70cm、直経３ｍの輪型で、当日朝に惣役員が出て作り、吉住池の水神に供えて生活用水と灌漑用水が豊かであるようにと祈る行事である。

井元の神のまつり

吉住池は湧水の沢である。この沢の上流に「市の湯(いちのゆ)」とも「浜野沢(はまのざわ)」とも呼んでいる湧水の沢がもう一ヵ所ある。この沢から流れ出る川を今井川といい、水利権は吉住池の下流郷である五個荘町大字奥集落・八日市市建部下野町集落・同市建部大塚町集落が持ち、三集落の生活用水と灌漑用水に使っている。この沢の水神様をまつる行事があって、これを「井元の神」のまつりと呼んでいる。

まつりは、１月11日朝９時頃、三集落の惣役員が揃い、酒一升と大注連縄（太さ約80cm・長さ約３ｍ）を持って市の湯（浜野沢）に行き・沢の岸に酒を供え、岸に生えている木の枝に大注連縄を掛けて拝む。

昭和55年、耕地整理で市の湯は水田となったが今井川は残り、今井川岸に「井元の神」の石標を建て、今もこの行事は続けている。

また、市の湯の徳水集落である八日市市建部日吉町では、市の湯を水源とする「サザ川」の川普請を５月８日のお月ようかの日に惣総出で行っていたが、昭和55年の耕地整理以後は愛知川ダム用水の通水で廃止された。

さらに八日市市建部瓦屋寺町も四月初旬に川普請を行っていたが、これも廃止している。

日吉町と瓦屋寺町は井元の神まつりには参加していない。

ゆるがえ普請

「ゆるがえ」とは、吉住池をさして呼ぶ集落と、吉住池にある四ヵ所の樋門(ひもん)をさして呼ぶ集落とがある。

ここで「ゆるがえ普請」と呼ぶのは、樋門口の土砂ざらえと補修のほかに、取水の水量割りをする土俵を埋める作業である。

この作業は、５月５日朝８時頃、吉住池の堤に６ヵ集落民が集まり土俵15俵を作る。

六ヵ集落とは、吉住池の水利権を持つ下の郷六ヵ集落で、八日市市建部大塚・建部下野・神

崎郡五個荘町大字伊野部・平坂・木流・奥集落である。

15俵の土俵は、伊野部用水の樋門口に四俵。伊野部・平坂・木流の三集落用水の樋門口に6俵。建部大塚・建部下野の二集落用水の樋門口に三俵。奥集落用水の樋門口に2俵の水かがりによるもので、耕作面積の割合である。

この土俵埋めのほかに、明治中期頃までは、各樋門口の土砂ざらえや堤の修復など行ったと伝えられる。今は伊野部公民館に六ヵ集落の役員が集合して土俵作りをしたあと樋門口に沈める行事だけになっているが、吉住池改修工事で、昔日のような湧水現象が出たら、ゆるがえ普請の復活が見られるだろうと地元民は期待している。

ゆるがえの杭打ち

ゆるがえの杭打ちとは、吉住池と今井川の境界に漏水防止用の松杭を打つ川普請である。

これをするのは、神崎郡五個荘町大字奥集落で、5月5日朝8時頃　惣中総出で吉住池東岸に参集。今井川の下流から上流の市の湯(別称浜野沢)にかけて歩き、吉住池と今井川の境界にそって松杭を打ち、松板を側溝に張り、川の水が沢に漏れないようにする。また。今井川の川底の土砂ざらえも行う。この行事は、昭和55年の耕地整理と昭和58年の吉住池改修工事完成によって廃止された。

速恵さんのまつり

速恵さん(そえさん)とは、吉住池の東北の隅にまつられている神で、龍神さんといわれている。この場所は池の中で雑木と雑草が茂る小さな丘であり、社の建物はない。

お社は、八日市市建部日吉町集落内の郷社日吉神社本殿東側にある小社三社の中央部のお社で、これが「速恵六明神」といわれていて、7月25日にお祭をしている。

この祭は、吉住池を共有する八日市市建部日吉集落・建部田中集落・建部竹鼻集落の三集落で、朝10時頃、氏子総代・区長・副区長・若衆大頭(おおがしら)・農業実行組合長・老人会長らが参列し、神職が祝詞を奏上する。供物に鯉・玉子・野菜が供えられ、三集落の老人会員が招待されるほか、終日、日吉郷の惣中が参詣する。

速恵大明神のお姿を見た話が伝わっている。

明治初期に速恵の森近くで肥料用の草刈りをしていると、大蛇が出現。目を光らせて怒ったので、以後、毎日玉子を供えて怒りをしずめたといわれる。明治末期頃には、速恵の森に玉子を供える習慣はなくなり、日吉神社境内の速恵大明神の小社に供えるようになったが、今はこれもなくなっている。

野の神のまつり

吉住池東岸に八日市市建部日吉集落の野の神の斎場がある。この野の神の斎場を別称「ダイジョウゴさん」と呼んでいる。昭和55年の耕地整理以前には、三本の大杉が生えていたが、昭和56年に「野の大神」の石標を建立した。

野の大神のまつりは、8月7日に氏子総代一人が酒一升とマクワ瓜を持って参詣するだけで

ある。周辺集落の野神まつりには、惣中の男性が参詣して子供相撲を奉納するが、この野の神まつりには、子供相撲を行った伝承はない。

嫁取り橋の伝説

昔、信州のさる大名のお姫様が、伊賀のさる大名の若君様に嫁入りする道中、吉住池にさしかかった。お姫様が輿の中から池の畔りを見ると、一頭の牛が水辺で池の水を飲んでいる姿が見えた。お姫様は、にわかにのどの乾きを訴え、輿から降りて、吉住池の水を飲もうと石橋の上から身を乗り出すと、お姫様の体が池の中に吸い込まれて水中に没してしもうた。側に居た女従者が手をさしのべて助けようとしたら、女従者も池の中に沈んでしもた。しばらくして黒雲天空を覆い、雷光雷鳴激しくなったかと思うと、お姫様の姿も、女従者の姿も大蛇に変り天上へと舞い上った。

この事件があって以来、嫁入道中には吉住池をさけて通るようになったとさ。

（昭和24年春　建部日吉　故畑九右衛門より取材の話）

吉住池の漁法

吉住池には「どんじょふみ」と呼ぶ珍らしい漁法がある。

どんじょふみ漁法とは、大きな竹籠(かご)を水中に沈め、足で魚を竹籠の中に追い込んで擲い(すくい)上げて捕獲するもので、近郊では見られない吉住池独特の漁法である。

「どんじょふみ」と呼んでいる竹籠は、長楕円形の舟型で、長さ１間半、幅半間・深さ６尺漆塗りの竹籠で、口の所に二本の取手棒があって、この取手棒を握って籠を水中から擲い上げて魚をとる方法の漁具である。

この漁法は昭和40年代まで行っていたが、吉住池へ八日市市街地の汚水が多く入り、ヘドロの沈積が深まったので、どんじょふみ漁法は自然となくなった。

このほかに「カイドリ」漁法がある。土石で水を囲み、囲みの中の水を汲み出して魚をとる方法。「ノド取り」という漁法もある。「ノド」という割り竹を編んで筒状の籠を作り、一方の口を閉じ、一方の口を漏斗状(じょうご)にした漁具を水中に沈め、ノドに入った魚を取る漁法である。

さらに「カキ」という漁法。投網。四手網。さで網。竿釣りなどの漁法もあるが、これらの漁法の時は、箱舟、たらい舟に乗って行った。

吉住池に生息する魚類は、コイ・フナ・ヒワラ(ハイ)・アマゴ・ゼゼラモロコ・タモロコ・ホンモロコ・ボテジャコ・ナマズ・ウナギ・ドジョウ・アカゲ・オイカワ・アユモドキ・ハリヨ・メダカ・モツゴ・タイワンドジョウ・カネヒラ・アブラボテ・ボテ（シロヒレタビラ）・カマツカ・ムギツク（ムギモロコ）・ヨシノボリ・ドンコ・スナヤツメウナギなどの淡水魚である。

吉住池でとれる魚は、味よくて骨が軟かいといわれている。また、周辺集落では家の前の小川にイケスを設けてあり、捕獲した鯉・フナが飼われて必要に応じて食卓に供したほか、吉住

池の普請や川普請には、これらの魚をとって直会の酒の肴にしていたと語られる。

今は、吉住池の湧水現象がなくなり、水も枯渇したため、魚は住んでなく、地元民は、吉住池の復活を持ち望んでいる。（三露俊男）

聴取り者（敬称略）

神崎郡五個荘町大字伊野部 582番地	北川伝右衛門	大正６年５月８日生
八日市市建部日吉町 676番地	寺井秀治郎	明治41年５月16日生
	寺井やえ	明治42年７月29日生
八日市市建部下野町 241番地	高木長兵衛	大正２年３月31日生

参考文献

八日市郷土文化研究会発刊　蒲生野１号・17号・18号の拙稿「郷土の民俗」

第6章　結　び

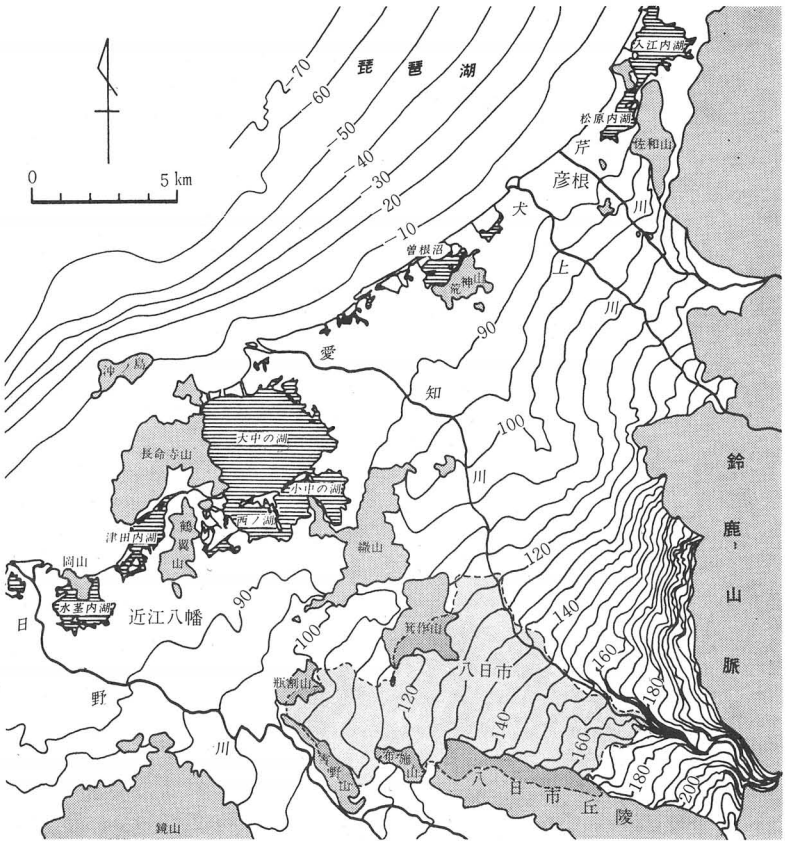
――吉住池に関する一試考――

1．吉住池の立地

吉住池の立地に関する、特筆すべきことがらは、他かでもなく愛知川の左岸にあって、しかも箕作山山塊の東麓に築造されていることである。実は、このことが、吉住池の形成や発展、あるいは利用、活用、さらにはこの池の衰退に関することまで、すべての面において規定的な要因となっていることである。

吉住池は、愛知川から距たること直線距離にしておよそ 1.6km、箕作山とはその山麓で接していて、山裾自体が池の岸辺の一部になっている。

吉住池の形成、発展、衰退は、一に愛知川の形成する扇状地の発達とかかわり、二に箕作山山塊に規定されてきたといえる。そして第三に池そのものの有用性、活用性を規定してきた要



挿図11　湖東平野の等高線（『八日市市史巻１』に依る）

因は、この吉住池がこの水系の最上部を占めることである。すなわち、この池のすぐ南に接して、愛知川と併行に広がる低位段丘が、吉住水系の上限を限っていることである。吉住池は、この水系の最上部を占め、しかも最大の貯水量を誇るものであったといえる。

愛知川の作る扇状地の発達を微細に観ると（挿図11）、その等高線は、愛知川を中心に扇形の弧状をなすが、まさしくこの高等線が愛知川と交叉する個所では、等高線は若干上流方向にそのラインを歪めている。この現象は、愛知川が一旦形成した扇状地を、侵蝕しはじめた証左であり、かつての愛知川は近江八幡市域へ真直に流路を取っていたことが判明している。このように、弧状に広がる等高線は、吉住池の位置する標高 125ｍラインでは、箕作山の南に延びる一支脈・延命寺山とクロスしていることに注目される。

すなわち、等高線の描く曲線は、標高 120ｍラインが箕作山に直交し、地形となじんでいるのと大きく異なり、この標高 125ｍラインは山麓部に大きなポケットを形成していることである。

愛知川が箕作山の南に流路を取っていた時、箕作山の北東麓はこの山に遮られて、愛知川の土砂の流入もなく、埋め残しの地域となっていた。さらに、愛知川が箕作山の北東部を流れる現在においても、その扇状地化はこの山麓にまで及ばなかった。

この山麓部には、河川の運搬する堆積物が全くみられず、低湿地としての窪みが残されたのである。

このような地形の形状とあわせて注意すべきことは、さらに、この扇状地が、愛知川の伏流水をこの地点で大いに湧出させたことにあったといえる。

以上のようにして、自然に生れた、清水を滾々と湧せた低湿地が、それ以降（厳密には水をも労働対象とする弥生時代以降）、人手による変改を経て今日に残された姿こそ吉住池そのものであったといえる。

吉住池は、本来上記の意味合いからみて、現吉住池よりはるかに広域であったと思われる。すなわち、現吉住池と浜野沢（広義には上沢、下沢、向沢など建部瓦屋寺町地先をすべて含んで考えたい）を合せた、箕作山山麓の長大な低湿地をすべて吉住池あるいは「ゆるがえの溜」時には「浜野沢」等々と呼称されていた時代があったに相違ない。

特に浜野沢なる呼称は、「淡海温故録」瓦屋寺の項によると、「其麓（箕作山山麓の意）の池は瓦の土を掘り出したる跡なりという。又浜野沢ともいうぞ」とあることから、そのように呼称された感は強い。すなわち、もとは扇状地の湧水点がこの窪みの東傾斜面に点々と広がり、「沢」と呼ばれるものにふさわしい状況を示していたものと思われる。

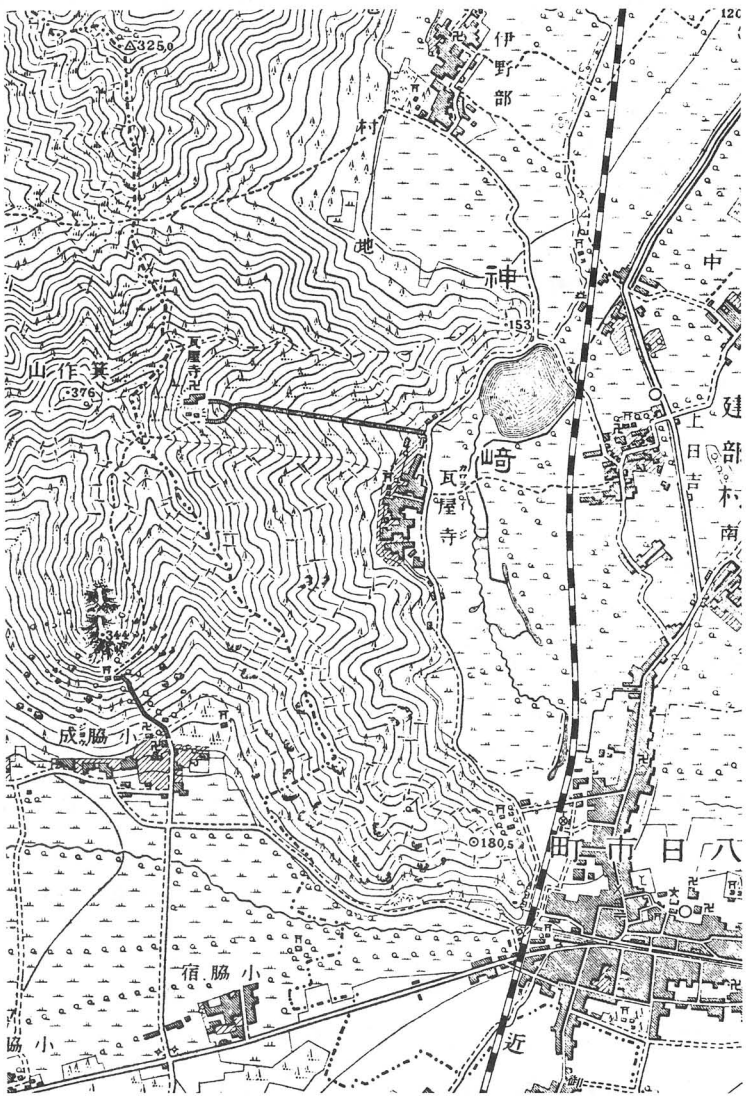
この沢の規模は、その地形の形状から推して、北は五個荘町の境となる小字北山の後光の峰と呼ばれる丘陵の最先端（箕作山から延びる丘陵支脈のうち、東に延びる丘陵先端、鼻と呼ばれる）から、南は延命寺山丘陵先端（箕作山から南に延びる丘陵の鼻）の松尾神社参道まで、その距離およそ 1.3kmで、その幅は約 250ｍ前後であったと推定される。

2．浜野沢の年代

滋賀県下で最も古い明治26年の仮製２万分の１地形図によると、松尾神社の参道右手には、参道から距たること数十ｍにして、湧水池１ヶ所がうかがえる（現存しない）。そして、さらにここより北方へ 300ｍ程距てて、やはり細長く延びた湧水池が 250ｍ程続いてみうけられる。

この湧水池から流れ出た水路は一条の河川（この河川は何々川との名称がなく、上流を上沢、中流を向沢、下流を下沢と沢の名前で呼称している）となって吉住池に注いでいる（吉住池が涸れだしてからは、この河川は伊野部井に流れ込んでいる）。

また、ほ場整備前、後には、もう一条の湧水を集めた河川が、吉住池の南を抜けて大塚に経る用水路・今井川がみうけられる。



挿図12　吉住池周辺地図(明治26年仮製2万分の1)

今井川は、その名のとおり比較的新しい用排水路として掘削されたもので、それ以前は上沢、向沢、下沢の地名を結ぶ一条の流れが先行して存在したものといえよう。

この二つの段階を、前者をａ、後者をｂ段階として整理すると、この二段階の基本的な相違は大きい。

ａ段階に比定する今井川の設置は、上沢、向沢、下沢の低湿地を本格的に乾田化することにあり、あわせて吉住池の恩恵に浴さない大塚方面への引水を図ったものであるといえる。

このことは、吉住池と不明瞭なかたちで不可分の形にあった狭義の「浜野沢」を、吉住池そのものと分離する意図があったといえる。

すなわち、吉住池を現在の規模として固定化を図るとともに、その水源についても、吉住池内の湧水点を確保、維持することに方向付けされたものと推定される。

ｂ段階以前の様相は、ほ場整備施行に伴う、発掘調査こそ実施されなかったが（地元関係者等からその要請が指摘され、遺物の発見も伝えられていたにもかかわらず）、地元、大谷巌氏の詳細な観察や多量の遺物採集が図られたことによって貴重な資料が確保された。

特に今井川の改良は、大幅な地下掘削を伴い、地表下 1.8m付近から多量の須恵器、土師器、木器等が出土するに及んだ。また、この部分の地層は腐植土層（スクモ層）からなり、広い意味での旧河川の川底とはいえｂ段階以前の実態を良く示すものであった（この段階をｃ段階としておきたい）。

以上の如く、吉住池上方の低湿地の変遷は、大きくはｃ段階－ｄ段階－ａ段階－ｏ段階（現在）の５段階に区分することが出来る。

３．吉住池の規模と年代

ａ．第１次調査の所見

吉住池は、その大部分が、建部日吉町日吉に属し、前記の上沢、下沢等の低湿地は、建部瓦屋寺町に属していた。

それのみか、この池の本質にかかわる重要な点は、当地が建部日吉町に所在しながらも、その管理者が下流域にあたる五個荘町伊野部の区長にあることである。

滋賀県農林部の備える『ため池台帳』には、この池の受益面積が90*ha*、堤高 2.5m、堤長75m、貯水量37,800m³とあり、築造時期は徳川中期と登載されている。

今回の吉住池の発掘調査は、その全域に及ぶものではなく、特に、瓦屋寺町の各沢を縫って流れる河川（沢）の流路と池とのかかわりを示す流入口個所は、流出（取水）個所とともに未調査に終った。

第１次調査は、吉住池の南半から東寄りにかけて発掘調査を行った。調査の成果は、本書本文中に記載のとおりであるが、注目すべきその特質は、池のベースがすべて砂と砂礫層からなり、愛知川のもたらした堆積物であったことである。

第２点は、標高119.30ｍが池床東寄りのベース高であり、西へ傾斜していた。そして、さらに注目すべきことは、池床の起伏が著しく、しかも、月にみられるクレータの如き円形の窪みが所々に散見され、ここが湧水地点であることが推察された。そして、これらの湧水土坑（湧水を招くために人工的に掘削された穴を土坑という意味でこの用語をしばらく使用する）は各湧水土坑と連携し下流へと流路をとっている（湧水土坑を連携させはじめたのは、湧水量が減少しはじめてからのことか）状態を示していた。

湧水土坑の基本的な事柄は、吉住池内のどこにでも穿たれたものでないことである。その位置・分布には大きな傾向が伺われる。

すなわち、いずれもが池の南東に偏り、西側には全くみうけられないことである。このことは重要なことであり、その理由は、扇状地先端の湧水点が池の東寄りにみうけられること、池の西寄りは、瓦屋寺方面からの用水に対する下流への流路的機能をもたせていたからといえよう。

この湧水土坑の観察から得られた第２点は、その形状に２種類がみうけられることである。１つは、略正円形を呈するものであり、他の１つは不正長方形を示すものの存在である。

しかも、この両者の分布にも偏よりがあり、土坑（ＳＫ－Ⅰ～Ⅵ）は適宜集合しながら溝で結合し、１条の溝となって下流に導かれる（水位の低い時のみ）構造となっている。しかし、不正長方形のものは、池の南端よりやや北東部に集合し、両者の形の違いには時間的なものもあったのではないかと思われる。

すなわち、以上をまとめてみると、ｏ段階、現在（湧水土坑より湧水が出なくなった時期から、この湧水土坑を浚渫で除去した時期）、ａ段階、湧水土坑を池床の東寄りに設けたが、いずれも不正長方形や長楕円形を呈するもので、湧水土坑と流路が良好な形で結せず、低みを縫って下流に流れでている形状をとっている。

ｂ段階、円形の湧水土坑が設けられ、各土坑が一条の水路にうまく結合して、下流に導かれている形態をとる。

ｃ段階、上沢、下沢、向沢等から湧出した水が、この吉住池に流入していた時期で、第１次調査において溝状遺構が検出された段階。以上４つの段階が推定された。

ｃ段階は、池床（愛知川扇状地の砂礫層）を自然掘削して流れる時期であるが、ひるがえって考えるに、単なる排水を目的とした人工溝の可能性も考えられなくもない。なぜなら、このような扇状地面に自然流路が流れ込む必然性はより少なく、むしろ東寄りの山の裾部低みを流れとする方がより自然である。しかし、この山裾部が狭隘な場合には、水は滞水し、池床を削るように自然水路が形成される場合がないでもないという推測が成り立つかもしれない。

なお、このｃ段階の溝は、その伴出遺物からみて、７世紀前半代・飛鳥時代に想定することができる。

また、ｂ段階とした円形湧水土坑は、その内部から出土した土師器より江戸時代に溯るもの

であることが判明している。

c段階にとって最も重要なことは、この自然流路（あるいは若干人手の加わった人工排水路）溝（ＳＤ－２）の時期に吉住池が形成されていたか否かである。このことに関しては、この溝に伴う良好な遺物や溝内の堆積土の状態がその様相を暗示しているといえる。

特に、溝内出土の一括遺物に関しては、その土器群の一括性そのものにまず注意されるが、良質な土師器椀は、在地性の色彩も薄く、中央に関連する祭祀を暗示させるものであった。

また、溝内の堆積については、その内部に暗灰黒色粘質土が充満しており、いわばスクモ・泥土が堆積しているといえる。このことは、この溝がこの土器群の示す飛鳥時代かその直後にはもはや流路としては機能せず、しかもスクモの形成される冠水の状態にあったことが推定される。このことは吉住池の築造にとってきわめて重要な所見である。すなわち、飛鳥時代ないし、それ以降のある時期に池の形成をみたことになり、それ以前には溯り難いことを暗示したといえる（但し、第１次調査区に及ばない小規模な池がすでに北部に築造されていたかどうかについてはこの溝自体の評価から導き出すことは出来ない）。

ｂ．第２、３次調査区

第２、３次調査区での吉住池は、第１次調査区のそれとは大きく様相を異にしていた。まず、調査前の地形の状況では、湧水土坑と推定されるものが四ヶ所認められたが、これらはいずれもが第１次調査区のａ段階とした不定形・長方形、楕円形のものであった。しかも、表土除去後、これらのいずれもが、池底に明瞭な形状をとどめることなく、消失したことからみて、湧水土坑としての明瞭さを欠いていたといえる（しかし、機能は充分果たしていたことが古老の話から推測される）。この地形図に示された状況をａ段階とし、浚渫後の現在の姿をｏ段階としておきたい。

この吉住池にとって、最も注目すべき画期は、ｂ段階である。この段階は、池底下に頭大から挙大の河原石を敷きつめた段階といえる。そして、次のｃ段階は、その下層数十cmに敷かれた（葺かれたとした方がよいかもしれない状況が傾斜面・築堤部分に認められた）河原石の層である。この敷石もまた、この池にとって大きな画期であったといえる。

さらに、河原石層下層の溝（ＳＤ－１）の形成もまた、この池の歴史として重要なものであった。この段階をｃ段階としておきたい。

これらの各画期のなかで、ｂ段階の年代は、敷石（Ⅱ）上の遺物から想定しなければならないが、まず、層位関係にもとづき、敷石下層の年代比定により上限を求めてみた。すなわち、溝（ＳＤ－２）からは平安時代の良好な遺物の出土があり、また、鎌倉時代に下るものも含まれることから、それ以降と推定した。

しかし、敷石（Ⅱ）上の江戸時代の出土遺物からみて、下層がそれ以前とすれば、敷石(Ⅱ)の年代もこの頃に近く、室町時代末葉ないしは戦国時代末葉前後頃と予想することができる。

c段階の石敷は、第1トレンチの東壁で部分的にみうけられたものであってその年代の決め手を欠くが、この石敷上面から和同開珍の出土があり、注目された。

d段階は、溝(ＳＤ－１)の年代比定によるが、溝自体の肩口・四周が再三再四削平される可能性のあることからみて(第1トレンチの溝(ＳＤ－１)は明らかに上部の削平を受けている)、石敷との直接的関係は考え難いものであった。

また、第1トレンチにかかる溝(ＳＤ－１)では、縄文式土器や古式土器師の出土をみるが、このことをもって単純にこの時期に開掘されたものと考えることは出来ない。ただ、溝の最下層の第Ⅳ層出土遺物をみてみると、いずれも古式土師器とそれ以前のものばかりであって、新しいものの混入がないことが注意された(四周に一杯あるにもかかわらず)。このことからみれば、湧水地点が、早い時点で、恐らく古墳時代前期頃に一度開掘された可能性が残されたといえよう。

また、この個所のII層では二点の良好な白鳳時代に溯る土師器をみるが、より新しいものと混在している。しかし、この暗文をもつ土師器碗が、他地域から搬入された良質なものだけにこの溝の年代を暗示しているかもしれない。

なお、他に良好な遺物として、第2トレンチのＩ層から出土した一括遺物がある。

平安時代中期の土師器であるが、これもまた良質な胎土をもつ土器群として出土している。しかし、溝の底までは、II、III層と約50cmの堆積があって、この一括遺物を溝の下限とするならば、溝の開掘年代はさらに溯らせてよいことになる。

c段階を平安時代中葉以前、場合によっては和銅開珍を下限(この場合は奈良時代に想定出来る)としてよいかもしれない。

ところが、さらに、第3トレンチの北壁では、白鳳時代の軒丸瓦や平瓦が溝(ＳＤ－２)に対応する個所で検出されており、このことも溝の下限を推定する重要な目安といえよう。

d段階－古墳時代前期、c段階－白鳳時代－平安時代、b段階－室町・戦国時代、a段階－昭和50年代、o段階－浚渫後、という諸段階を経たといえる。

これら諸段階、諸画期のなかで、問題は、何時からこの池の形成がはじまるのか、その痕跡はどこに見い出せるのかである。何をもって池の形成とするのかが重要な点になると思われる。

特に、溝の内、外において、有機質土層、スクモ層、腐植土層と呼ばれるものや、ヘドロ状の泥土の堆積は、流れの停滞・池底化を予想させるが、それも溜池化のなかの水位低下を思わせるものもある。

なお、池底部で、あわせて溝底となる各部位は、第2トレンチで標高約 117.7m、第8－2トレンチで同約 117.6m、第3トレンチで同約 117.5mを測っており、約 100m間で約20cmの勾配をもっていることになる。

そして、第2トレンチでは溝内上層(Ｉ層)は、黒褐色有機質土層で、その下のII層は有機混りの砂礫層である。すなわち、このトレンチのＩ層は、平安時代中葉の良好な土師器を出した

土層であるが、その有機質土の堆積は、その水位の上昇、下降を伴う池底部がすでに形成されていたことを想わせるし、下層の砂礫層に有機質が混ることはこの層が池底部にあったことを物語っているといえる。

同様なことは、第3トレンチについても指摘できる。そのⅠ層は、黒褐色有機質土層で、厚みが1mも認められ、しかもその下層には白鳳期の軒丸瓦が包含されていた。この瓦の堆積時期からこの流路の滞水が開始されており、池としての機能がそなわっていった一証拠といえよう。

4．吉住池成立年代考証

第1次調査では、溝（SD－2）が飛鳥時代まで溯り、その後、溝底に腐植土が堆積を示し、吉住池の池としての貯水が始まった可能性をみた。では、この溝（SD－2）の年代は、何時におけばよいのであろうか。溝（SD－2）の溝内出土須恵器群を概観すると、杯蓋の口径が10～11cmと小さく、蓋部はヘラ削りが残されている。杯身も口径は9～12cmと小さいが、やはり底部にヘラ削りが残存している。蓋を固定するかえりの立上りもきわめて小さいが、受け部より上方へ3～6mm突出している。

これらの様相は、遅くとも7世紀の第1四半期におくことができる。他方、同伴の土師器碗は、これまた口径が14～16cmと大きく、器高も 4.3～ 5.5cmと深く、器壁も重厚である。内面に暗文を巡し、外面はケズリや指圧痕をとどめるものもある。須恵器、土師器ともに年代に矛盾なく、この頃、 600年代の前葉頃（推古女帝、聖徳太子の頃）にこの湧水地帯が田養水として改めて注目された一大画期のあったことを推測させるといえる。

他方、第2、3次調査分については、溝（SD－1）から検出された軒丸瓦が、この地区の貯水化現象を示す年代比定の一論拠になりうるといえる。この種軒丸瓦と対になる平瓦は、格子目の叩きがつき、その実年代については、奈良時代におく研究者もあるが、近江の格子目叩きをもつ瓦（平安時代のものを除いて）の多くが 710年・平城京遷都前に焼成されたものとの推定に立っている。その根拠は、平瓦に格子目叩きと縄目叩きを併用した時期が、近江では（大和ではまた様相が異なるが）、いまだ杯蓋の内面のかえりをわずかに残す時期に相当することである。

このことから格子叩き目から縄目叩きへの完全な交替は、杯蓋の内面かえりが消失した頃で、ひかえめにみても 700 年頃前後と推定される（実際はもう少し古く考えてはいるが）。

このような推定がある程度許されるならば、軒丸瓦を伴った溝（SD－1）は710年以前に掘削されたものであり、この溝が引続いて貯水化現象を示すことから、やはりここでもこの池の池としての貯水化は白鳳期にあったのではないかと推定される。

5．吉住池の造営

8世紀前後には、箕作山の東麓に滞水地帯の形成をみたが、その造営はいとも簡単なもので

あったに違いない。

なぜなら、先に触れたように、池の底は、その北辺で標高 117.5m を測り、中世のそれでも 118.5m であった。ところが、当初述べた如く、この池は、扇状地の埋め残しとして、もともと低湿地であったことより、池の四周が池底よりも最初から高かったのである。

すなわち、池の四周や1辺に大規模な堤防を築くまでもなく、扇状地状の湾みが、池辺の岸を自然に形成していたといえる。ちなみに、先に述べた池底高と北側の高みとを比較してみると、大塚井や大井の外側平地の標高がおよそ 120m 前後あって、その比高差 2.5m を数えることになる。

池の形成は、北山・後光の丘陵先端を流下する久野部井を堰止めて、東から迫る扇状地との間の窪みに提防を築くことのみで充分であったといえる。その堤防も十数mもあれば当初は充分な機能を持たし得たものと思われる。

このような恵まれた自然的地形をもちえたゆえに、この吉住池が早くに、容易に形成されたとみてよかろう。

しかし、この吉住池形成の当初より大井、大塚井が存在したか否かは、今回の調査では検討出来なかった（池底に両井の痕跡がみうけられなかったことと、井そのものが県道下にあるのみか、現在も使用されているものであって、その底を掘削することは不可能である）。また、現在の両井の底部高は溝（ＳＤ－１）の底部よりはるかに高かった。

造池において、築提とともに最も重要な作業は余水・洪水吐口と取水施設の構造である。

ここ吉住池では、現状から鳥居型引抜式の取水施設や、堤防の高低差から（低いところから）洪水を流し出す・吐口は見い出せなかった。恐らく吐口は、現在の伊野部井とみてよかろう。

現況の伊野部井の構造は、堤防を堤頂部から池底まで幅およそ 1.50 mにおいて隔隙を設け、この個所を取水口兼吐口としていることである。他方、大井と大塚井についても、ともに単なる吐口の形状となって取水口の用途も兼ねていた。

6．取水施設再考

一般に池にみられる取水施設は、池底下に設けられ、樋管で堤外に導水されている。この取水方法は、造池史上の画期とされ、この技術開発こそ池を池たらしめたものとして高い評価が加えられている。すなわち、吐水口からのあふれる余水は、いざ養田水としての利用に供する時には用いることが不可能で、しかも、貯水された水を池底部まで利用し尽すには、この鳥居型引抜式取水施設が最大のものとされてきたのである。

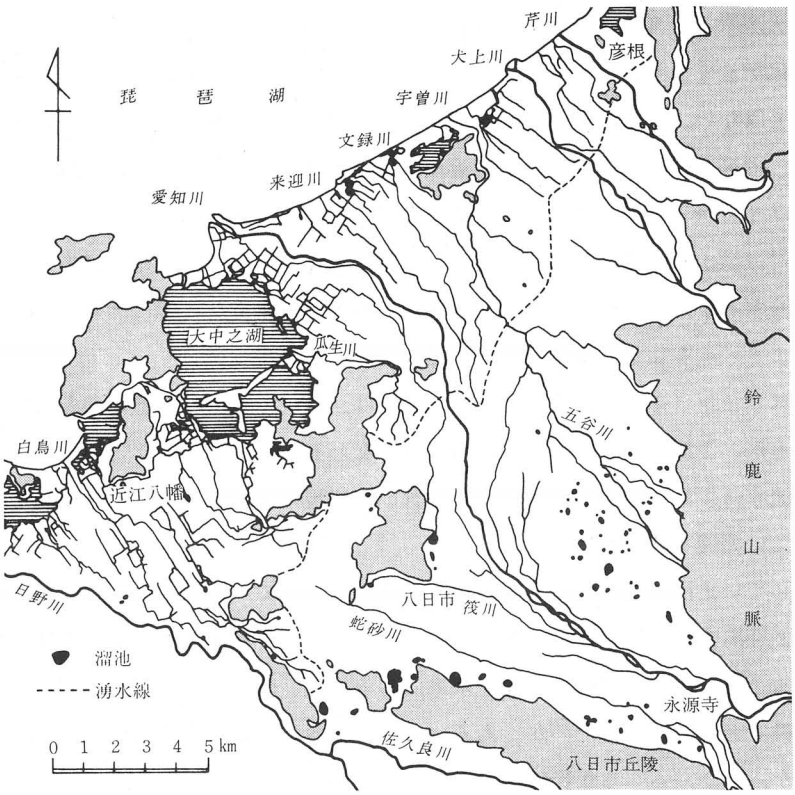
しかし、いま、この単純な伊野部井の構造をみる時、池底から堤外に樋管を設ける必要もないこの構造こそ、より原始的ではなかったかと考えられる。

すなわち、堤の切れ目に土嚢を何枚も重ね、その余水は土嚢の最上段からオバーフローしており、養水として使用するときはこの土嚢を一つ一つはずすことによって池水は池底部まで流

れでることになる。しかもこの場合には流れ出る養水は、上層の暖いものから流れでることになり、鳥居型引抜式の場合よりより田養水としてふさわしかったと思われる。特に吉住池では、冷たい湧水がその水源であるため、水温を高めるための遊水池としても大きな役割を果したはずである。

ただ、このような吉住池の構造がより原始的であるからといって、古代まで溯ってこのような構造であったことが明らかにされたわけではない。おそらく、鳥居型引抜式と「水閘」型式（吉住池の場合）は早くから共存し、池の立地や規模、築造技術者等によって各構造に差異が生じていたと思われる。特に「水閘」型式の場合には堤が大きくなればなるほどオーバフローする水の落差は大きくなり、堤の基部に与える被害は大きいものが予測されたであろうし、また、この「水閘」部への水圧が大きく感じられ、現にこの部分の堤が他に比してき弱にならざるを得なかったであろう。水圧を大きく受ける堤において、鳥居型引抜式取水口の出現は大きな機能を果たしたわけである。

なお、吉住池の最近については、地元史家大谷巌氏によると、石枠で設けた「水閘」部分の前には俵で作った土嚢を積み重ね貯水したとのことで、下流へ水を流す時にはこの土嚢をはずしていったという。また、オーバフローした水が落下する部分には「なめり石」が据えてあり、



挿図13　湖東平野の水系図(『八日市市史巻１』に依る)

地盤がえぐれないように配慮されている。なおまた、「水閘」部石枠の上部横石は、水準線をも示しており、土嚢をこれ以上上に重ねると瓦屋寺や日吉側（上流）の田地が冠水しはじめるので、横石の上から水が余水として流れ落ちていたとのことである。

鳥居型引抜式取水口が後世、水閘式に変更されるとは考えにくいことから（逆はあっても）吉住池は古代からこの型式で取水、余水の取扱いをしていたものと予想できないであろうか。

7．吉住池水系の概観

吉住池の水系に関する最も興味ある事実は、その所在地が建部日吉町に属するにもかかわらず、下流の伊野部区長が管理者となっていることである。水が低きへ低きへとしか流れない以上、日吉町にとってこの池は無用の長物ともいえる。ただし、このような行政区分は比較的新しく、過去においては地域区分も異なっていたにちがいない。

なお、付言しておきたいことは、池の価値は、下流に流れる水以外にも存在することである。池は養魚場や漁場ともなるし、防災上の利用に供する場合もある。また、池内や堤防上の植生が池の所有者に何がしかの利益をもたらす場合もあるといえる。

吉住池の水系は、ごく大雑把にいえば、箕作山の東麓、五個荘町伊野部、木流を経て、和田山の西側、繖山との境を抜けて、能登川町に至っている。この間琵琶湖に注ぐまでおよそ12kmは田養水や伏流水となりながら流下している。

しかし、銘記しておかなければならないことは、愛知川左岸の全域を吉住池の水流がすべて潤したわけではない。１つは愛知川から引水された用水が、愛知川左岸沿いの田養水となっている。また、標高 105ｍラインは、この愛知川扇状地のつくる伏流水の湧水線として知られており、このラインから下流では伏流水を集めた用水の起点が各所に水源池として存在している。

五個荘町では繖山の懐である宮荘、金堂、七里の集落付近がそのラインにあたっている。しかし、この湧水もまた、吉住池の流水・伏流水と無縁ではなく、この 105ｍラインからはじまる小河川はまさしく吉住池と不可分のものであったといえよう。

標高 105ｍラインに起点をもつ五個荘町の流水は、やがて繖山の山麓裾部を迂回し、能登川町伊庭に至るが、下流においては吉住池の水流と交わることはなかったといえる。

吉住池の流水は、能登川町内に至ってもなお、吉住池に源を発した貴重な田養水として認識されつづけたに相違ない。

古代に関していえば、本文中でも瓦の項で若干触れられているように、吉住池下流の白鳳寺院址中、五個荘町金堂、能登川町法堂寺の両者において、吉住池出土と同一文様の軒丸瓦の出土をみていることである。遠隔でも同一水系にある以上、同一の水源を共有するという強い意識が、寺院建立者に働いていたのか、あるいは、吉住池の小堂建立の契機も下流の支配者層と無縁ではなかったとみるべきか興味がもたれるところである。

特にこの箕作山東麓の瓦屋寺町には白鳳時代の瓦窯址が数基存在するにもかかわらず、この

瓦屋寺瓦窯で焼成した瓦を用いることなく、吉住池の一角（北端）に小堂を建立していることに注目されるのである（瓦屋寺瓦窯では、将来ともこの吉住池出土と同一文様の軒丸瓦が出土しないとは断言しがたいが、すでに出土した平瓦や丸瓦においても瓦屋寺瓦窯のそれとは若干異質なようにも思われる）。

8．むすびにかえて

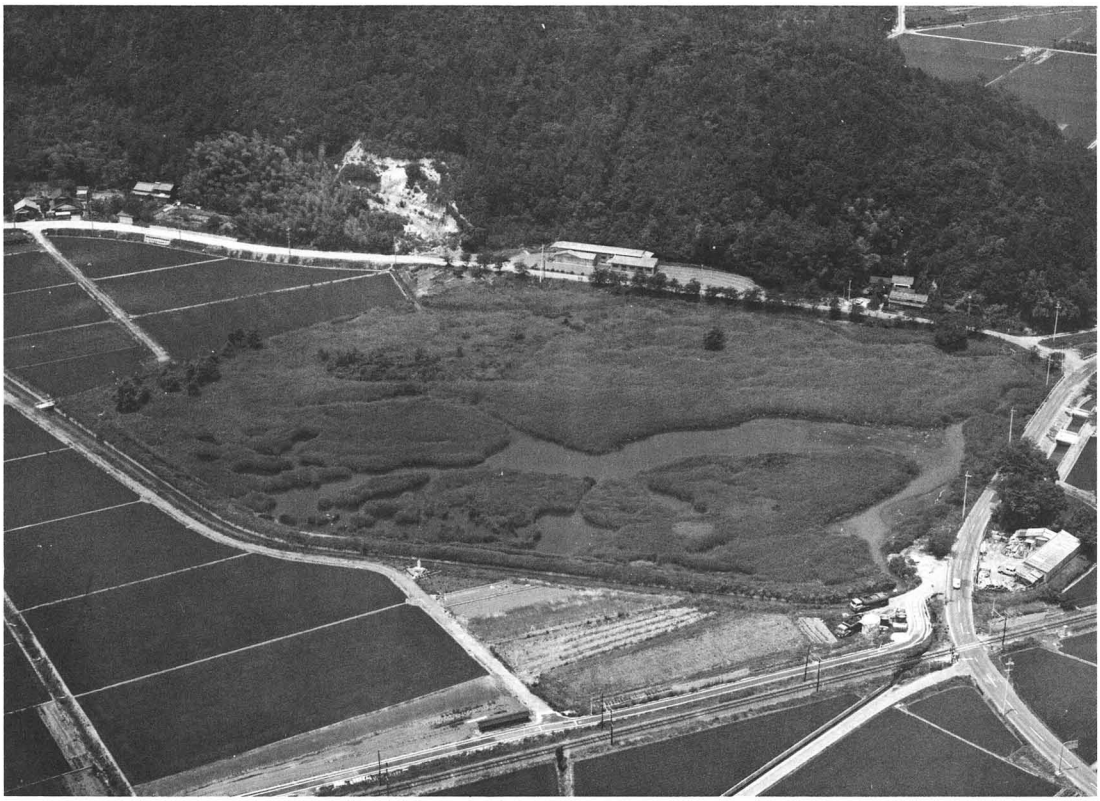
吉住池の調査は、一部を除いてほぼ池床の全域を観察することができたが、伊野部井に近い、池床の北端寄りで、多量とはいえないまでもコンテナ3箱分に相当する瓦片が検出された。この出土状況からみるかぎり、この池の一角か隣接地に小堂が建立されていた可能性は大きい。池と寺院との関連は新しい今後の課題といえる。また、このような造池がどのような人々の力によって果されたのか、それによって生れた田地はどのように扱われたのか究明しなければならない問題は多いが、すでに紙数も尽きた。

池の改修やその消滅は今日至るところでみうけられるが、その調査例は本当に少ない。池に対する理解が低いことに起因しているといえる。しかし、本例が示すように、大小を問わず池や沼を水系のなかで記録化する必要性は今をおいて再び行うことは不可能といえよう。

（丸山竜平）

図　　版

吉住池全景（東から）



吉住池全景（南東から）

吉住池第２・３次調査前（北から）

吉住池第２・３次調査前 上方は第１次調査区の工事完了後 （東から）

吉住池第１次調査後近景（南から）

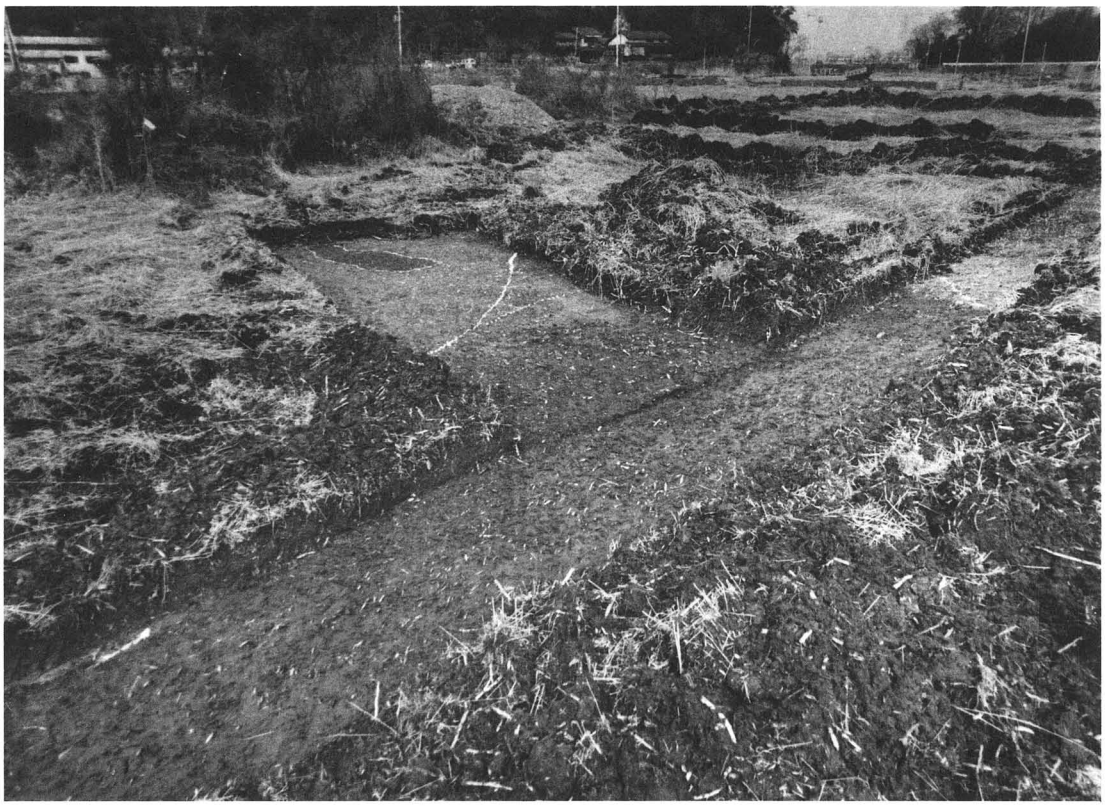
吉住池第１次調査後近景（北から）

吉住池全景（南から）

吉住池全景（西から）

第1トレンチ水路2南部分（南から）

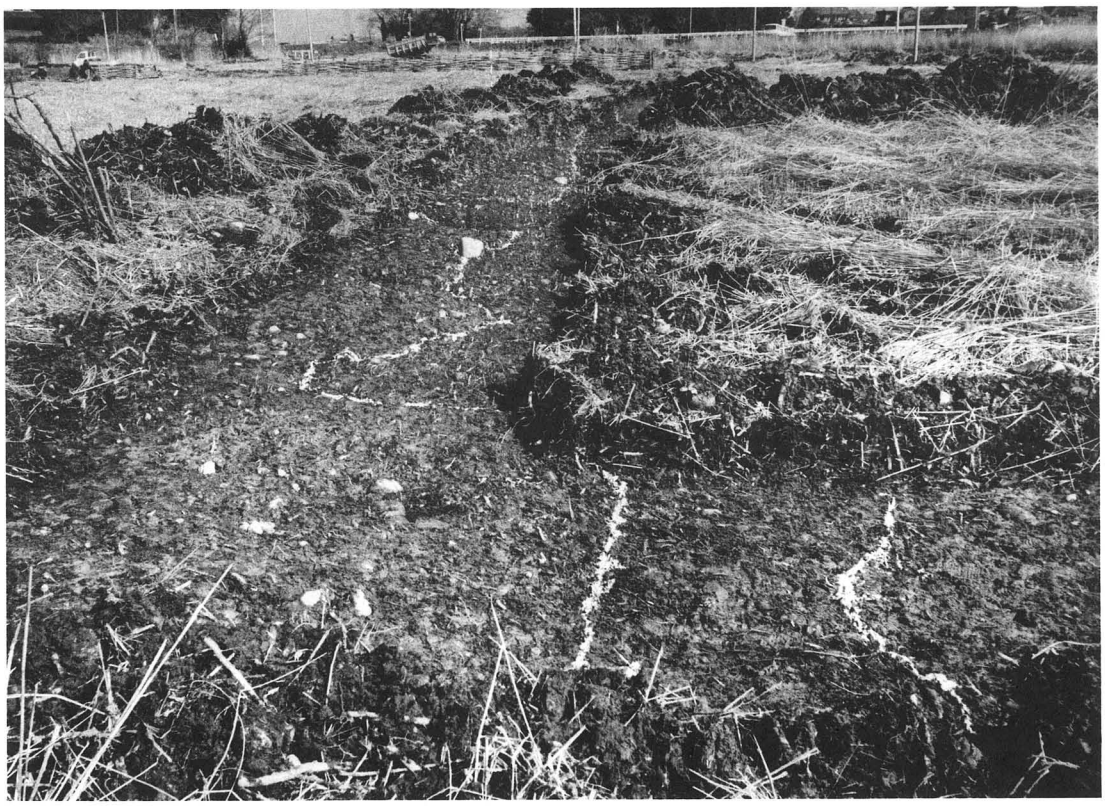
第1トレンチ水路2南部分（北から）



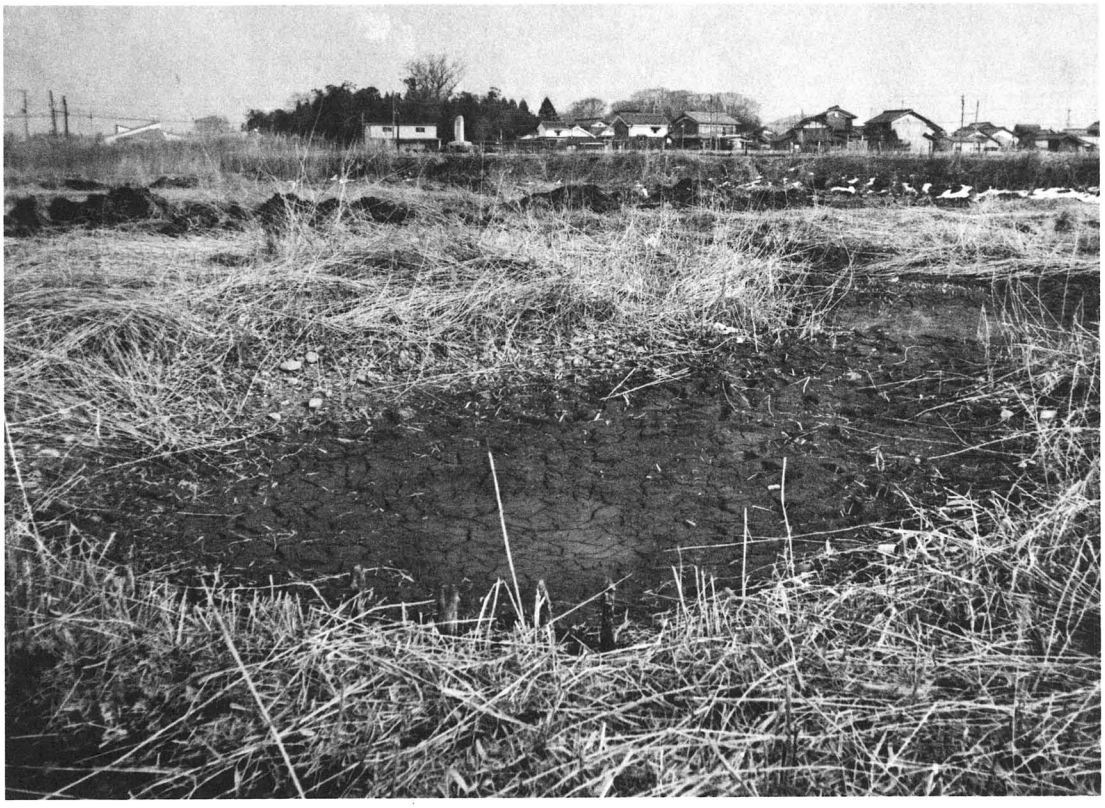
第７トレンチ水路２（南から）

第７トレンチ水路２（南から）

第８トレンチ（北から）



第８トレンチ（南から）



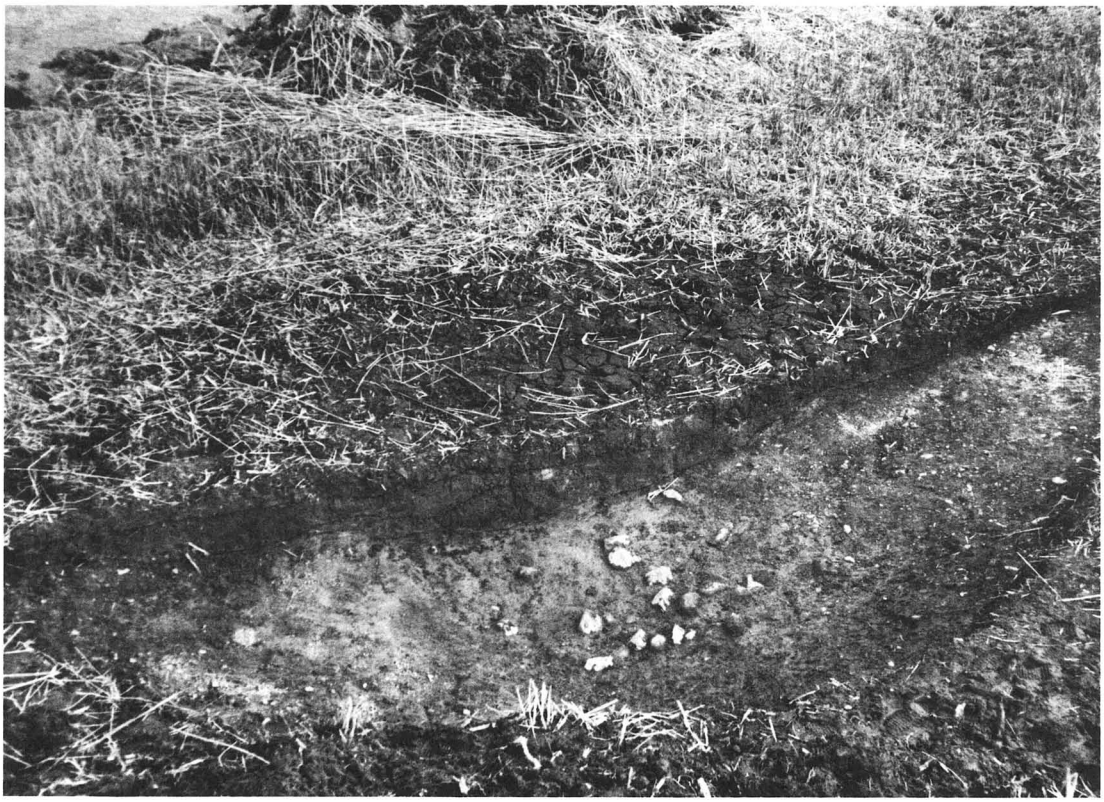
湧水土坑II（西から）

湧水土坑II（西から）

湧水土坑II（北から）

湧水土坑II（東から）

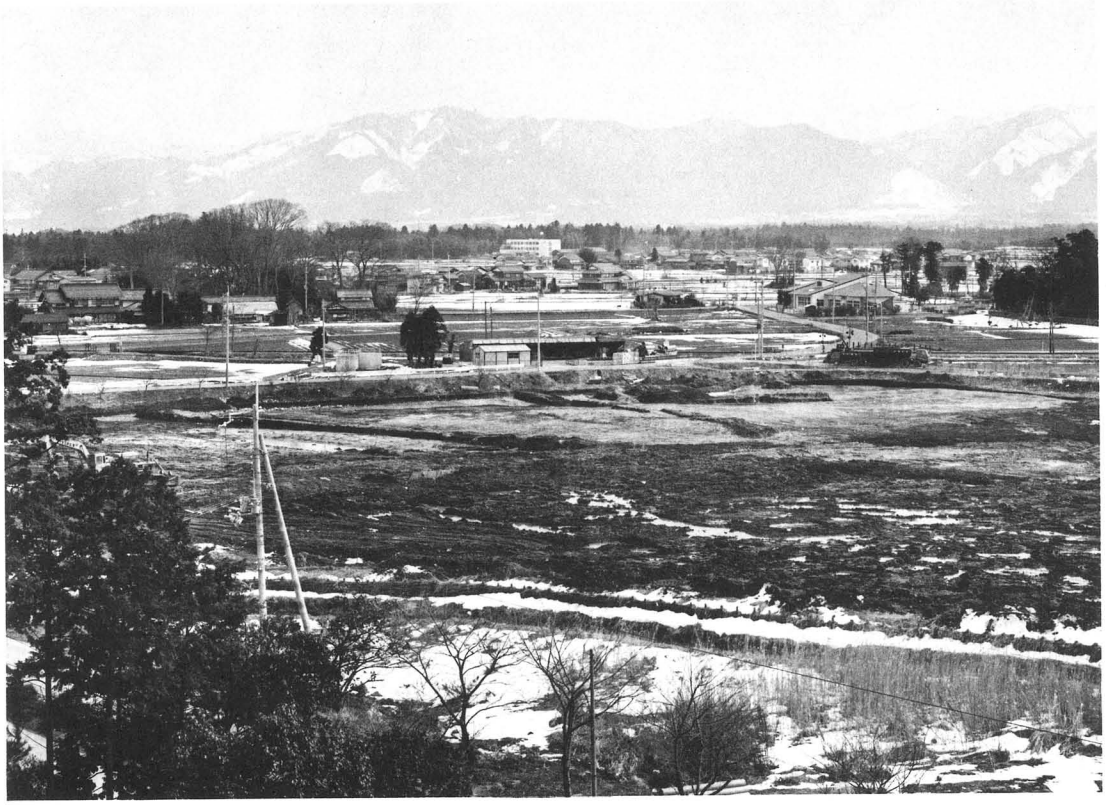
湧水土坑Ⅰ（西から）



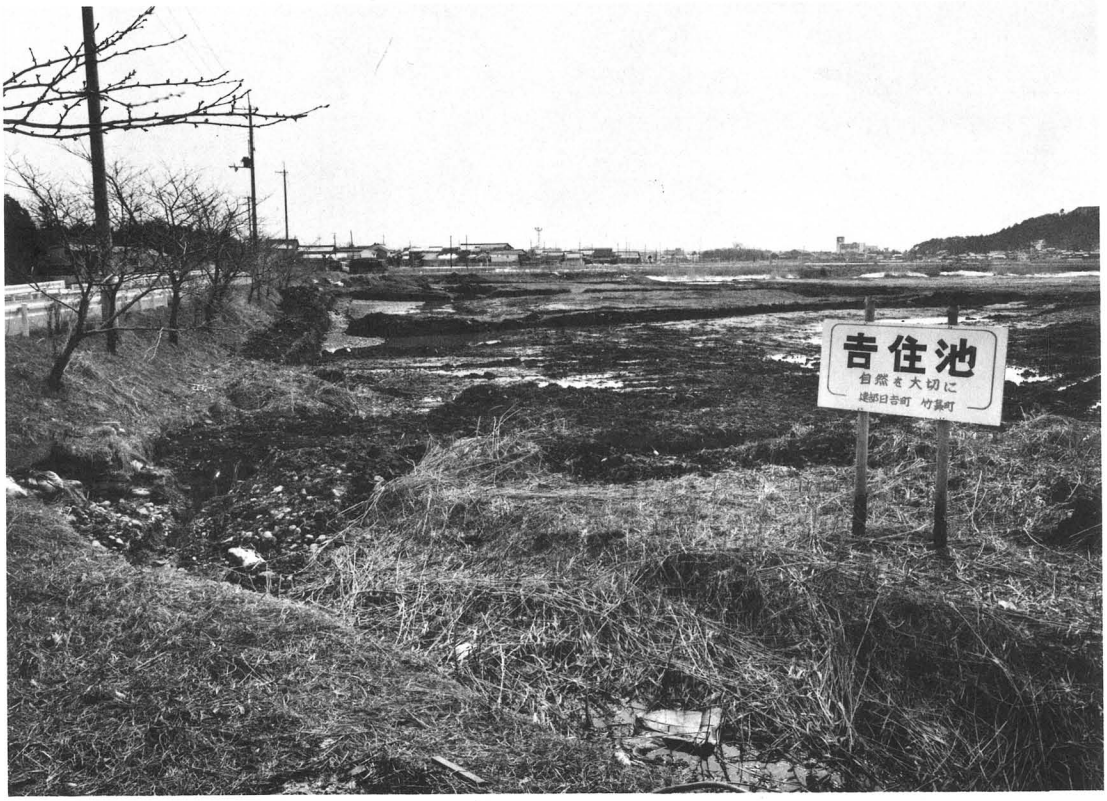
湧水土坑Ⅰ（南から）

第４トレンチ池床起伏状況（南から）

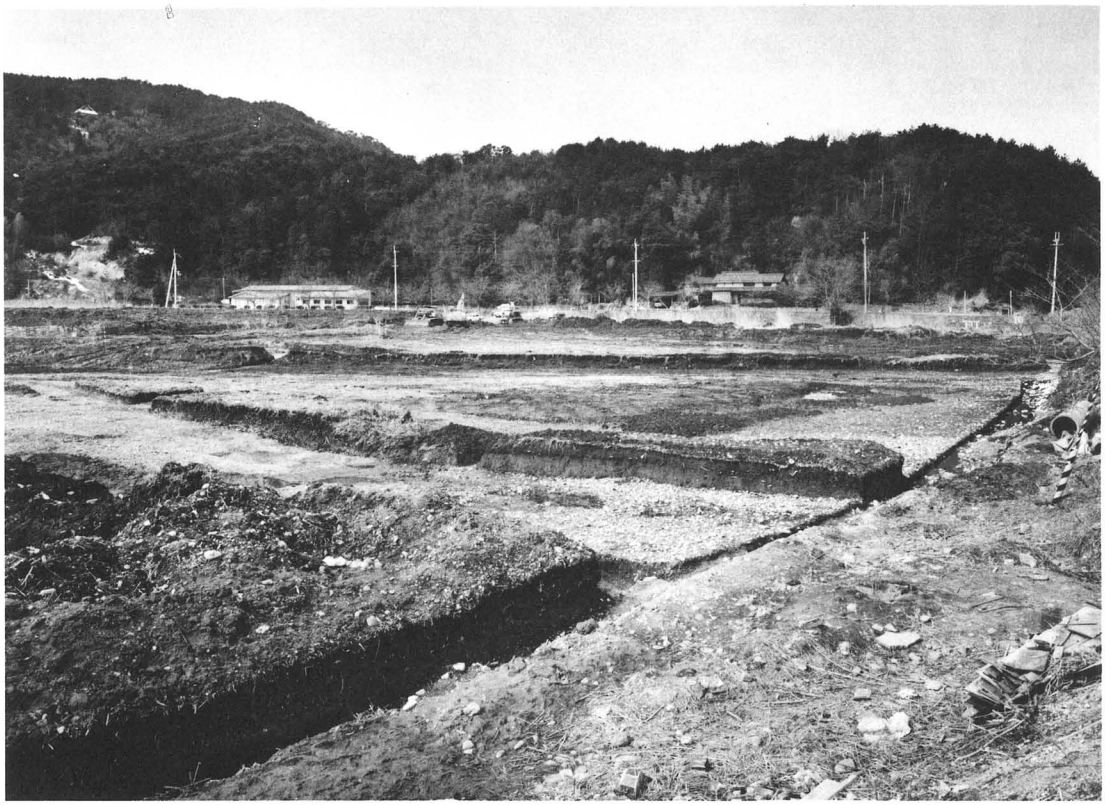
水路２遺物出土状況（南から）



完掘後全景（西から）



完掘後近景（北から）



完掘後近景（南から）

完掘後近景（南東から）

敷石遺構全景（南から）

敷石遺構近景（南から）

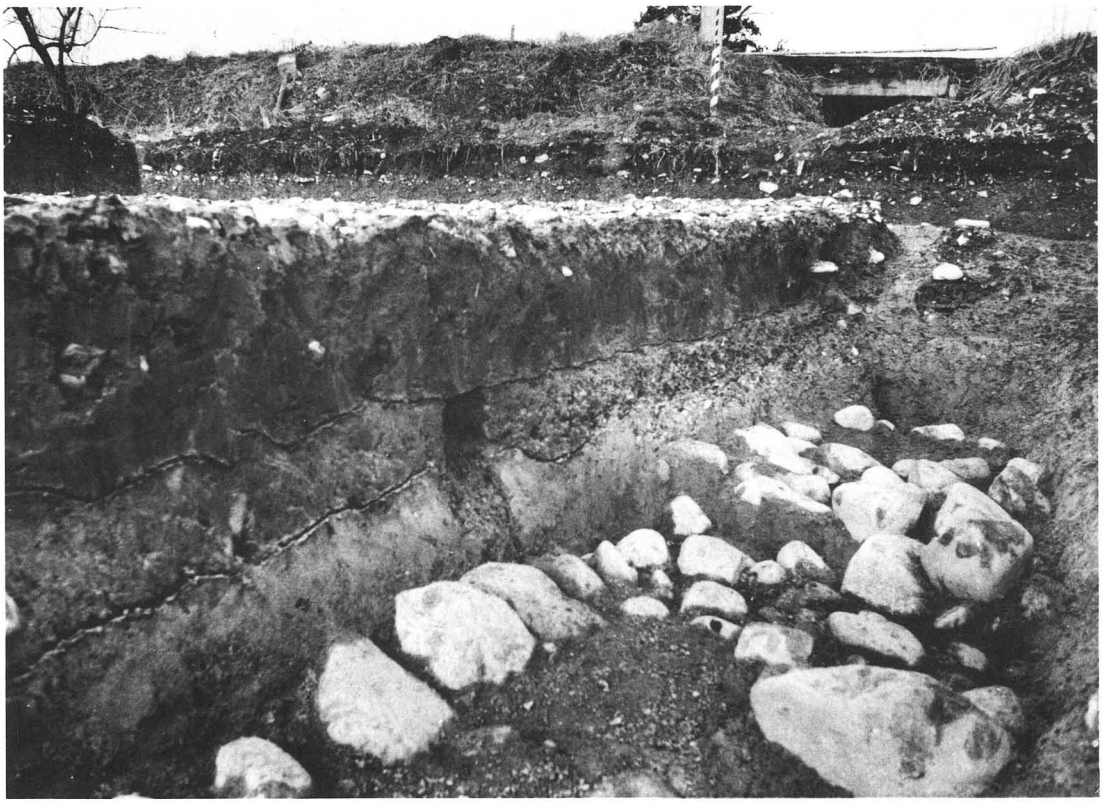
敷石遺構近景（北から）

敷石遺構近景（南から）

第１トレンチＳＤ－1（南から）

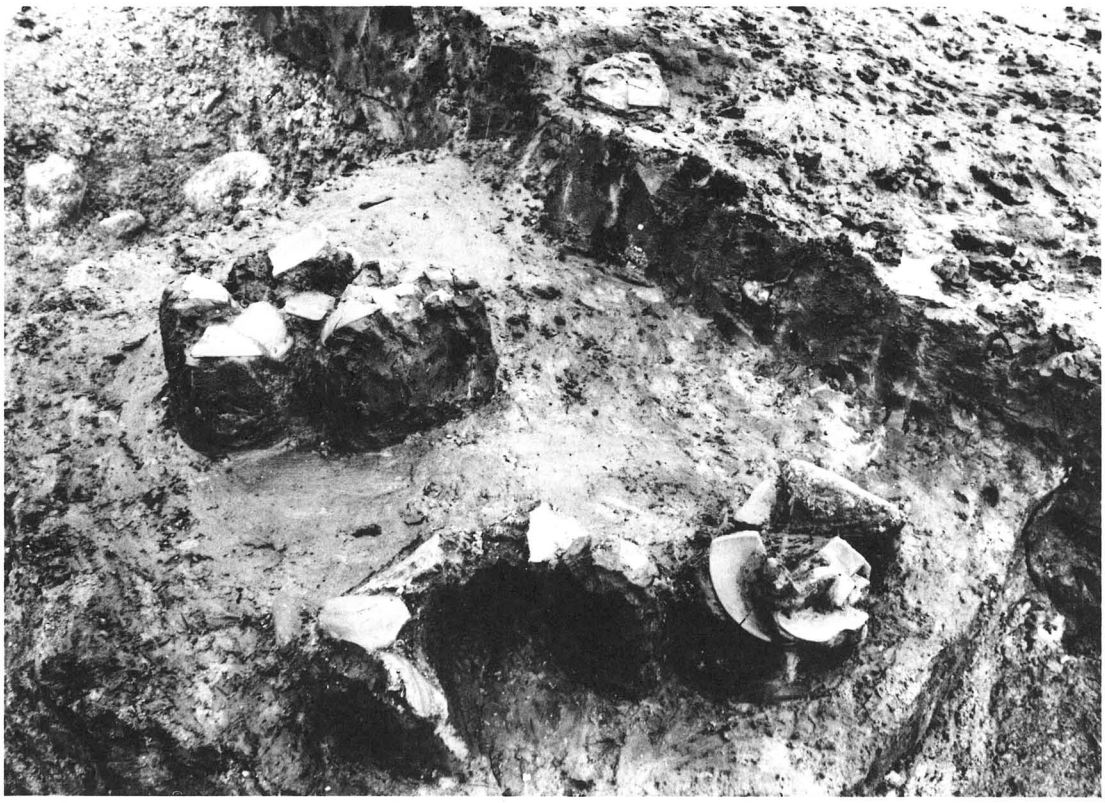
第１トレンチＳＤ－1（北から）

第２トレンチＳＤ－1（南東から）



第２トレンチＳＤ－1（南西から）

第２トレンチＳＤ－１遺物出土状況（南から）

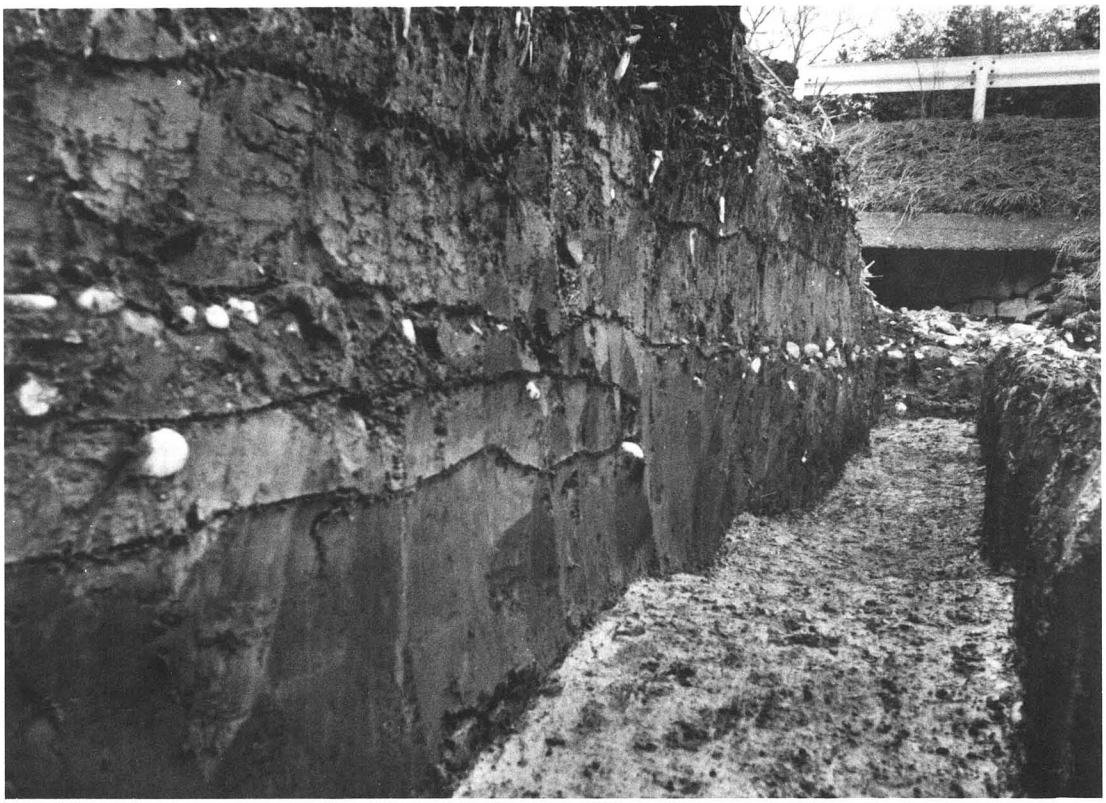


第２トレンチＳＤ－１遺物出土状況（南東から）

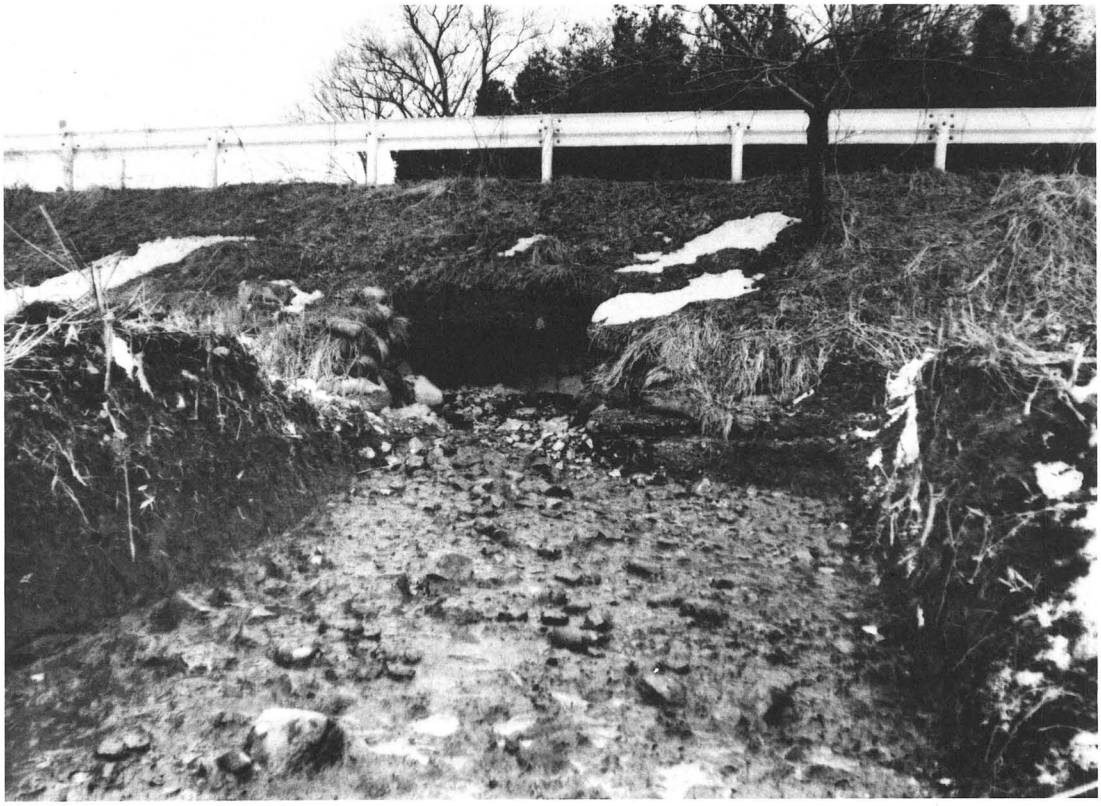
第３トレンチ（東から）

第３トレンチ（西から）

第３トレンチ（東から）



第３トレンチ大井（西から）



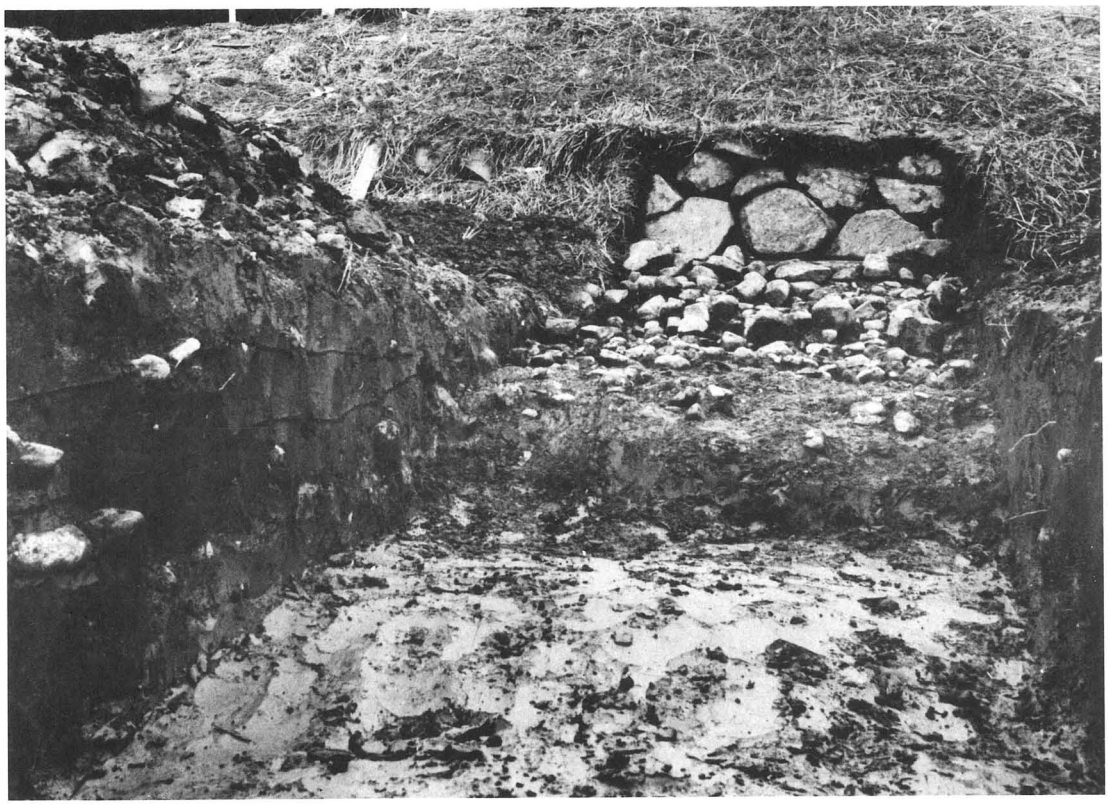
第３トレンチ大井（西から）

第３トレンチ軒丸瓦出土状況（南東から）

第４トレンチ石垣（南から）

第４トレンチ石垣、敷石遺構（北から）

第４トレンチ石垣（南西から）



第４トレンチ石垣断面状況（南東から）

第５トレンチ弁天塚（東から）

第５トレンチ弁天塚（西から）

第５－１トレンチ（東から）

第５－１トレンチ（西から）

第５－１トレンチ（東から）

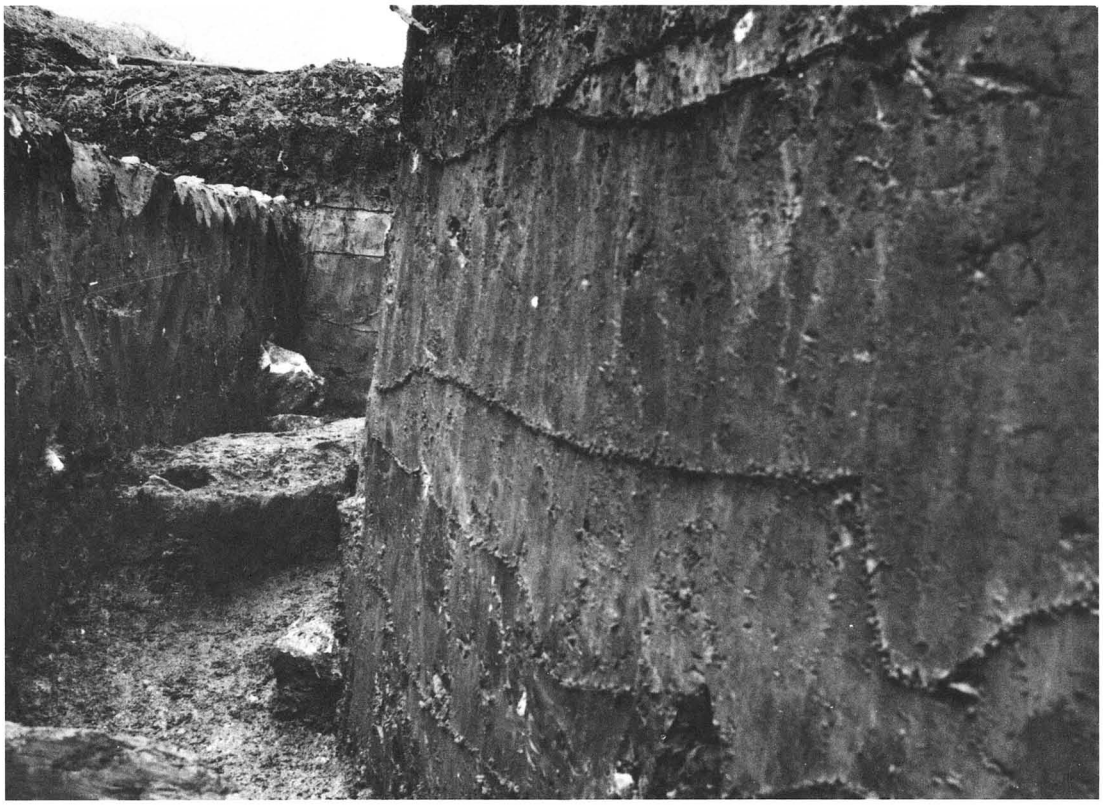
第５－１トレンチ（西から）

第５－１トレンチ断面状況（西から）

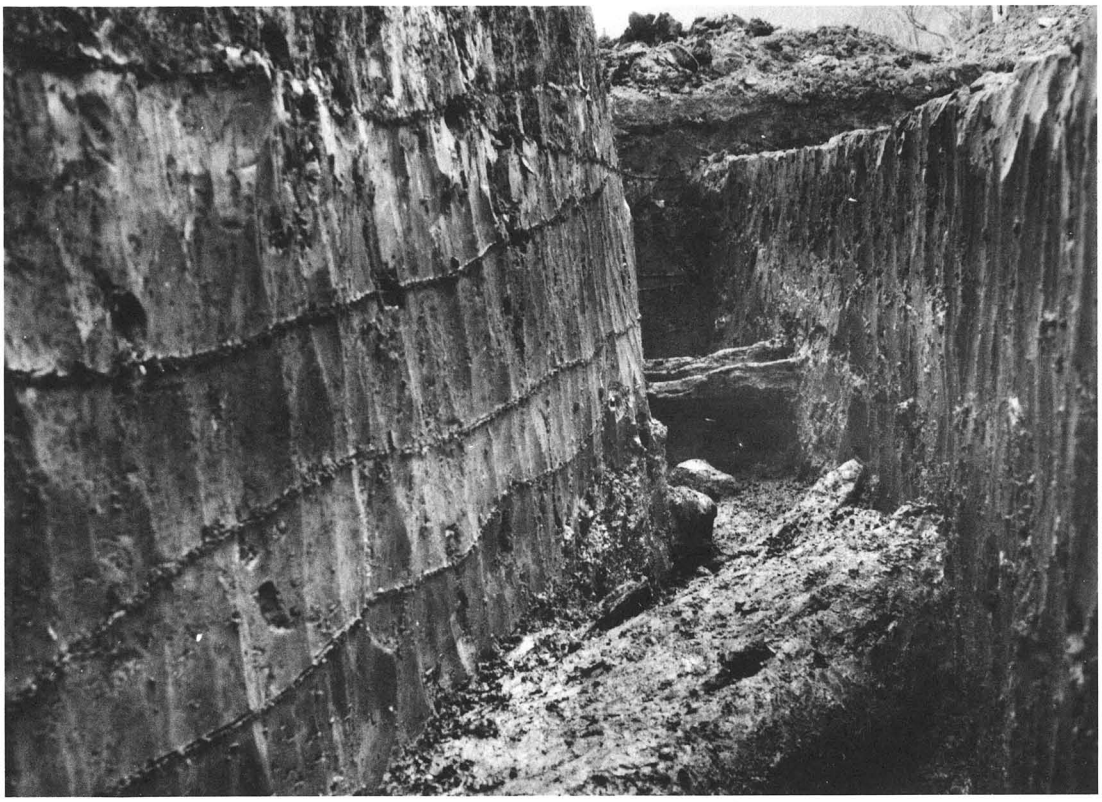
第５－１トレンチ断面状況・弁天塚（北から）

第５－２トレンチ（西から）

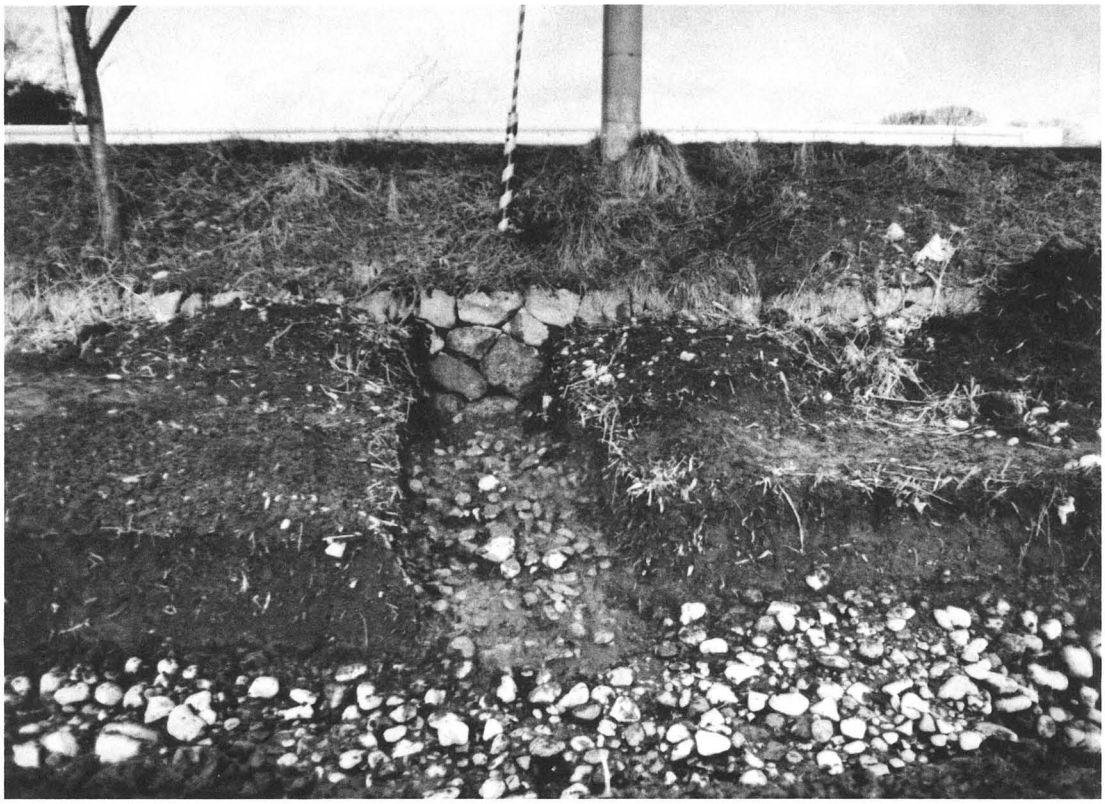
第５－２トレンチ（東から）



第５－２トレンチ断面状況（西から）



第５－２トレンチ断面状況（東から）



第６トレンチ石垣、敷石遺構（西から）

第６トレンチ敷石遺構（東から）

第７トレンチＳＤ－2（西から）

第７トレンチＳＤ－2（南から）

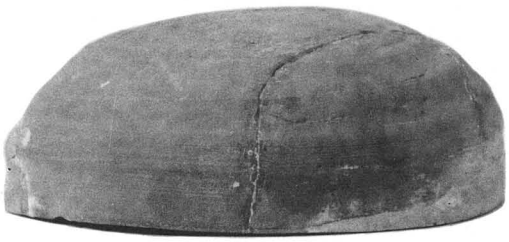
第７トレンチＳＤ－2（北西から）

第７トレンチＳＤ－2（南西から）

第８トレンチ（北から）

第８トレンチ（南から）

S 18


S 27

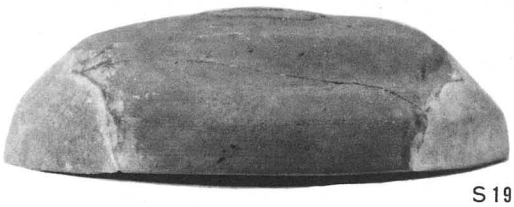
S 5

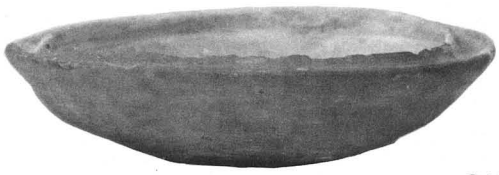
S 11

S 24

S 22

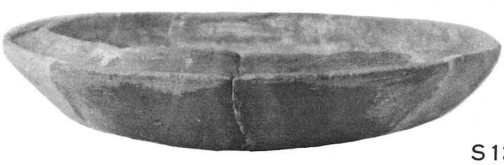
S 4


S 19


S 12

S 9

S 7

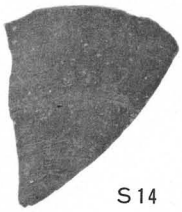

S 13

S 10

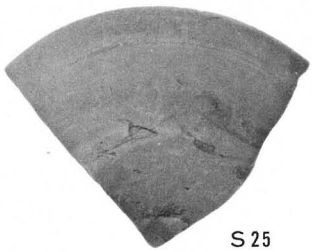
S 6

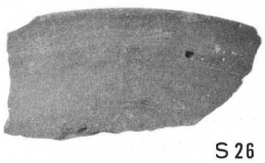
S 20

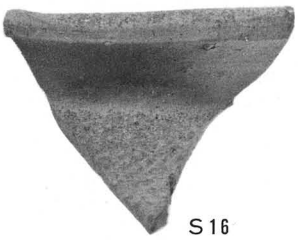
S 8

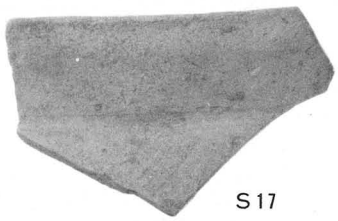

S 14

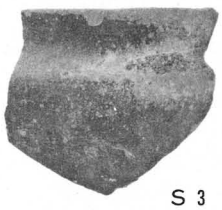
S 23

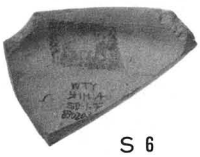

S 25


S 26


S 16


S 17


S 3


S 6

S 20

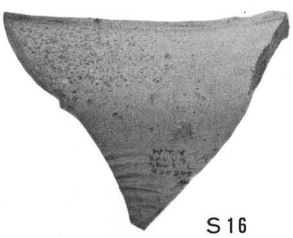
S 8

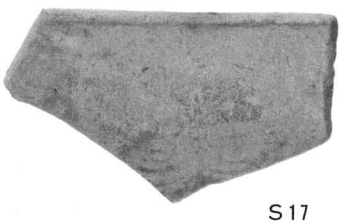
S 14

S 23

S 25

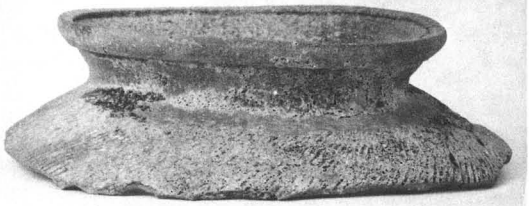
S 26


S 16


S 17

S 3

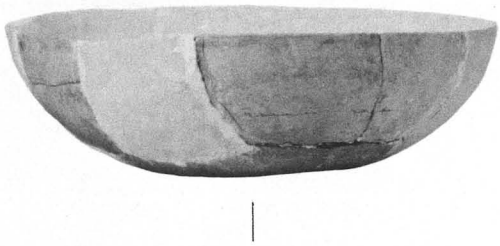
S21



S 2

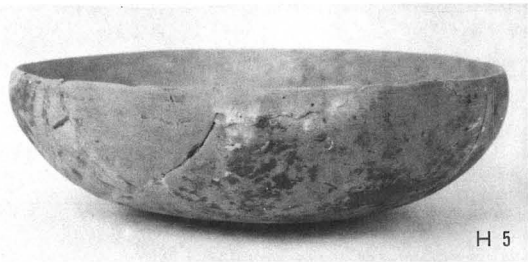
S15

S 1

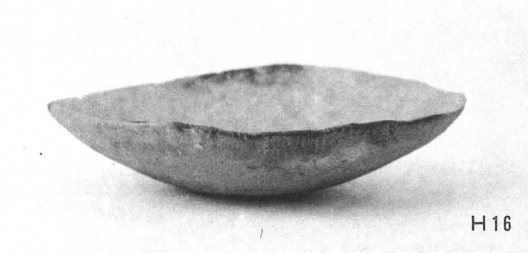


H 2

H 6

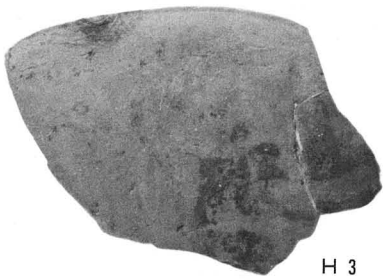


H 5



H16

H11


H 3

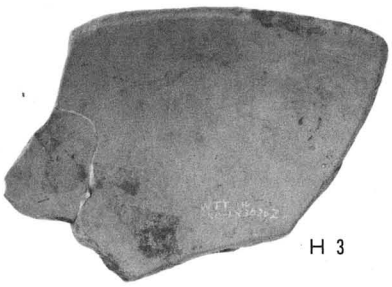
H 7

H10

H12

H 9

H11

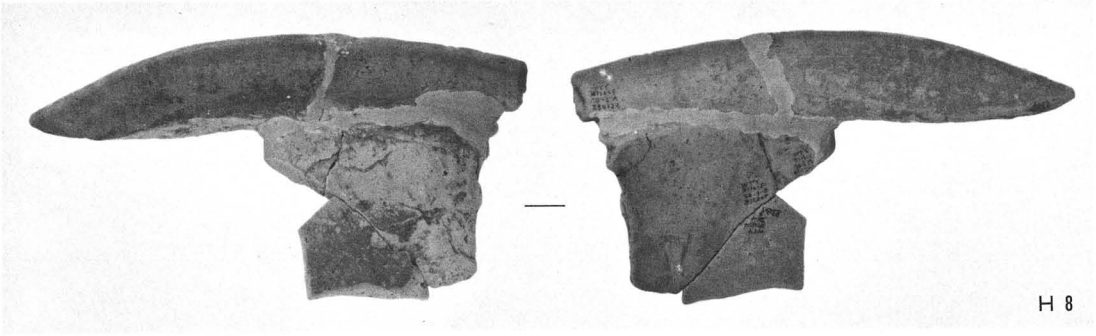

H 3

H 7

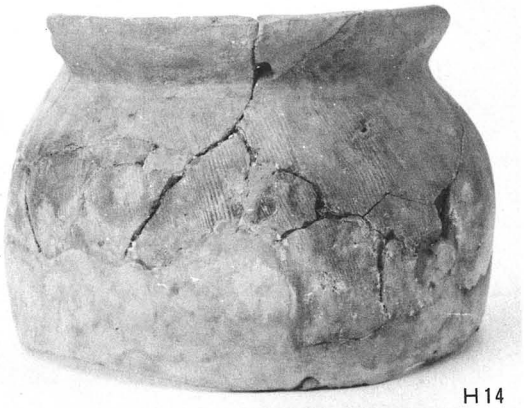
H10

H12

H 9



H 8



H14

H 1

H13

H15

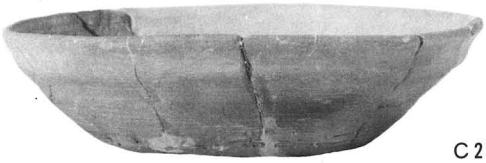
Z 1

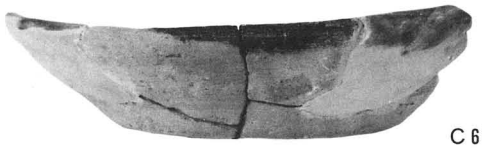
C45

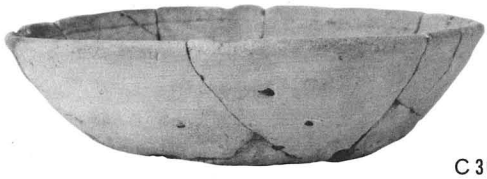
C2

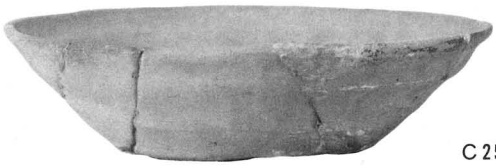
C39

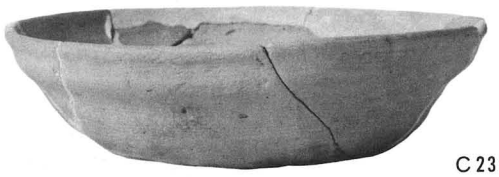
C37


C29

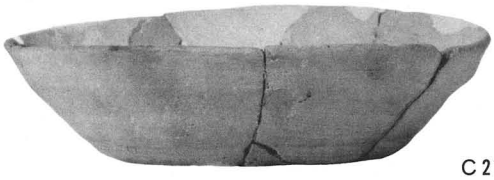

C65


C30

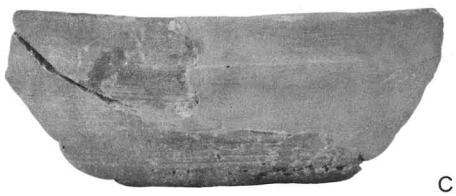

C25

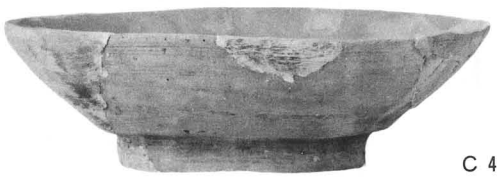

C23

C24


C27

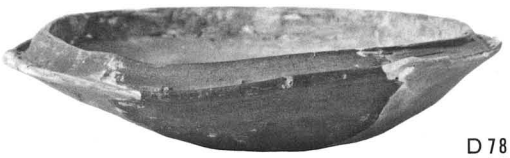
C31


C28


C4

C22

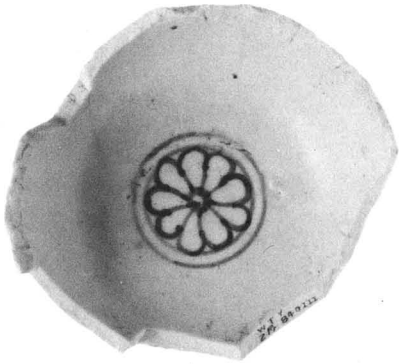
C13



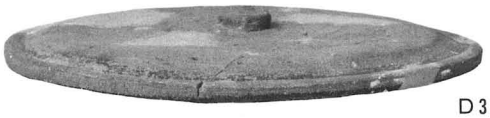
D78

D77

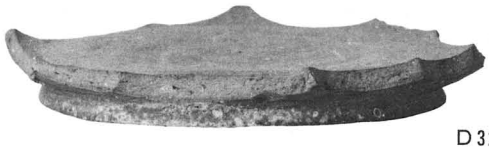
D11



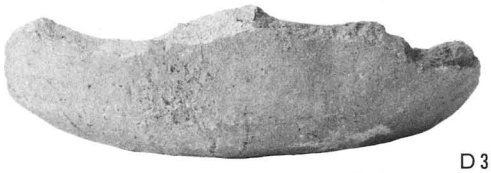
T1



D34

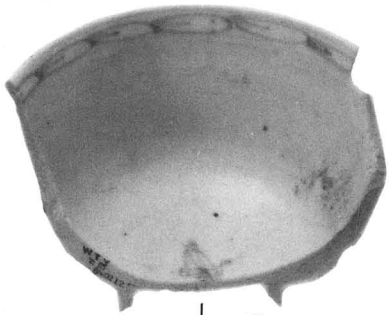


D32

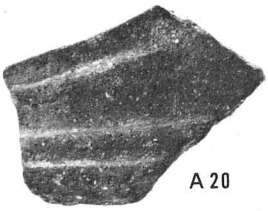


D33

F76



T4

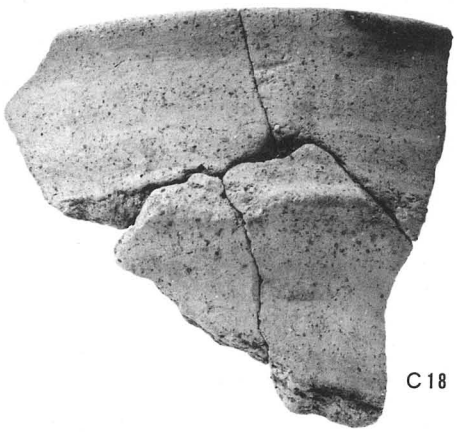

A 20

A 21

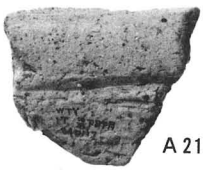
A 19

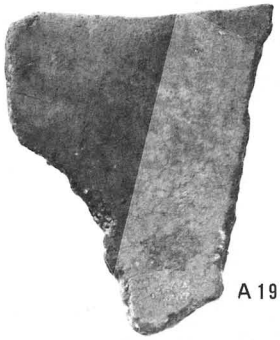
C 16

C 17


C 18

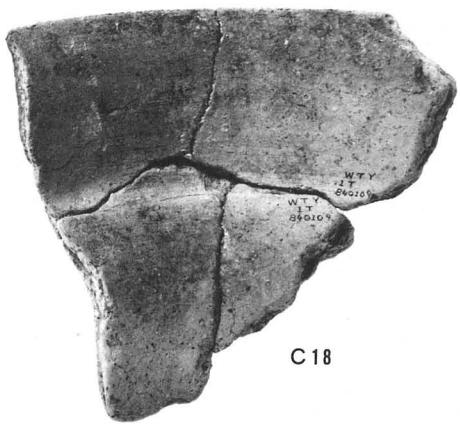
A 20

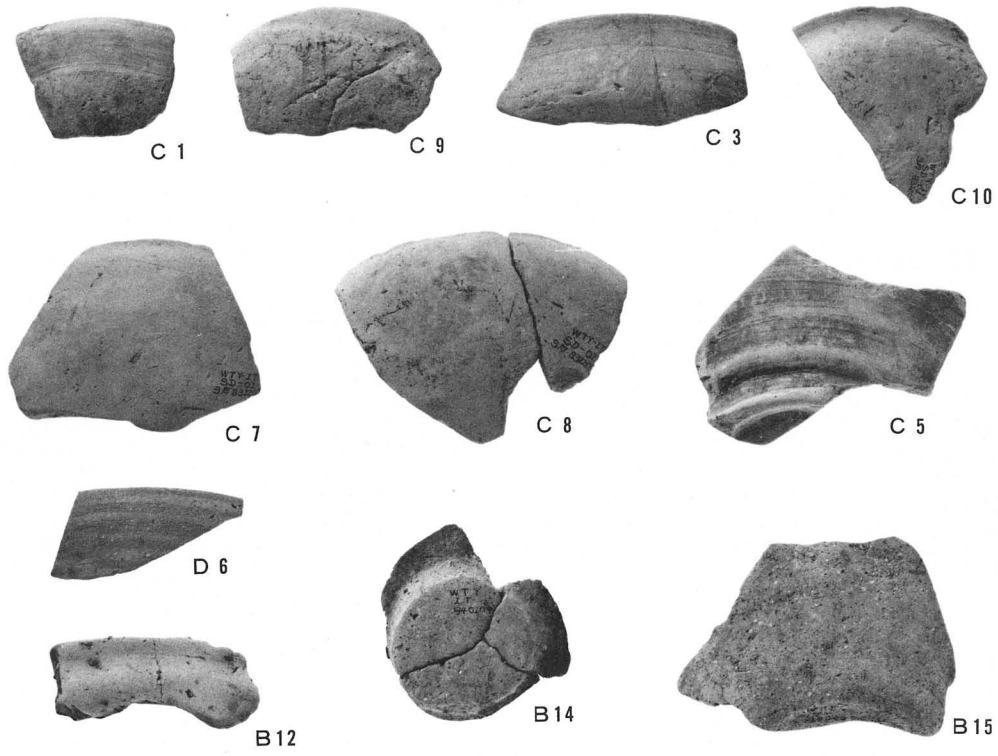

A 21

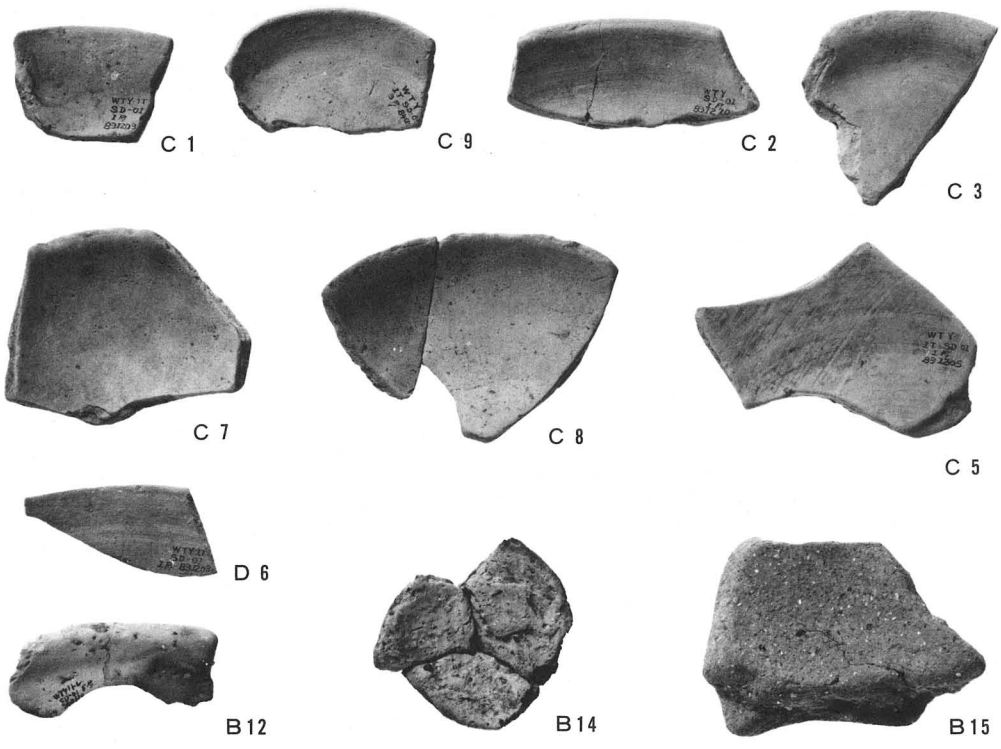

A 19

C 16

C 17

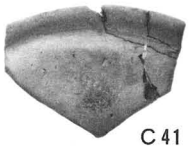

C 18


C 1
C 9
C 3
C10
C 7
C 8
C 5
D 6
B12
B14
B15


C 1
C 9
C 2
C 3
C 7
C 8
C 5
D 6
B12
B14
B15

C40

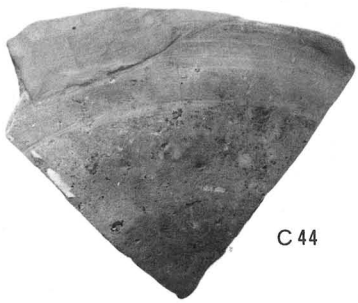
C43


C41

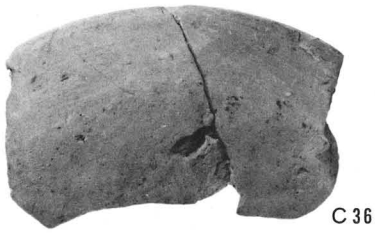
C38

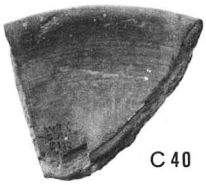
C42

C26


C44

C35

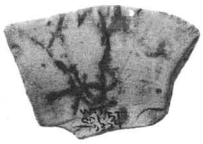

C36

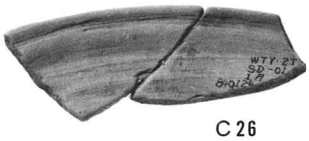

C40

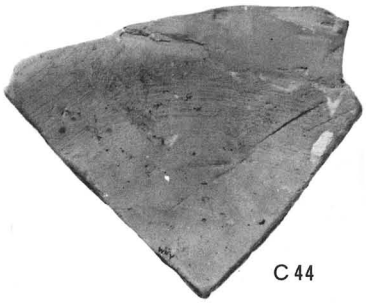
C43

C41

C38

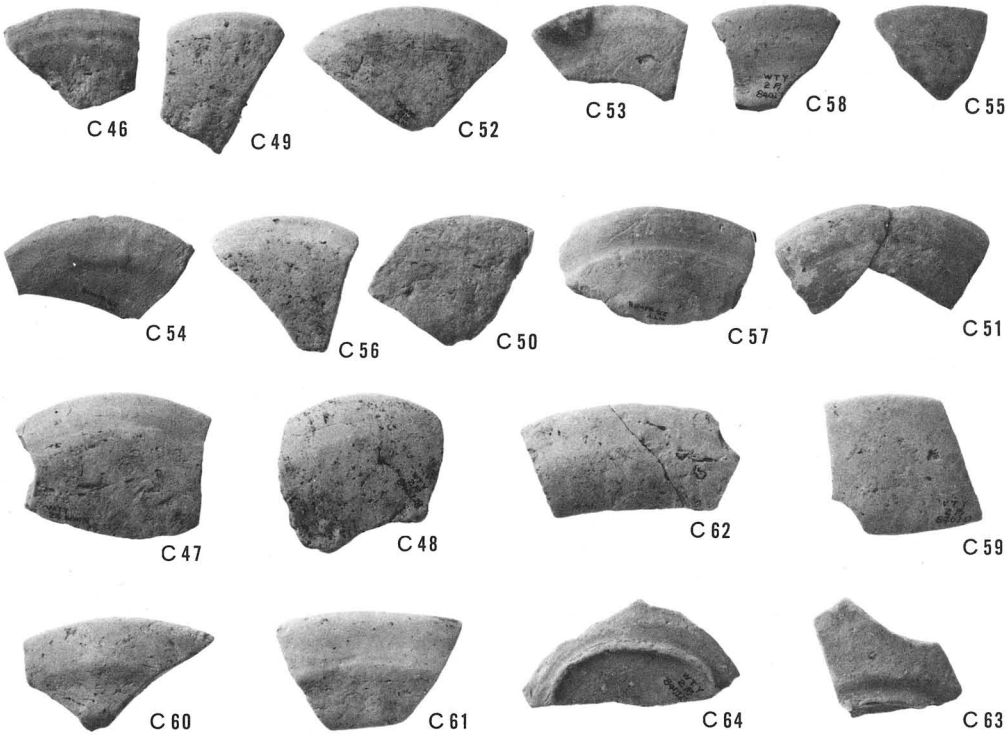

C42

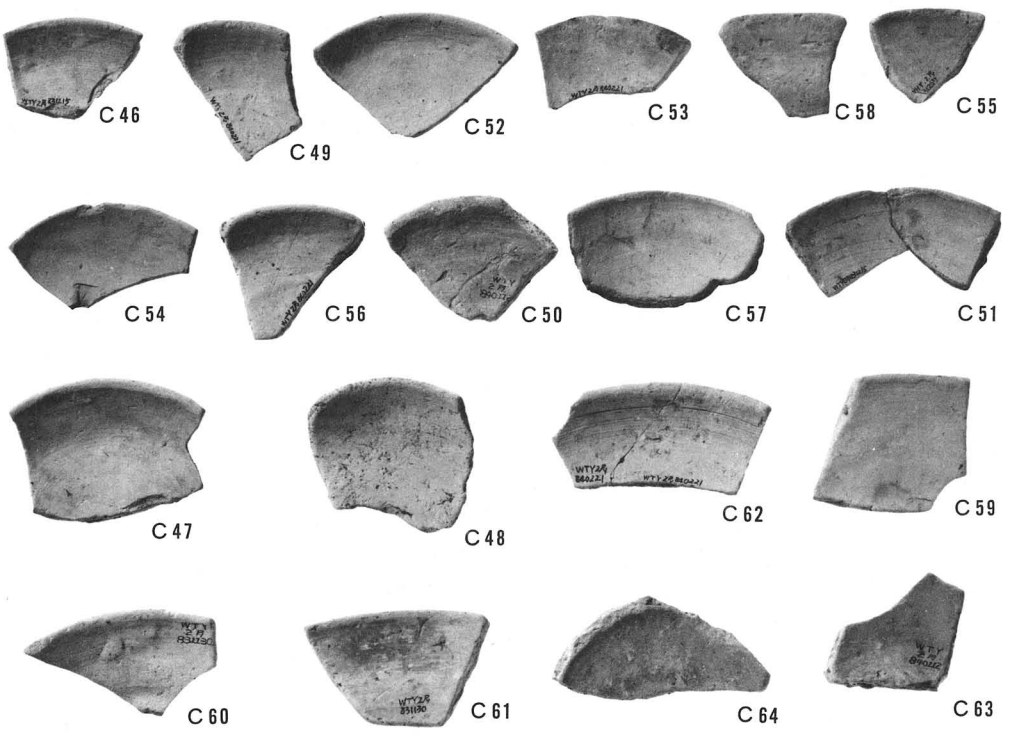

C26

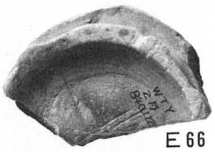

C44

C35

C36


C46
C49
C52
C53
C58
C55
C54
C56
C50
C57
C51
C47
C48
C62
C59
C60
C61
C64
C63


C46
C49
C52
C53
C58
C55
C54
C56
C50
C57
C51
C47
C48
C62
C59
C60
C61
C64
C63


E66

E67

E68

E69

E70

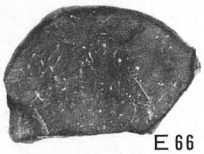
E71

F75

E72

G73

F74


E66

E67

E68

E69

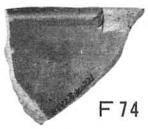
E70

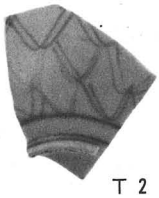
E71

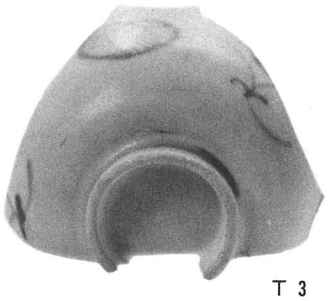
F75

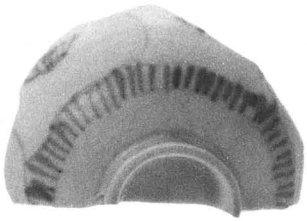
E72

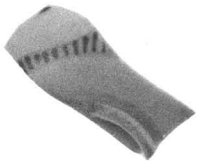
G73

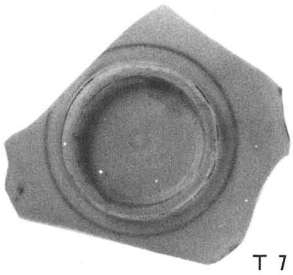

F74

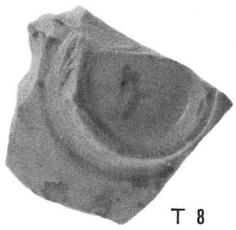

T 2


T 3

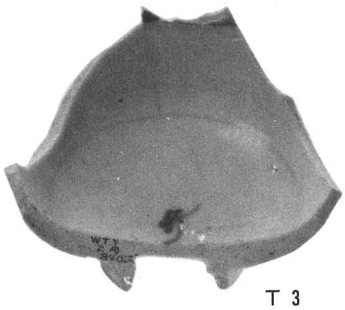

T 5

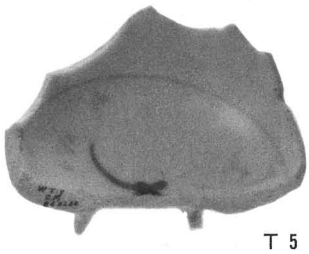

T 6


T 7

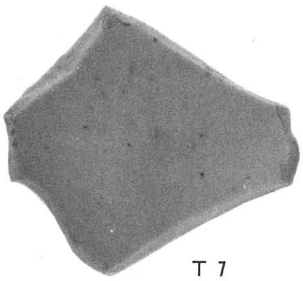

T 8

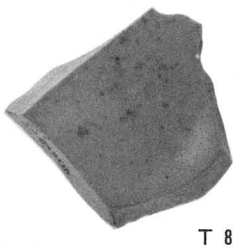
T 2

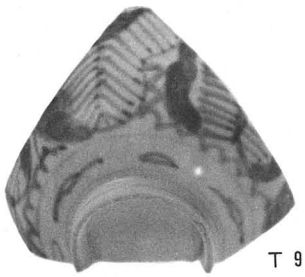

T 3

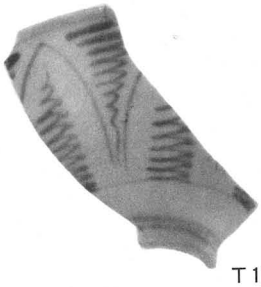

T 5

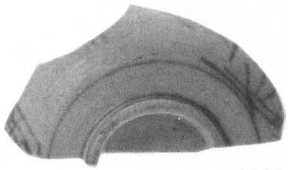
T 6


T 7

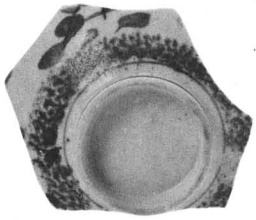

T 8


T 9


T 10


T 11

T 12

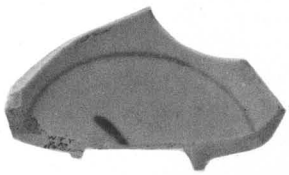

T 13

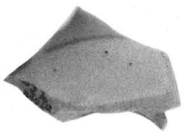
T 14

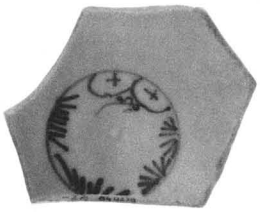
T 15

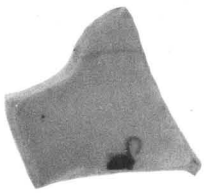
T 9

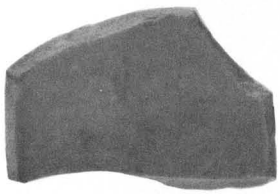
T 10

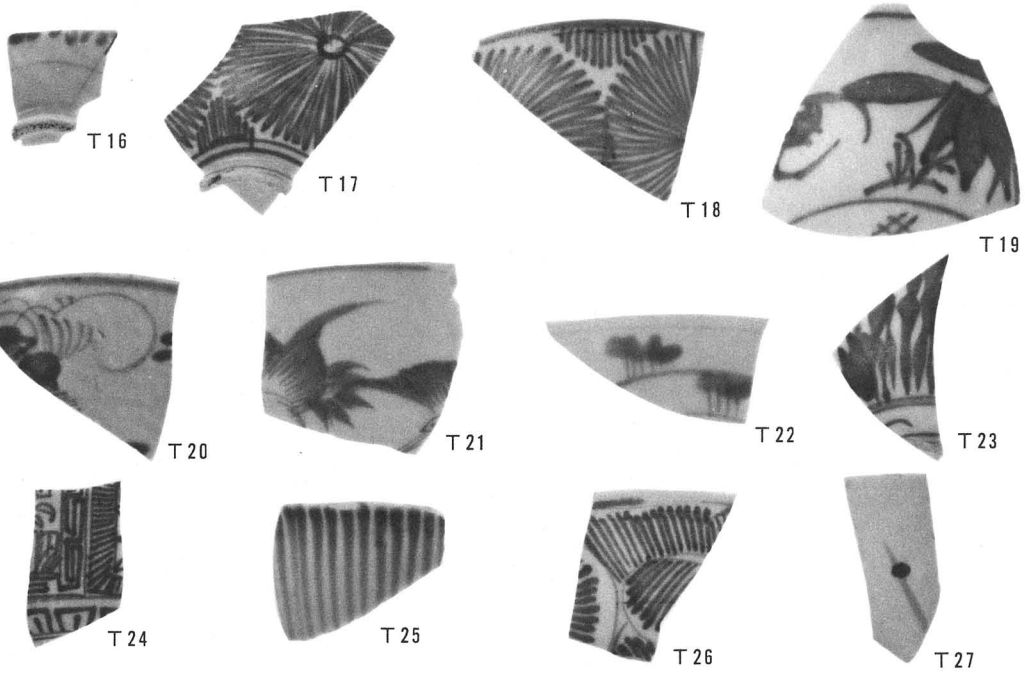

T 11

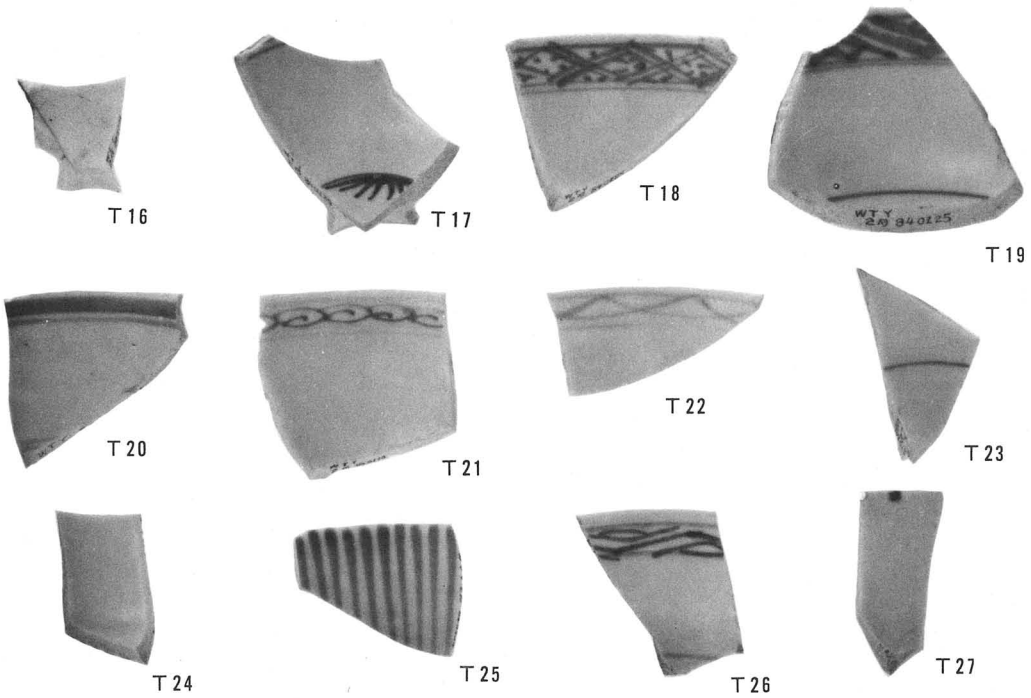

T 12

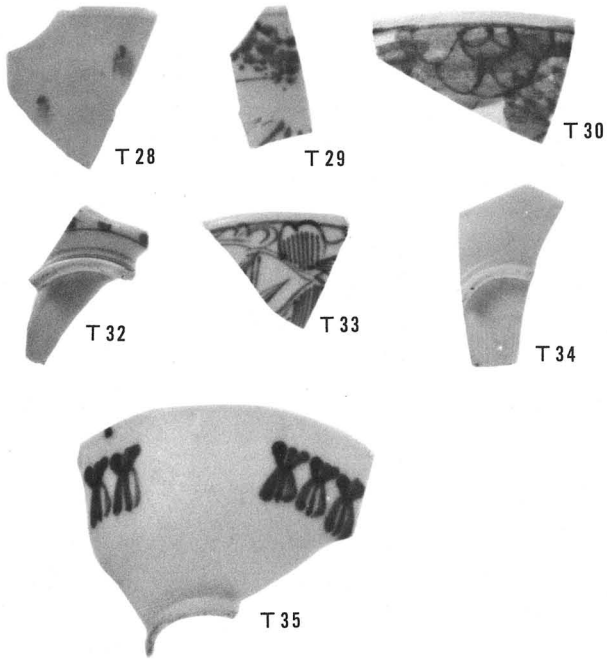

T 13

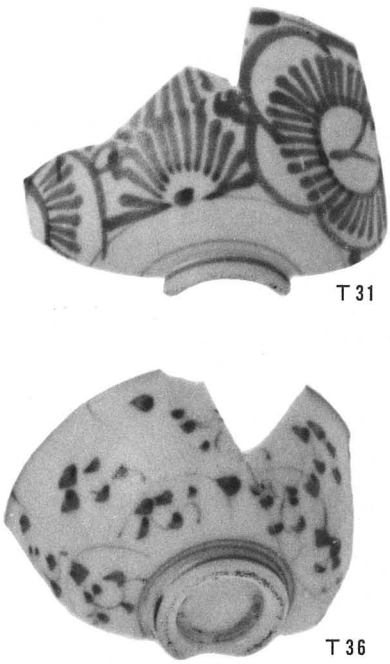

T 14

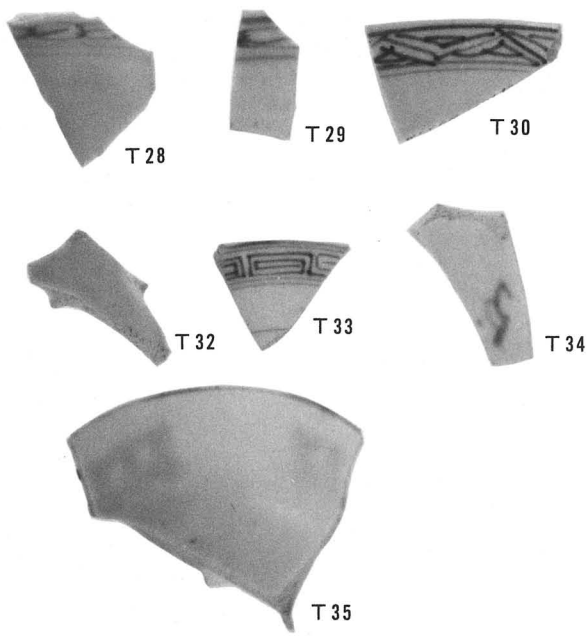

T 15

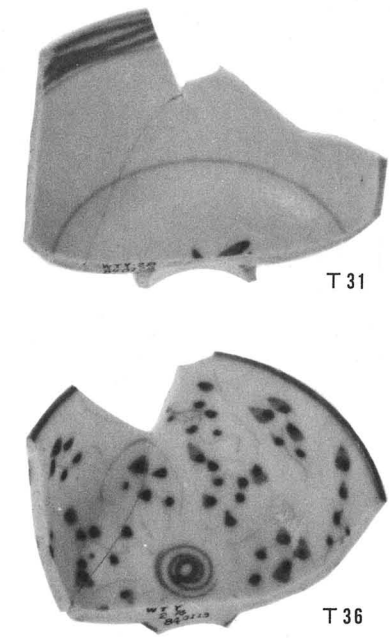

T16
T17
T18
T19
T20
T21
T22
T23
T24
T25
T26
T27

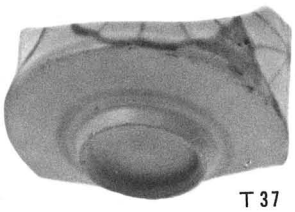

T16
T17
T18
T19
T20
T21
T22
T23
T24
T25
T26
T27


T28
T29
T30
T32
T33
T34
T35


T31
T36


T28
T29
T30
T32
T33
T34
T35

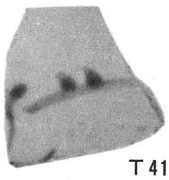

T31
T36

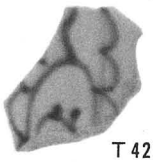

T37

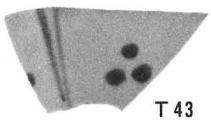
T38

T39

T40

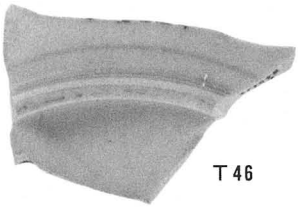

T41

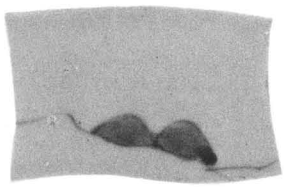

T42

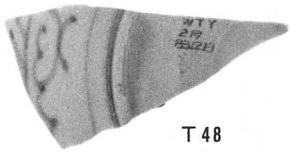

T43

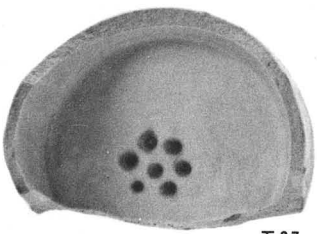
T44

T45


T46

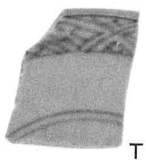

T47

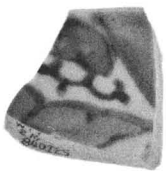

T48

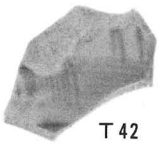

T37

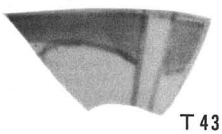
T38

T39

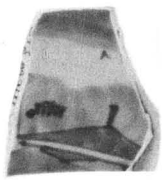

T40

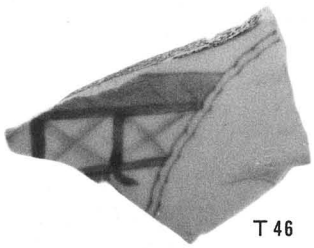

T41

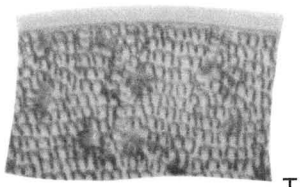

T42

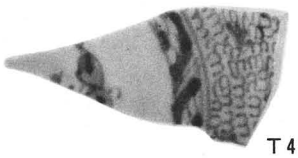

T43

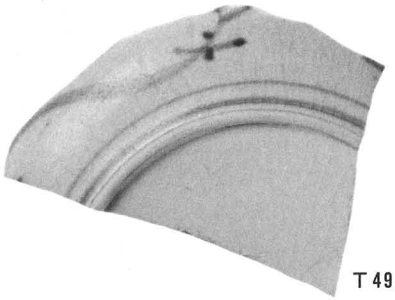
T44


T45

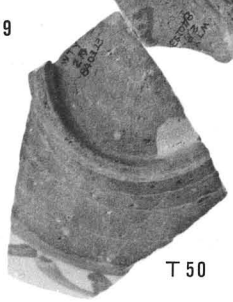

T46


T47

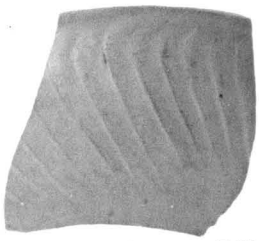

T48



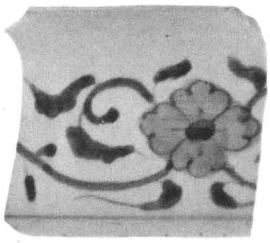
T 49



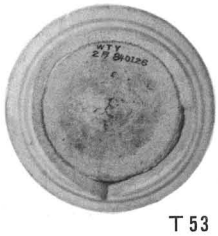
T 50



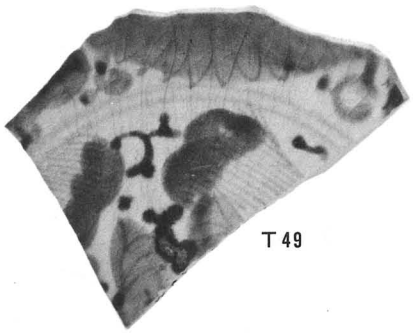
T 52



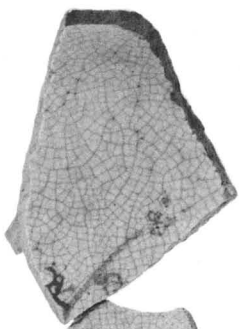
T 51



T 53

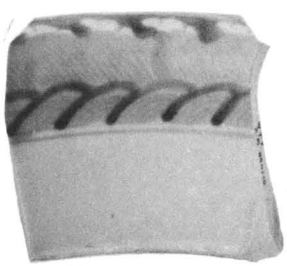


T 49

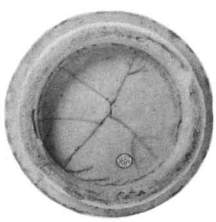


T 50

T 52

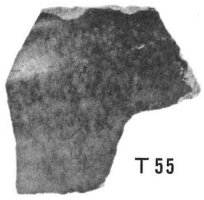


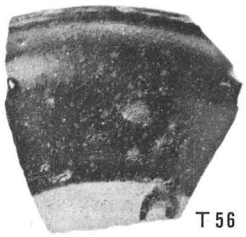
T 51



T 53

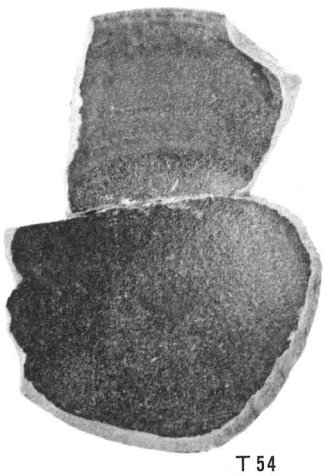
T54

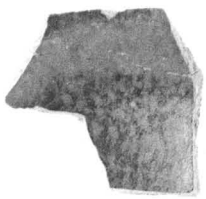

T55

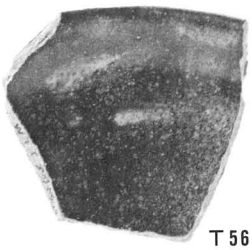

T56

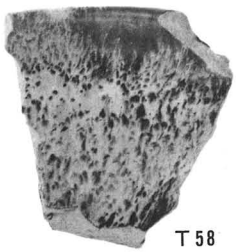
T58

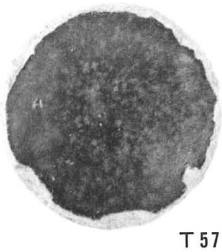
T57

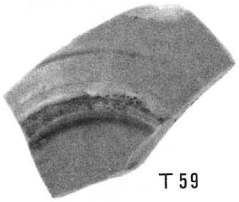

T54


T55

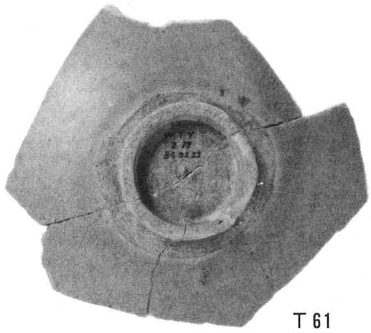

T56

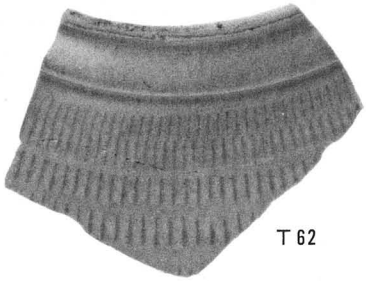

T58

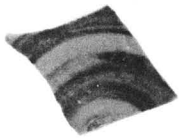

T57


T 59

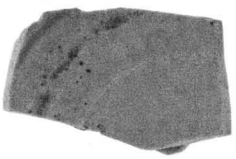
T 60


T 61

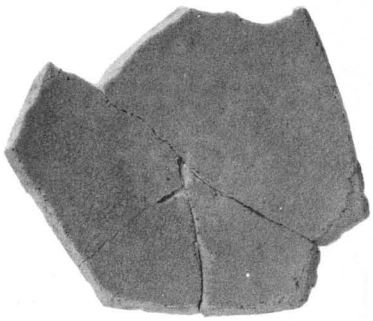

T 62

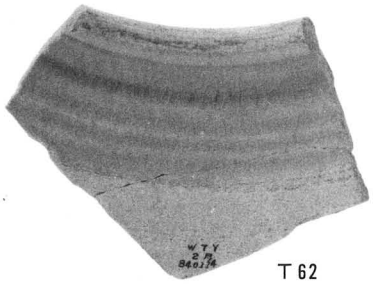

T 63

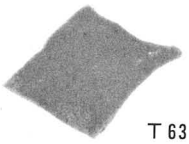
T 64


T 59

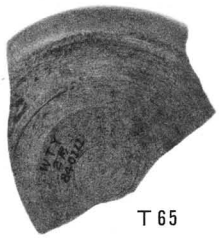
T 60


T 61


T 62


T 63

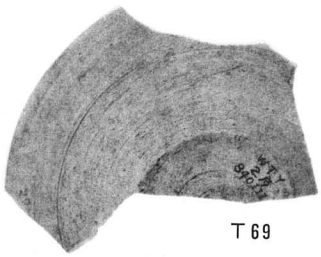
T 64


T65

T66

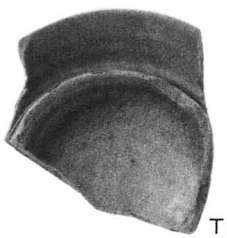
T67

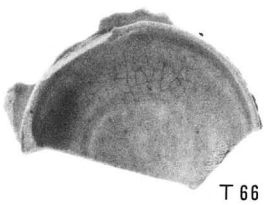
T68

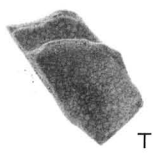

T69

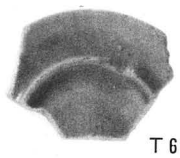
T70

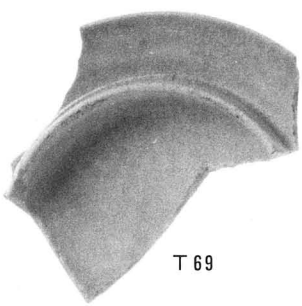
T71


T65

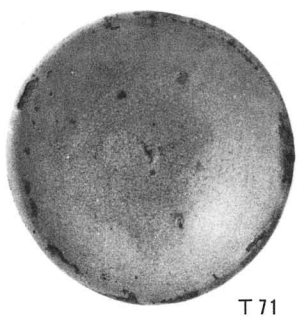

T66

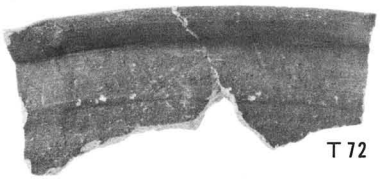

T67

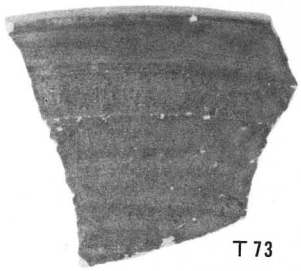

T68

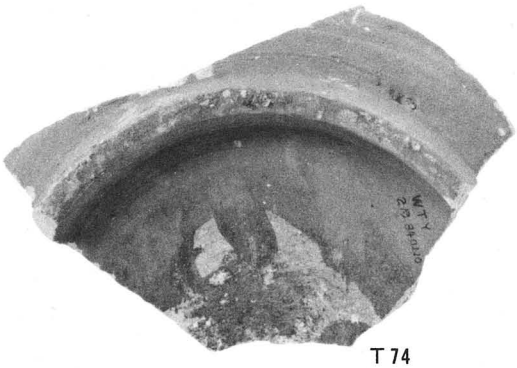

T69

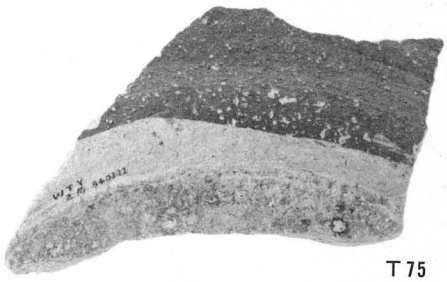
T70

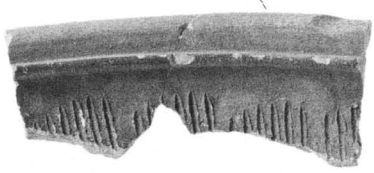

T71

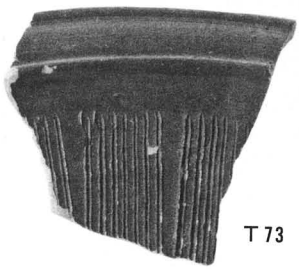

T 72

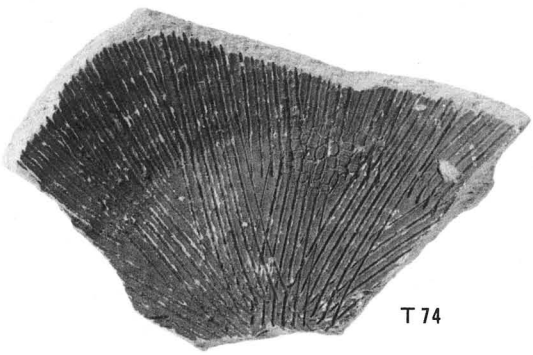

T 73

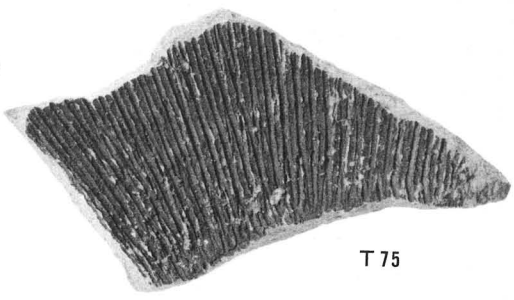

T 74


T 75

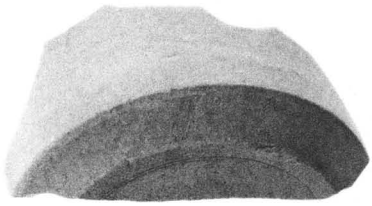

T 72


T 73

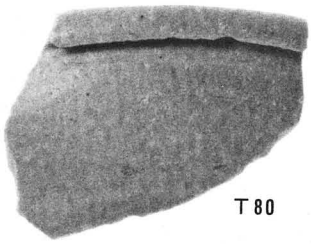

T 74


T 75

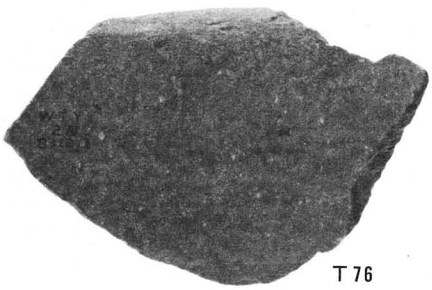
T 76

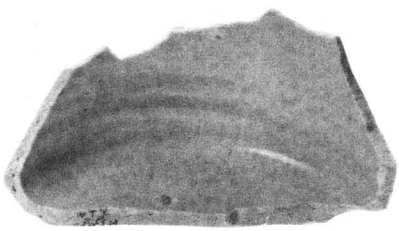

T 78

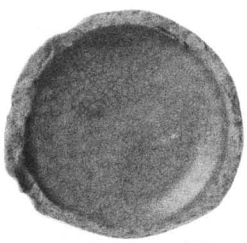
T 79

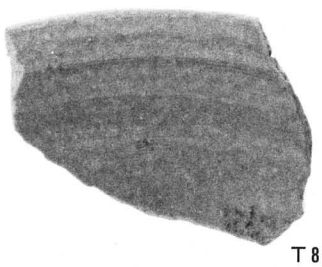

T 80

T 77

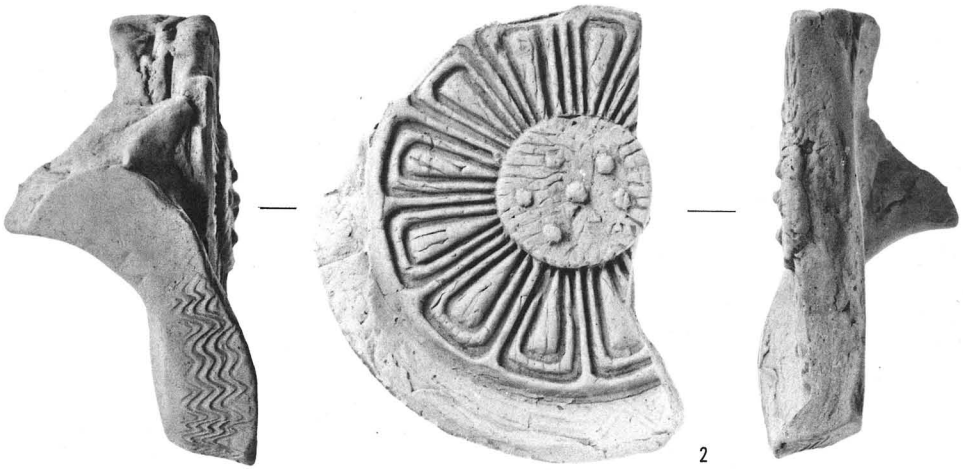

T 76


T 78


T 79

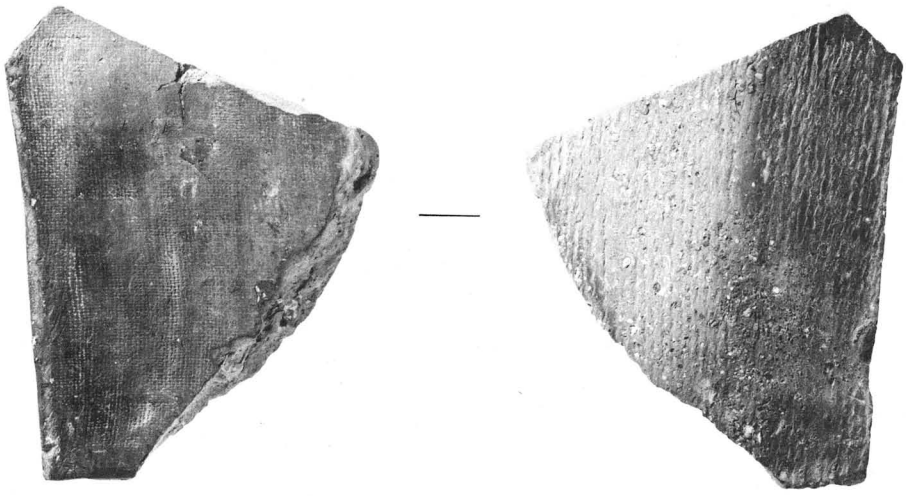

T 80

T 77



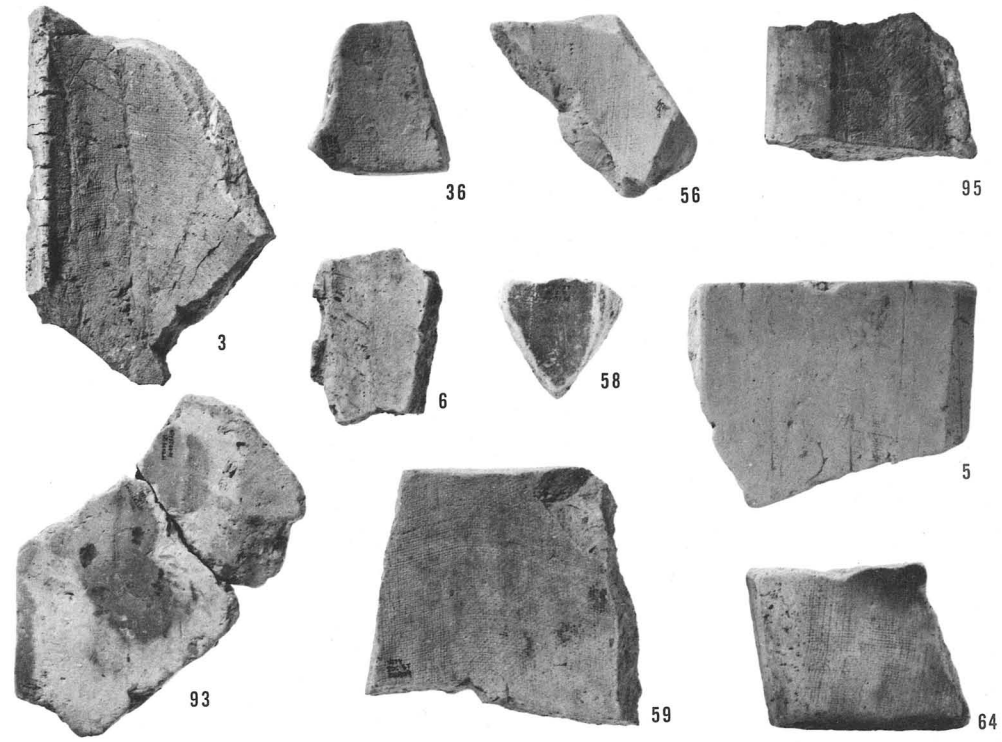
2

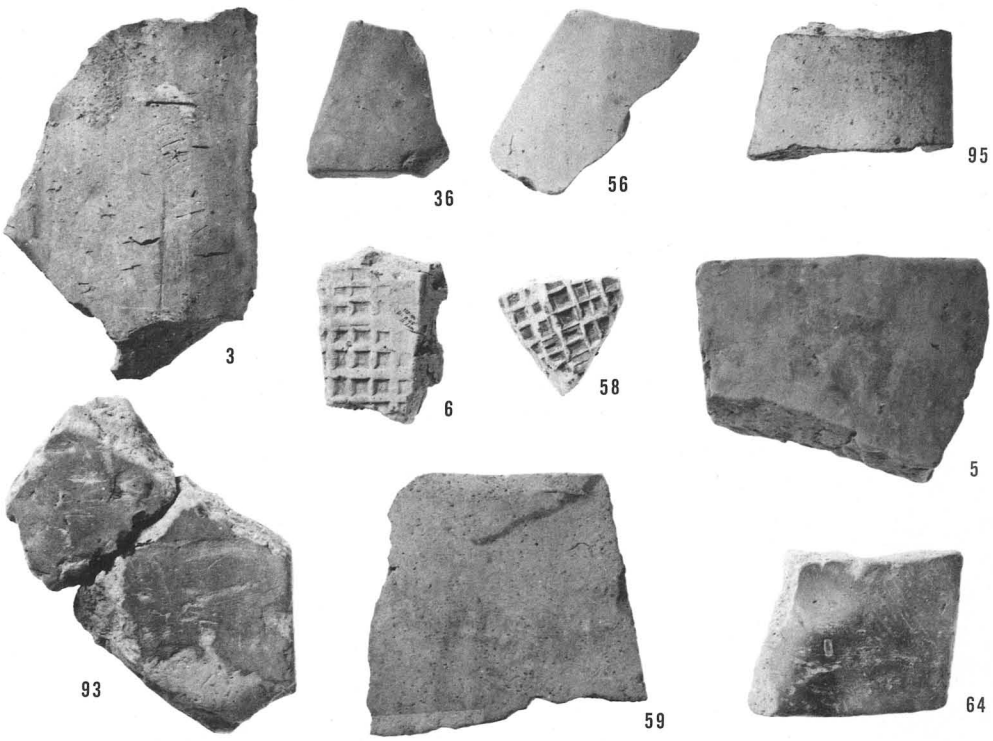
57　2

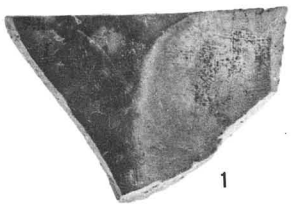


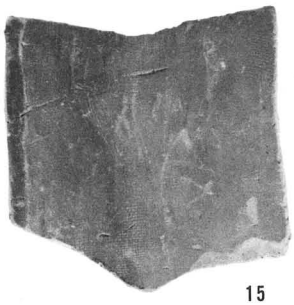
32

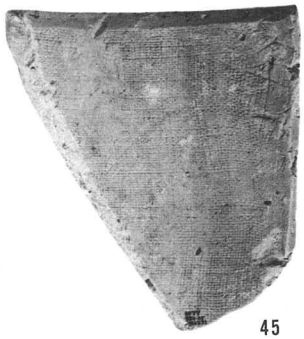
2軒丸瓦、57軒平瓦、32隅平瓦


3
36
56
95
6
58
5
93
59
64


3
36
56
95
6
58
5
93
59
64

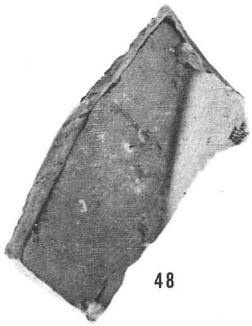

1

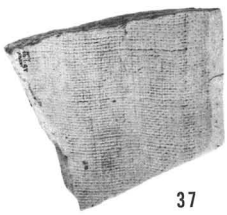

15

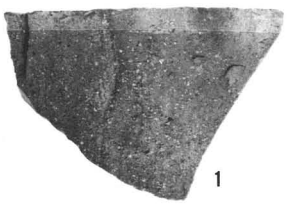

45

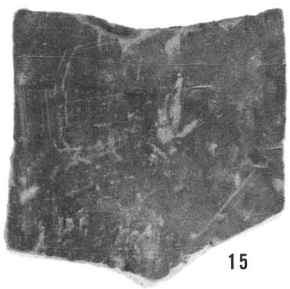
14

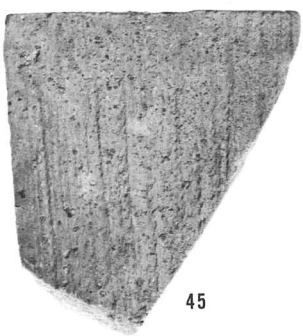
46


48

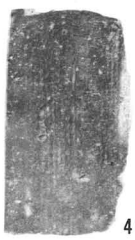

37


1

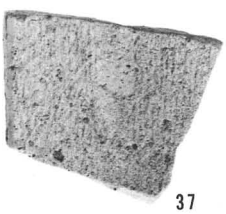

15

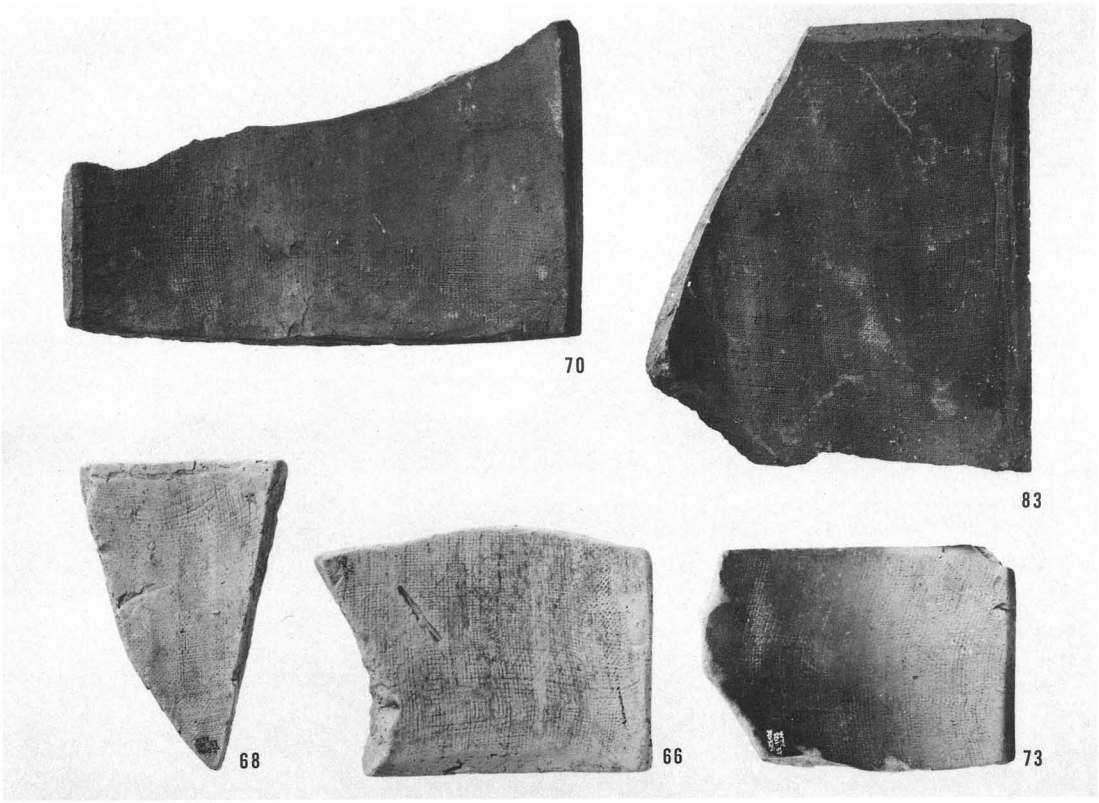

45

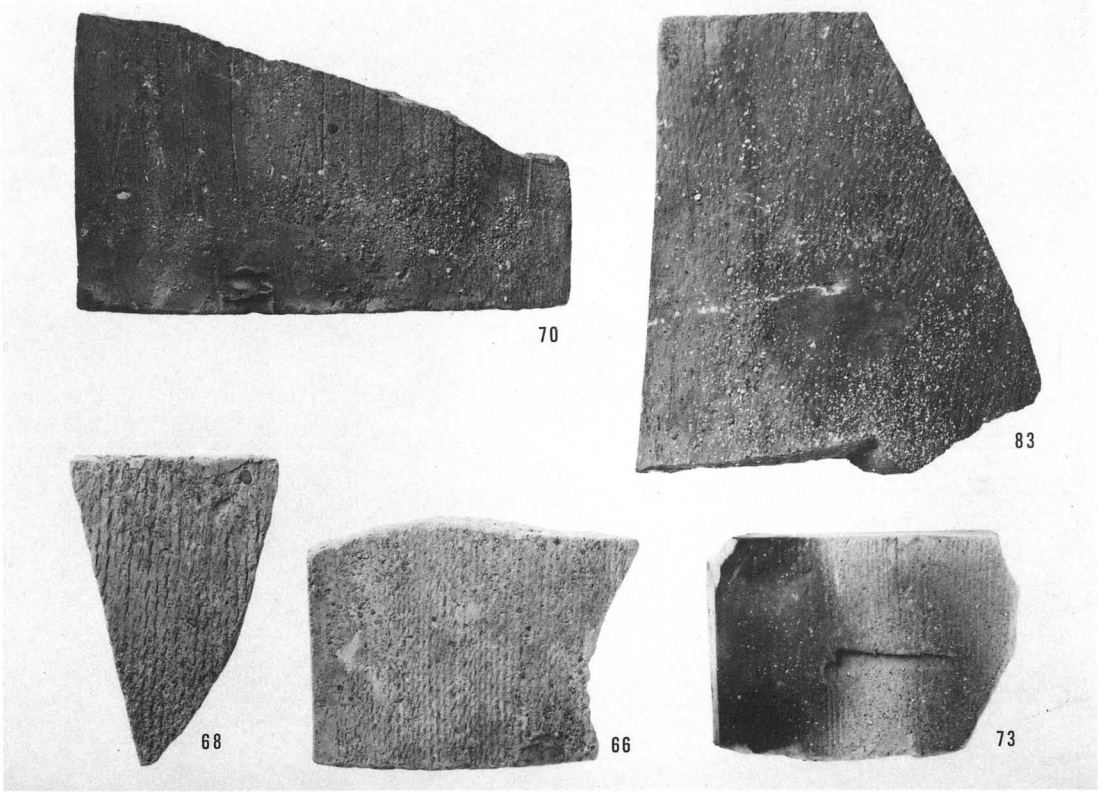
14


46

48

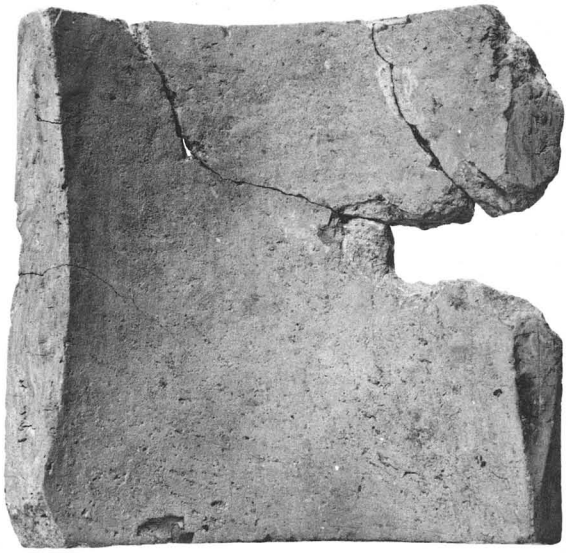

37


70
83
68
66
73


70
83
68
66
73

79

87

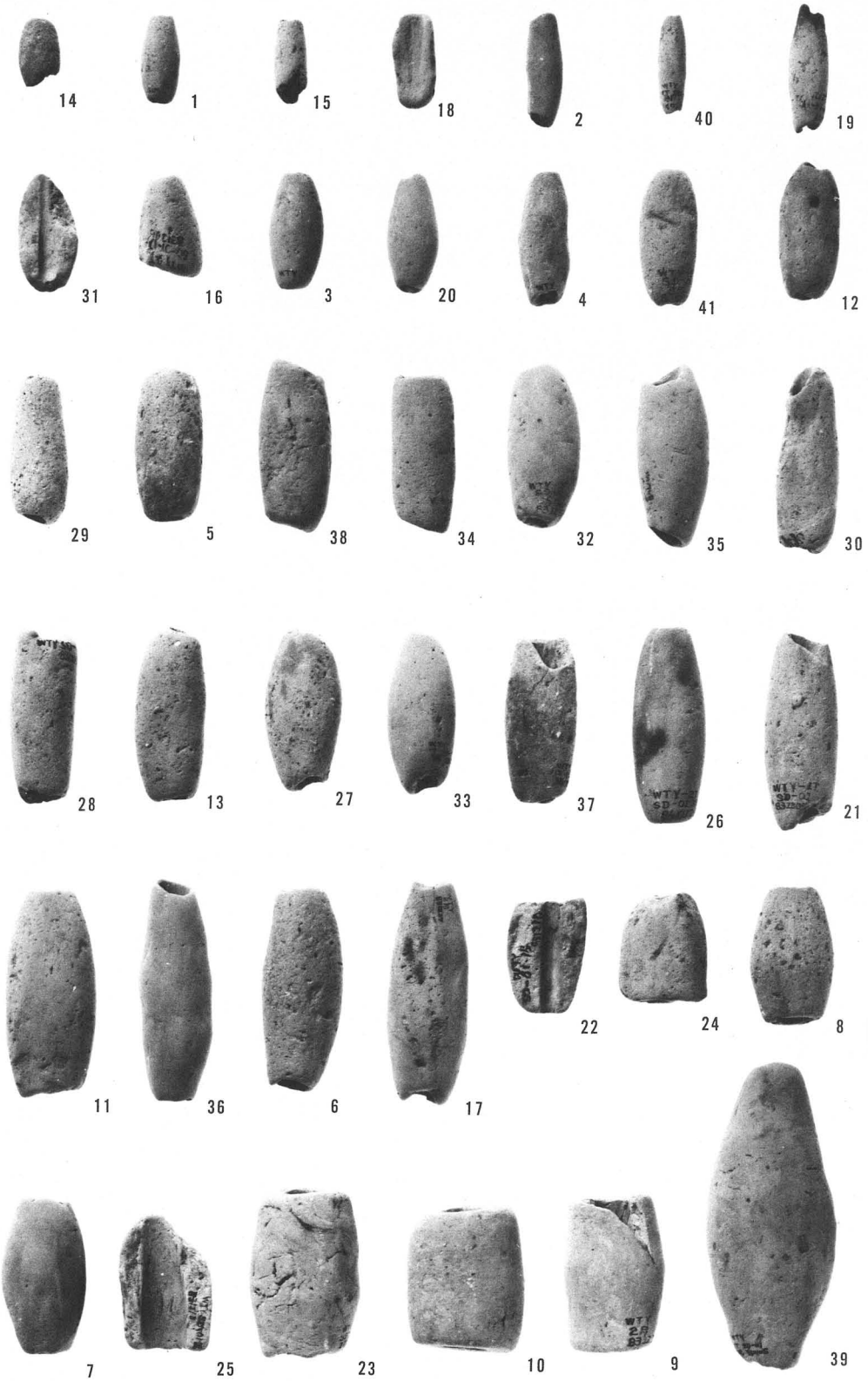


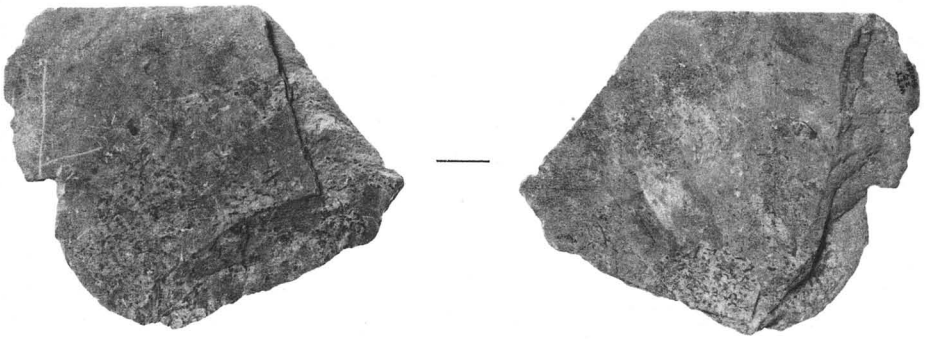
96

79

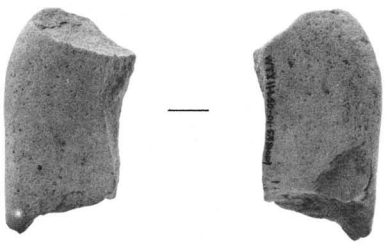
87

96


14
1
15
18
2
40
19
31
16
3
20
4
41
12
29
5
38
34
32
35
30
28
13
27
33
37
26
21
11
36
6
17
22
24
8
7
25
23
10
9
39

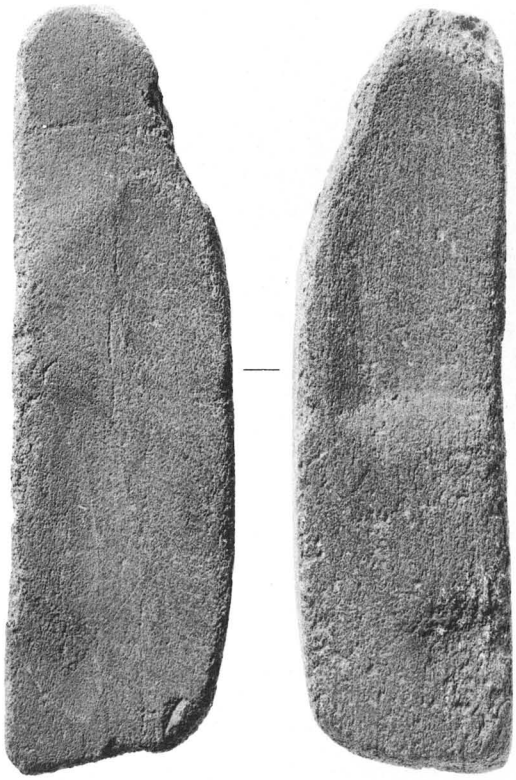


1



2

3



4

1

2

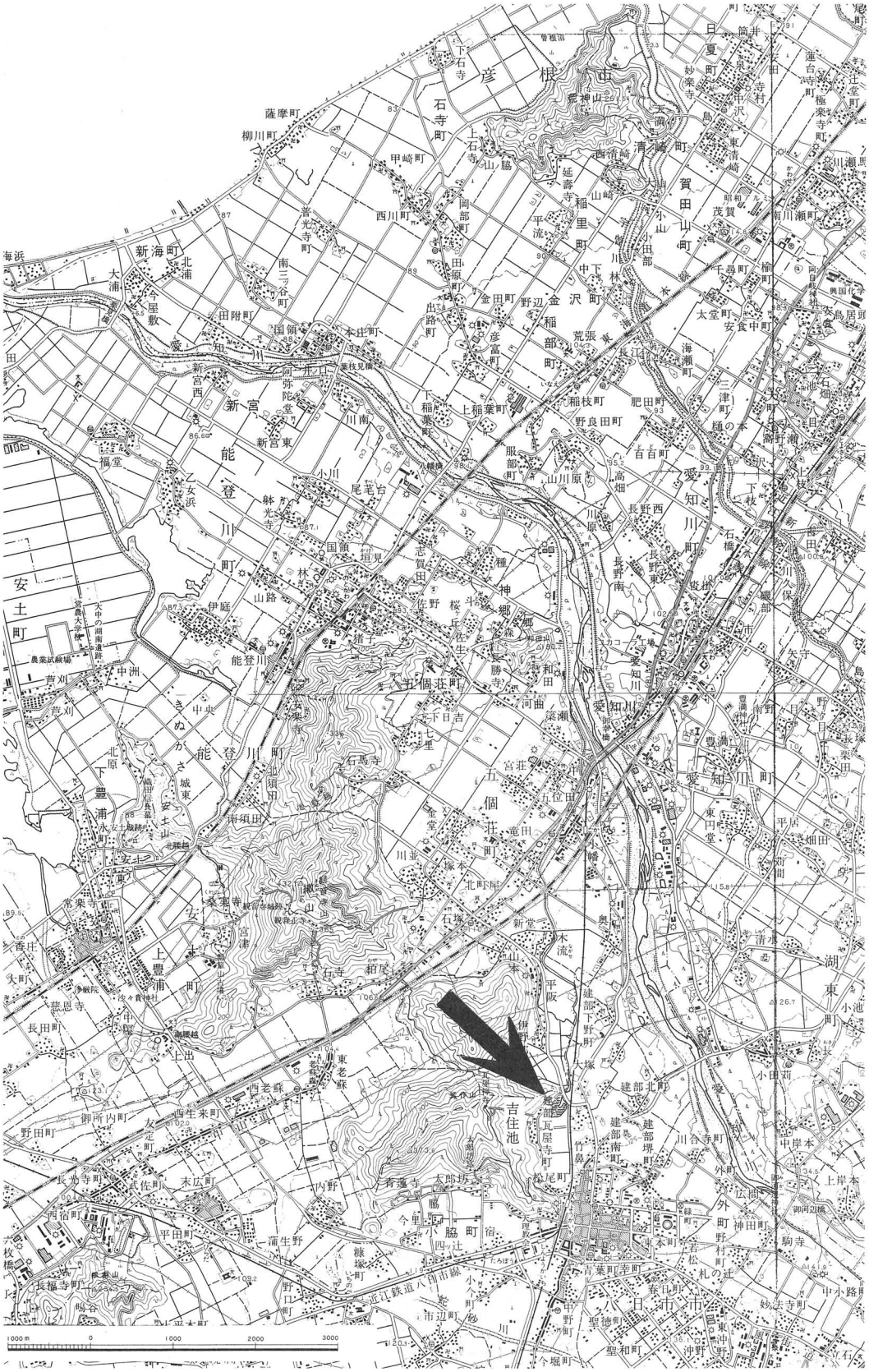
3

1

2

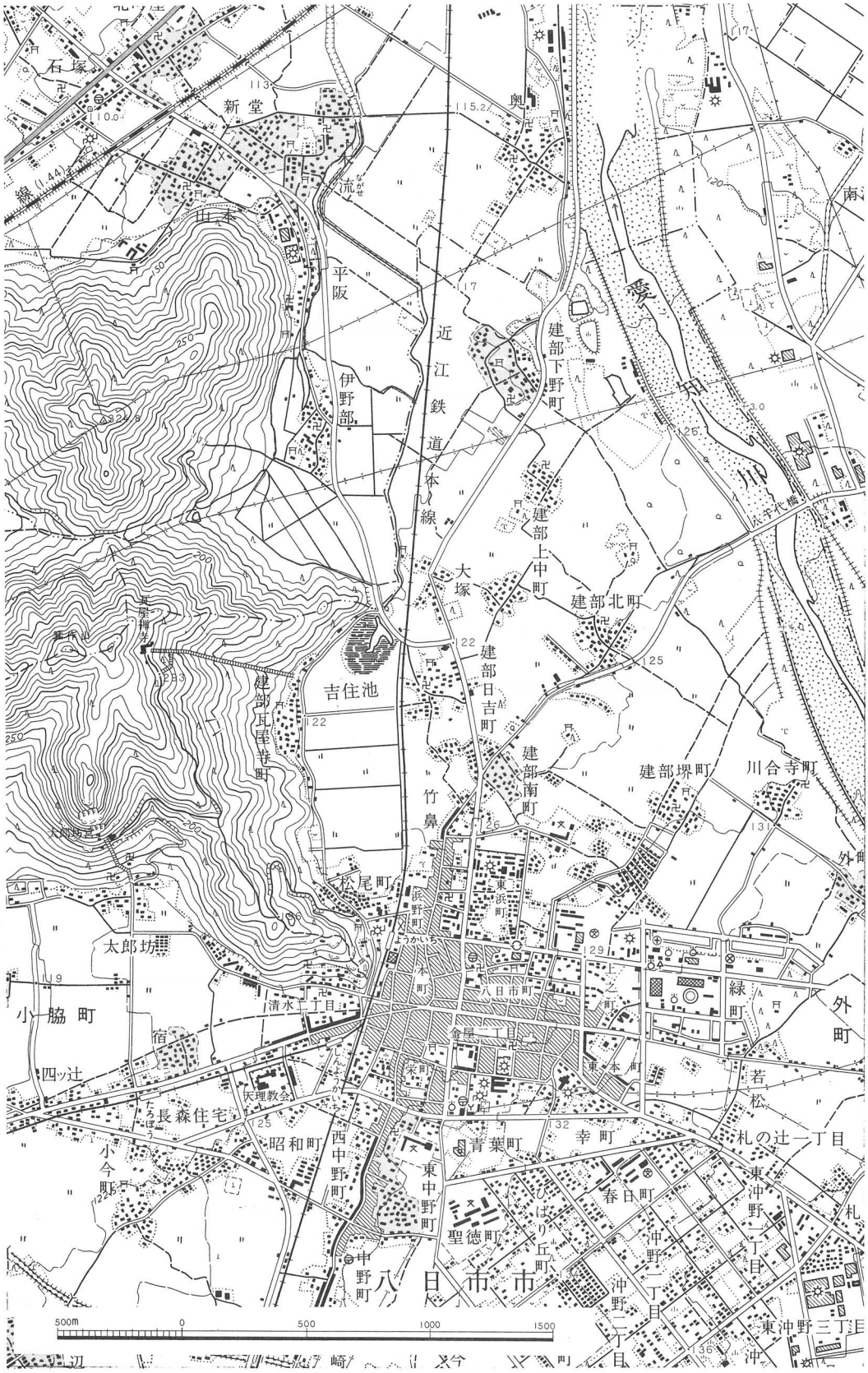
3

図版六四　位置図



彦根山
石寺町
新海町
新宮
能登川町
愛知川町
五個荘町
上豊浦町
吉住池
小脇町
八日市市
湖東町
1000 m
0
1000
2000
3000

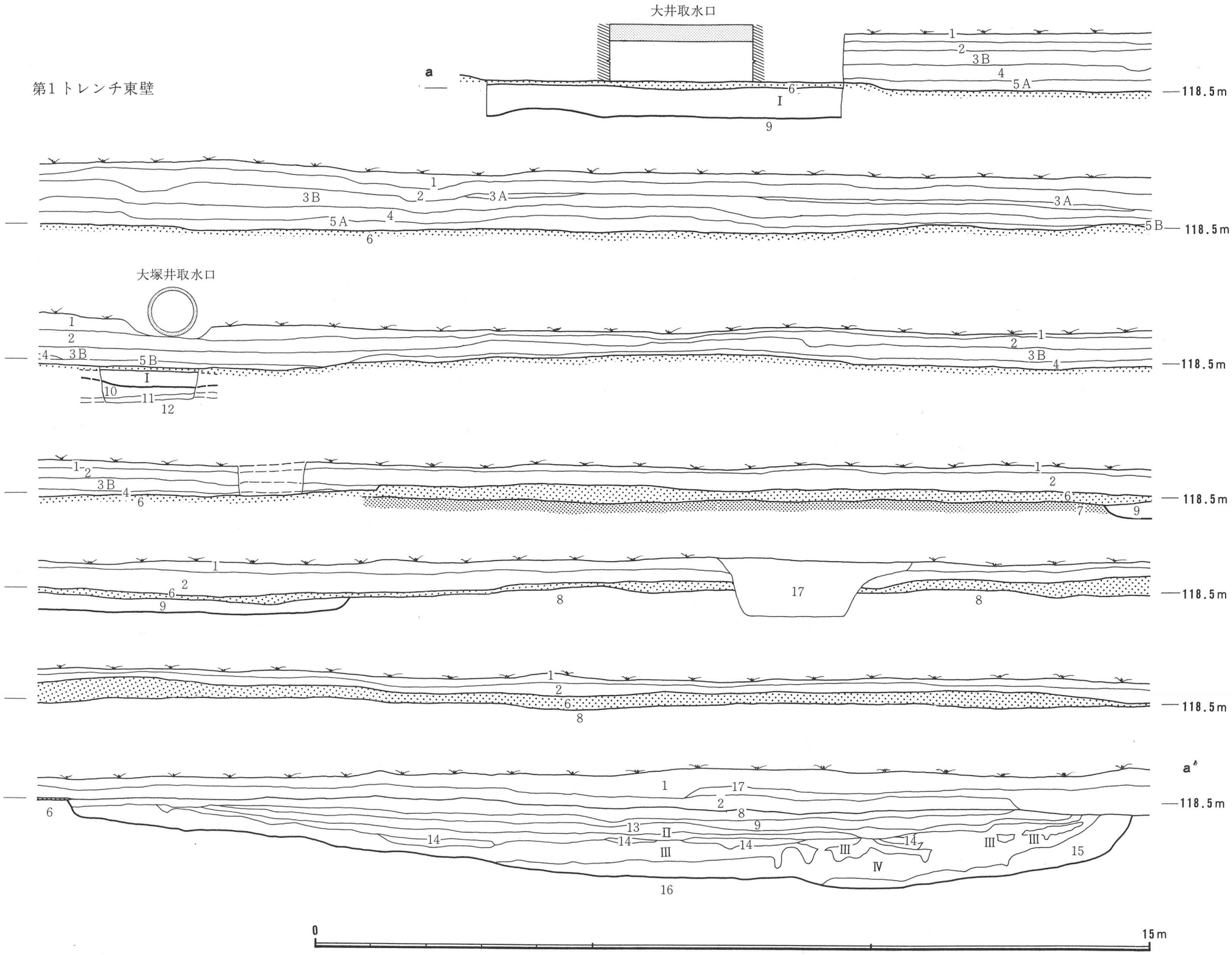
図版六五　位置図


石塚
新堂
奥
流
山本
平阪
伊野部
近江鉄道本線
建部下野町
愛知川
建部上中町
大塚
建部北町
建部日吉町
吉住池
建部瓦屋寺町
建部堺町
川合寺町
竹鼻
建部南町
松尾町
浜野町
東浜町
太郎坊
本町
八日市町
清水一丁目
小脇町
宿
四ッ辻
金屋一丁目
栄町
東本町
緑町
外町
若松
天理教会
長森住宅
昭和町
西中野町
青葉町
幸町
札の辻一丁目
小今町
東中野町
春日町
東沖野一丁目
聖徳町
びばり丘町
沖野一丁目
申野町
八日市市
沖野二丁目
東沖野三丁目
500m
0
500
1000
1500

第１次調査前地形図・トレンチ配置図

第2、3次調査前地形図・トレンチ配置図

第２、３次調査後地形図・トレンチ配置図、遺構図

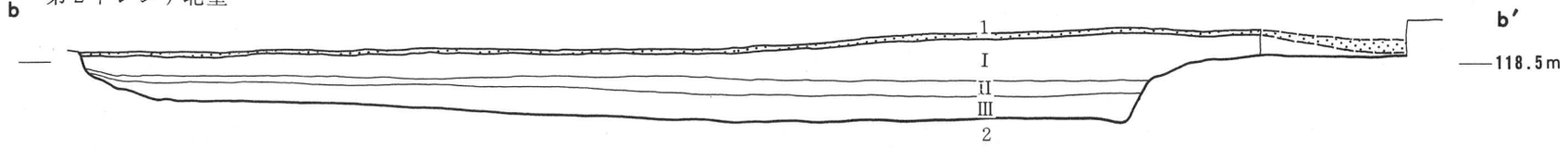


第1トレンチ東壁

1．濃茶褐色腐植土層
2．微砂混り暗緑灰色腐植土層
3A．暗茶灰黄色腐植土層
3B．明褐色腐植土層
4．黒褐色腐植土層
5A．灰茶褐色粘質腐植土層
5B．暗灰青褐色砂礫層
6．敷石II
7．敷石I
8．灰褐色砂礫層
I．黒褐色有機質土層
9．明青灰色粘質土層
10．黒茶褐色有機質土層
11．灰褐色有機質混り砂礫層
12．灰褐色砂礫層
13．明褐色有機質土層
II．黒褐色有機質土層
14．灰褐色細砂層
III．黒褐色有機質混り灰褐色砂質層
IV．暗緑灰色粘土混り鉄分帯細砂層
15．緑灰色鉄分帯粘土層
16．礫層
17．撹乱層

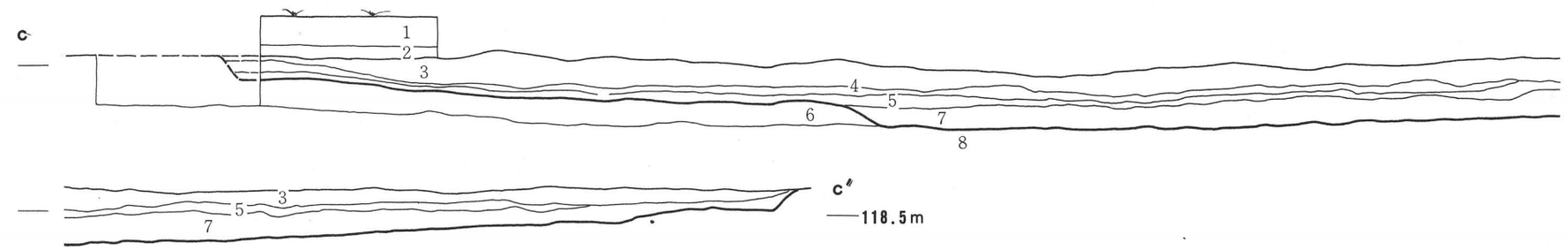
第2、3次調査断面図（第１トレンチ）

第２トレンチ北壁



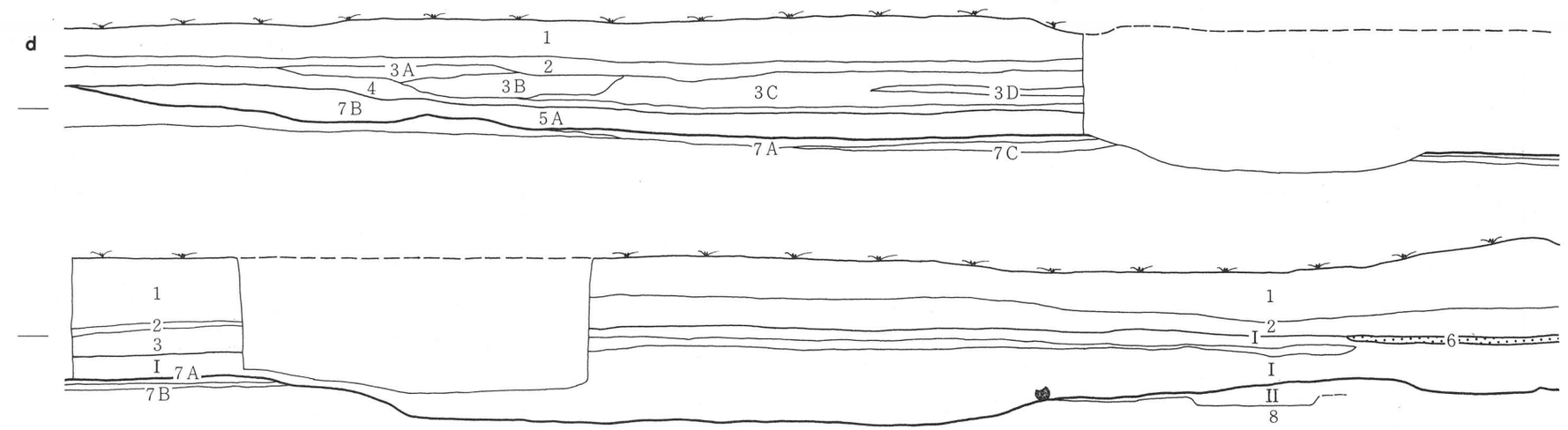
第２トレンチ
1．敷石II
I．黒褐色有機質土層
II．暗灰褐色有機混り砂礫層
III．暗青灰色砂礫層
2．灰褐色砂礫層

第８−２トレンチ東壁



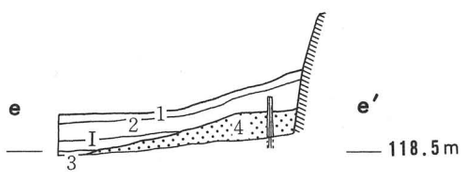
第８－２トレンチ東壁
1．濃茶褐色腐植土層
2．暗緑灰色微砂混り腐植土層
3．黒灰色有機質土層
4．スクモ層
5．灰褐色有機質混り砂礫層
6．暗褐色砂礫層
7．暗緑灰色粘土層
8．暗緑灰色粗砂層

第３トレンチ北壁



第３トレンチ北壁
1．濃茶褐色腐植土層
2．暗緑灰色腐植土層
3A．黄褐色砂質層
3B．灰褐色黄褐色砂質層
3C．濃茶褐色腐植土層
3D．暗茶褐色腐植土層
4．暗灰黄褐色粘質腐植土層
I．黒褐色有機質土層
5．灰褐色有機質土混り粘土層
6．敷石II
7A．灰色粘質土層
7B．黄褐色砂質土混り礫層
7C．灰褐色砂層
II．明青灰色粘土層
8．灰緑褐色砂礫層

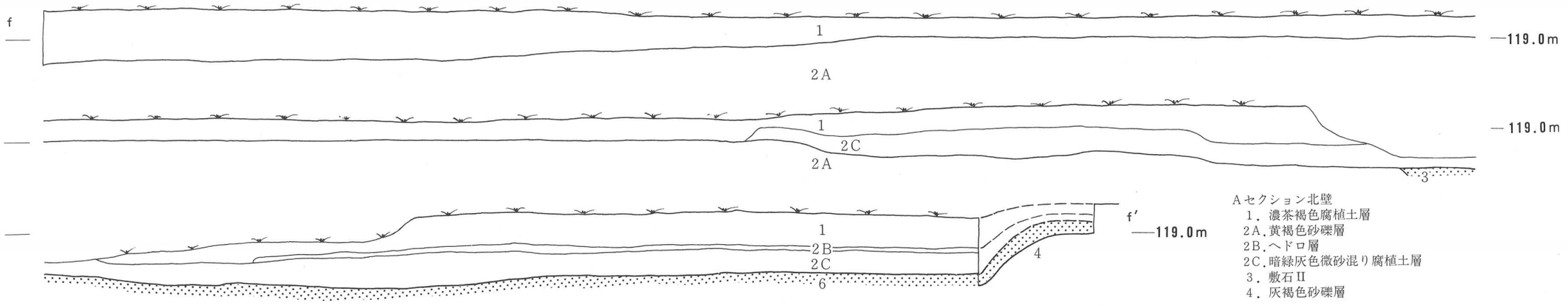
第６トレンチ



第６トレンチ北壁
1．濃茶褐色腐植土層
2．濃緑灰色微砂混り腐植土層
I．暗灰褐色砂礫土層
3．黒灰褐色腐植土層
4．敷石II

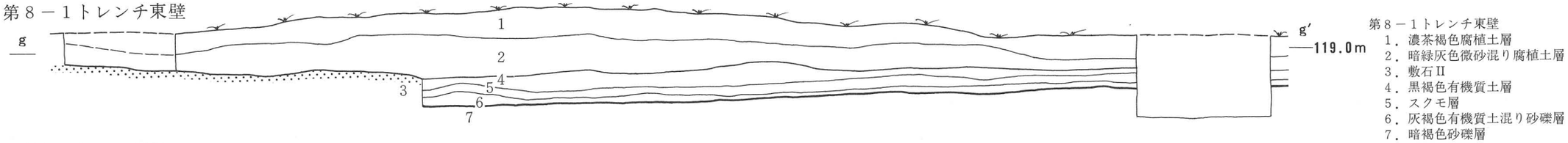
第2、3次調査断面図（第2、3、8−2トレンチ）

Aセクション北壁



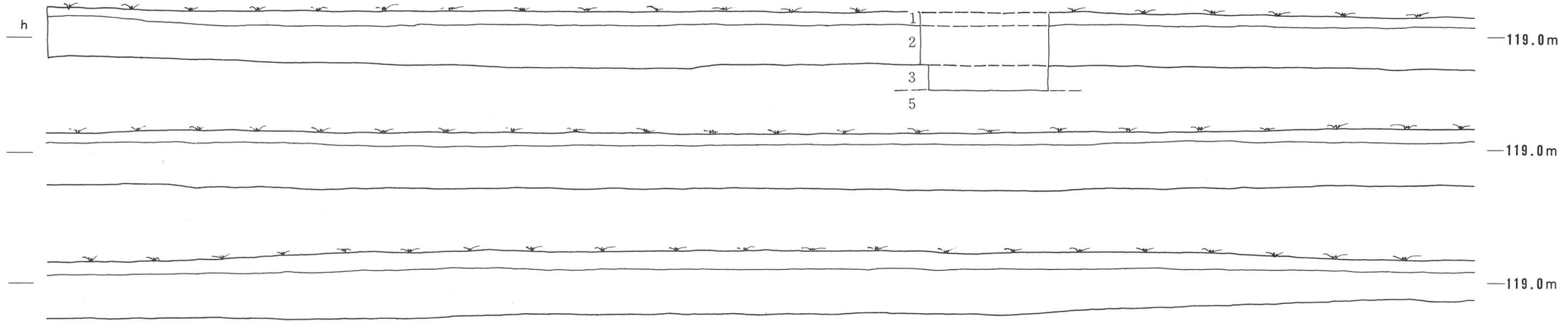
Aセクション北壁
1．濃茶褐色腐植土層
2A.黄褐色砂礫層
2B.ヘドロ層
2C.暗緑灰色微砂混り腐植土層
3．敷石Ⅱ
4．灰褐色砂礫層

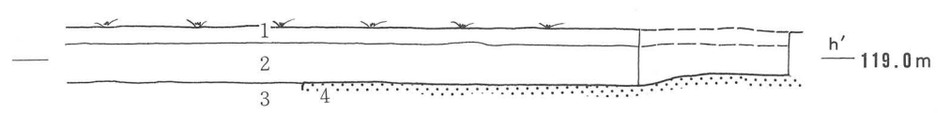
第８－１トレンチ東壁



第８－１トレンチ東壁
1．濃茶褐色腐植土層
2．暗緑灰色微砂混り腐植土層
3．敷石Ⅱ
4．黒褐色有機質土層
5．スクモ層
6．灰褐色有機質土混り砂礫層
7．暗褐色砂礫層

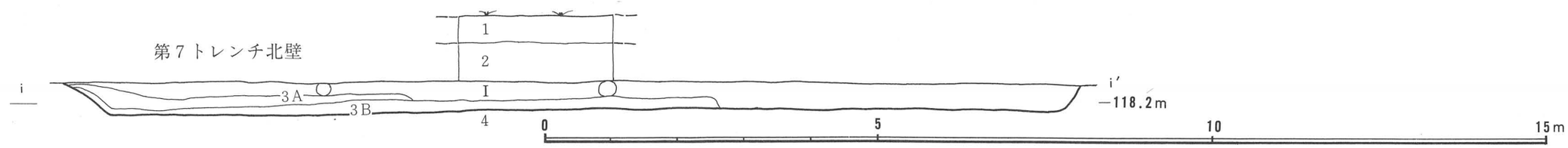
Bセクション西壁





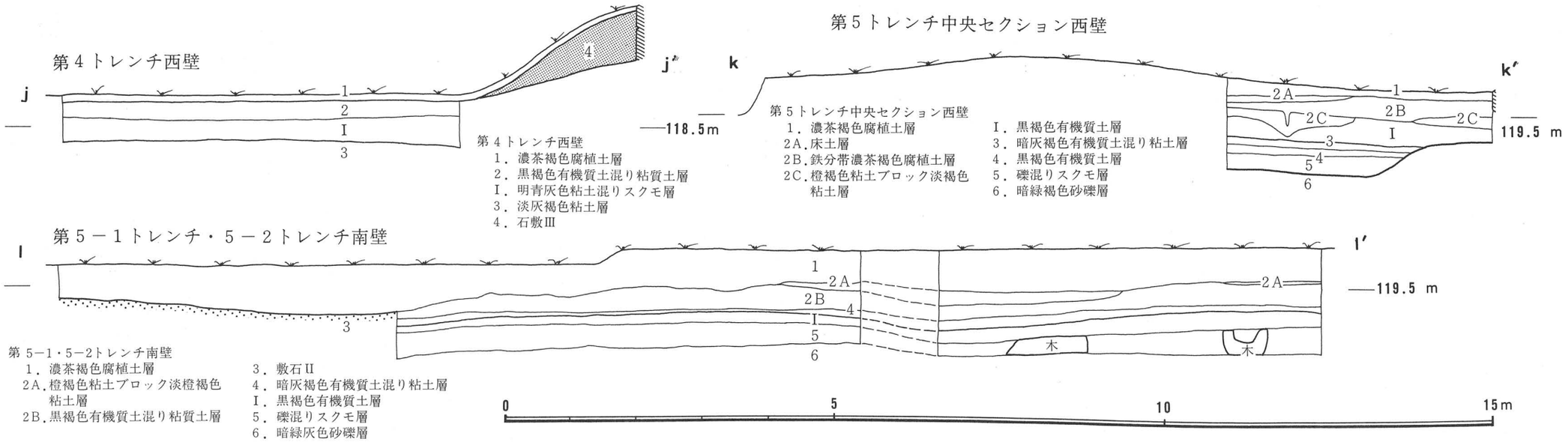
Bセクション西壁
1．濃茶褐色腐植土層
2．暗緑灰色微砂混り腐植土層
3．黒褐色有機質土層
4．敷石Ⅱ
5．暗灰褐色砂礫層

第７トレンチ北壁

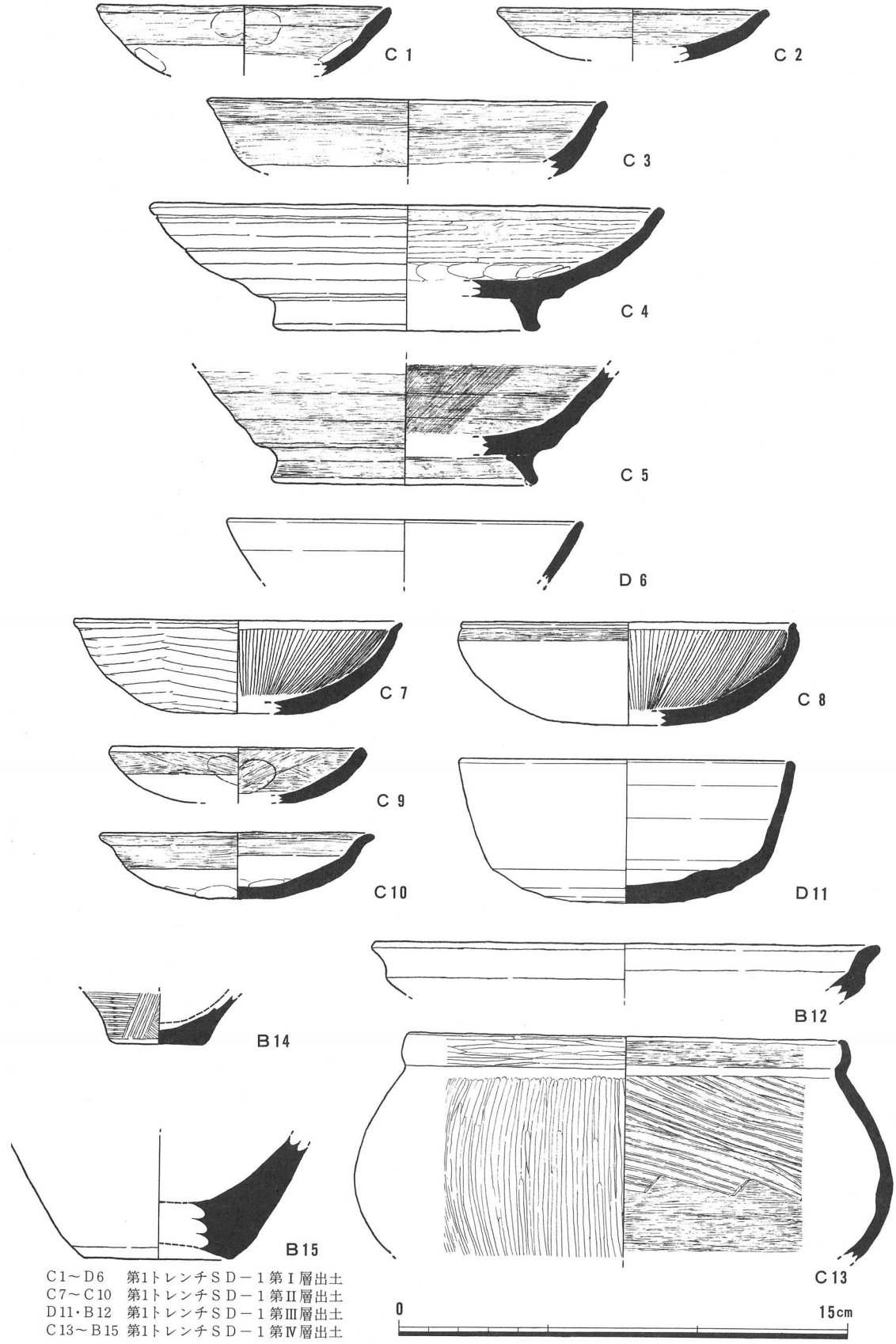


第７トレンチ北壁
1．濃茶褐色腐植土層
2．暗緑灰色微砂混り腐植土層
Ⅰ．黒褐色有機質土層
3A.スクモ層
3B.灰褐色有機質土層
4．暗青灰色礫混り粘土層

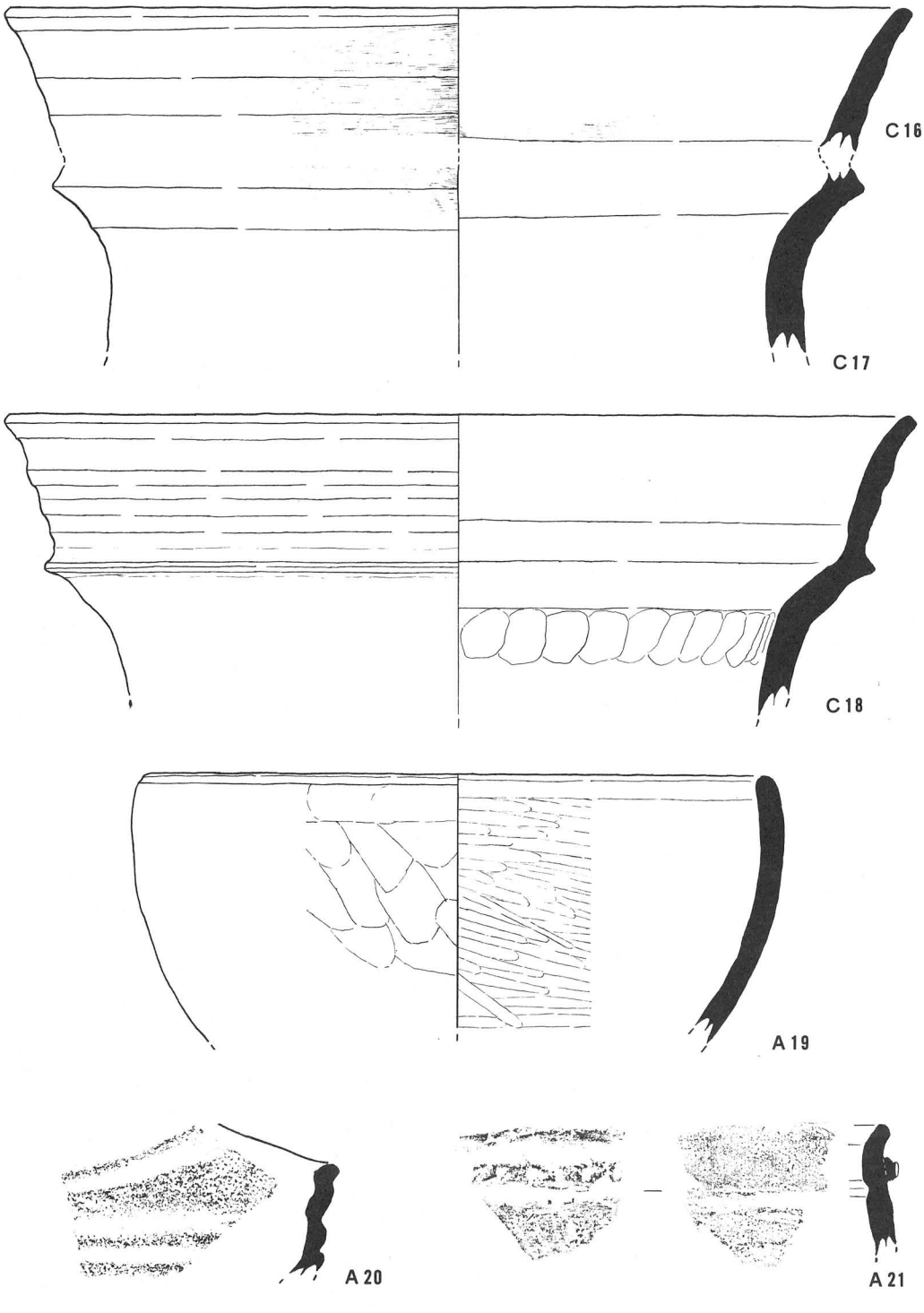
第２、３次調査（Ａ、Ｂセクション・第７，８－１トレンチ）



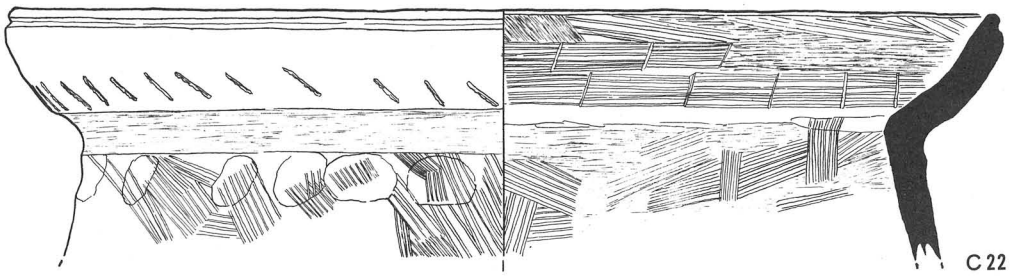
第2、３次調査断面図（第4、5トレンチ）

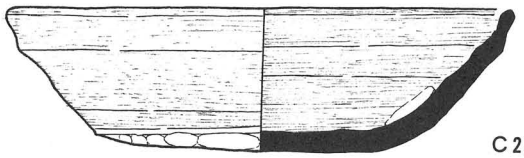


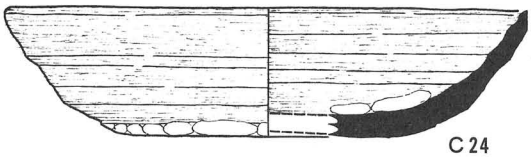
C1～D6　第1トレンチＳＤ－１第Ⅰ層出土
C7～C10　第1トレンチＳＤ－１第Ⅱ層出土
D11・B12　第1トレンチＳＤ－１第Ⅲ層出土
C13～B15 第1トレンチＳＤ－１第Ⅳ層出土

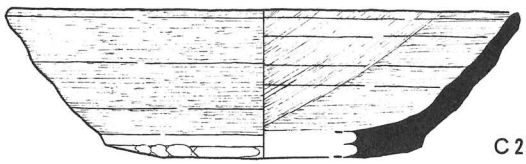


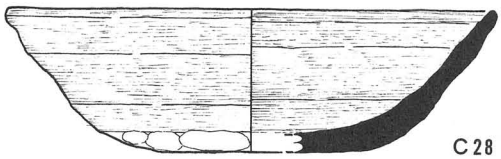
C16～A21　第1トレンチＳＤ－１第Ⅳ層出土

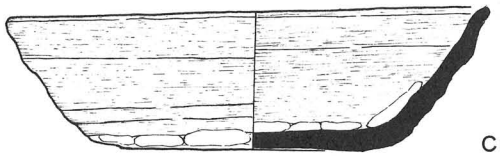


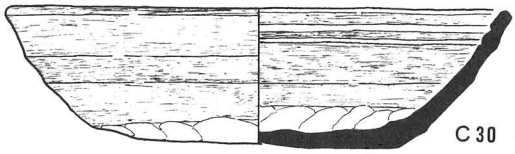


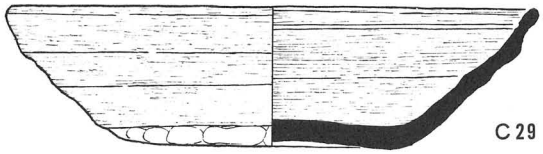


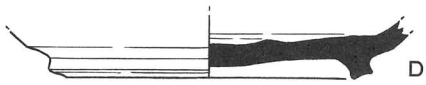


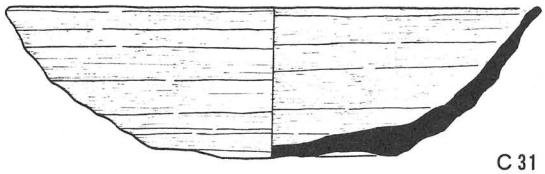


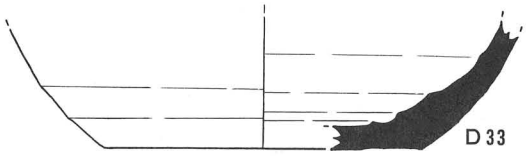


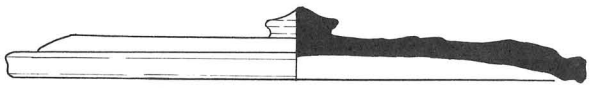


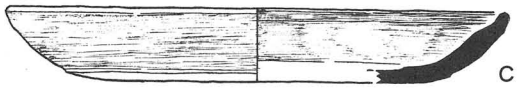


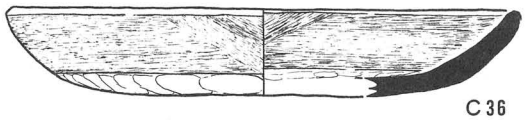


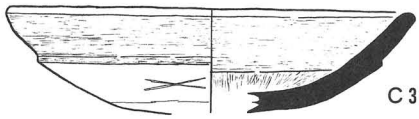




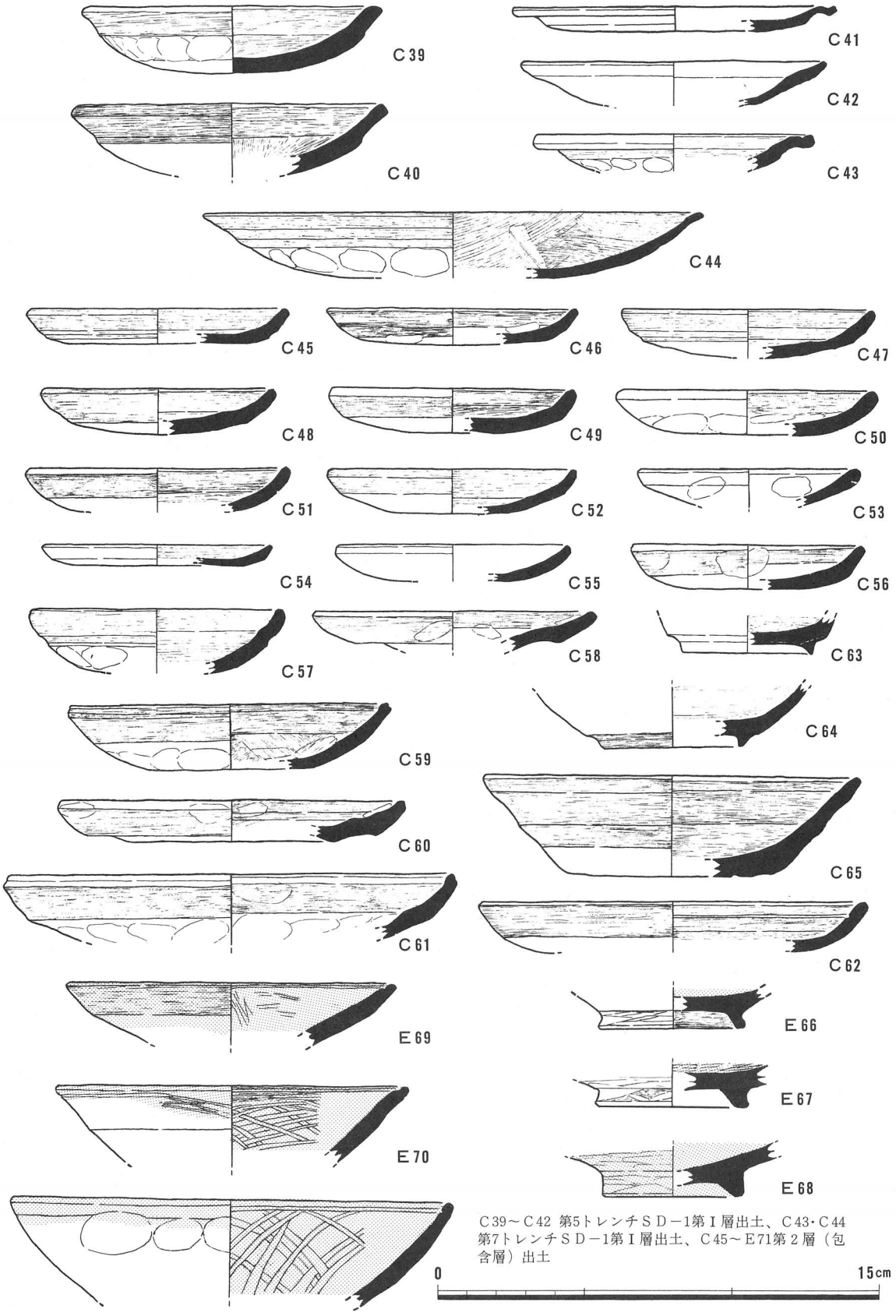






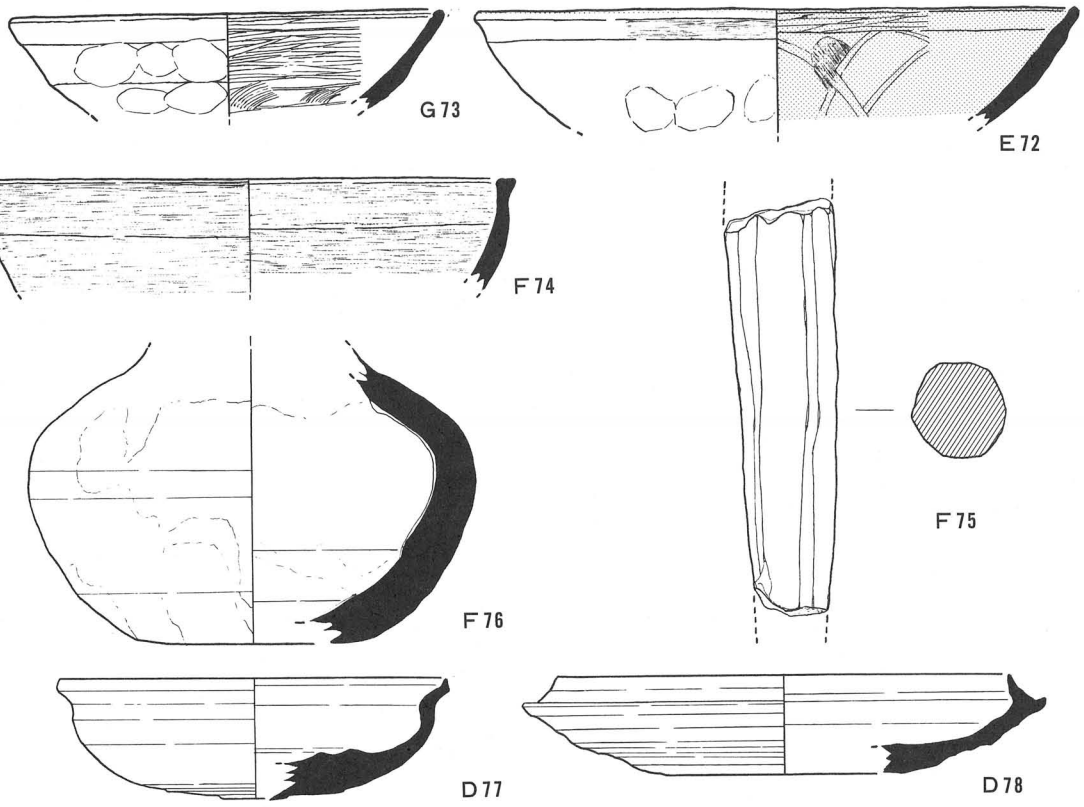


C22～D33 第2トレンチＳＤ－１第Ⅰ層出土
D34 第2トレンチＳＤ－１第Ⅱ層出土
C35・C36 第3トレンチＳＤ－１第Ⅰ層出土
C37・38 第4トレンチＳＤ－１第１層出土

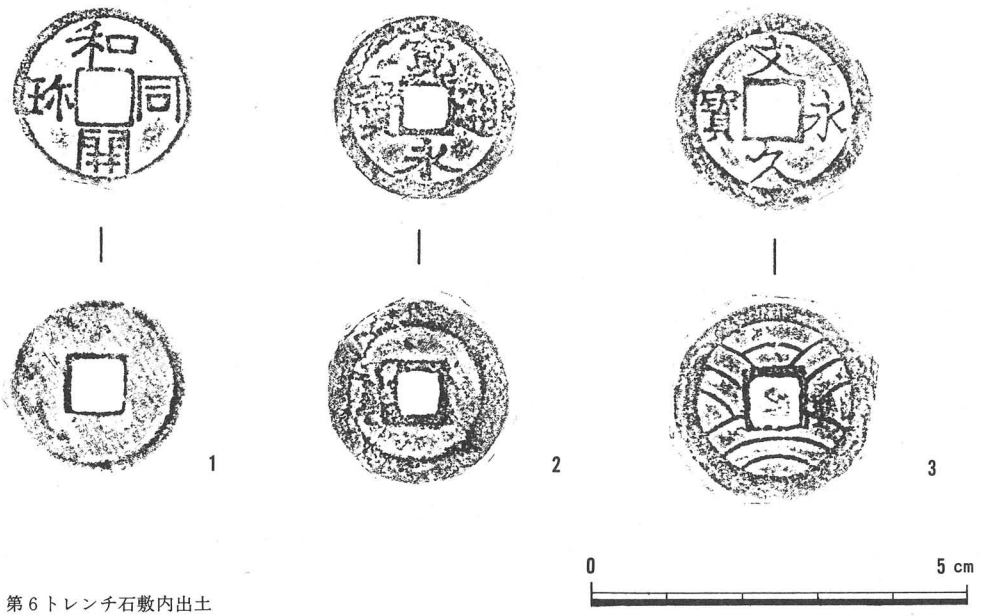


C39～C42 第5トレンチＳＤ－1第Ⅰ層出土、C43･C44 第7トレンチＳＤ－1第Ⅰ層出土、C45～E71第２層（包含層）出土

図版七七　第二・三次調査　須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、銅銭

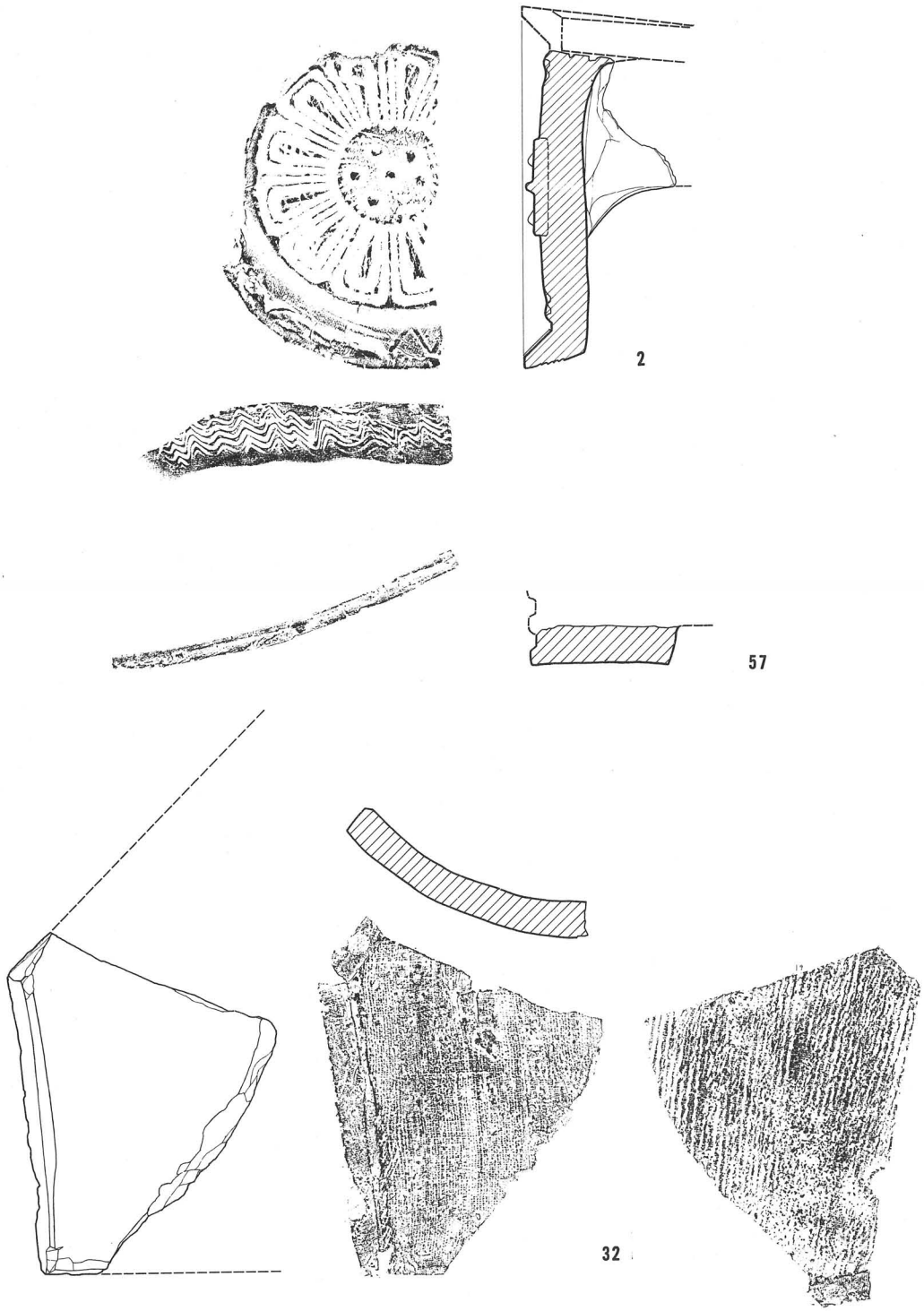


G73～F75 第2層(包含層)出土
F76 表採(第２次発掘調査)
D77・D78 表採(第１次発掘調査)



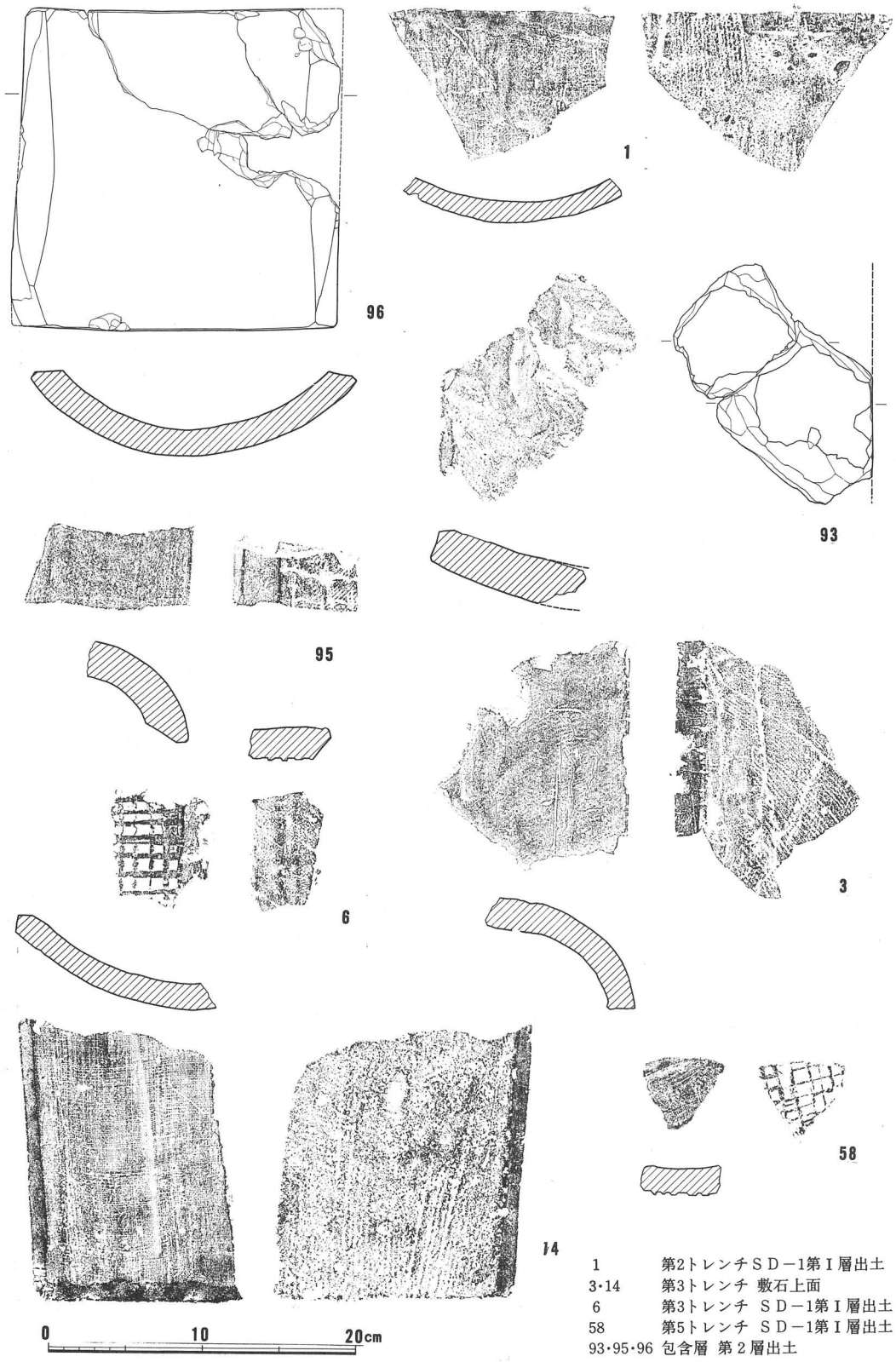
1　第６トレンチ石敷内出土
2・3　第２層(包含層)出土

図版七八　第二・三次調査　軒丸瓦、軒平瓦、隅平瓦

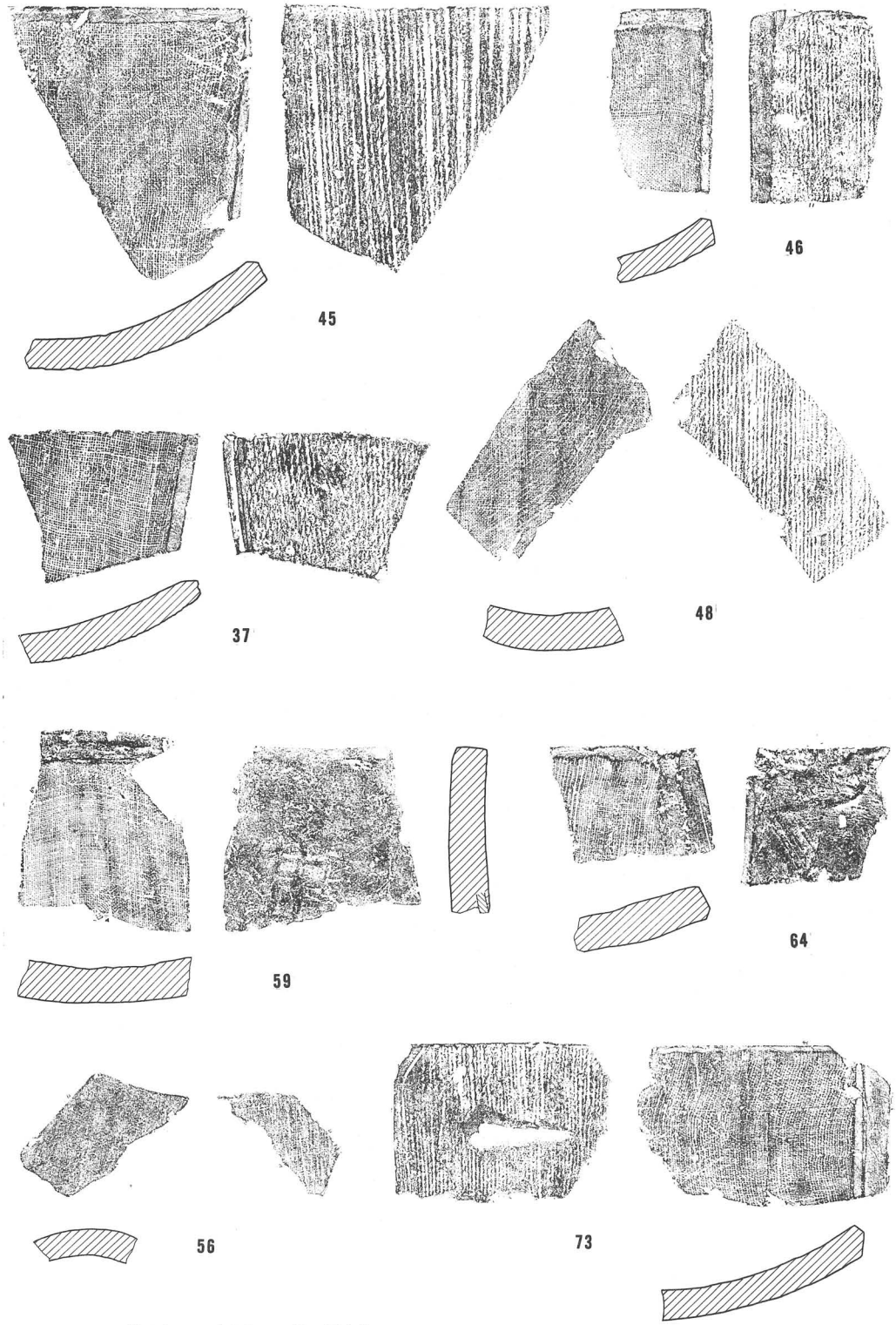


2　軒丸瓦　第３トレンチＳＤ－１第Ⅰ層出土
57　軒平瓦　第５トレンチＳＤ－１第Ⅰ層出土
32　隅平瓦　第３トレンチＳＤ－１第Ⅰ層出土

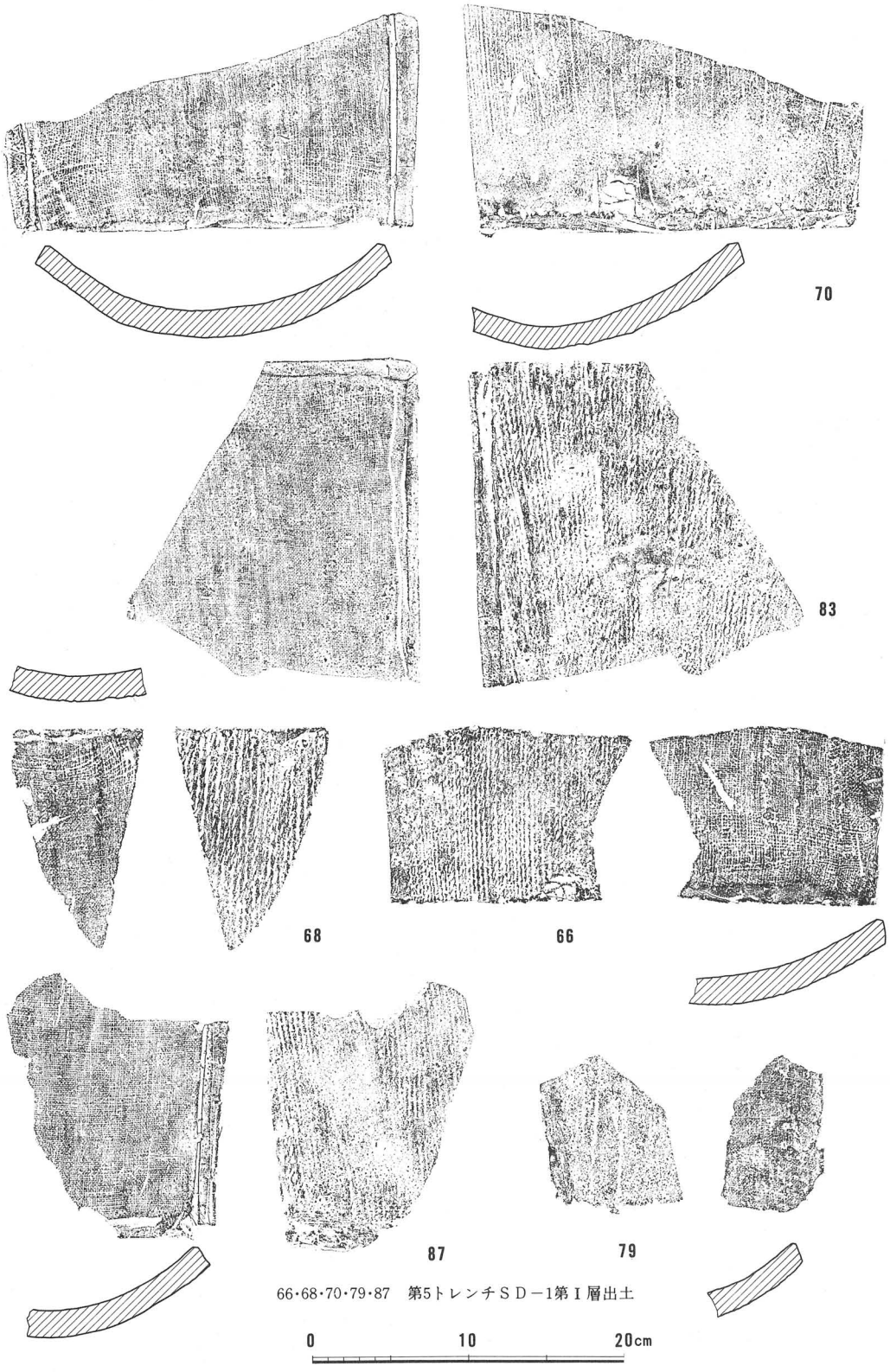
図版七九　第二・三次調査　丸瓦、平瓦



1　　第2トレンチＳＤ－1第Ⅰ層出土
3･14　　第3トレンチ　敷石上面
6　　第3トレンチ　ＳＤ－1第Ⅰ層出土
58　　第5トレンチ　ＳＤ－1第Ⅰ層出土
93･95･96　包含層　第２層出土

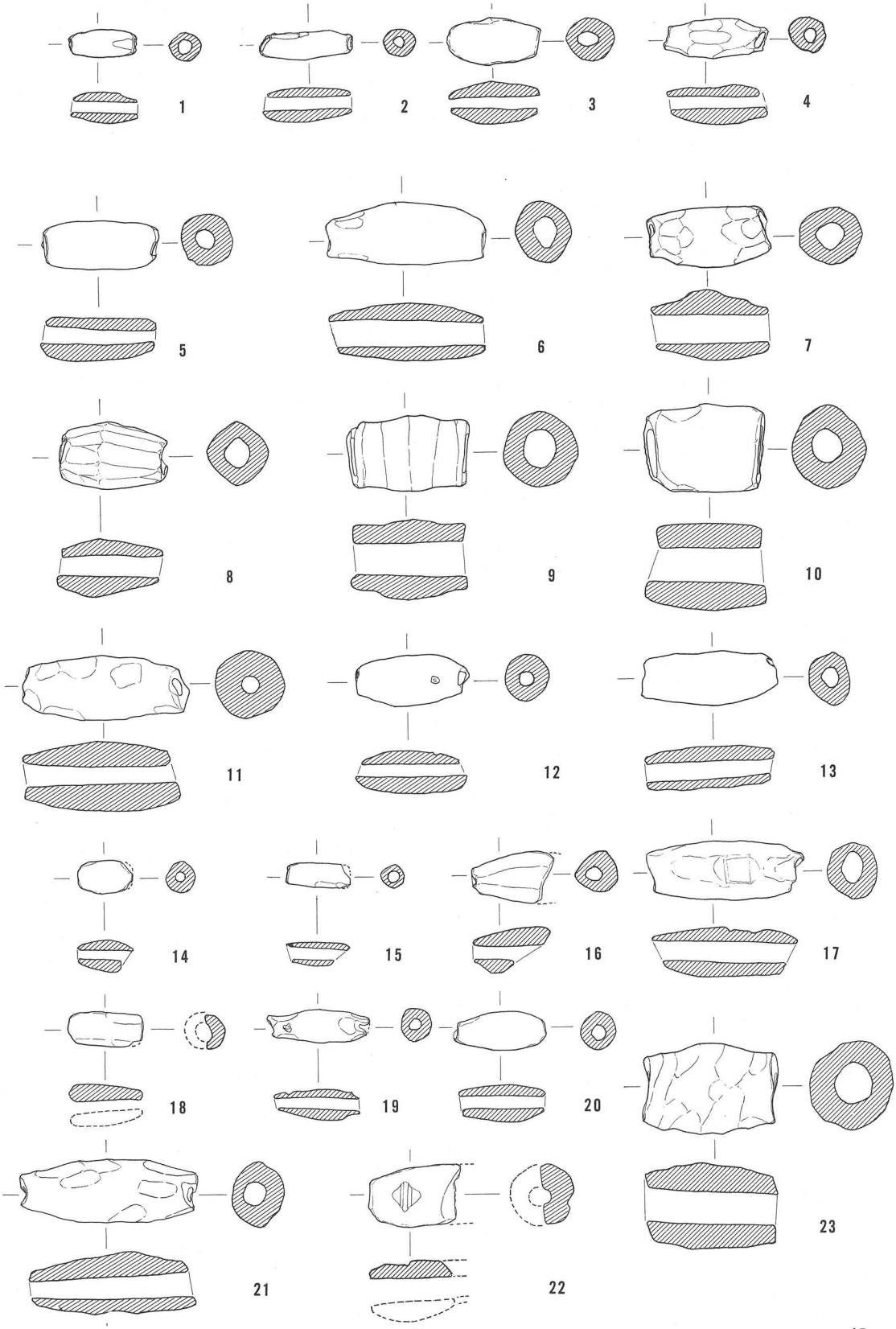


37・45・46・48　第４トレンチＳＤ－１第Ⅰ層出土
56・59・64・73　第５トレンチＳＤ－１第Ⅰ層出土



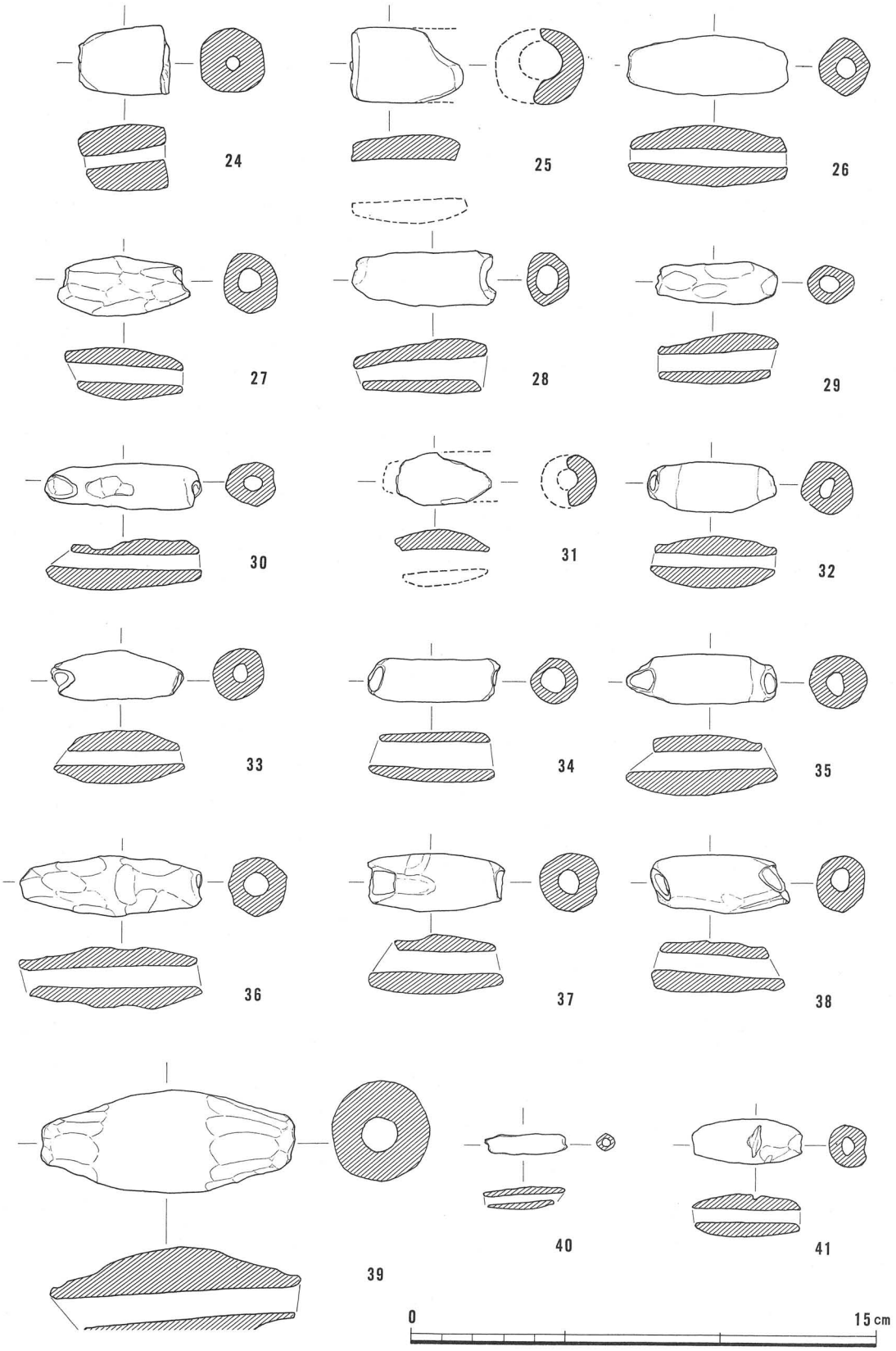
66·68·70·79·87　第5トレンチＳＤ－1第Ⅰ層出土

0　10　20cm

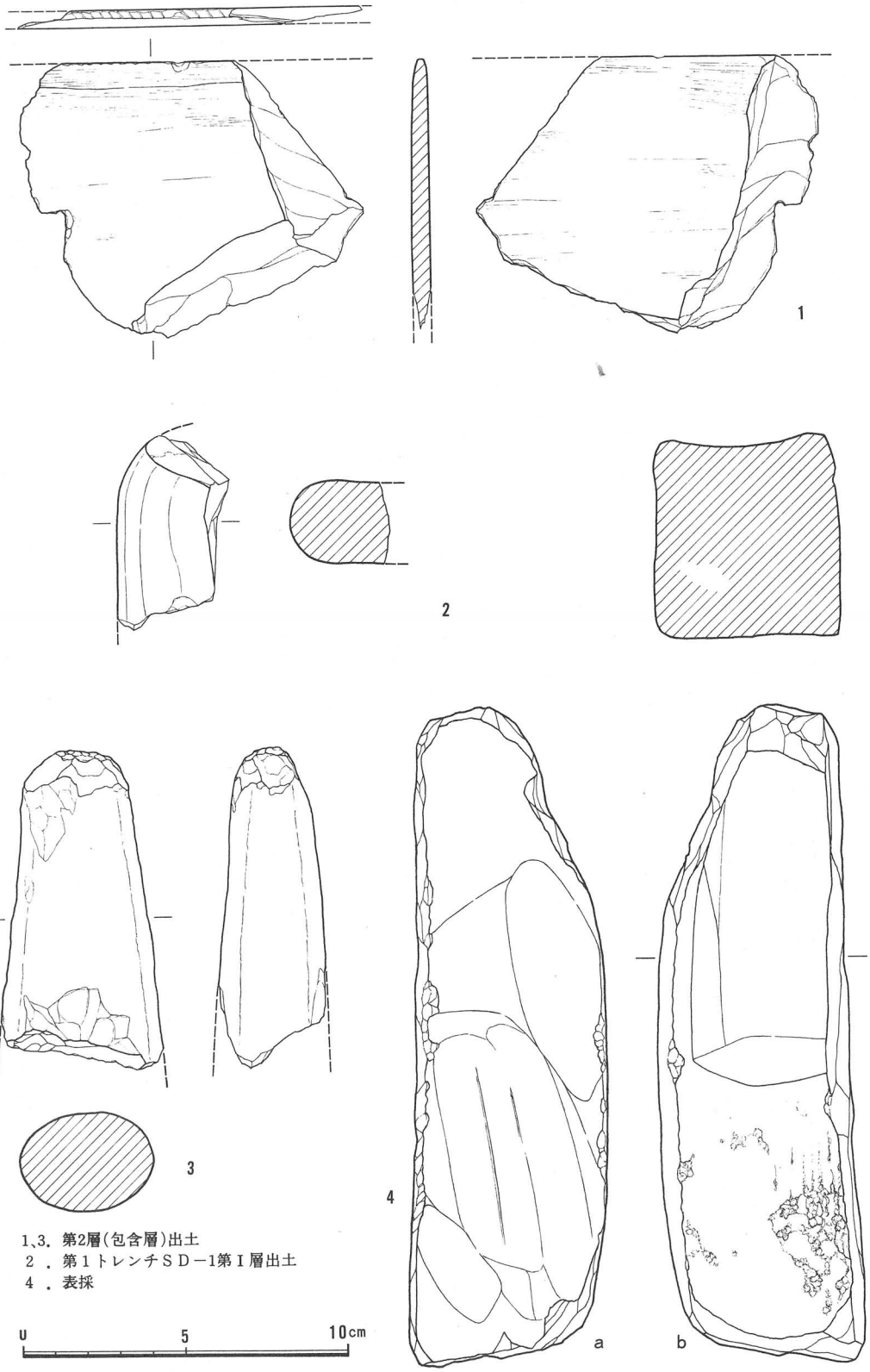


1～8　表採(1984年発掘調査)
9～13　第2層(包含層)出土
14～23　第1トレンチSD－1第Ⅰ層出土

図版八三　第二・三次調査　土錘



24～31　第１トレンチＳＤ－１第Ⅰ層出土
31～41　第１トレンチＳＤ－１第Ⅲ層出土



1、3．第2層（包含層）出土
2．第1トレンチＳＤ－1第Ⅰ層出土
4．表採

日吉・吉住池遺跡発掘調査報告

１９８４年９月

編集　滋賀県教育委員会
　　八日市市教育委員会
発行　滋賀県教育委員会
　　(財)滋賀県文化財保護協会
印刷　株式会社　中村太古舎